

水海道都市計画事業・小絹土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 1

大谷津 B 遺跡

(財)茨城県教育財団調査課

受理年月日	
受理番号	
贈機関	

昭和 58 年 3 月

茨城県教育財団文化財調査報告第18集

水海道都市計画事業・小絹土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 1

大 谷 津 B 遺 跡

昭和 58 年 3 月

財團法人 茨城県教育財團

序

筑波郡谷和原村の西方地域における「水海道都市計画事業・小綱土地区画整理事業」は、住宅・都市整備公団によって進められております。その土地区画整理事業地域内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、昭和55年度から財團法人茨城県教育財団が実施し、今日に至っております。

この報告書は、昭和55年度から昭和56年度前半にかけて発掘調査を実施した大谷津B遺跡の調査の成果を集録したものであります。本遺跡は縄文時代の集落遺跡であり、ここから検出された数多くの資料は、郷土史解明にあたって幾多の示唆を与えてくれるものと考えます。その意味からも、この報告書がより多くの方々に御活用いただければ幸甚に存じます。

なお、発掘調査と整理を進めるにあたり、委託者の住宅・都市整備公団をはじめ、御協力と御指導をいただいた茨城県教育委員会、谷和原村教育委員会、および地元関係者各位に対して厚くお礼を申し上げます。

昭和58年3月

財團法人 茨城県教育財団

理事長 大金新一

例　　言

1. 本書は、住宅・都市整備公団（昭和56年10月1日、日本住宅公団と宅地開発公団との統合により改組）と財團法人茨城県教育財團との委託契約に基づいて、昭和55年度から昭和56年度にわたって実施された「水海道都市計画事業・小網土地区画整理事業」に伴う、茨城県筑波郡谷和原村大字小網に所在する大谷津B遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 大谷津B遺跡の調査にかかるる財團法人茨城県教育財團の組織は、下記のとおりである。

理　事　長	竹内 邦男 大金 新一	～昭和56年11月 昭和56年12月～
副理　事　長	古橋 晴 織引 一夫	～昭和57年3月 昭和57年4月～
常務　理　事	川野邊 四郎	～昭和57年3月
事　務　局　長	小林 義久	～昭和56年3月
調　査　課　長	大塚 博 寺 内 寛	～昭和56年4月～（昭和55年度調査第一班長）
企画管理班 班長	坪井 秀雄 今村 信大	～昭和57年5月 ～昭和57年6月
主任調査員 主　事	加藤 雅美 鈴木 三郎	～昭和57年4月～
主　事	海老沢 一夫	～昭和57年4月～
主　事	織引 良人	～昭和57年4月～
調　査　班　長	倉 木 富美男	昭和56年度調査
主任調査員	中 村 幸雄	昭和55・56年度調査
主任調査員	和 田 雄次	昭和56年度調査　昭和57年度整理・執筆
第一調査員	川 井 正一	昭和55年度調査
第二調査員	小 河 邦 男	昭和56年度調査

3. 本書における土層及び上器の色相は、小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社）を使用して表し、上層については挿図内に記号化して表示した。
4. 遺跡の規模などの計測値は、全て遺構検出面からの計測値である。
5. 挿図の遺構実測図中においては、炉跡を ・焼土を  で表した。
6. 本書で使用した記号は、下記のとおりである。

SD—溝　　SI—住居跡　　SK—土壌　　P—ピット

7. 大谷津B遺跡の発掘調査および整理、執筆に際して御協力、御指導を賜わった関係諸機関や多くの研究者各位に深く感謝の意を表したい。

目 次

序
例 言
目 次

第1章 調査 経 過	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の経過	2
(1) 調査方法	2
(2) 調査の経過	3
第2章 位置と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	9
第3章 遺構と遺物	12
1. 住居跡	15
2. 土 壤 と 構	234
3. 墓 設 土 器	258
4. 石器とその他の遺物	364
第4章 ま と め	410
1. 住居跡について	410
2. 土 壤 について	415
3. 土 器 について	415
4. 石器類について	416

図 版

第1章 調査経緯

1 調査にいたる経過

日本住宅公団は、首都圏における膨大な住宅用地の需要に対し、良好な居住環境を備えた住宅用地の供給を図るため、昭和41年から、茨城県取手市と下館市を結ぶ「関東鉄道常総線」沿線の宅地開発に着手した。

この開発計画の中の一つとして茨城県筑波都谷和原村大字小綱および筒戸地区にある山林・原野を中心とした面積85haを「水海道都市計画事業・小綱土地区画整理事業」と称して、住宅団地を造成しようとする大規模な開発計画である。

このため、昭和54年度に茨城県教育委員会は、谷和原村教育委員会とこの開発地域内に所在する埋蔵文化財包蔵地の現況について分布調査を実施し、この調査結果に基づき、その取扱いについて茨城県教育委員会、谷和原村教育委員会、日本住宅公団が協議し、確認された5遺跡（大谷津A遺跡・大谷津B遺跡・筒戸A遺跡・筒戸B遺跡・西下宿遺跡）約10haについては、現状保存が困難なため、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。

茨城県教育財団は、日本住宅公団と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し、これに基づき昭和55年度から年次計画によって発掘調査を実施することになった。

昭和55年度は、大谷津B遺跡（縄文時代中期の集落跡）の発掘調査を行い、昭和56年度も継続して調査を実施した。

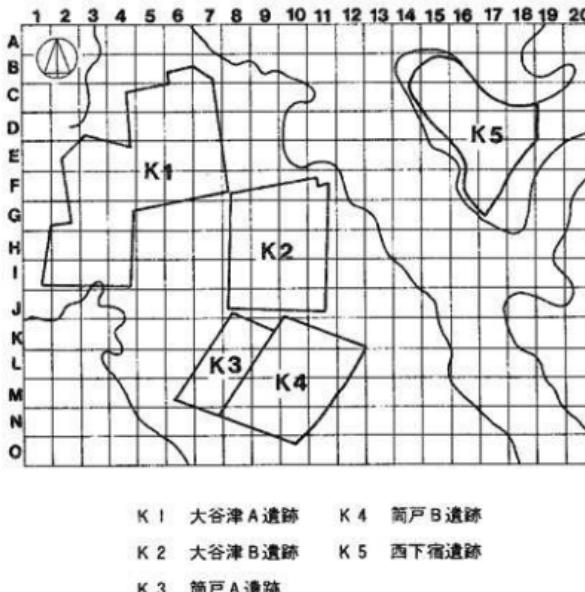
なお、日本住宅公団は、昭和56年10月1日付けをもって宅地開発公団と統合し、新たに「住宅・都市整備公団」として発足した。これに伴い、従来の契約によって生じた権利・義務は、そのまま新公団に承継されることとなった。

また、発掘調査は調査第1班が担当した。

2 調査の経過

(1) 調査方法

大谷津B遺跡の調査対象面積は、21,151m²であり、東西約140m・南北約150mの山林である。調査方法は、区域内の立木伐開後、平面直角座標系・第Ⅳ座標、X軸（南北）-2,900m、Y軸（東西）+13,200mの交点を通る軸線を基準にして、そこから東西・南北各々40mずつ平行移動して大調査区を設定した。この土地区画整理事業区域内の大谷津A遺跡・大谷津B遺跡・筒戸A遺跡・筒戸B遺跡・西下宿遺跡の5遺跡は互いに隣接しているため、一連の大調査区の方眼の中に組み入れた。



第1図 小網地区遺跡配置図と大調査区

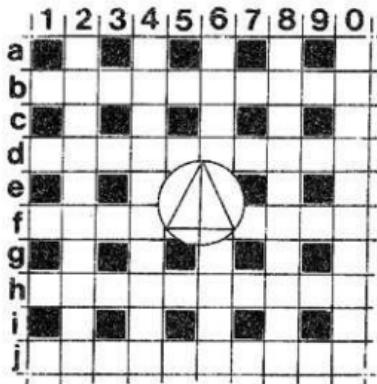
大調査区名称は、北から南へ「A」・「B」・「C」……「P」、西から東へ「1」・「2」・「3」……「20」と付して「A 3」区・「B 2」区のように呼称した。さらに、その大調査区内を4m四方の小調査区に分割し、それぞれは北から「a」・「b」・「c」……「j」、西から「1」・「2」・「3」……「0」と付した。各小調査区の名称は、大調査区と小調査区を合わ

せた4文字で「A 1 a」区・「G 9 j」区のように呼称した。

当遺跡の発掘調査は、第一段階として第2図の着色部分のように、全小調査区の25%の割合で発掘し、遺構・遺物の確認調査を行った。次いで、遺構・遺物の検出状況に応じて周辺への拡張を行うという方法で調査を進めた。

住居跡の調査は、長径方向とそれに直交する方向にベルトをもうけて四分して掘り込む四分割法で、土壌の調査は、長径方向で二分して掘り込む二分割法で実施した。

記録の行程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→平面写真撮影→断面図作成→平面図作成の順で行った。出土遺物については、出土位置で標高を計測し、平面図の作成をした。



第2図 小調査区と25%の調査方法

- (2) 調査経過
- 当遺跡の調査対象面積のうち、昭和55年度はそのうちの16,000m²、昭和56年度に5,151m²の発掘調査を行うという方針で調査を進め、計画通りに昭和56年8月末日までに全調査を終了した。
以下調査の進展にそって、その概要を記し、経過をふり返ってみた。

昭和55年度

4月中旬～5月中旬

- ◎事務所・倉庫等の建設、日本住宅公団常総事務所等関係諸機関への挨拶と協力の依頼を行った。
◎調査区域の確認、区域内山林の伐開、人調査区の杭打ち作業を行った。

5月中旬～6月中旬

- ◎ 5月15日 鍵入れ式。関係者が大谷津B遺跡に集まり、5遺跡合同の鍵入れ式を執り行った。
- ◎ 5月22日 東西・南北に、40mごとの杭打ち作業が終了した。続いて本日から、東西・南北4mごとの小調査区の杭打ち作業を開始した。
- ◎ 5月26日 発掘前の遺跡全景写真を撮影した。
- ◎ 5月28日 小調査区の杭打ち作業を終了し、遺構の分布状況を確認するため、25%の表土を除去する作業を開始した。
- ◎ 6月16日 遺構の確認調査が終了した。その結果、調査区の全域にわたって遺構を確認した。

6月中旬～7月中旬

- ◎ 6月17日 遺構が集中して確認された大調査区のG10区・G11区について、本日から全面的に表土の除去を開始した。
- ◎ 7月10日 G10区、G11区の表土除去が終了し、遺構調査の準備が整い、土壤・住居跡の調査を開始した。なお、大調査区ごとの表土除去も、遺構調査と並行して行うこととした。

7月中旬～12月下旬

- ◎作業は、G10区から順に、G11区・F11区・F10区・F9区・F8区・G9区・G8区・H9区へと、大調査区ごとの表土除去と遺構調査を並行して行った。
- ◎12月25日 昭和55年の調査を終了し、遺跡の保護と安全対策を講じて年末・年始の休業に入った。

1月初旬～3月下旬

- ◎1月7日 昭和56年の調査開始。
- ◎残された遺構に対し、H9区からI9区・I8区・H11区・I11区・J11区へと、順次調査を進めた。
- ◎3月27日 昭和55年度に予定したすべての発掘調査を終了した。

昭和56年度

4月初旬～7月初旬

- ◎4月8日 昭和56年度の発掘調査開始式を行い、ただちに調査の準備にとりかかった。
- ◎5月初旬からH10区の住居跡の調査を開始した。

7月初旬～8月初旬

◎7月下旬に、H10区の調査はほぼ終了し、I10区・J9区、さらに、J10区へと調査を進めた。8月初旬には、全土壤の調査が終了した。

調査風景

8月初旬～8月下旬

◎調査はまとめの月を迎えた。J10区の調査が中旬までに終了した。

◎8月31日 発掘後の遺跡全景の写真撮影を行い、本年度の予定面積5,151m²の発掘調査を終了した。



調査風景

第2章 位置と環境

1 地理的環境

大谷津B遺跡は、茨城県筑波郡谷和原村大字小綱字大谷津1120番地の11外9筆に所在し、面積は21,151m²である。

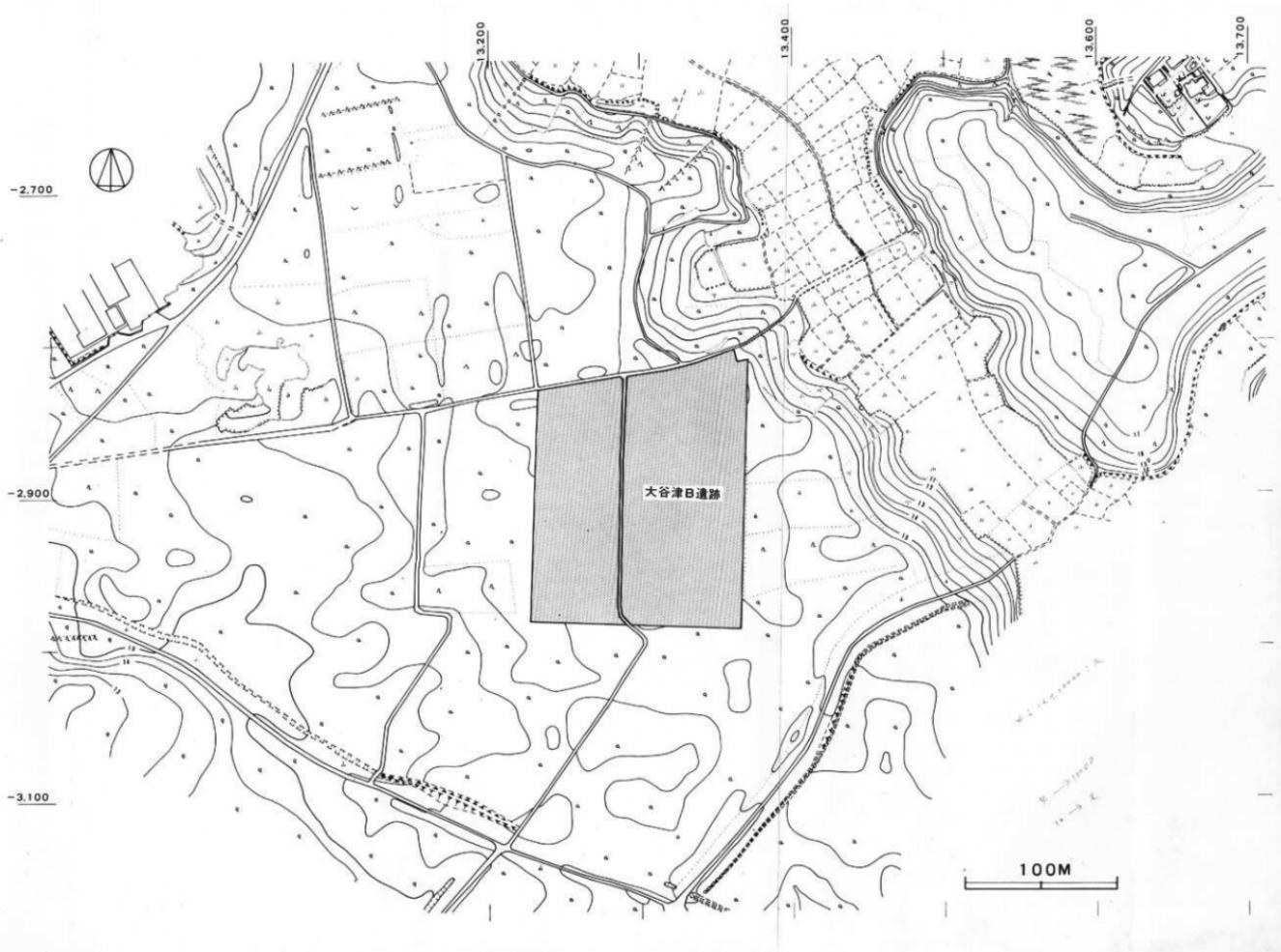
当遺跡の所在する谷和原村は、関東構造盆地の北東部にあたる茨城県の南西部に位置する。本村は、栃木県から南流する鬼怒川・小貝川下流沿岸に造られた広い沖積低地と、東側の筑波・稲敷台地の一部および西側の猿島・北相馬台地の一部から成っている。

筑波・稲敷台地は、筑波山塊の南東方に延び、東は霞ヶ浦、南は利根川下流の低地を境とした比較的平坦な台地である。標高は南東部が26~29mを測りやや高く、それに比較して北西部はやや低い。谷和原村は、その台地の南端の縁辺部を村域に含んでいる。なお、この台地上の北部には筑波研究学園都市が建設されている。

猿島・北相馬台地は、本県の南西部台地の南端に位置し、利根川の北側に広がり、小貝川低地を境とする猿島郡・北相馬郡等にまたがっている。かつて、この北相馬台地の北部に位置した北相馬郡小綱村は、昭和30年に筑波郡内の福岡村・十和村・谷原村と合併し筑波郡谷和原村となる。これによって本村は、東に筑波・稲敷台地、西に猿島・北相馬台地という二つの洪積台地の縁辺部と、その間の沖積低地を村域とすることになった。

また、小貝川南面に広がる沖積低地は、谷和原村の大部分を占めている。この低地は、鬼怒川水系の幾多の変遷と造盆地運動によって造られたと考えられている。鬼怒川は、江戸時代まで北相馬台地の北端・小綱地先で東流し、小貝川と合流して谷原を灌漑し、反面これを荒廃させる洪水の源ともなった。そのため鬼怒川は、江戸時代初期・伊奈半十郎による治水事業によって、猿島・北相馬台地の中間である大木・板戸井の占地する台地を開削して利根川に放流された。こうして小貝川との分流がなされ、鬼怒川は、本遺跡の北部で大きく南西に曲がりながら流下している。

当遺跡は、この猿島・北相馬台地を二分する新河道である鬼怒川に面した北相馬台地の北端部に位置している。遺跡の北東部には谷津があり、谷津は北流して鬼怒川に向かう。また、南西部の台地も浸食を受けており、遺跡は舌状にとり残された台地に占地している。当遺跡の標高は、約16.5mを測り、北東部の谷津との比高は約5mである。なお、本遺跡の北西部には大谷津A遺跡、南側には筒戸A・B遺跡が接している。また、当遺跡の東側には、谷津を越えて西下宿遺跡が近接している。これらの遺跡は、関東鉄道常総線の小綱駅から、約800mほど西の地域である。その間に国道294号線が南北に走っている。遺跡の現況は、一部に畠を含み大部分が平地



林である。表土は浅く、約20~30cmでローム層に至る。

2 歴史的環境

谷和原村は、鬼怒川・小貝川の東側に広がる沖積低地と、筑波・稻敷台地、猿島・北相馬台地の、それぞれの縁辺部の一部を村域としている。この低地と谷津が入り込む複雑な地形をした台地は、原始時代から現在に至るまで、人々が生活するために豊かな自然の恵みを与えたと考えられ、台地上とその縁辺部には多くの遺跡が残されている。

縄文時代の遺跡は、猿島・北相馬台地上に見られる早期の茅山式土器が出土した西下宿遺跡、中期に編年される阿玉台系の土器が出土した洞坂畠遺跡(調査後湮滅)、今回調査されて加曾利E式土器が出土した大谷津B遺跡、中期と思われる大谷津A遺跡・筒戸A遺跡・筒戸B遺跡がある。また、小綱地内の中間山貝塚も縄文時代の遺跡として周知されている。さらに、本跡の北西側に位置する水海道市には、内守谷館ノ台遺跡・内守谷本郷遺跡・坂手日之王神遺跡・坂手萱場貝塚・大日山貝塚・満蔵A遺跡・満蔵B遺跡・横曾根貝塚・豊岡A遺跡などが周知されている。また、本跡の南側に位置する守谷町には、高野A遺跡がある。筑波・稻敷台地の本村には、苗代山A遺跡・苗代山B遺跡・田村貝塚があり、本村の北東側の谷田部町には山田遺跡・真瀬新田谷津遺跡・ハナ遺跡・中台貝塚、南東側の伊奈村では鹿島神社遺跡・小張貝塚・南太田貝塚・足高貝塚・東栗山貝塚等が周知されている。茎崎村の小山台貝塚は、縄文時代後期に編年される加曾利B式土器および安行I式などの土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、先土器時代の遺跡と同様に、当遺跡の周辺には確認されていない。筑波・稻敷台地において確認されている弥生時代の遺跡は、谷田部町の熊の山遺跡・高山遺跡、伊奈村の勘兵衛新田遺跡(湮滅)があるのみである。

古墳時代の遺跡は、本村内にも茶畠古墳をはじめ、並木古墳(湮滅)、福岡南古墳群・昭和53年に当教育財団の発掘調査によって記録保存が行われた東橋戸古墳(湮滅)が知られている。この他にもこの時代の古墳や集落跡は、猿島・北相馬台地、筑波・稻敷台地に数多く周知されている。

以上、本村と周辺の遺跡を概観してみると、そこには時代的な変遷をうかがい知ることができる。また、上記の両台地上とその縁辺部には、縄文時代から現在に至るまで脈々と続く各時代における文化の繁栄が推察される。

大谷津B遺跡の所在する小綱地域は、かつて小綱村と呼ばれて北相馬郡に属していた。また、その名称は、小貝川と鬼怒(綱)川との間に位置しており、それらの両川名の一字(小・綱)に由来していると言われている。

参考文献 ●居留川正平 青野壽郎編集「日本地誌」5 二宮書店 昭和50年3月

●茨城県教育委員会発行 「茨城県遺跡地図」 昭和52年3月



第4図 遺跡分布図

遺跡一覧表

番号	遺跡名	種目	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	浅間山貝塚	貝塚	繩文	29	神生古墳群	古墳群	時 墳
2	茶畑古墳	古墳	古墳	30	足高貝塚	貝塚	繩 文
3	洞坂畠遺跡	貝塚	繩文	31	小山台貝塚	" "	
4	清水古墳群	古墳群	古 墳	32	小山台城跡	城館跡	鍾・室
5	大木遺跡	包藏地	古 墳	33	田村貝塚	貝塚	繩 文
6	高野H遺跡	"	"	34	並木古墳	古 墳	古 墳
7	鈴塚A "	"	"	35	福岡南古墳群	古墳群	"
8	" B "	"	"	36	苗代山B遺跡	包藏地	繩 文
9	" 古墳群	古墳群	"	37	" A "	"	"
10	" C 遺跡	包藏地	"	38	山田遺跡	"	"
11	高野A遺跡	"	繩文	39	ツバタ遺跡	"	古 墳
12	内守谷館ノ台"	"	繩文	40	高山遺跡	"	弥 生
13	内守谷本郷	繩文・古墳	"	41	"	黒跡	古 墳
14	菅生城跡	城館跡	鍾・室	42	真瀬新田谷津遺跡	包藏地	繩 文
15	坂手日之王神遺跡	包藏地	繩文	43	中台貝塚	貝塚	繩文・古墳
16	坂手賀場貝塚	貝塚	"	44	中台東遺跡	包藏地	古 墳
17	勘兵工新田遺跡	包藏地	繩文・古墳	45	大日山貝塚	貝塚	繩 文
18	東猪戸古墳	古 墳	古 墳	46	満藏A遺跡	包藏地	繩 文
19	下長沼貝塚	貝塚	"	47	満藏B遺跡	"	古 墳
20	小張貝塚	"	繩文	48	横曾根貝塚	貝塚	繩 文
21	鹿島御社遺跡	包藏地	"	49	七ツ塚古墳群	古墳群	古 墳
22	上街道遺跡	"	"	50	豊岡古墳	古 墳	"
23	宮後古墳	古 墳	古 墓	51	豊岡A遺跡	包藏地	繩 文
24	大房地遺跡	包藏地	"	52	筒戸A遺跡	"	"
25	三条院城跡	城館跡	鍾・室	53	" B "	"	"
26	南太田貝塚	貝塚	繩文	54	西下宿遺跡	"	"
27	野柳古墳	古 墳	古 墓	55	大谷津B遺跡	"	"
28	神生貝塚	貝塚	繩文				

第3章 遺構と遺物

本遺跡の中で検出された住居跡・土壤・溝の土層観察は、「新版標準土色帖」を使用し、その後、整理の段階で土層を次のように分類して、図中に数字とアルファベット小文字で表現した。

なお、遺構内覆土の堆積状況については、遺構の説明文の中で述べることにした。

1褐色土	Hue 7.5Y R 5% · 5% · %		a ローム粒子を少量含有
2暗褐色土	" 3% · %		a' " 中量 "
3黒褐色土	" 3% · %		a" " 多量 "
4黒色土	" %		b ローム小ブロックを少量含有
5極黒褐色土	" %		b' " 中量 "
6明褐色土	" % · %		b" " 多量 "
7橙色土	" %		c ロームブロックを少量含有
8灰褐色土	" %		c' " 中量 "
			c" " 多量 "
			d ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを少量含有
			d' " "
			d" " 中量 "
			d" " 多量 "
9黒褐色土	Hue 5 Y R %		e ローム粒子・焼土・炭化粒子を微量含有
10極暗褐色土	" %		e' " " " 少量 "
			e" " " " 中量 "
11にい赤褐色土	" %		f 焼土・炭化粒子・炭化物を微量含有
12暗赤褐色土	" % · % · %		f' " " " " 少量 "
			f" " " " 中量 "
13赤褐色土	" % · %		g 黒色土・黒色土ブロックを少量含有
14明赤褐色土	" %		g' " " 中量 "
			g" " " 多量 "
			h 砂を少量含有
15黒褐色土	Hue 10Y R % · %		h' " 中量 "
			h" " 多量 "
16暗褐色土	" % · %		i 腐植土を少量含有
17にい黄褐色土	" % · %		i' " 中量 "
			i" " 多量 "
18灰黄褐色土	" %		j 粘土を少量含有
19褐色土	" %		j' " 中量 "
20黄褐色土	" %		j" " 多量 "
			K ローム
21赤褐色土	Hue 2.5Y R %		L 捣乱
22暗赤褐色土	" %		

住居跡について

- 一覧表については、土壇のものに準じて記した。
- 実測図についての実測基準線のレベルは、表示していないものの全てが16.2mである。
- 遺構説明文での位置は、本遺跡の範囲が広いために、表現上の混乱を防ぐ意味において、比較的近接しているものを任意の5グループに分けて、そのグループ内での位置的表現をした。なお、任意の5グループは、以下のように○○群とした。

※北東部住居跡群——SI 3号を中心としてSI 1・2・4・6・7・8・9 A・9 B・10 A・10 B・11・12・13号の各住居跡と住居跡状遺構。

※北西部住居跡群——SI 17号を中心としてSI 5・14・15・16・18・19・20・21・22・23・36号の各住居跡と住居跡状遺構。

※中央部住居跡群——SI 46号を中心としてSI 40・41・42 A・42 B・43・44・45 A・45 B・47・50 A・50 B・50 C・57・58・59号の各住居跡。

※南西部住居跡群——SI 28号を中心としてSI 24・25・26・27・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39号の各住居跡と住居跡状遺構。

※南部住居跡群——SI 51号を中心としてSI 48・49・52・53 A・53 B・54・55・56号の各住居跡。

土壤について

本遺跡から検出された土壤は、854基の多数にのぼっている。これらの土壤は、様々な形と大きさをしているため、個々についての説明を省略し次のような観点に立って一覧表と実測図の作成をした。

- 位置の表示は、遺構が占める面積の割合が大きい小調査区名をもって示した。
- 長軸方向は、長径(辺)方向をもって示し、平面形が円形のものは記述しない。
- 形態は、平面形と断面形でA～Zに、平面規模でI～IIIに、壁高でa・bに分類した。

(例えばAIa……平面形が楕円形で、規模が1.5m×1.2m、壁高が39cmなどの場合)

- 平面形と断面形など
- A 平面形が楕円形、円形で、壁は外傾あるいはゆるやかに立ち上がるもの。
 - B 平面形が楕円形、円形で、壁は垂直に立ち上がるもの。
 - C 平面形が(隅丸)長方形・方形である。
 - D 平面形が不定形であるもの。
 - E 平面形が楕円形・円形でピット状のもの。
 - F 平面形が長楕円形、断面がV字状をなすもの。
 - G 平面形が楕円形・円形・断面が袋状をなすもの。
 - H 埋設土器。
 - Z 形態不明。

規 模	I	平面最大径（辺）が1～2m以内のもの。	壁 高	a	壁高が50cm以下のもの。
	II	平面最大径（辺）が1m以内のもの。		b	壁高が50cm以上のもの。
	III	平面最大径（辺）が2m以上のもの。			

○平面形で重複等により形状が不明確なものについては、推定で記して（ ）を付した。規模についても同様である。

○各部の状況については、壁をI～V・床を1～4に記号化して表した。

壁	I	壁は床より垂直（垂直ぎみ）に立ち上がる。	床	1	床は平坦である。
	II	壁は床より外傾（外傾ぎみ）に立ち上がる。		2	床は皿状である。
	III	壁は床よりゆるやか（なだらか）に立ち上がる。		3	床は凹凸状である。
	VI	壁は床から袋状に立ち上がる。		3'	床は凹凸が激しい。
	V	壁は床からV字状（U字状）に立ち上がる。		4	床にピットがある。

土壤の実測図について

○実測図については、一覧表の形態の分類に従って掲載した。

○実測基準線のレベルは、表示していないもの全てが16.2mである。

○埋設土器については、一覧表・実測図とともに、土壤の最後の頁にまとめて掲載した。

土壤形態一覧表（数字は遺構数）

下表 平高 平均		A	B	C	D	E	F	G	H	Z	計
I	a	356	3	1	16	41	2	1	4	23	
	b	10	23	1	4	5	0	4	1	1	
小計		366	26	2	20	46	2	5	5	24	496
II	a	201	10	2	2	15	2	1	5	6	
	b	4	6	0	2	4	0	3	0	0	
小計		205	16	2	4	19	2	4	5	6	263
III	a	52	1	1	9	6	0	0	0	12	
	b	7	1	0	4	1	0	0	0	1	
小計		59	2	1	13	7	0	0	0	13	95
合計		630	44	5	37	72	4	9	10	43	854

遺物について

○実測できた遺物については、遺構ごとの表にまとめた。表中の表現は、下記のとおりである。

●法量 A—口径、B—現在高、C—低径を示し、単位はcmであり、（ ）は推定である。

備考は、完存率を表す。

○撮影図は、可能な限り掲載して説明を加えた。なお、縮尺の表示をしていないもの全てが縮尺1/2である。

1 住居跡

第1号住居跡状遺構（第5図）

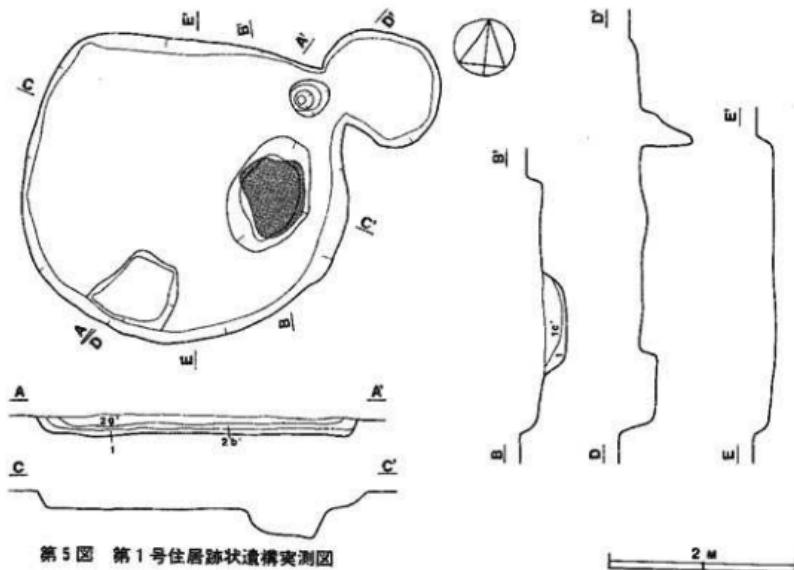
本住居跡状遺構は G10is・is の調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の南々西部に位置し、本跡の北東側に SI 2 が、やや離れて所在している。

規模は長径 4.7m・短径 3.5m で、平面形は不整橢円形を呈し、長径方向は N—58°—E である。壁高は東側 13cm・南側 15cm・西側 16cm・北側 19cm で、北西側壁がやや高い。壁はソフトロームであるがやや縮りを帯び、また壁は床面から外傾して立ち上がっている。床面は平坦なロームであるが軟かくて縮まりが弱い。炉は床面の東側に位置し、規模は長径 90cm・短径 65cm である。炉の形状は橢円形を呈し、深さ 25cm ほど掘り落してあり、土器埋設炉と推定される。炉の覆土を観察すると、中央部に焼土と炭化粒子が堆積している。炉床は、凹凸しており、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化している。柱穴は検出できず、柱穴状の土壤がみられた。

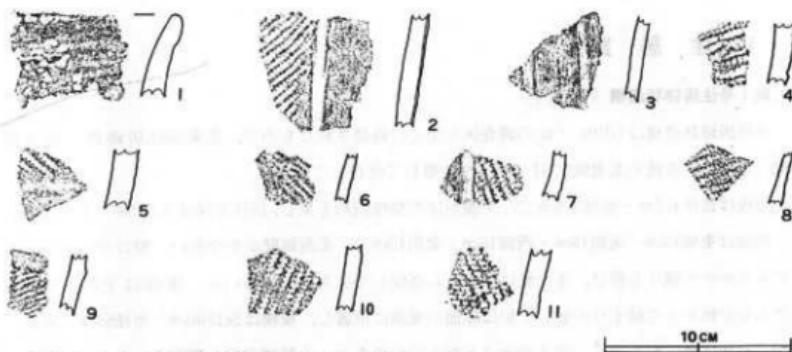
覆土は褐色土で、微量の炭化粒子・焼土粒子を含み、やや縮まりを帯び、自然堆積していた。

遺物は、覆土の上層に少量の土器片が検出されただけである。

本跡は北東部で SK41 と重複し、また、炉は検出したものの壁・床・柱穴等住居跡としての判断資料に欠けるため、住居跡状遺構として取扱った。



第5図 第1号住居跡状遺構実測図



第6図 第1号住居跡状造構出土遺物拓影図

第1号住居跡状造構出土遺物（第6図）

1が、口縁部、2～11は、胴部である。

2・3・7は、沈線によって区画され幅広の懸垂文を施している。

9は、口縁部近くの胴部片で上部に無文帯を有している。また繩文は細い。

第2号住居跡状造構（第7図）

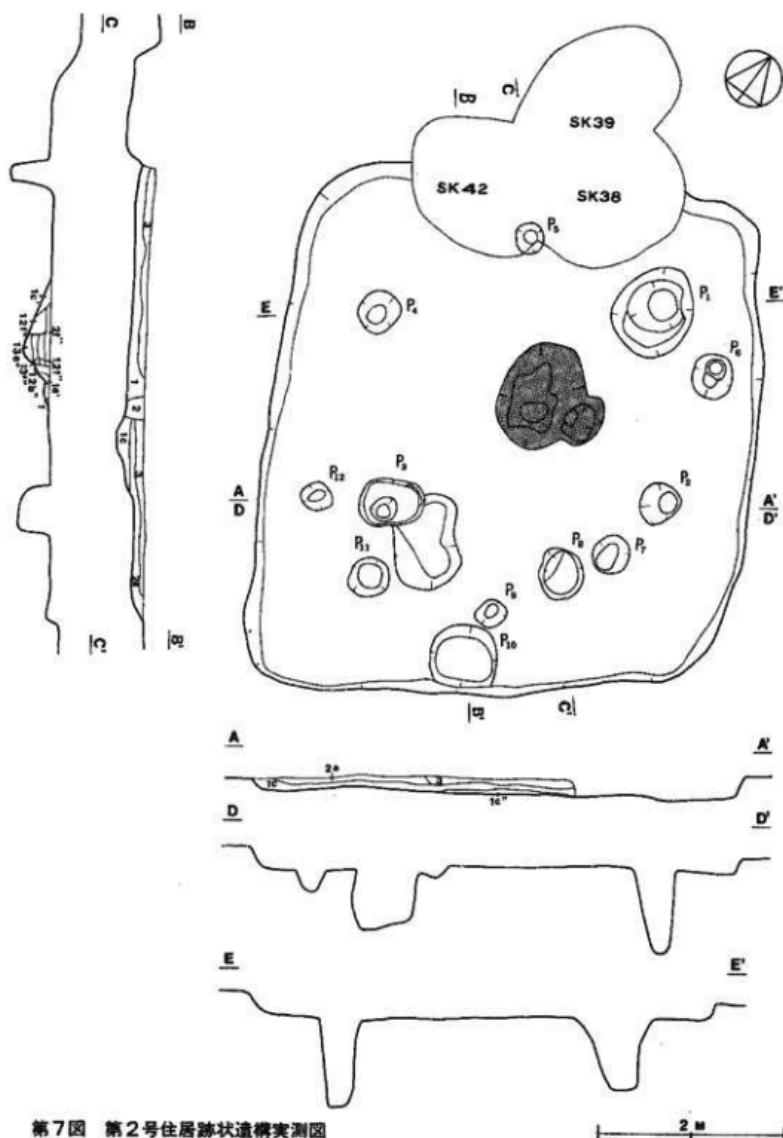
本住居跡はH10gaの調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の南部に位置し、本跡の北西部でSK38・39・42と重複している。

規模は長軸5.5m・短軸5.2mで、平面形は隅丸方形を呈し、長軸方向はN-32°-Wである。

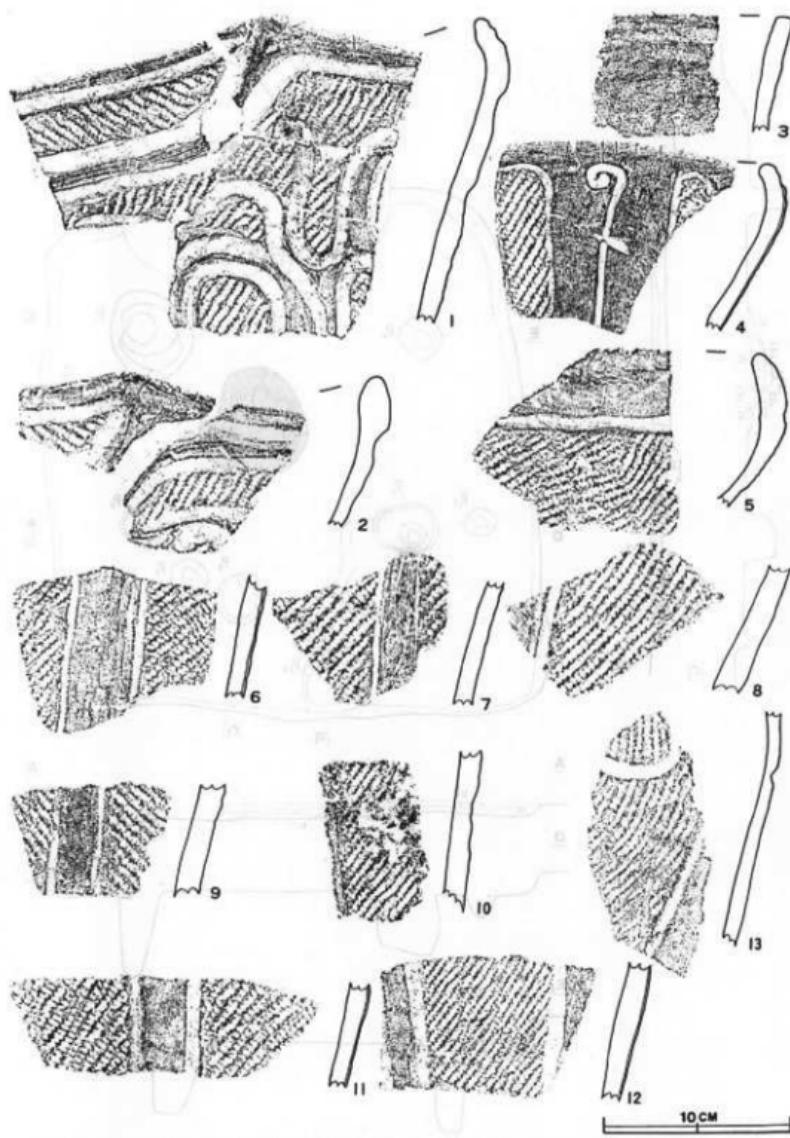
壁高は北東側17cm・南東側12cm・南西側19cm・北西側29cmで、西側が高い。壁はソフトロームであるが、やや締まりを帯びている。東側の壁は床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。他は床面からゆるやかに立ち上った後、上部で垂直となっている。床面はロームで硬く、P付近が低く、南東部一帯がやや高まっている。炉は床面の中央よりやや北東部に位置し、長径70cm・短径50cmを測る。平面形は不整円形で、皿状に深さ25cmほど掘り窪められた地床炉である。炉内には焼土が多量に堆積し、炉床はロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用をうかがわせる。ピットを12個検出したが、主柱穴はP₁～P₄である。

覆土は上層が黒褐色土・下層が褐色土で、軟らかく締まりがなく、少量のローム粒子を含み自然堆積していた。

遺物は、北西部の覆土の上層から多量の土器片と石器2個を検出した。また、北側のP付近から木の実の炭化したものも検出した。

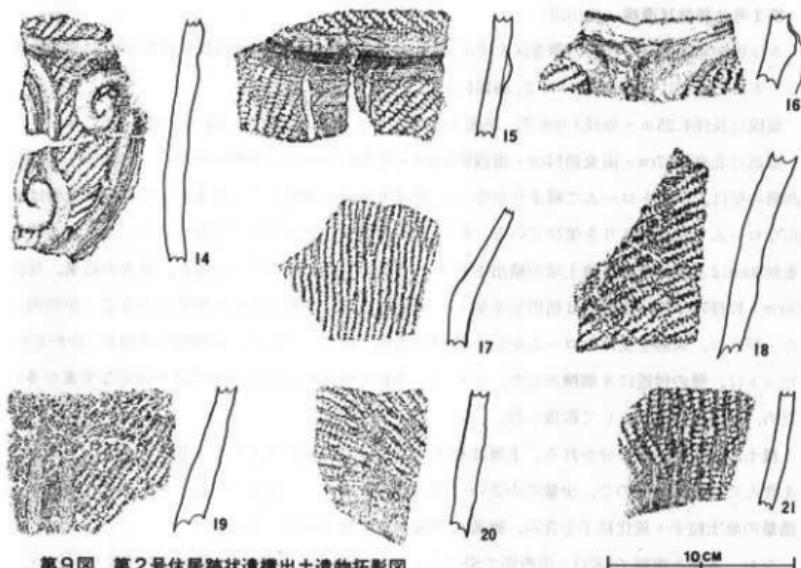


第7図 第2号住居跡状造構実測図



第8図 第2号住居跡状遺構出土遺物拓影図

日本実業出版社編著『支那考古学』(1955年)



第9図 第2号住居跡状造構出土遺物拓影図

第2号住居跡状造構出土遺物(第8・9図)

1～5が口縁部、6～21が胴部である。

1・2は波状口縁で、ともに横位の横円文を有している。

3は、口縁部無文帯を持っている。

4は、縦位の横円文、口縁から続く懸垂文を施している。

5は、幅広の無文帯を有する鉢の口縁である。

6～13は、懸垂文を施している。

14は、蕨文を上下交互に施している。

15は貼付による横の隆沈線を付け、繩文を区画している。

16は、横位横円文の破片。

17は、縦の繩文を施している。

18は、斜位の繩文を施している。

19は、懸垂文を施すが、沈線区画の沈線をわずかに残している。

20は、斜位の繩文である。

21は、縦の繩文を施している。

第3号住居跡状遺構（第10図）

本住居跡状遺構はG10crの調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の中央部に位置し、本跡の東側にSI6、南側にSI2、西側にSI4が離れて存在する。

規模は長径4.25m・短径3.9mで、平面形は楕円形を呈し、長径方向はN-43°-Wである。

壁高は北東側17cm・南東側14cm・南西側22cm・北西側15cmで、南西側が高い。確認された東側、西側の壁は、ソフトロームで締まりがなく、壁は床面から外傾して立ち上がっている。床面は平坦なロームでやや締まりを帯びている。炉は、本跡の床面から検出できなかった。ただ、本跡の東側30cmほど離れた所に焼土塊が検出された。本跡との関係は不明であるが、調査の結果、長径90cm・短径75cmで、平面形は楕円形を呈し、ロームを皿状に掘り窪めた炉穴であることが判明した。炉穴は、火熱を受けたロームがレンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。ピットは、壁の付近に8個検出した。しかし、本跡を住居跡と考えるのには不確定な要素が多いため、住居跡状遺構として取扱った。

覆土は上下の二層に分かれる。上層は褐色土で、ごく微量の焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を含んだやや硬いもので、少量の小さい土器片を検出した。下層はロームを主体とする褐色土で、微量の焼土粒子・炭化粒子を含み、緻密な堆積をして硬く締まっていた。

なお、本跡と南側でSK93・南西側でSK107・北側でSK104が重複し、すべて本跡より新しい。

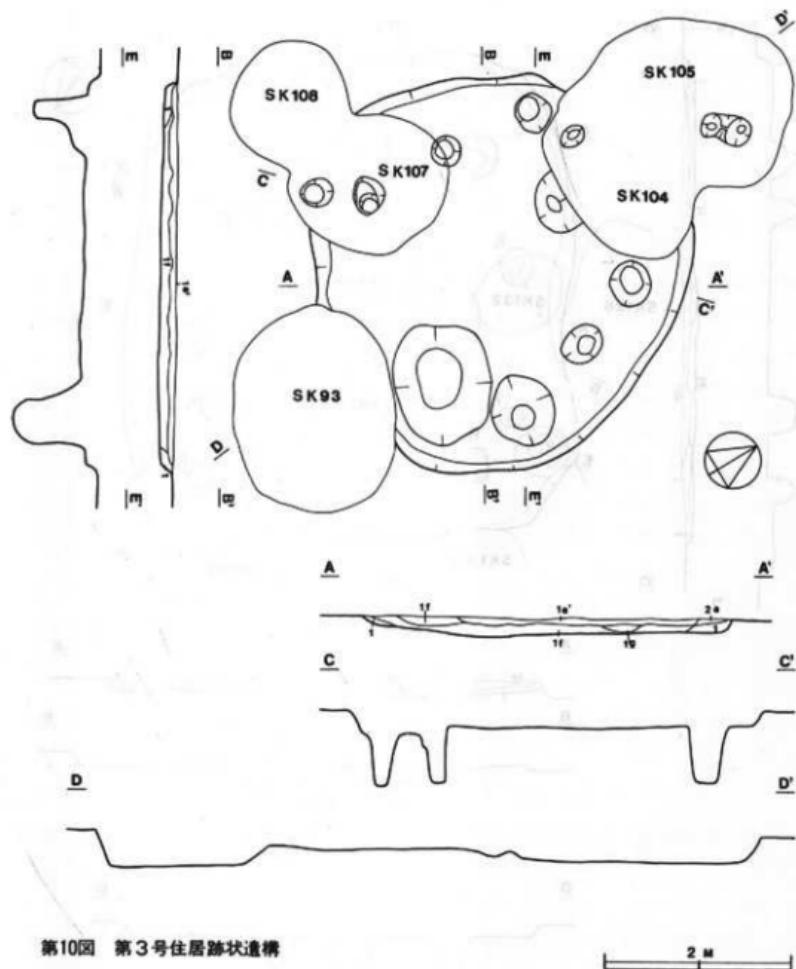
第4号住居跡（第12図）

本住居跡はG10daの調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の西部に位置し、北側でSD1と、さらに床面を切ってSKI32・SKI33・SKI95と重視している。いずれも本跡より新しい遺構である。

規模は長軸5.05m・短軸4.65mで、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-37°-Eである。

壁高は南東側13cm・南西側18cm・北西側14cm・北東側15cmで、南西側がやや高い。壁はソフトロームで締まりがなく、はっきりしないところもある。溝や土壌に切られていない所はなだらかに外傾して立ち上がり、西側一帯は床面からゆるやかに外傾した後、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面はほぼ平坦なロームで良くなじみ、炉の北東部がやや低い。炉は床面の中央より東側に位置し、長径145cm・短径95cmで、平面形は楕円形を呈している。また、皿状に深さ10cmほど掘り窪められた地床炉である。炉内には焼土粒子・焼土塊を堆積していた。また、炉床はロームが火熱を受けたレンガ状に赤化・硬化している。さらに、炉床の部分は掘方の割合に対して小さく、炉床の中央部が凹凸を示している。ピットを14個検出したが、深さも一定せず、炉を囲んだ柱穴の規則性も見られないため主柱穴の判断が出来なかった。

遺物は、覆土上層から少量の土器片を検出したのみである。



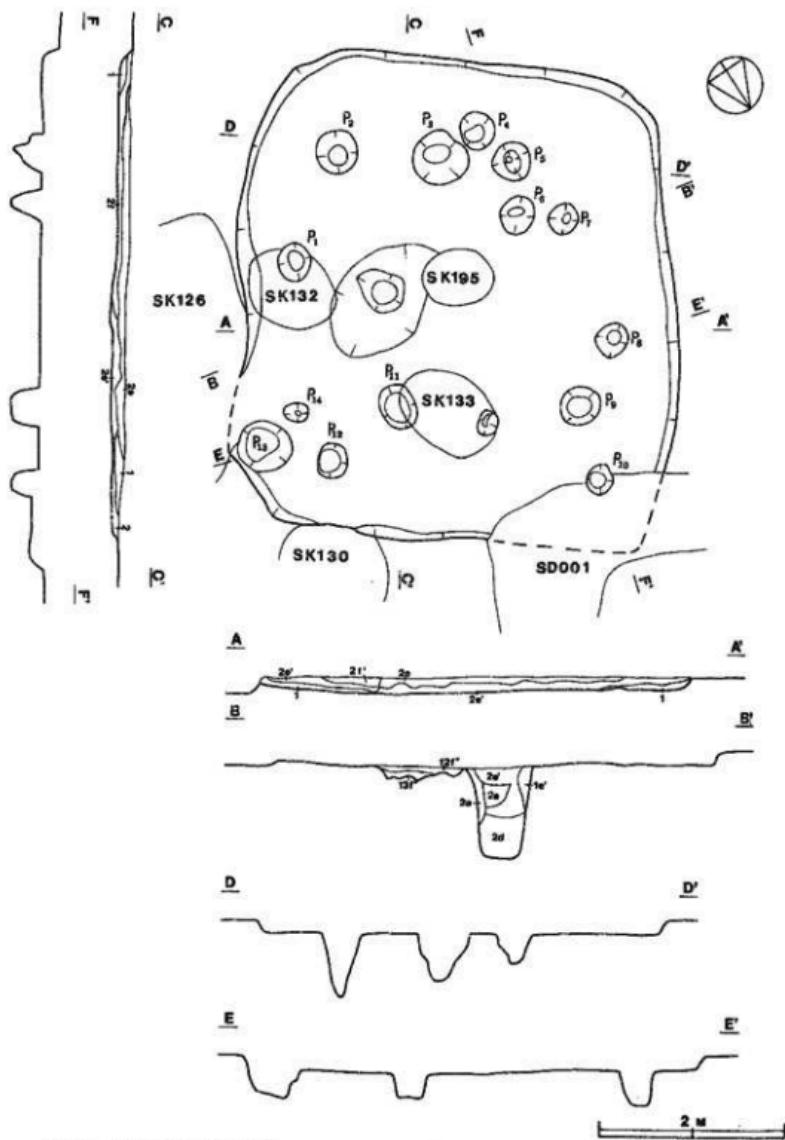
第10図 第3号住居跡状造構



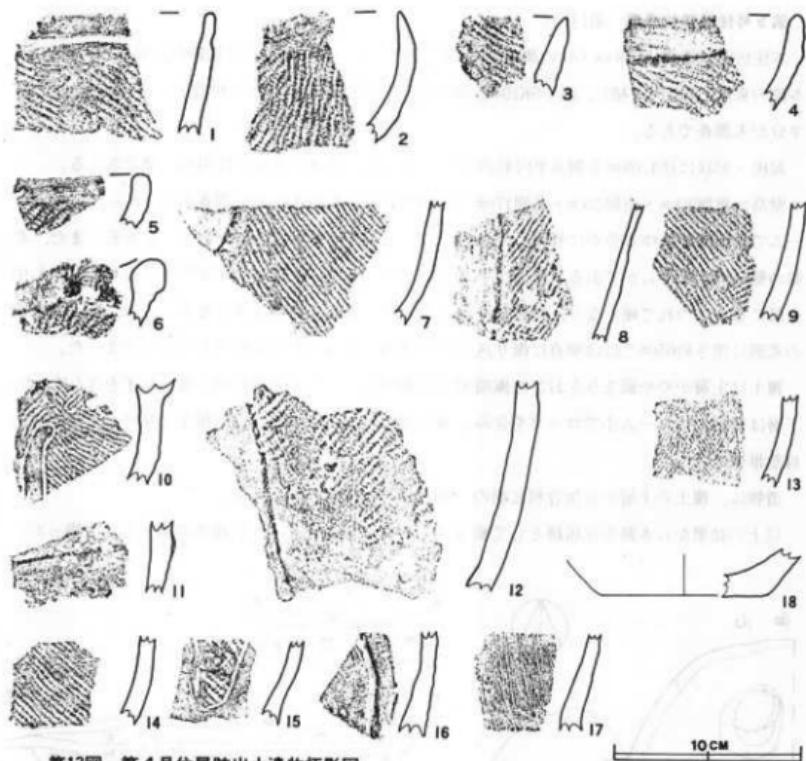
第11図 第3号住居跡状造構出土遺物拓影

第3号住居跡状造構出土遺物（第11図）

2個とも無文だが、異個体である。すり消文、あるいは口縁部無文帯の一部と思われる。



第12図 第4号住居跡実測図



第13図 第4号住居跡出土遺物拓影図

第4号住居跡出土遺物（第13図）

- 1は、横沈線で、無文帯と縞文帯を区画している。
- 2・3は、縞文を施すが、口縁部は薄い。
- 4は、幅広の口縁部無文帯を有している。5は、口縁部無文帯を持つが、口唇部は平たい。
- 6は、貼付による瘤状波状口縁である。
- 7は、すり消しによる懸垂文を持っている。8は、幅広の懸垂文である。
- 9は、縞文の綾絡が見られる。12は、懸垂文を残す大型破片である。
- 13は、細い縞文で結節と綾絡を残している。14は、細い斜位の縞文を付けている。
- 15は、竹管などによる細い沈線で、縱位の格円文を付けている。
- 17は、櫛描き文である。

第5号住居跡状造溝（第14図）

本住居跡状造溝はG 9 cs・dsの調査区に確認されたもので、北西部住居跡群の東部端に位置し、本跡の東側でSK196と接し、南でSK194と隣接している。本跡は西側の村道下まで延びており、約半分が未調査である。

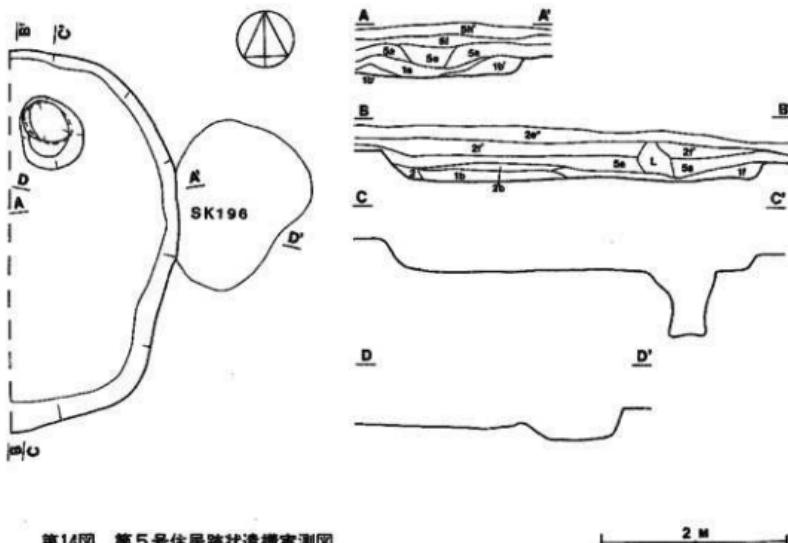
規模・形状は径4.05mを測る半円形のものであるが、本来の平面形は円形と推定される。

壁高は東側30cm・南側32cm・北側17cmで、西側半分は村道下のため調査出来なかった。壁はロームで、床面からゆるやかに外傾して立ち上っているが、明確でないところもある。また、北側の斜面は低くなだらかである。床面は平坦なロームであり、壁周辺の床が明瞭でない。しかし中央部になるにつれて硬くなり、明確なものとなっている。炉は検出されなかった。ピットは、床面の北部に深さ約65cmではば垂直に掘り込まれた土壌状のものを1個検出したにとどまった。

覆土は上層がやや縮まりをおびた極暗褐色の砂質土で、少量の炭化物・焼土粒子を含んでいた。下層は褐色土でローム小ブロックを含み、硬く締まっている。一部分は擾乱を受けているものの、自然堆積であった。

遺物は、覆土の上層から加曾利E期の土器片を検出したのみである。

以上の結果から本跡を住居跡として断定するには無理があり、住居跡状造溝として取扱った。



第6号住居跡（第16図）

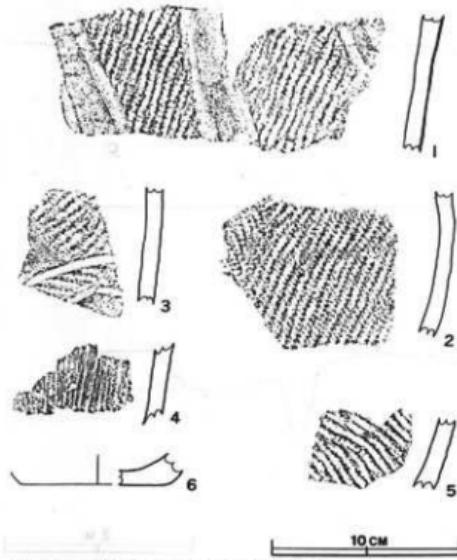
本住居跡はG11b₃・c₃の調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の東部に位置し、本跡の西側にSI3・北西側にSI10・南西側にSI2が離れて所在している。

規模は一边が4.4mで、平面形はほぼ隅丸方形を呈し、長軸方向はN—0°である。

壁高は東側6cm・南側6cm・西側7cm・北側5cmである。壁はソフトロームから成り、床面からゆるやかに外傾して立ち上っている。なお、壁高が低いためにプランの確認が難しく、不明確な所もあった。床面は平坦なロームで締まっているが、壁周辺から炉に向かって低くなり、南側壁ぎわでやや高まっている。炉は、床面のはば中央部に位置している。規模は長径45cm・短径33cmで、平面形は揃円形を呈する。炉の形態は、深さ18cmほど掘り込んだ土器片囲い炉となっている。炉の外側はやや低くなり、焼土粒子・炭化粒子が散らばり軟かい。炉内は焼土が厚く堆積し、炉床は皿状に窪み、熱を受けたロームが白変して硬化している。ピットを14個検出したが、主柱穴はP₁～P₄の4本である。

本跡は当初土壤であるとの判断から、土壤の土層を記録したのみで、住居跡全体の土層を記録することができなかった。

土壤の覆土は、褐色～暗褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む縮まりを帯びたものであるが、堆積の状態は自然なものであった。



遺物は南東部覆土中から磨製石斧1点と、炉内から加曾利E期の土器片を検出した。

第6号住居跡出土遺物（第15図）

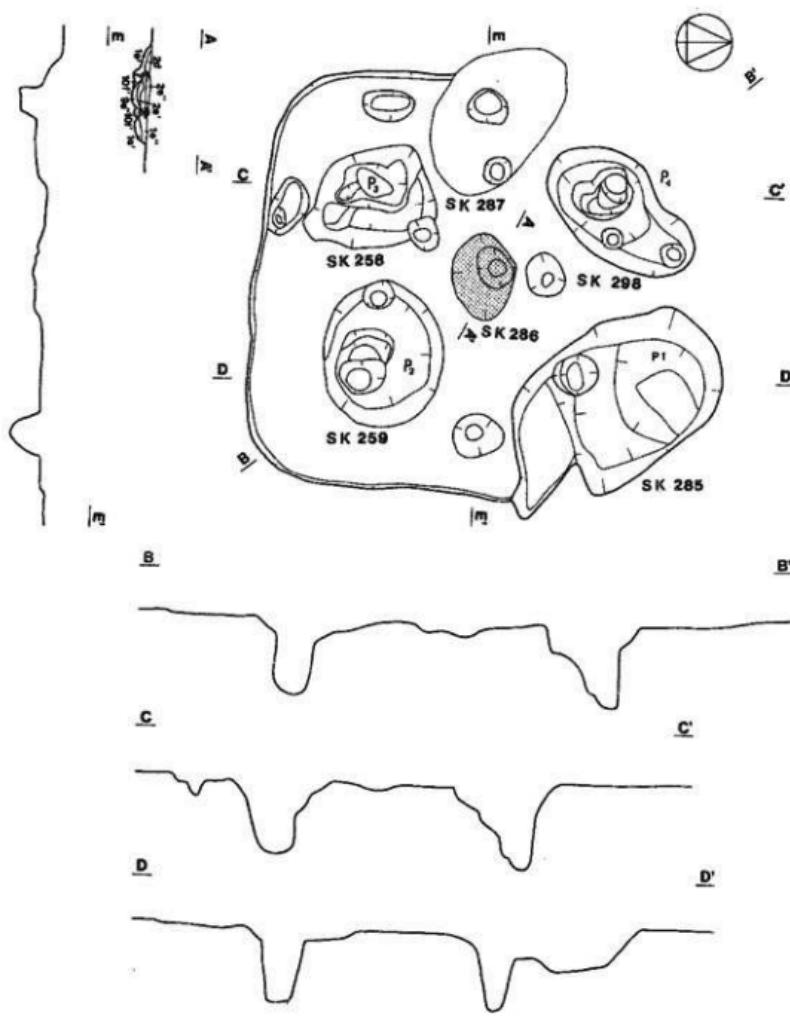
1～5は胸部、6は底部である。

1はすり消による懸垂文を施している。

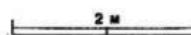
4は櫛描きによる施文である。

6は底部で、平底だが厚さは胸部より薄い。

第15図 第6号住居跡出土遺物拓影図



第16図 第6号住居跡実測図



第7号住居跡（第18図）

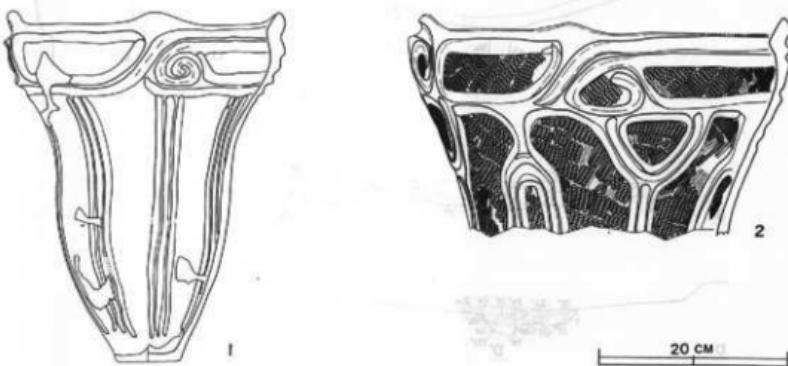
本住居跡はF11f_a・g_bの調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の北東部に位置し、北側でSI8と近接している。

規模は長径4.6m・短径4mで、平面形はほぼ円形を呈し、長径方向はN-45°-Wである。

壁高は、東側13cm・南側16cm・西側13cm・北側20cmである。壁はロームでよく締まっており、床面から外傾して立ち上がった後、上部ではほぼ垂直となっている。床面はロームで硬く締まり、明確なもので、壁周辺から炉に向かって皿状に低くなる。なお、東側に浅い土壤状の張り出しを有しているが、本跡に伴うものとは考えにくい。炉は床面の中央部に位置し、加曾利E III式の大形深鉢の胴部上半を埋設した土器埋設炉である。炉内の覆土は、焼土粒子を含み締まっていた。炉床は火熱を受けたロームがレンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。ピットは、床面から9個検出された。

覆土は暗褐色土で、少量の焼土粒子・炭化粒子を含み、締まりを帯び、自然堆積していた。

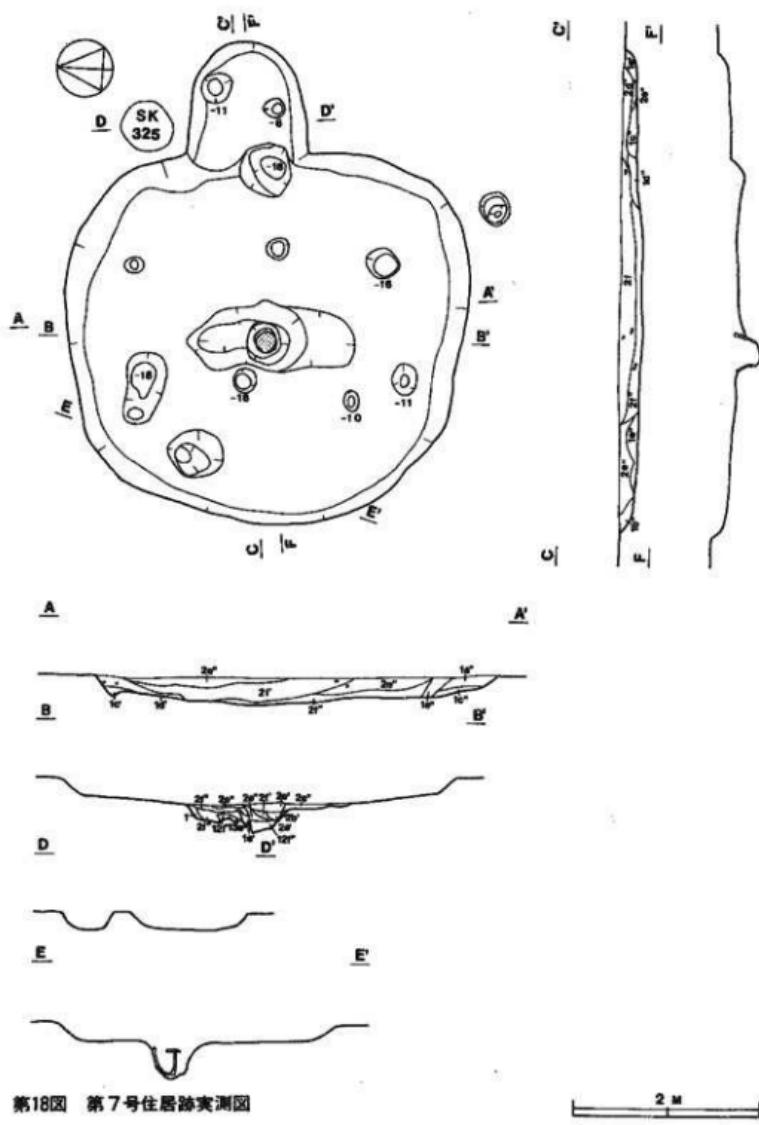
遺物は、床面の北西部から加曾利E III式の深鉢形土器の胴部下半を検出した。



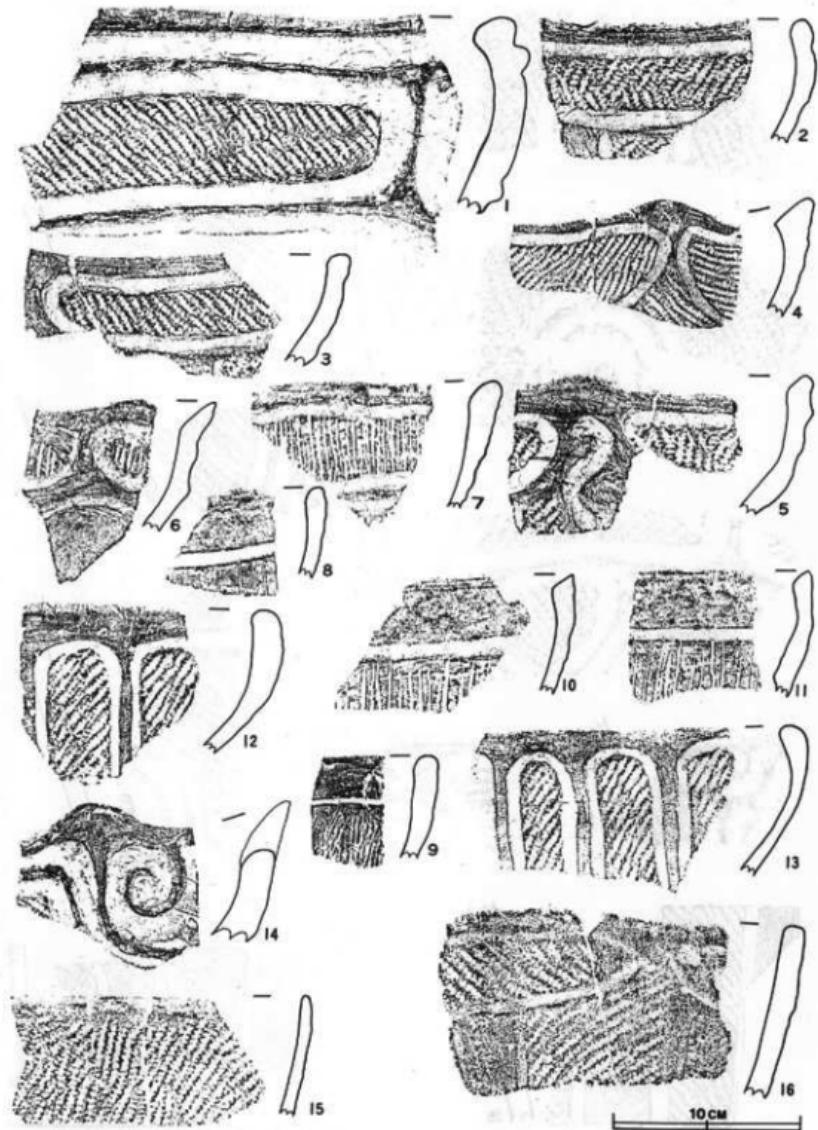
第17図 第7号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表(第17図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-7	1	深鉢	A 29.3 B 37.2 C 7	四つの大底付口縁。口縁部は貼り付けによる隆起部で、複数枚円文を2単位めぐらして貼り付ける。口縁部の内側にはY字状の凹部がある。底部にかけて大きく外傾し、上部で内傾する。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 スコリア 褐色	E III	75% 埋設土器
	2	深鉢	A 39.0 B 23.8	口縁は5つの大底付口縁で、隆起部による複数枚の円文を1単位とする。4単位めぐらされると、縁文が欠陥されている。胴部には沈縁によるY字状の凹部がなされ、複数枚の変形横内文が施される。胴部はやや外傾し、底部では、やや内傾して立ち上がる。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 スコリア 石英	E III	50% 埋設土器



第18図 第7号住居跡実測図



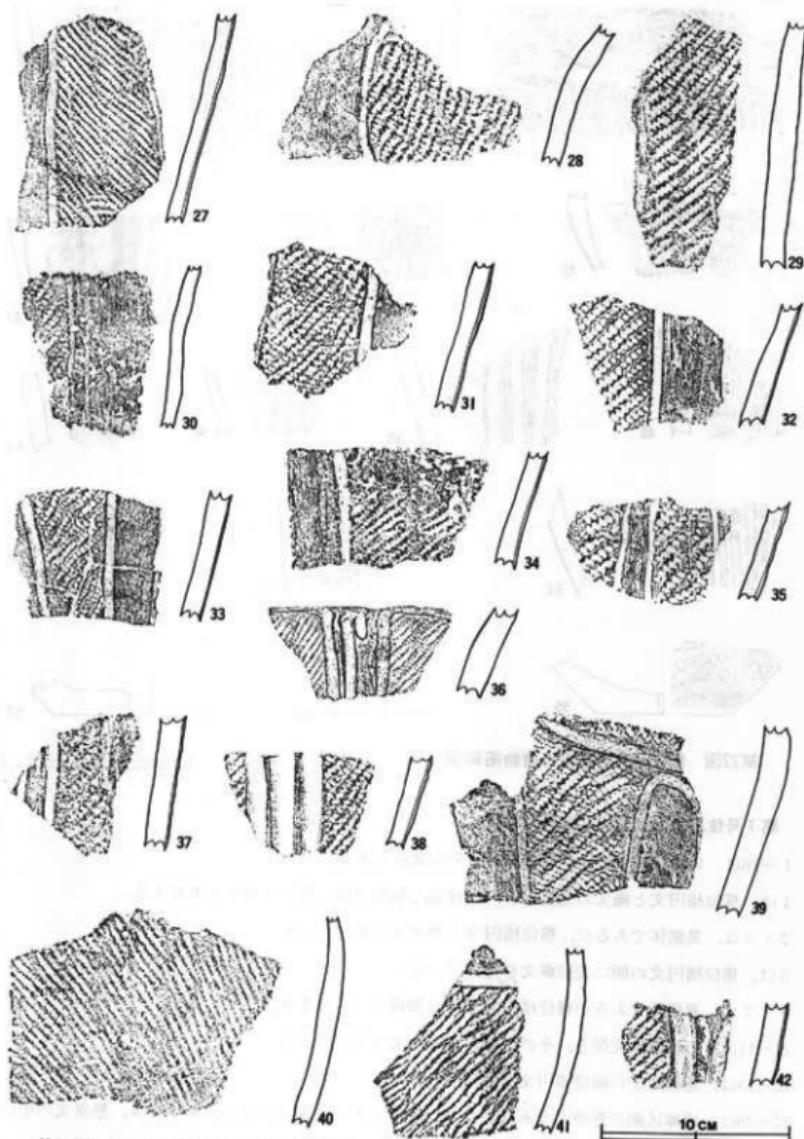
第19図 第7号住居跡出土遺物拓影図

第19図 第7号住居跡出土遺物拓影図

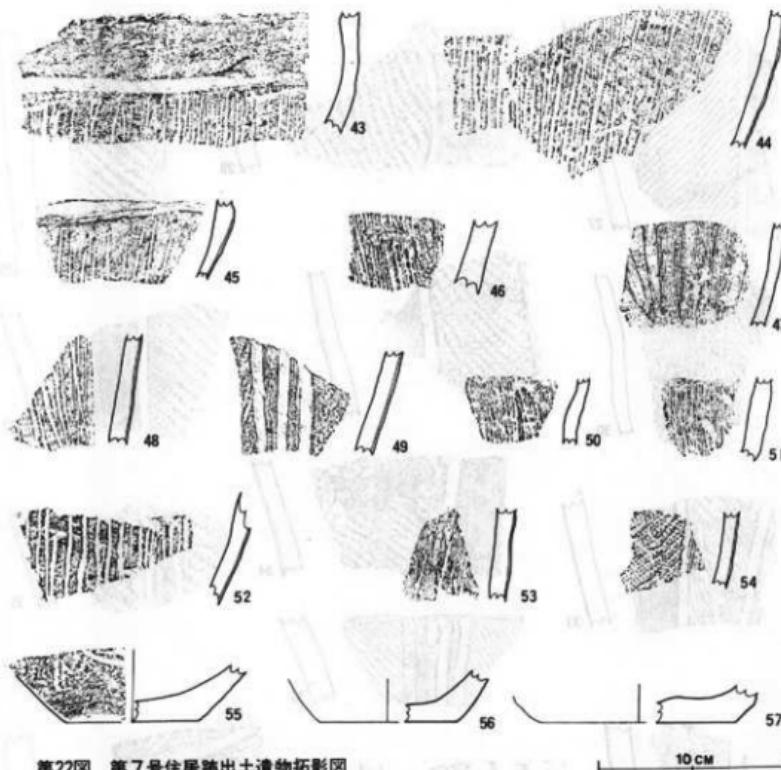


第20図 第7号住居跡出土遺物拓影図

日本考古学会出展第7回 考古学



第21図 第7号住居跡出土遺物拓影図



第22図 第7号住居跡出土遺物拓影図

第7号住居跡出土遺物（第19～22図）

1～16は、口縁部、17～54が胴部、55～57が底部である。

1は、横位格円文と繩文の充填をし、口縁部と胴部の境に横位沈線を1本有する。

2・3は、異個体であるが、横位格円文と懸垂文を見せてている。

5は、横位格円文の間に変形繩文を付けている。

6・7は、異個体であるが横位格円文の中に櫛描きの文様を充填している。

8～11は、口縁部無文帶と、その下部に櫛描き文を有している。

12・13は、連続並びの縦位格円文を付ける。

27～28は、沈線区画の懸垂文であるが、36は懸垂文の中に繩文を持ち、37・38は、懸垂文の中にもう1本の沈線を有している。

第8号住居跡状遺構（第23図）

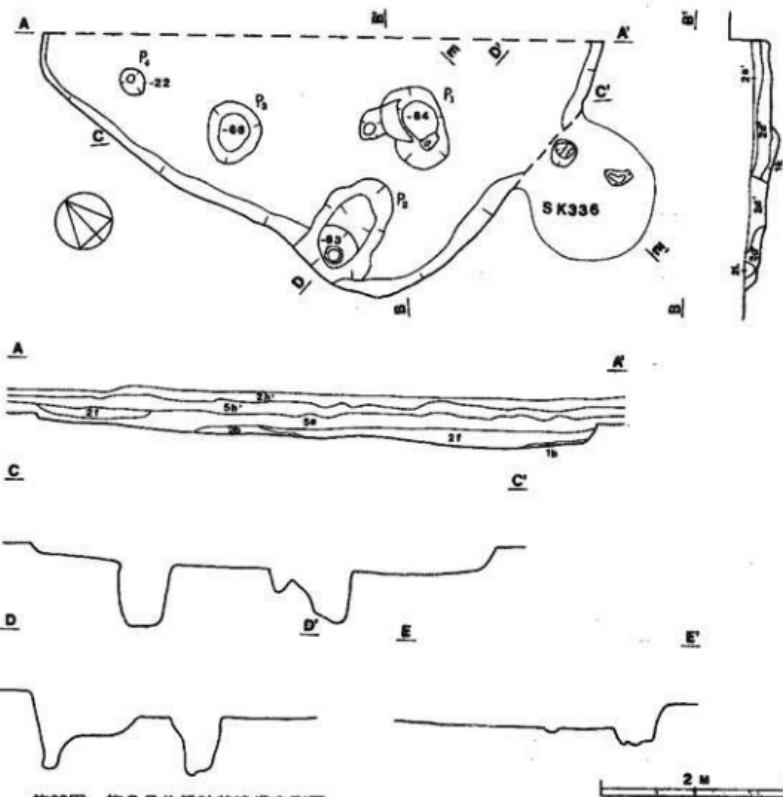
本住居跡状遺構はF11e₅・e₆の調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の北東部端に位置し、3分の2ほどがエリア外へ延びており、調査ができなかった。

規模は、5mほどの隅丸方形と推定される。

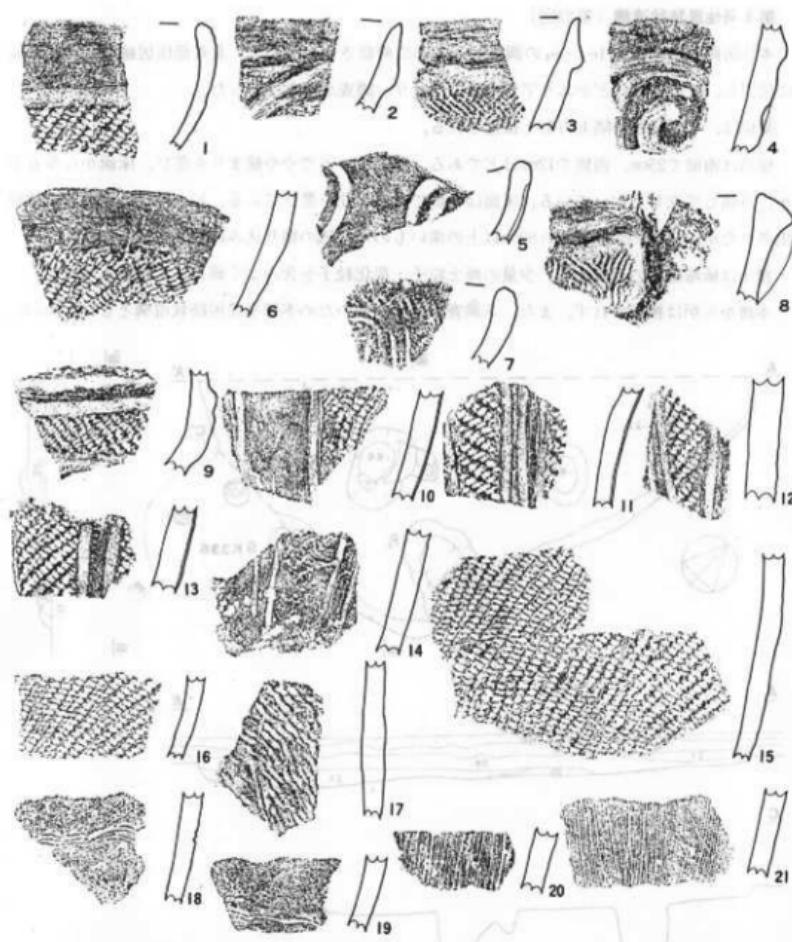
壁高は南側で25cm、西側で12cmほどである。壁はロームでやや縮まりを帯び、床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面は平坦で、縮まりを帯びている。ピットは床面から4個検出されたが、P₁～P₄がそれぞれ60cm以上の深いもので、P₄の掘り込みは22cmと浅かった。

覆土は極暗褐色の砂質土で、少量の焼土粒子・炭化粒子を含みよく縮まって堆積していた。

本跡から炉は検出されず、また、未調査の部分が多いため本跡を住居跡状遺構として取扱った。



第23図 第8号住居跡状遺構実測図



第24図 第8号住居跡状遺構出土遺物拓影図

10 CM

第8号住居跡状遺構出土遺物（第24図）

1～3は、口縁部無文帯を有している。

4～5は、沈線のみによる渦巻文、8は、貼り付けによる隆帯を持っている。

9～14は、沈線区画による懸垂文である。

15～16は、繩文のみ施文。20・21は、櫛歯状沈線を描いている。

第9 A号住居跡（第25図）

本住居跡はF11d₃・e₃の調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の北東部端に位置する。東側にSI8、南東側にSI7、南西側にSI10が近接して存在し、南側には柱穴状の土壙が多数検出されている。

規模は長径5.9m・短径4.8mで、平面形は不整円形を呈し、長径方向はN-15°-Eである。

壁高は、東側10cm・南側12cm・西側10cm・北側11cmである。壁はソフトロームで繋まっており、床面からゆるやかに外傾して立ち上かる。床面はロームブロックで硬く、壁際辺部から炉に向かってやや低く傾斜している。部分的には南東部がやや高まりをもっている。炉は床面の中央部から北側寄りに位置し、長径130cm・短径110cmの規模を有している。炉の平面形は楕円形で、皿状に15cmほど床面を掘り込んだ地床炉である。炉床は南北東側から北西側へ向なりに火熱を受け、ロームが部分的にレンガ状に赤化・硬化している。炉の使用は短かったと考えられる。ピットを床面から10個検出したが、本跡の主柱穴と考えられるものはP₁～P₅である。柱穴の中で、P₄の覆土はレンズ状に自然堆積していたがその中層の南側に白色粘土の層が20cmほど流れ込んだ状態で検出された。その性格や目的は不明である。

覆土は中央部が暗褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含みやや硬い。周辺の覆土は褐色土で、含有物は中央部のものと変化なく、また、縮まりを帯びていた。

遺物は、北東部覆土から石皿片が出土した。

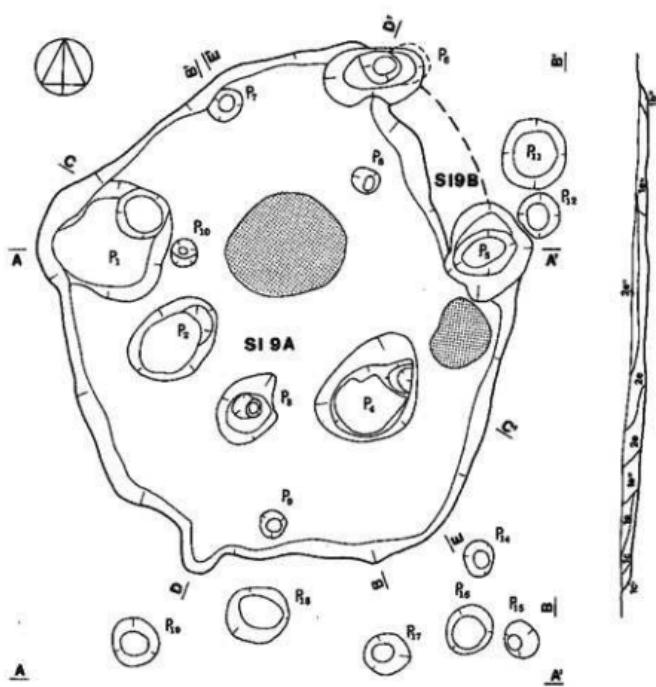
第9 B号住居跡状遺構（第25図）

本住居跡状遺構はF11d₃・d₄・e₃・e₄の調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の北東部端に位置し、SI9 Aと重複している。

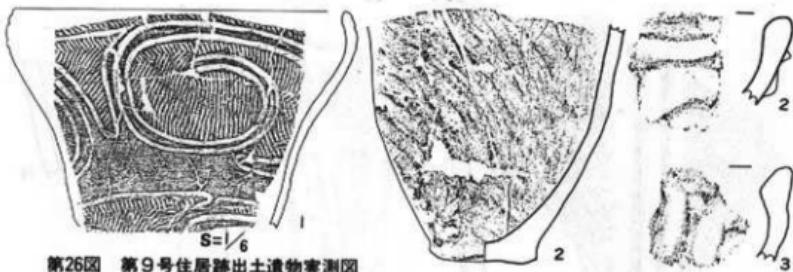
規模・壁はSI9 Aを確認するためにローム面を削りすぎ、計測できなかった。床面はSI9 Aの北東部に、それらしきものを一部分確認したが、付近の同一レベルのものと近似したソフトロームのため、本跡の床と断定することができなかった。炉はSI9 Aの床面上の東側に検出されたが、SI9 Aの床面上であったためその形態は不明である。また、炉床そのものが判然とせず、その使用期間を推定することができなかった。柱穴も確認できなかった。

以上のことから、本跡を住居跡と断定することができず、住居跡状遺構として取扱った。

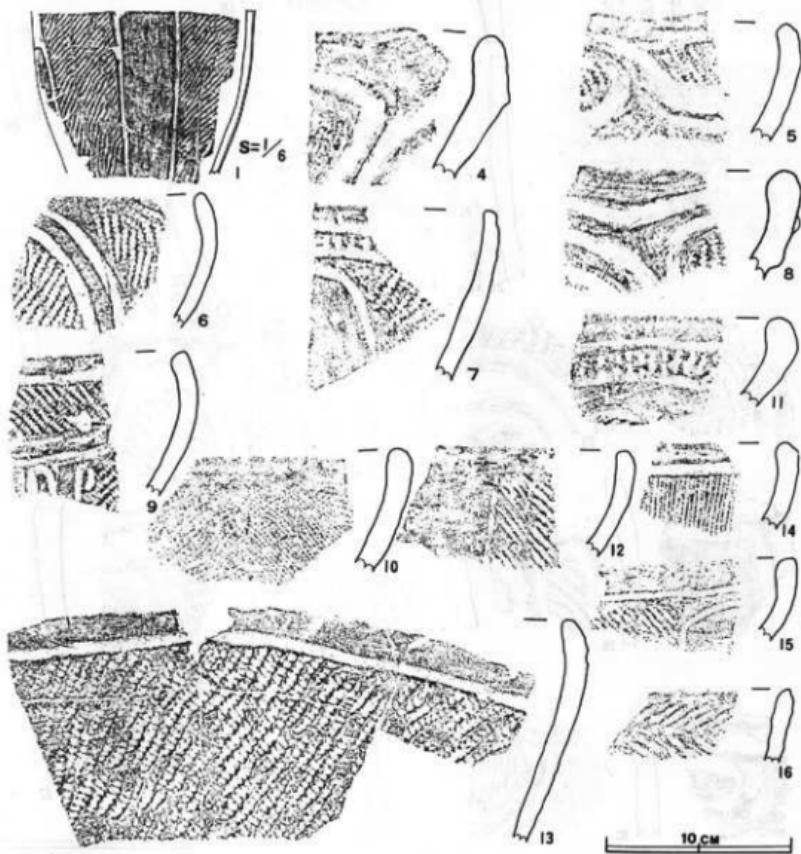
遺物は、本跡に伴うものとしては未検出であるが、表土除去の際に加曾利E期の土器片を検出している。また、本跡とSI9 Aの新旧関係は土層の切り合いから判断すると本跡が新しい。



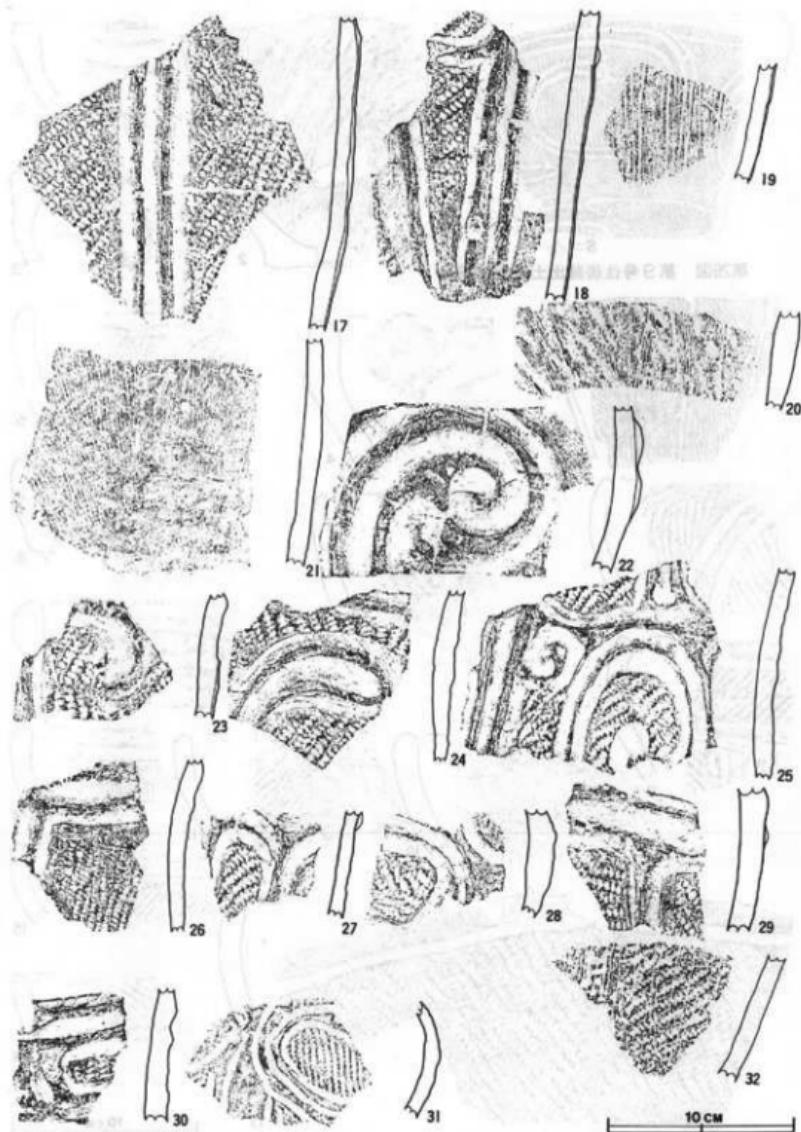
第25図 第9A・B号住居跡実測図



第26図 第9号住居跡出土遺物実測図

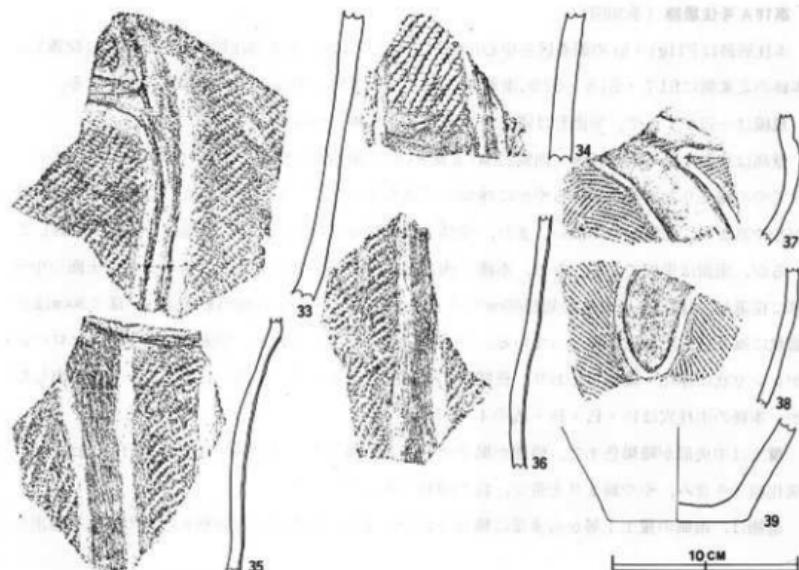


第27図 第9号住居跡出土遺物拓影図



第28図 第9号住居跡出土遺物拓影図

出雲市立歴史民俗資料館蔵 図25



第29図 第9号住居跡出土遺物拓影図

出土遺物解説表(第26図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-9	1	深鉢	B(12.4) C 5.6	脇部以下が残存。無文で、左側より斜線にヘラによる整形がなされているが、粗雑な作りである。底部から脇部にかけてやや開き、脇部ではほぼ垂直となる。内面横なので、外面へかけ足り。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 スコリア 色調 橙色		

第9号住居跡状遺構出土遺物(第29図)

2~5・8は、貼付けによる隆沈線を持つている。

10~15は、口縁部無文帯を有している(12は口縁から懸垂文を有し、13~15は沈線によって口縁と脇部を分けている)。

17~18は、3本の沈線懸垂が垂下している。19~21は、櫛齒状線を施している。

22~25は、満巻文を持っている(22は貼付け微隆帶、他は沈線による。ただ25は織文を有している)。

26~31は、横円文を持っている(27~29は縦位、26・28・29・30・31は横位)。

33~36は、沈線区画による懸垂文を付けている。

37~38は、沈線区画による無文帯を有し、脇下は斜行の細い織文を施している。

第10A号住居跡（第30図）

本住居跡はF11g・hの調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の北東部に位置し、本跡の北東側にSI7・SI8・SI9、南東側にSI6、南西側にSI3・SI10が離れて所在する。

規模は一辺が7mで、平面形は隅丸方形を呈し、長軸方向はN-10°-Wである。

壁高は東側4cm・南側13cm・西側21cm・北側8cmで、南西部の壁がやや高い。壁はソフトロームでやや縮まり、床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面はロームで硬く、南東部がやや高まり、北側がやや低い。また、全体として見ると炉に向かって壁周辺から低く傾斜しているが、床面は平坦である。なお、本跡の南西部にSI10Bの床が重複している。炉は床面の中央部に位置し、規模は長径150cm・短径65cmである。また、炉の平面形は楕円形を呈し、深さ30cmほど皿状に掘り込んだ地床炉となっている。炉内には焼土が厚く堆積し、炉床は火熱を受けたロームがレンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。床面に15個のピットを検出したが、本跡の主柱穴はP₁・P₄・P₇・P₉の4本である。

覆土は中央部が暗褐色土で、周囲が褐色土である。覆土中には、少量のローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含み、やや縮まりを帯び、自然堆積であった。

遺物は、南側の覆土上層から多量に検出された。また、炉内から加曾利E期の土器片を検出した。

第10B号住居跡（第30図）

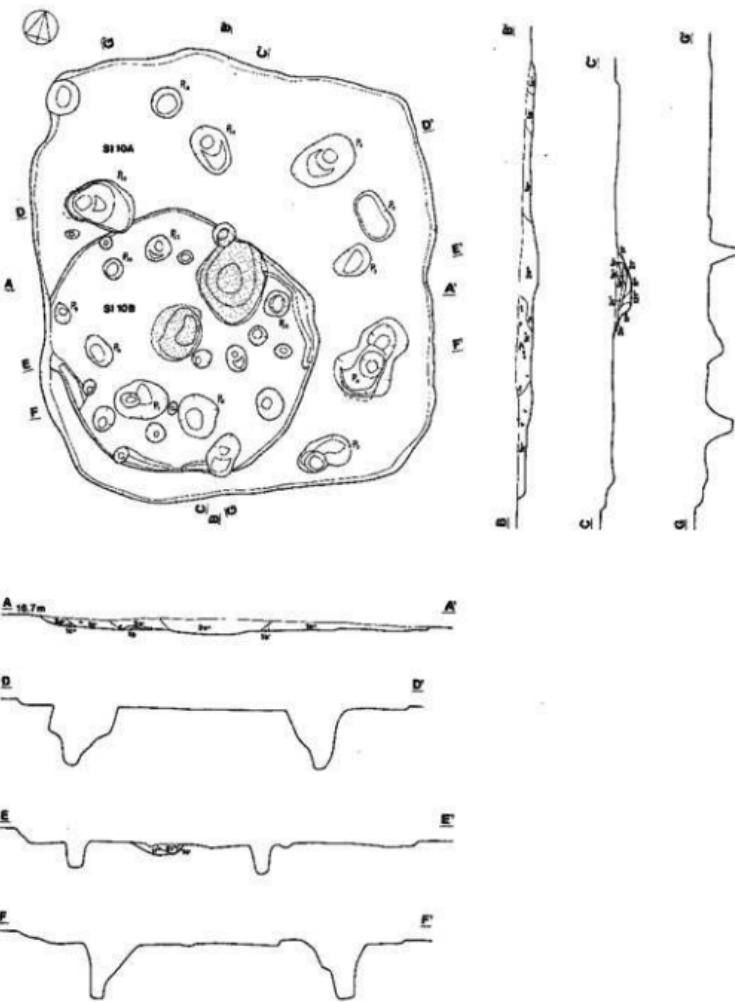
本住居跡はF11hの調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の北東部に位置し、本跡の北東側にSI7・SI8・SI9・南東側にSI6・南西側にSI3・SI10が離れて所在する。

規模は4.8mで、平面形は円形を呈する。

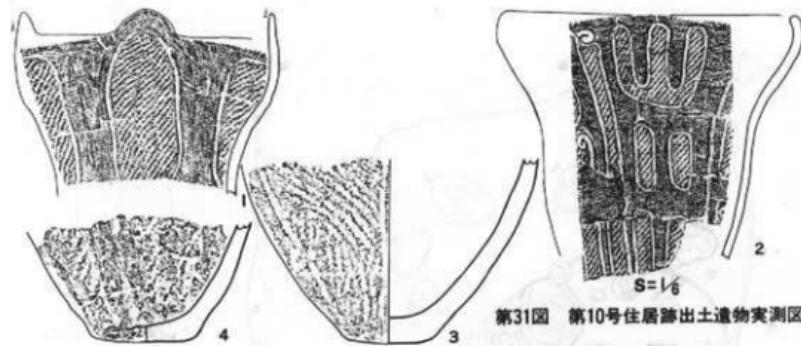
壁高は床面とはほぼ同じ程度で低く、SI10Aの床面を1~2cmほど掘り込んでいる。床面と壁の間には、U字状の壁溝がほぼ全周している。この壁溝と本跡の壁は一体となっている。床面はロームで硬く、炉の東・西側でやや高く、南側が低い。炉は床面の中央に位置し、規模は長径90cm、短径65cmである。炉の形状は楕円形で床面を深さ18cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土が厚く堆積し、炉跡は火熱を受けたロームがレンガ状に赤化・硬化している。柱穴は、SI10Aのものも本跡の床面上にあってやや複雑であるが、本跡の主柱穴はP₄・P₈・P₉・P₁₀の4本と考えられる。

覆土は浅く、SI10Aのものと本跡のものとの区別はできなかった。

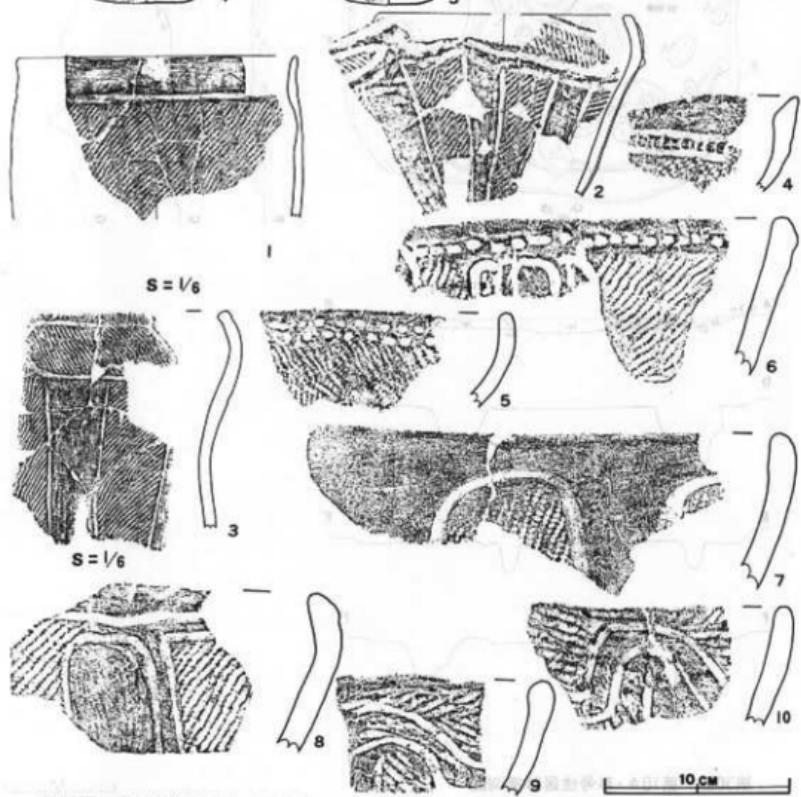
遺物は、覆土上層から中層にかけて土器片が多量に検出された。また、炉内からも土器片を検出した。SI10A・SI10Bの新旧関係は、遺構と炉内遺物からも判断出来なかった。



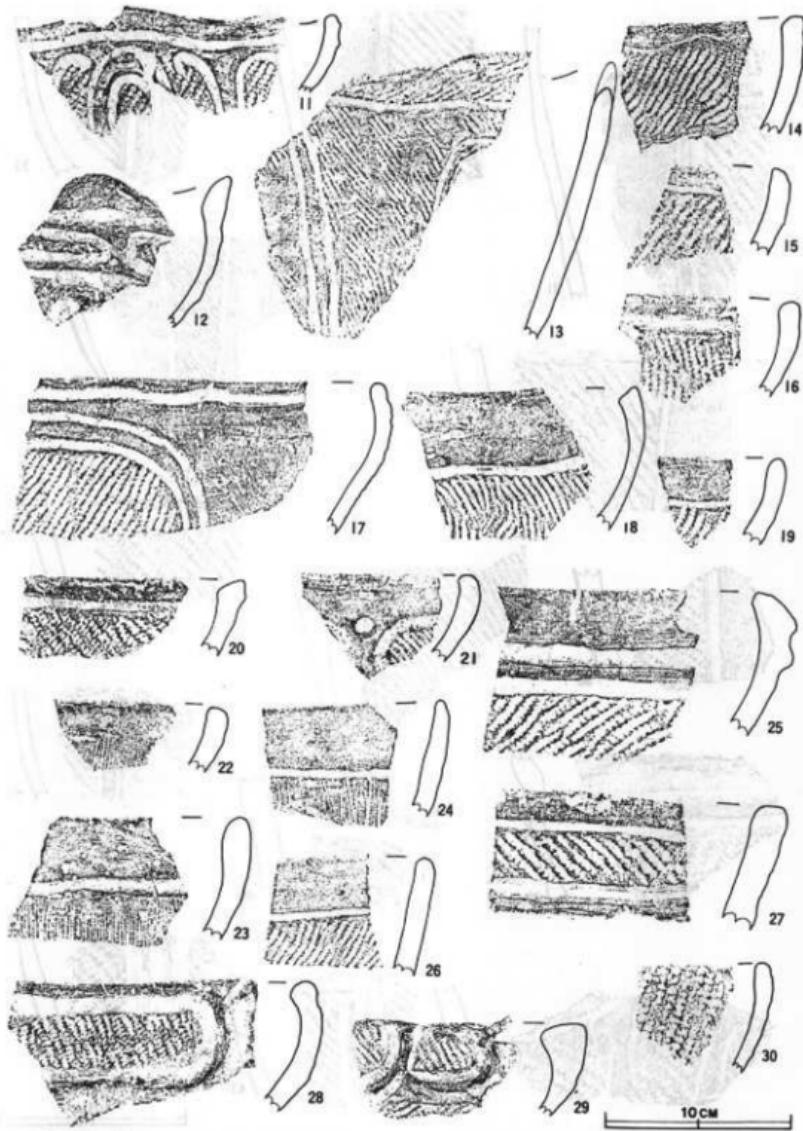
第30図 第10A・B号住居跡実測図



第31図 第10号住居跡出土遺物実測図



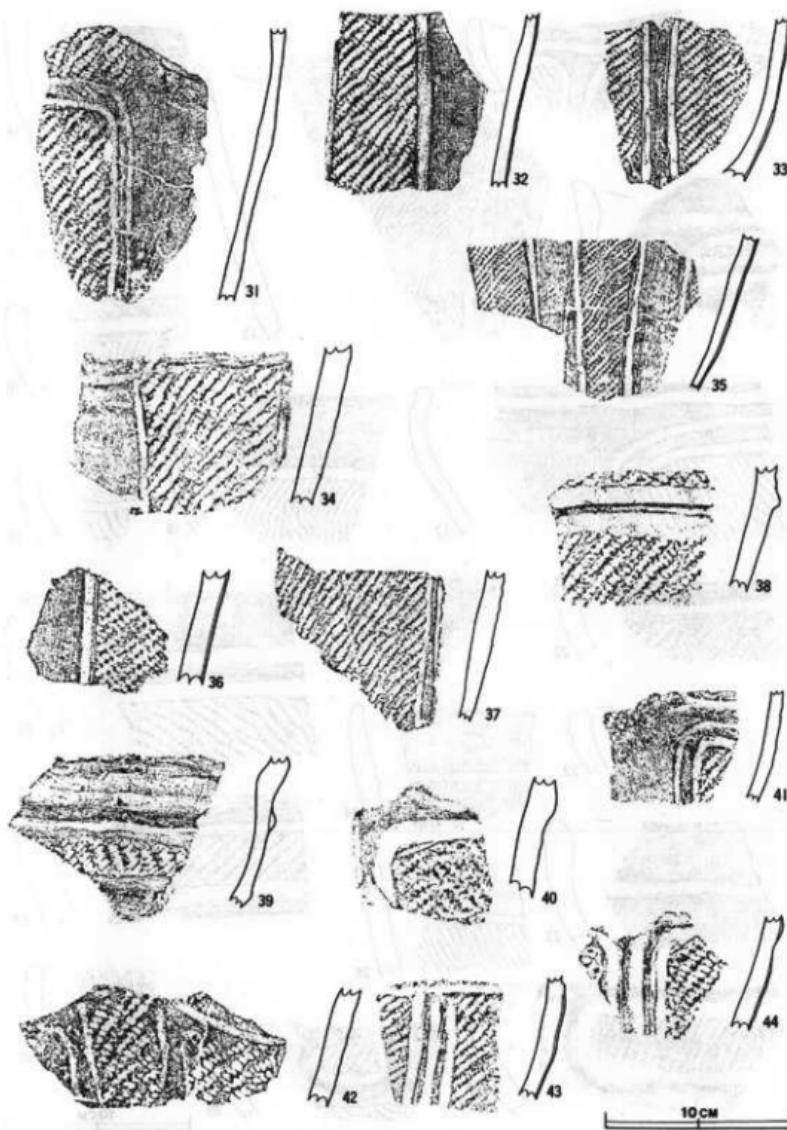
第32図 第10号住居跡出土遺物拓影図



第33図 第10号住居跡出土遺物拓影図

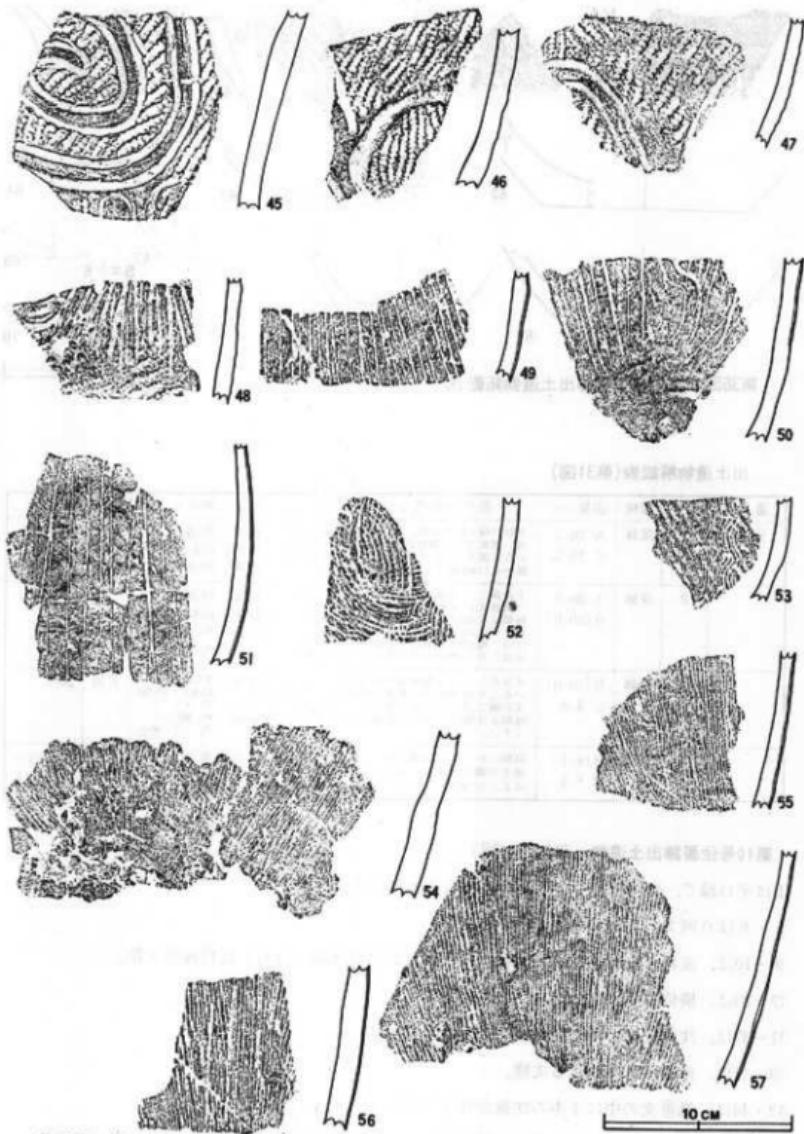
◎ 漢陽城南土出器物群研究会

10 CM

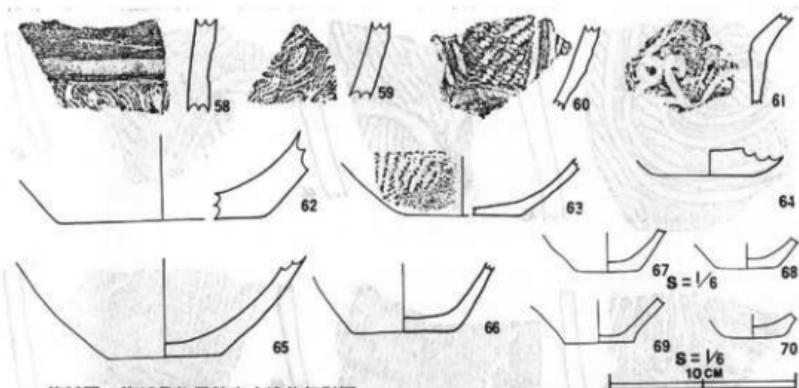


第34図 第10号住居跡出土遺物拓影図

第34図 第10号住居跡出土遺物拓影図



第35図 第10号住居跡出土遺物拓影図



第36図 第10号住居跡出土遺物拓影図

出土遺物解説表(第31図)

遺 標	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備 考
SI-10	1	深鉢	A 26.3 B 19.5	波状口縁(把手抜4つ)で、口縁から底へすり消し懸垂文と、調整沈線による横位の楕円文が6区画にされ、区画内は、縞文を施す。底部から口縁部にかけて内側に立ら上がる。	焼成 普通 胎土 砂粒 色調 明赤褐色	E III	胴上50%
	2	深鉢	A 28.5 B (26.0)	平口縁で、全面に縞文を施したのも、楕位の楕円文による4単位の区画がなされ、口縁部は沈線による「W」字形の区画をし、縁をすり消している。腹部から底部にかけては、楕位の沈線による楕円文が施され、且つその間にすり消されている。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 外 黒褐色 内 橙色	IV	40%
	3	深鉢	B (10.0) C 4.8	すり消しによる懸垂文(底面)にまで達している。5区画内は、粗糲で不明しくい楕円文が施こされている。底面は、小さく凹い。底部が施こされている。底面は、小さく凹い。底部にかけて直線的に立ち上がり、底面に凹む。	焼成 不良 胎土 砂粒・砂礫 色調 スコリア 外 橙色 内 にむき色	E III	20%
	4	深鉢	B (6.1) C 5.5	底面にかけて、沈線区画によるすり消し懸垂文が縞文と交互に施されている。縞文はほとんど率減している。	焼成 普通 胎土 砂粒 色調 棕色	E III	底部のみ 床面出土

第10号住居跡出土遺物 (第32~36図)

1は平口縁で、口縁部横なでへら磨きがなされている。

5~6は点列文、7~8は縱位の楕円文。

9~10は、波状の沈線を持っていて。15~26(25の隆沈線を含む)は口縁部文帯。

27~29は、横位の楕円文。

31~37は、沈線区画による懸垂文。

39~41は、楕円文と思われる文様。

43~44は、懸垂文の中に1本の沈線が垂下している。45~47は横位の満巻文。

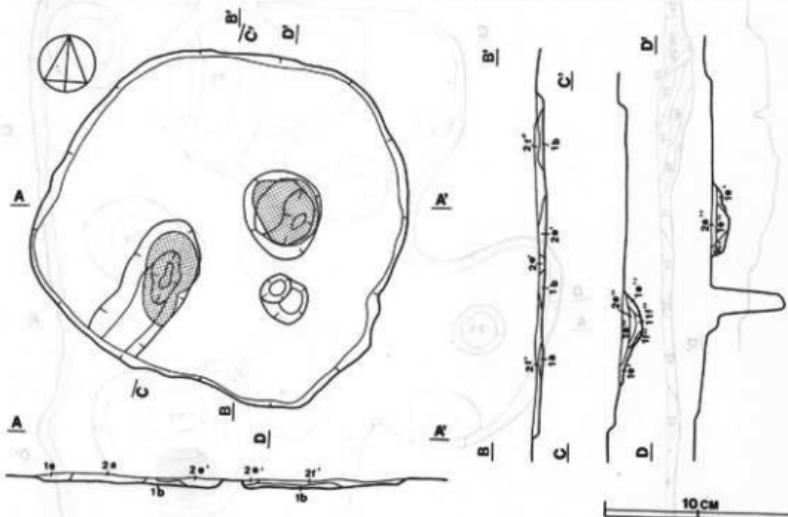
49~57(52は孤状、53は縱波状)は櫛歯状沈線。

第11号住居跡状遺構（第37図）

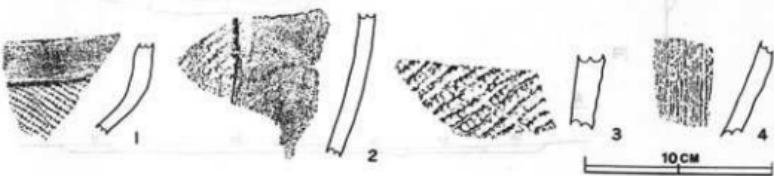
本住居跡状遺構はF10jの調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の北西部に位置している。

規模は長径4.05m・短径3.5mで、平面形は不整円形を呈し、長径方向はN—76°—Eである。

壁高は6～9cmである。壁・床面ともにソフトロームで明確なものでない。炉と思われるものは、床面の南西部に地床炉の相様を示すもの、北東部に焼土を堆積した土壤状のものである。また、柱穴も1本である。これらから総合的に判断して本跡を住居跡状遺構として取扱った。



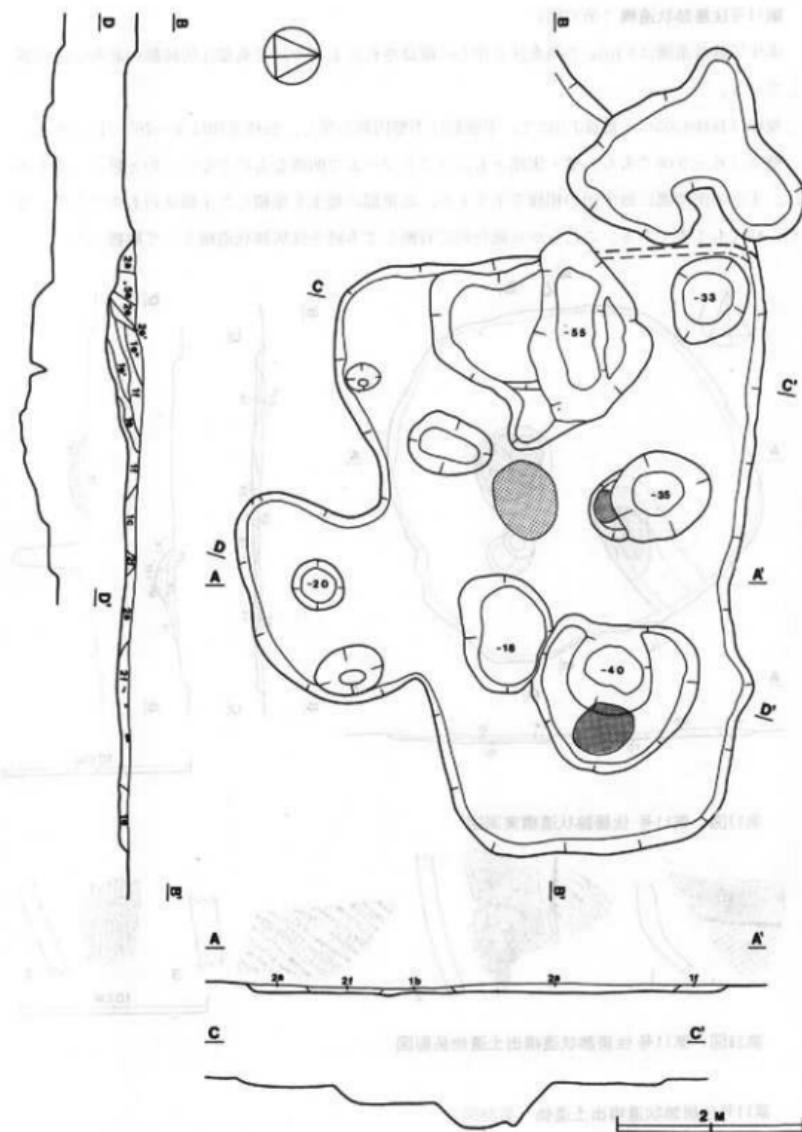
第37図 第11号 住居跡状遺構実測図



第38図 第11号 住居跡状遺構出土遺物拓影図

第11号住居跡状遺構出土遺物（第38図）

1は無文帶を有し、2は幅広の懸垂文、3は繩文のみである。4は櫛歯状沈線。



第39图 第12号住居跡状況実測図

第12号住居跡状遺構（第39図）

本住居跡状遺構はG10aの調査区を中心に確認されたもので、北東部住居跡群の北西部に位置し、北東側でSI11、北西側でSI13、南々西側でSI4と近接している。

規模は長径6.05m・短径3.95mで、平面形は不定形を呈し、長径方向はN-89°-Eである。

壁高は、東側13cm・南側9cm・西側10cm・北側7cmである。壁・床面ともに明確なものではなくソフトロームである。床面から楕円形・不整円形の土壙が確認されたが、本跡との新旧関係は不明である。柱穴と考えられるものはない。これらのことと総合的に判断して、本跡を住居跡状遺構として取扱った。

第12号住居跡状遺構出土遺物（第40図）

2・3が点列文による口縁部、4・5は口縁部無文帶、6～8は波状口縁の一部である。

10～12は、貼り付けによる隆帯を持つ口縁部である。14は、指圧の点列文を有している。

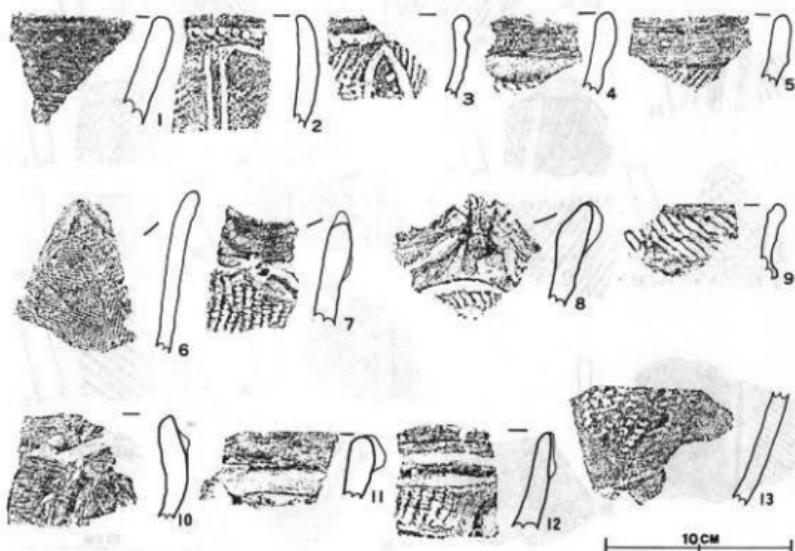
15・16は、降沈線文と思われる。18・20・22は縦位の楕円文で、19は歯状沈線を波状に施している。

23・25～35・37は沈線区画による懸垂文を付け、24・36・38・39は懸垂文だけである。

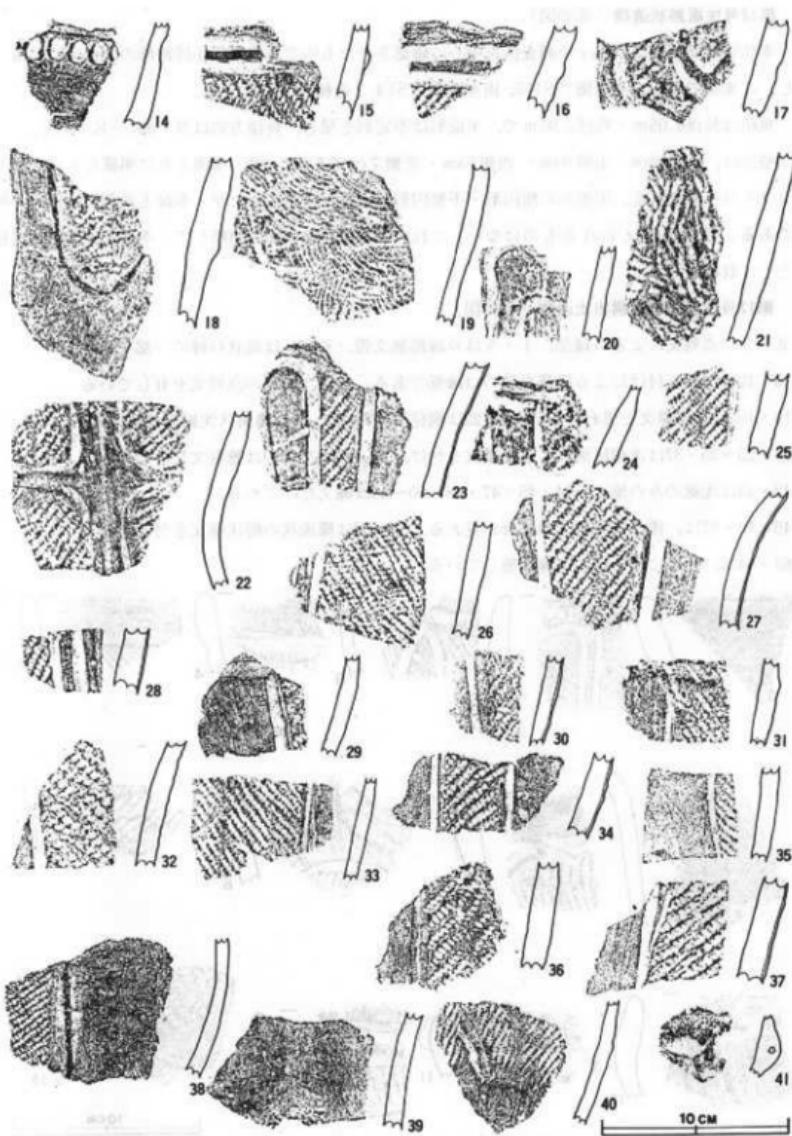
42・43は沈線のみの施文。44・45・47・48・50～56は繩文だけである。

46・49・57は、僅かに懸垂文の部分が見える。58～62は櫛歯状の縦沈線文を付けている。

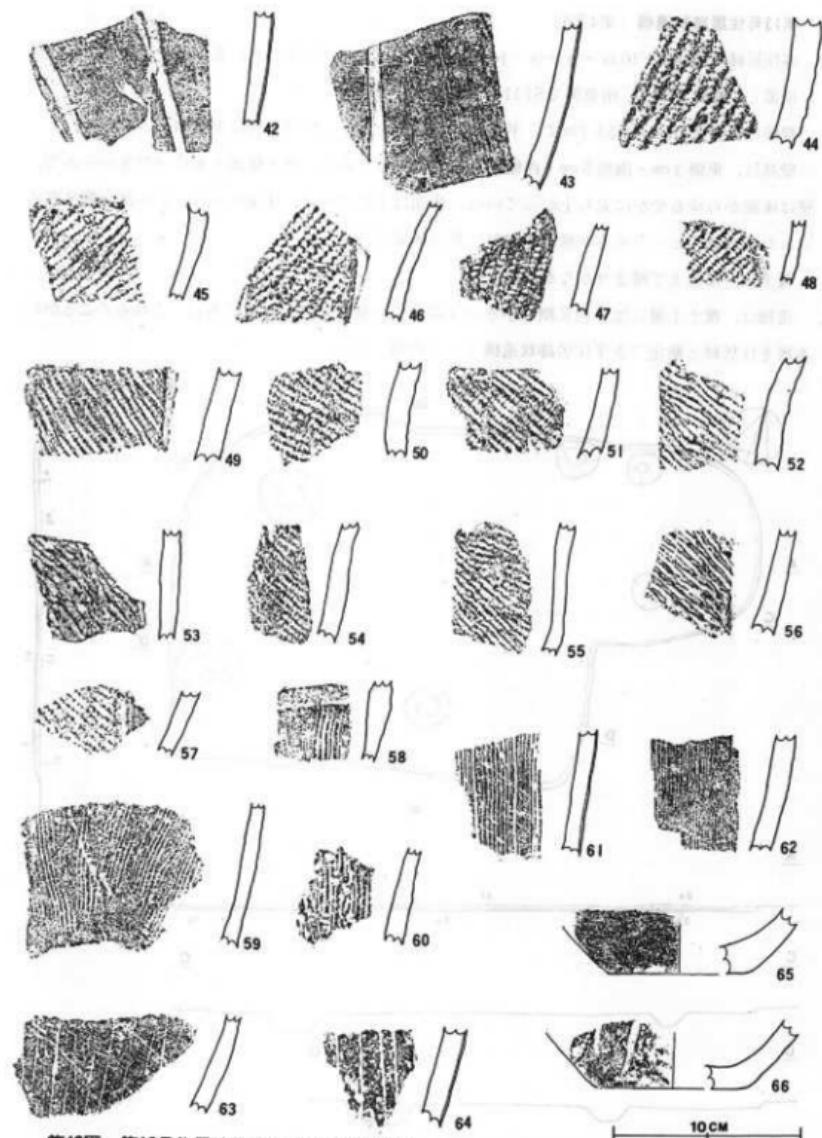
63・64は、ヘラによる縦の沈線を施している。



第40図 第12号住居跡状遺構出土遺物拓影図



第41図 第12号住居跡状造構出土遺物拓影図



第42図 第12号住居跡状構出土遺物拓影図

第13号住居跡状遺構（第43図）

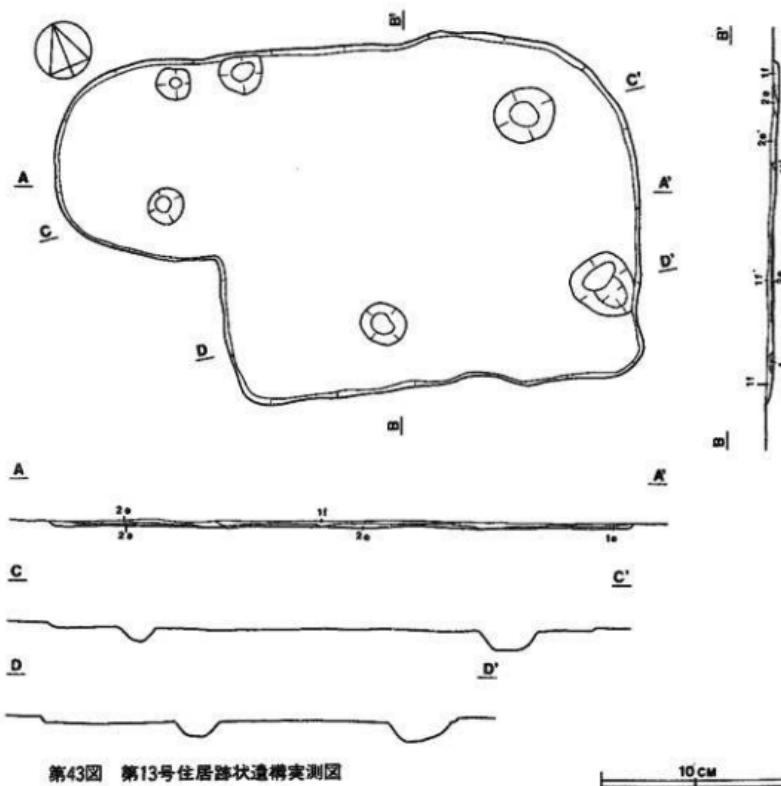
本住居跡状遺構はF10 i₃・j₂・i₄・j₄の調査区に確認されたもので、北東部住居跡群の北西部に位置し、南側でSI12、南東側でSI11と近接している。

規模は長径6.2m・短径3.7mで、平面形は不定形を呈し、長径方向はN-74°-Wである。

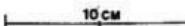
壁高は、東側3cm・南側5cm・西側5cm・北側7cmである。壁・床面とともにソフトロームで、壁は床面からゆるやかに立ち上がっている。床面は平坦であり、床面からは、14~20cm掘り立てられた柱穴状のピット6本が検出された。炉は確認できなかった。

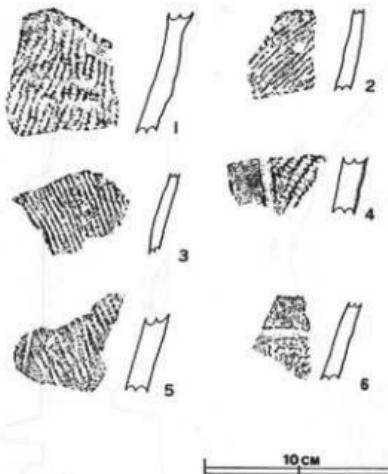
覆土は、褐色土で締まりがなかった。

遺物は、覆土上層に加曾利E期の小さい土器片を少量検出しただけである。これらのことから、本跡を住居跡と断定できず住居跡状遺構として取扱った。



第43図 第13号住居跡状遺構実測図





第44図 第13号 住居跡状造構出土遺物拓影図

第13号住居跡状造構出土遺物（第44図）

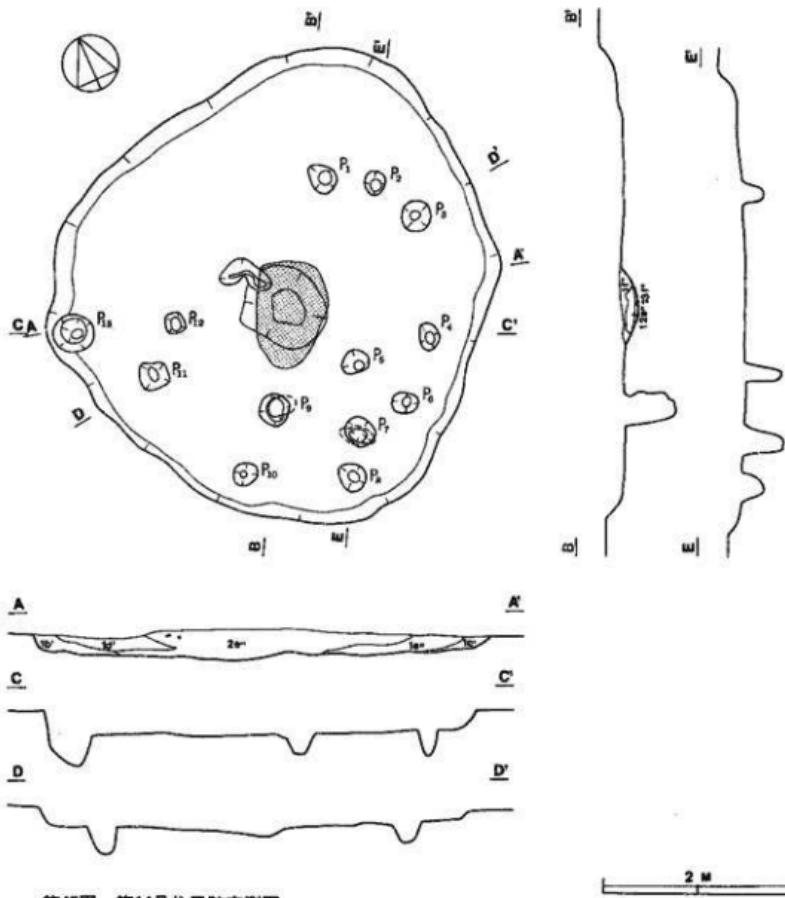
- 1～3は縄文のみ施文であるが、3は目が細かい。
- 4は、沈線区画による懸垂文を付けている。
- 5は、わずかに懸垂文らしきものを残している。
- 6は、上部に沈線区画と無文帯を有している。

第14号住居跡（第45図）

本住居跡はF 9 g₄の調査区を中心に確認されたもので、北西部住居跡群の北部端に位置している。南側にSI17、南西側にSI15、SI 16がやや離れて所在し、南東・南西側に土壌が近接している。規模は長径5.1m・短径4.6mで、平面形は不整円形を呈し、長径方向はN-35°-Eである。壁高は、北東側30cm・南東側13cm・南西側10cm・北西側18cmである。壁はロームを主体とし、やや締まりを帯び、床面からゆるやかに立に上がった後、上部ではば垂直になっている。床面はよく踏み固められており、特に北側は硬い。炉の西側・南西側・東側が低く、北側は壁に向かって高くなり、全体としては大きな起伏をもっている。炉は床面の中央部に位置し、径90cmほどで、橢円形を呈している。炉の形態は、30cmほど床面を掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土が厚く堆積し、炉床は火熱を受けたロームがレンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。床面にピットを13個検出したが、深いものはP₁・P₂・P₃の3本であり、他は浅い。

覆土は中央部が暗褐色土でやや締まりを帯び、自然堆積であった。

遺物は覆土上層にチップ・フレイク・土器片、下層から多量のチップを検出した。また、本跡の外側にも多量のチップが検出されており、本跡で多量の石器を製作したと考えられる。さらに、本跡の南西部床面から加曾利E III式の胸部上半分の土器を検出した。



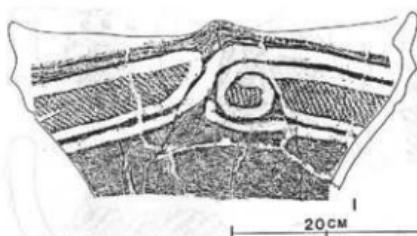
第45図 第14号住居跡実測図

出土遺物解説表（第46図）

造 構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時 期	備 考
SI-14	1	深鉢	A 41.6 B 18.5	四つの波状口縁、口縁部は無文で、はり付けによる内面がめぐらしている。A側面の跡は、内面に残る凹痕と外縁に残る凸痕が認められる。口縁部と腹部交間にには焼成跡がめぐらされ、それ以下は無文である。内へへラナチ、外へへラナチ。	焼成 普通 胎土 砂粒・スコリア 色調 棕色	E III	胸上30%

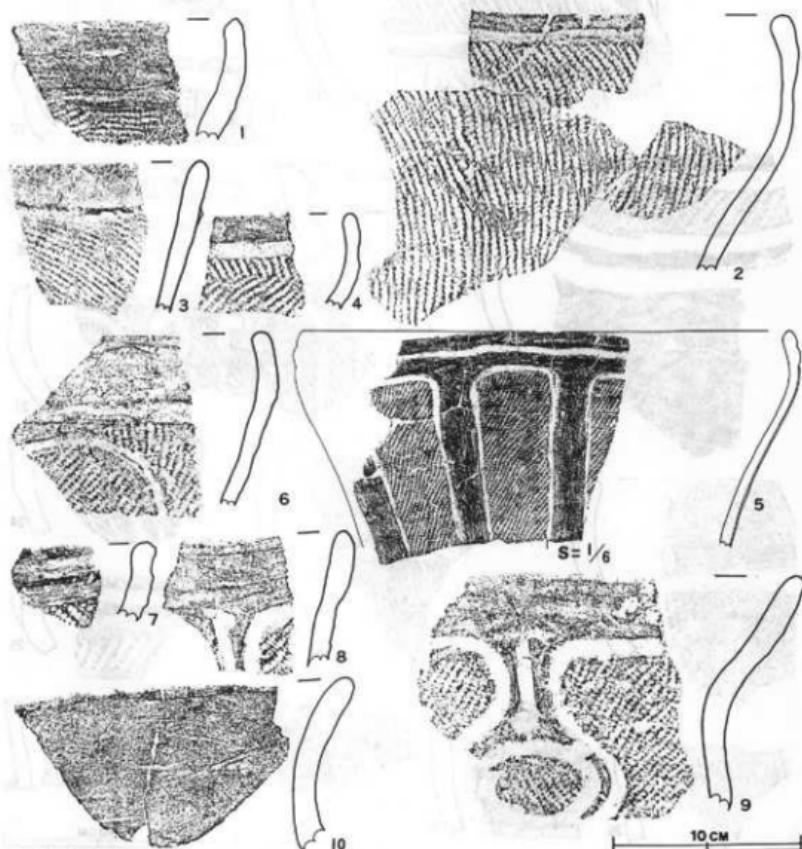
第14号住居跡出土遺物（47～51図）

1～8は口縁部無文帯を有す。9～14は、円文や横位の楕円文。19・20は、貼り付け隆沈文。



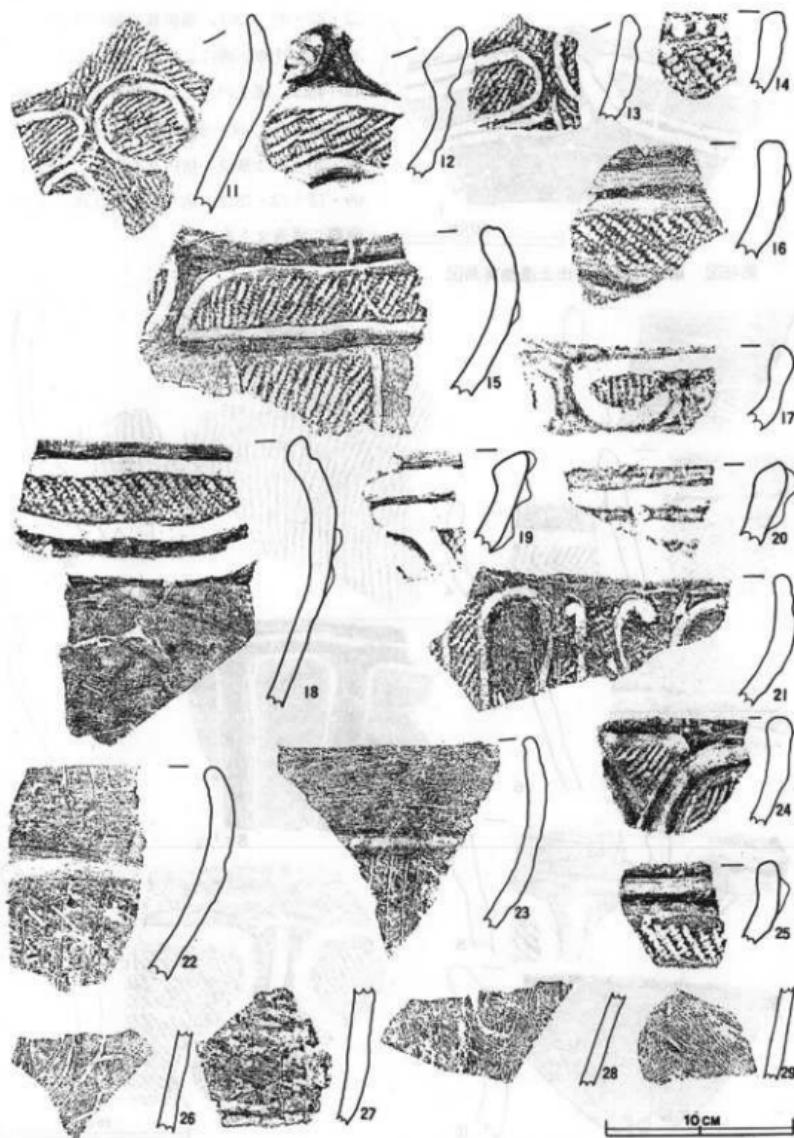
22・23・26～29は、櫛歯状の細い沈線。
30～42は沈線区画による懸垂文を有す。
43～45は、縦文のみ。47～58も櫛歯状の縦の沈線を有し、50～60は縦文のみ施す。
67・70・71は横位の楕円文を有している。
69・72・73・75は、貼り付け隆沈線による
縦横の渦巻文を有す。

第46図 第14号 住居跡出土遺物実測図

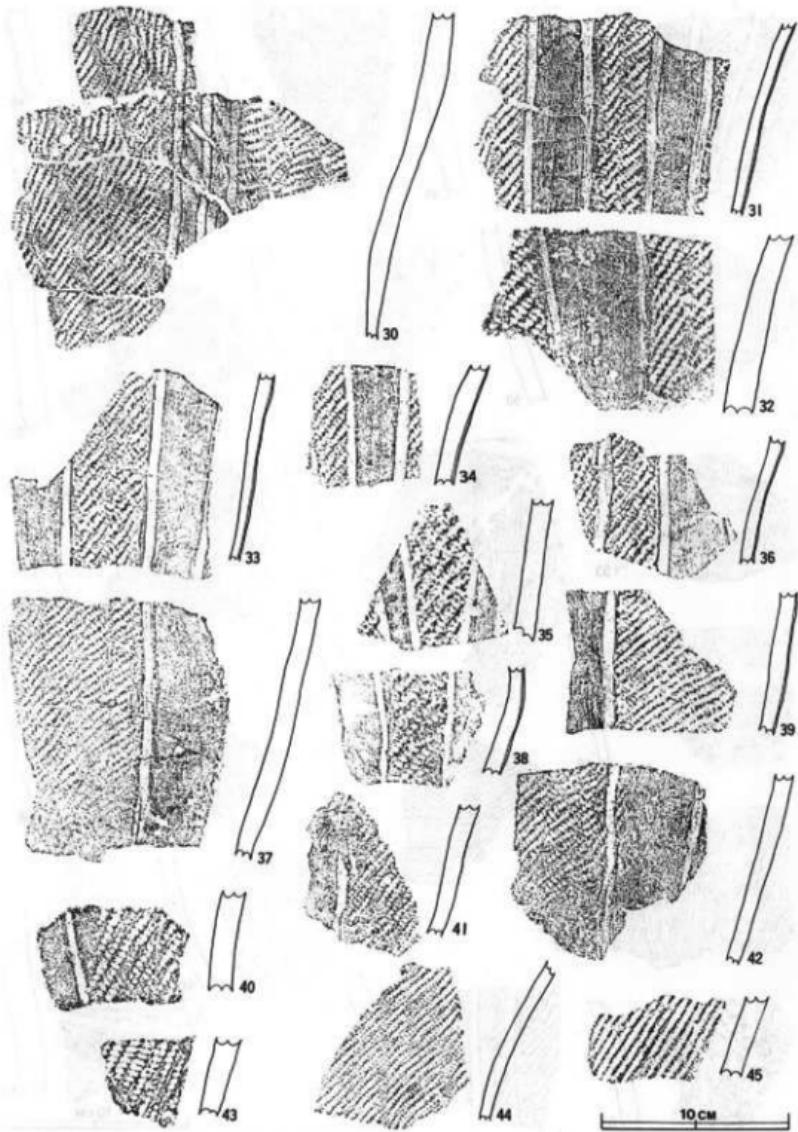


第47図 第14号 住居跡出土遺物拓影図

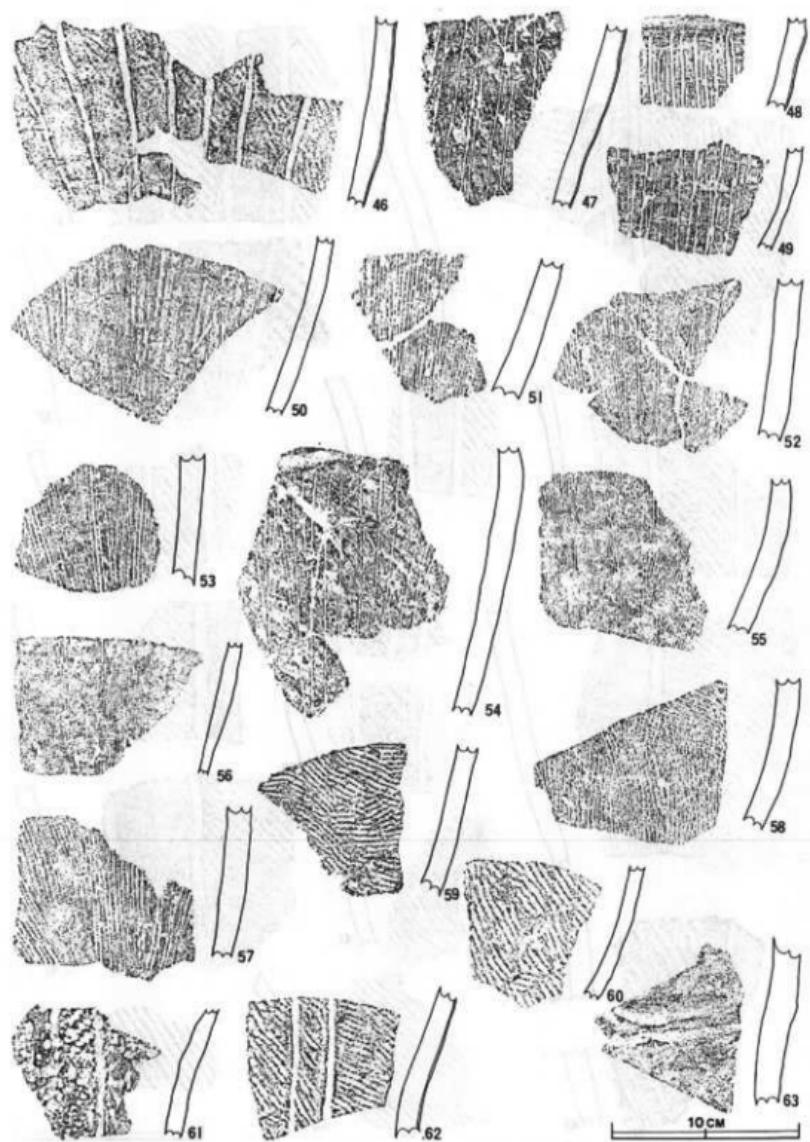
福井県出土古墳時代遺物



第48図 第14号住居跡出土遺物拓影図



第49図 第14号住居跡出土遺物拓影図

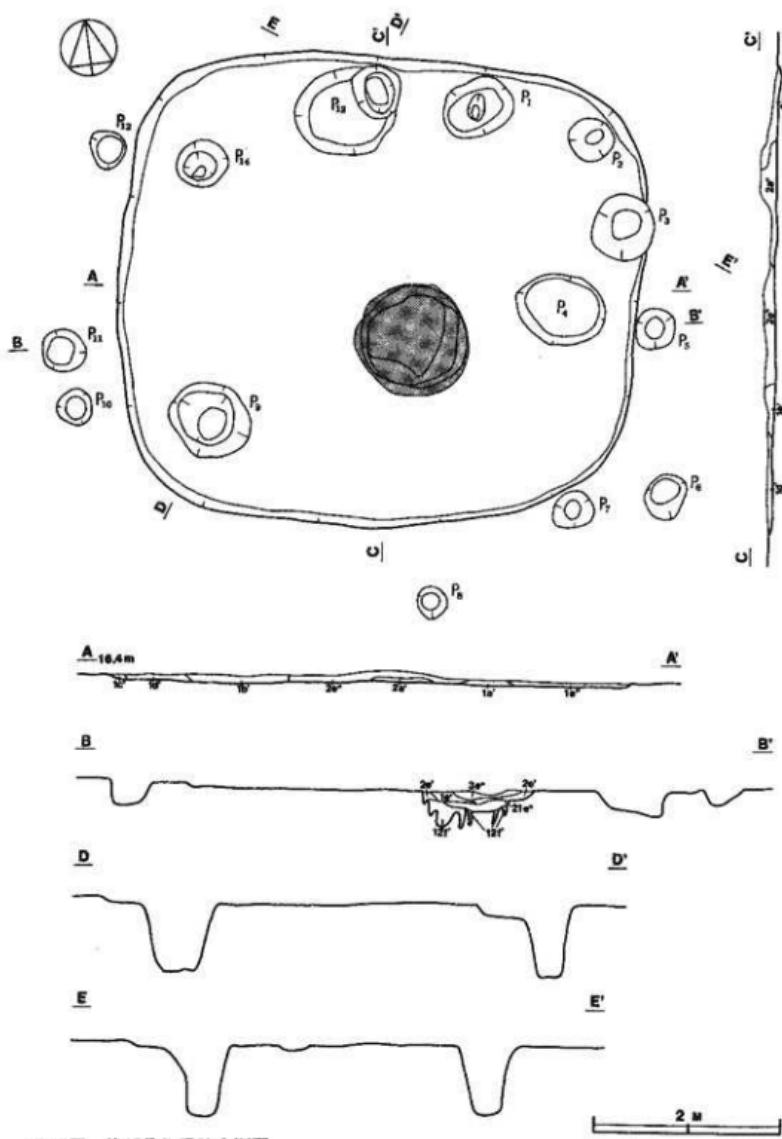


第50図 第14号住居跡出土遺物拓影図



第51図 第14号住居跡出土遺物拓影図

日本考古学会会報 四三編



第52図 第15号住居跡実測図

第15号住居跡（第52図）

本住居跡はF9 j₂・j₃の調査区を中心に確認されたもので、北西部住居跡群の北西部に位置し、本跡の北西側にSI16、南西側にSI23・SI36、南東側にSI17、北東側にSI14が近接している。

規模は長辺5.3m・短辺4.4mで、平面形は隅丸長方形を呈し、長辺方向はN-81°-Wである。壁高は、東側4cm・南側4cm・西側5cm・北側5cmである。壁はソフトロームで軟かく、床面からゆるやかに外反して立ち上がっている。床面はロームを主体として締まっており、北東部の一部がやや高くなっているほかは平坦である。炉は床面の中央より南側に位置し、径120cmで、円形である。また炉は地床炉で、床面を皿状に16cm掘り込んでいる。炉内には焼土粒子・炭化粒子が少量堆積している。炉床は火熱を受けたロームが10cmほどレンガ状に赤化・硬化している。ピットは床面に7個、本跡の外側に7個の計14個が検出された。主柱穴と考えられるのはP₁・P₂・P₃・P₄である。

覆土は中央部が暗褐色土、周囲が褐色土で、ともに焼土粒子を含んで締まっていた。

遺物は覆土中に土器片を少量検出した。

出土遺物解説表（第53図）

造構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-15	1	深鉢	A(33.0) B(20.5)	口縁部は沈線と、沈線による横位の楕円文が施されている。胸部には、複数の2本と3本の沈線から口縁部から垂下し、沈線間をすり消し、次の沈線間に纏文が施されている。胸部から頸部にかけてやや外反し。口縁部で内折する。	焼成 普通 胎土 砂粒 色調 橙色	III	口縁30%
	2	深鉢	A(36.4) B(16.8)	口縁部は、幅広の楕円文による無文帯。胴部には貼付けによる陰沈線の横位の楕円文で、内側に纏文が施されている。胴下部にも纏文が施されている。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 橙色	IV	口縁25%

第15号住居跡出土遺物（第54・55・56図）

1・2は波状口縁で、横位の楕円文を有し、3は貼り付けによる平口縁で、やはり楕円文を持っている。

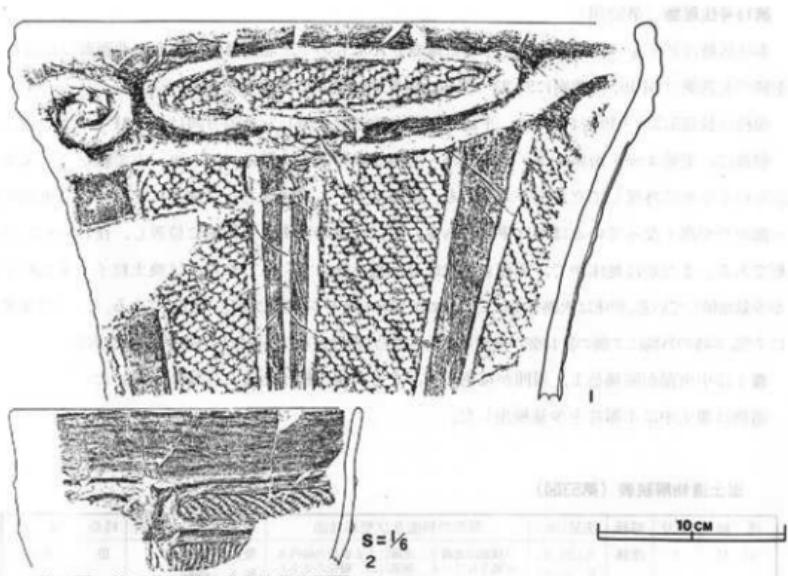
4・5は纏文を持つが、4は纏文を2本並べた後、縱位の楕円文を付けて並べる。5は2本の纏文の間に縱の沈線を1本付け、その後縱位の楕円文を並べている。

6は貼り付けによる渦巻文、7は口縁部から続く沈線区画の懸垂文を持っている。

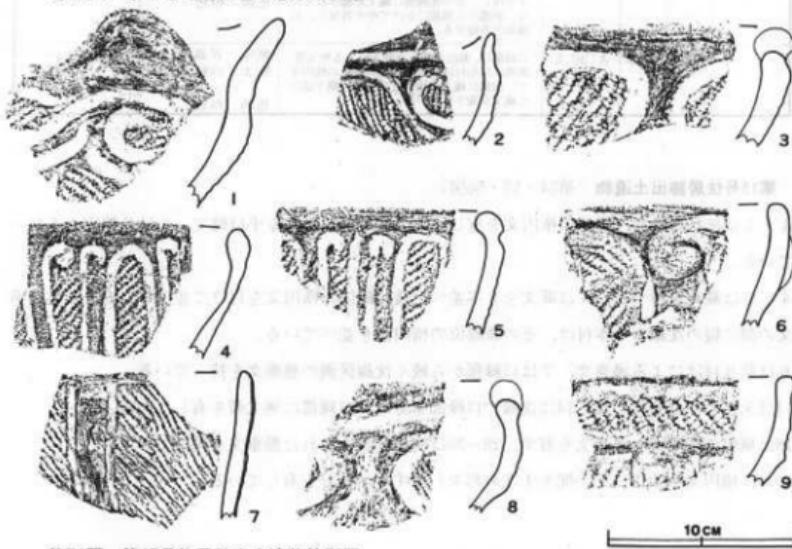
11は大きめの点列文、12~14は沈線で口縁部を分け、口縁部に無文帯を有している。

18は横位の楕円文と渦巻文を有す、28~38は沈線区画をされた懸垂文を持っている。

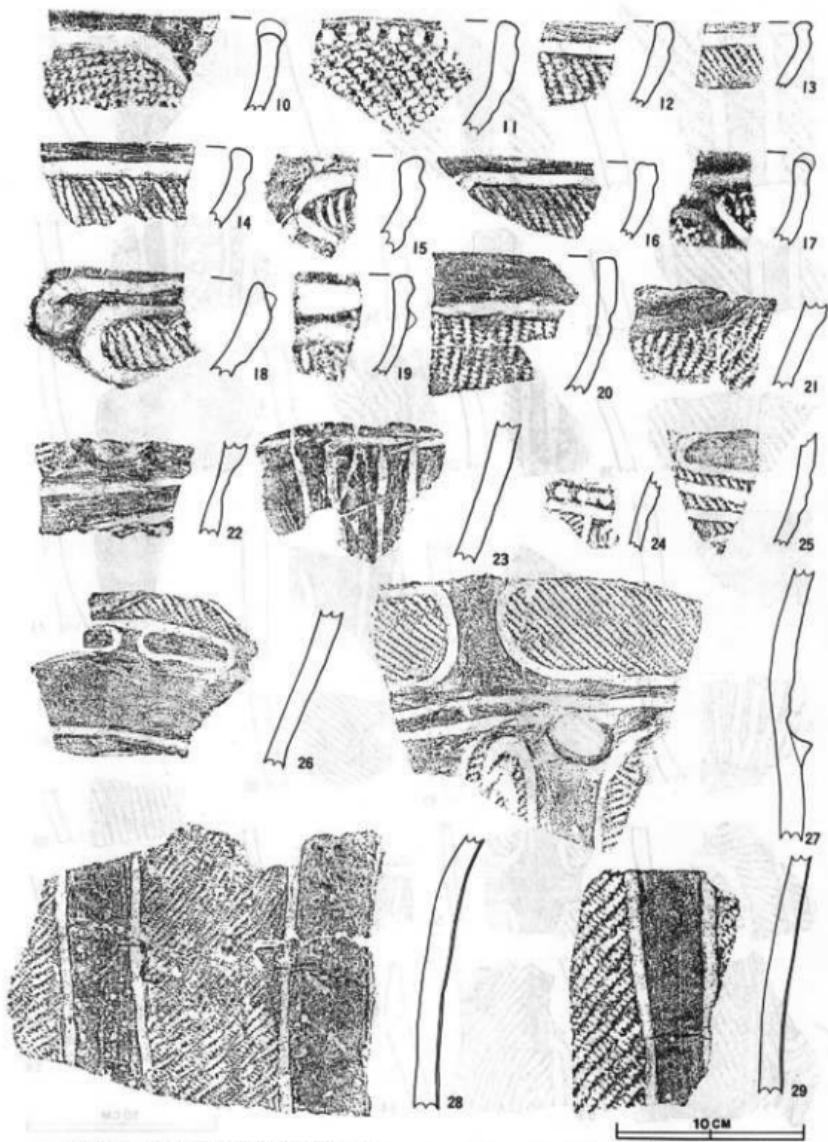
50は、楕円文を並べてその間を十字の形をしたすり消部分を有している。



第53図 第15号住居跡出土遺物実測図



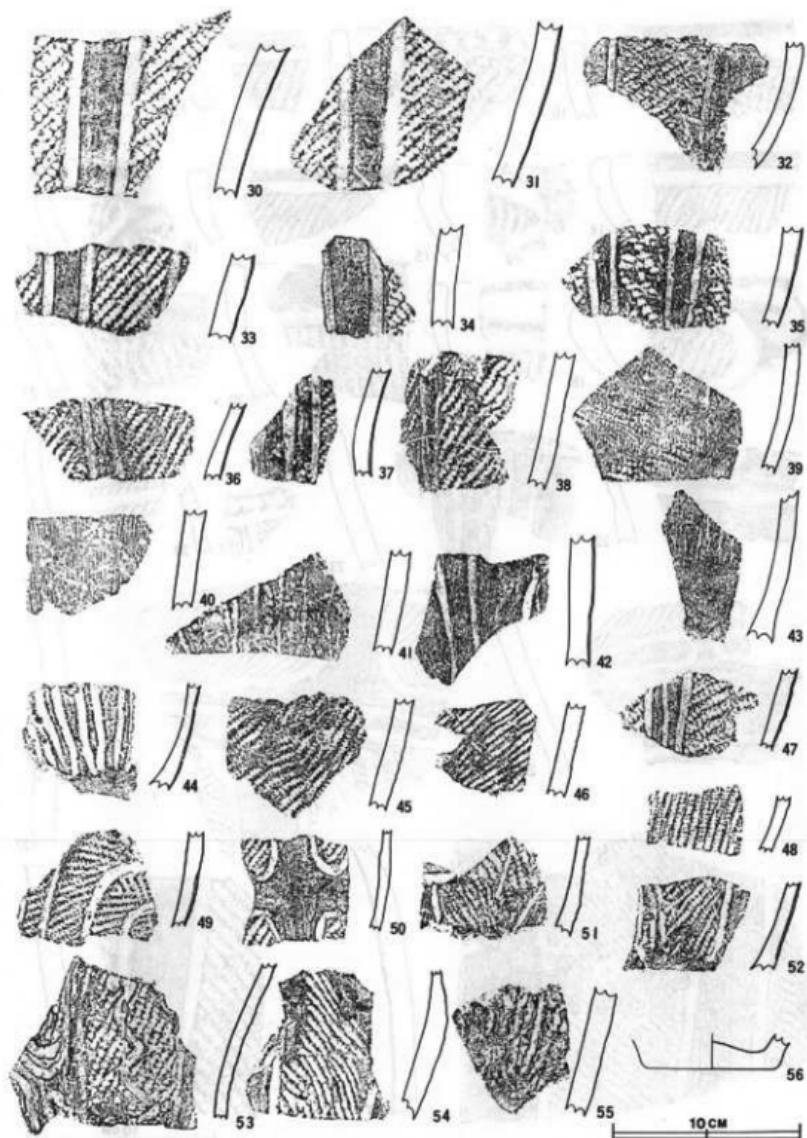
第54図 第15号住居跡出土遺物抜影図



第55図 第15号住居跡出土遺物拓影図

（出土地点：北京市昌平区南口镇北辛村）

10 CM



第56図 第15号住居跡出土遺物拓影図

西漢時代の出土遺物拓影図 第15号

第16号住居跡（第58図）

本住居跡はF 9 ii・hiを中心確認され、北西部住居跡群の北西部に位置している。本跡は南東側でSK562と重複し、北東側でSI 14と、南東側でSI 15と近接している。

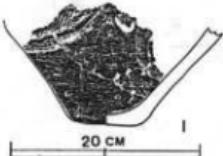
規模は長径5.65m・短径5.5mで、平面形はほぼ円形を呈し、長径方向はN-62°-Wである。

壁高は東側20cm・南側20cm・西側20cm・北側25cmで、北側がやや高い。壁は明確で、南壁は床面からなだらかに外傾して立ち上がる。他は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面はロームでよく締まっており、西・南側の壁周辺がやや高く、東・北側は低い。さらに、全体的に壁から炉に向かって低くなり、ゆるやかに起伏している。炉は床面の中央部から北側にかけて位置し、長径164cm・短径111cmを測り、平面形は梢円形を呈している。炉は地床炉で、2基が重複して検出された。炉の深さは10~30cmほどで、床面を皿状に掘り込んでつくっており、炉内には焼土が薄く堆積していた。炉床は、火熱を受けたロームがレンガ状に赤化・硬化している。床面にピットを11個検出したが、主柱穴はP₂・P₄・P₆・P₈である。

覆土は暗褐色土で、焼土粒子・炭化粒子を少量含有して締まり、自然堆積であった。

遺物は、覆土上層から土器片を多量に検出した。また、炉内からも二次焼成を受けている土器片を検出した。

第16号住居跡出土遺物（第59・60・61・62・63図）



1~5は波状口縁で、横位梢円文を有し、6~14は平口縁で、やはり横位梢円文を施している。

15~28・35は平口縁を付け、口縁部無文帯を有している。29は、2列の点列文である。37

32は貼り付けによる隆沈文、33・36は梢円文を有している。37
第57図
第16号 住居跡出土遺物実測図 ~50は、沈線区画の幅広懸垂文である。

51は口縁部近くの無文帯、52は貼り付け隆沈線による横位梢円文を持つ。

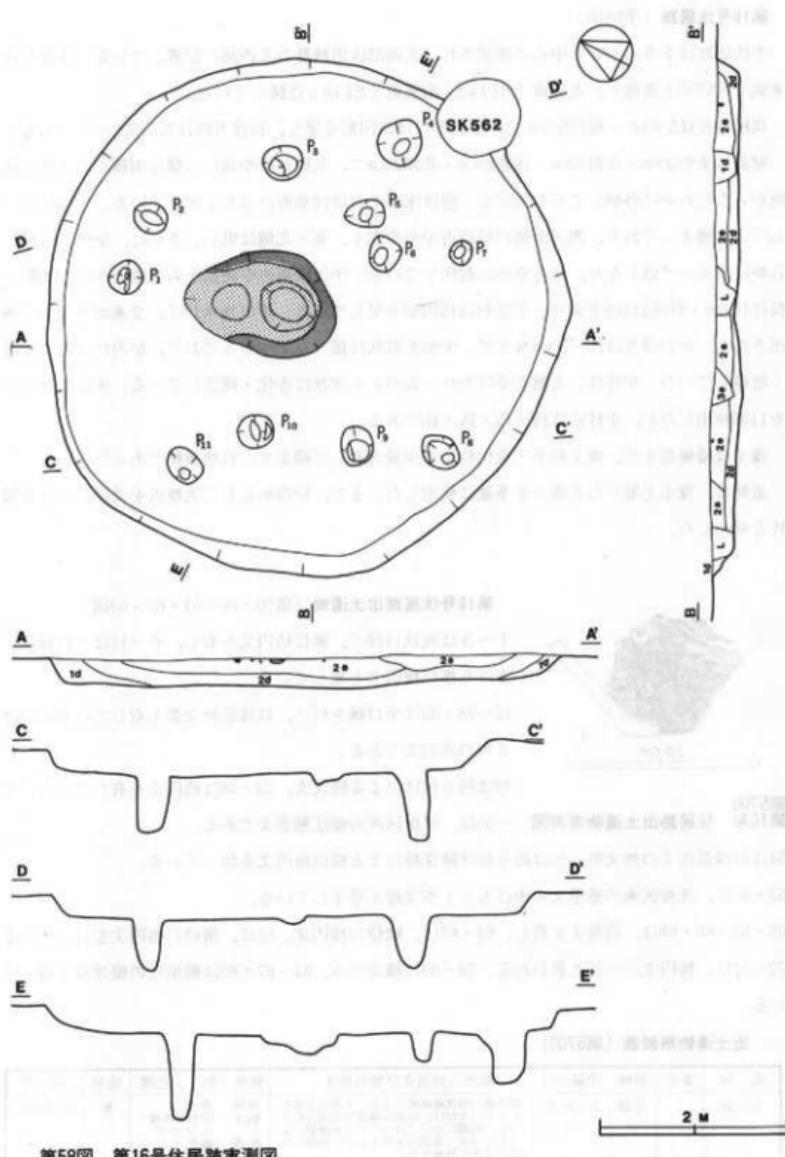
53~55は、沈線区画の懸垂文の中にもう1本沈線が垂下している。

59・62・66・68は、渦巻文を有し、64・67は、縱位の梢円文。65は、横位の梢円文を付けている。

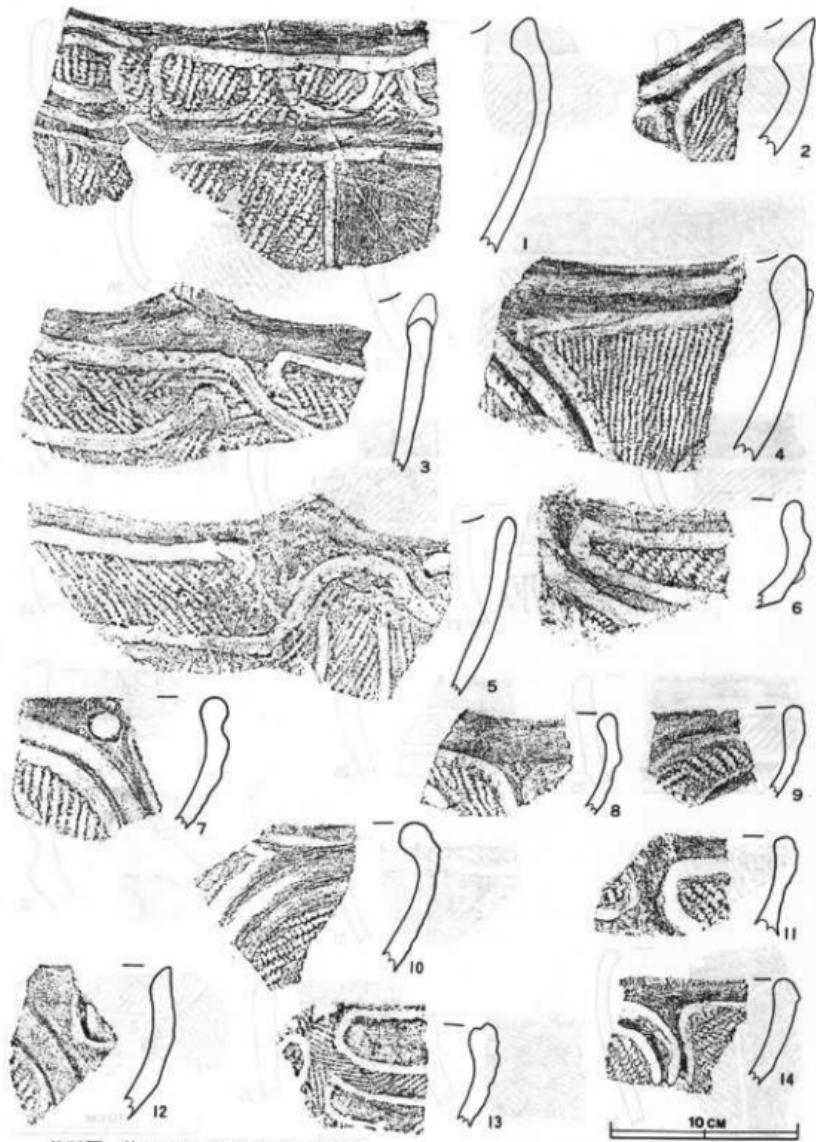
72~77は、梢円文の一部と思われる。78~83は縄文のみ、84~87・89は櫛歯状の縱沈線を持っていて。

出土遺物解説表（第57図）

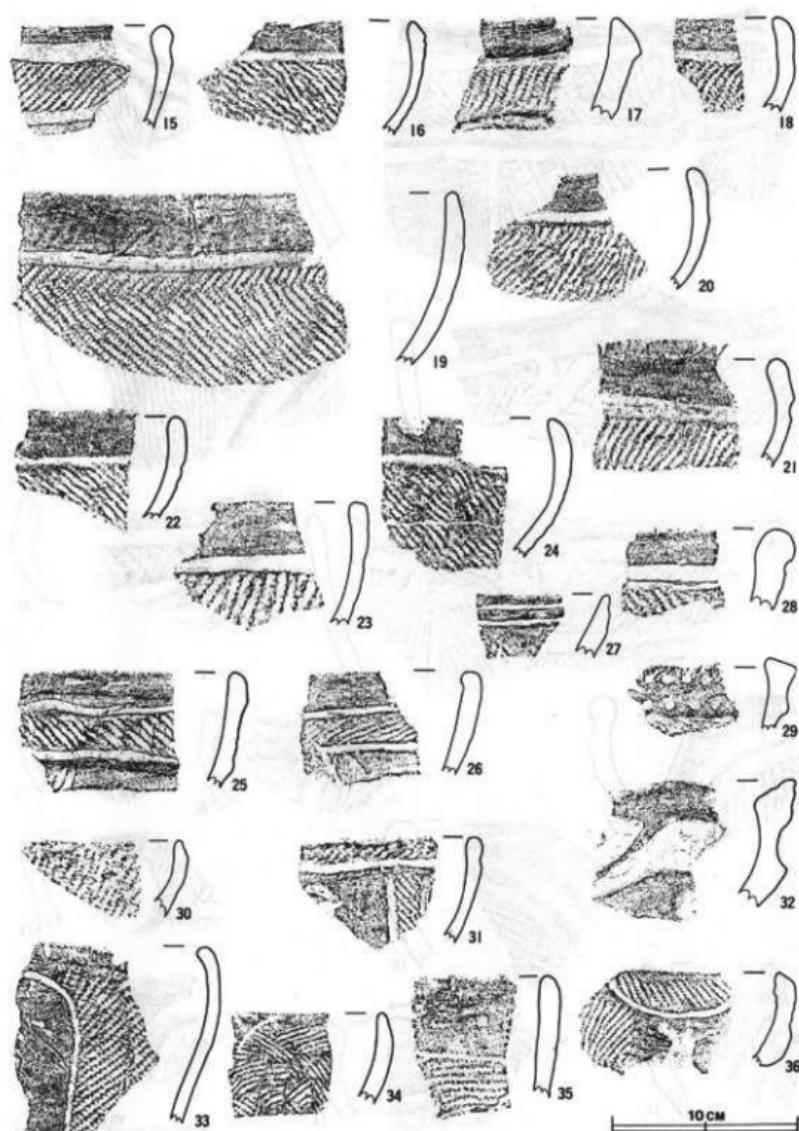
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-16	1	深鉢	B(10.6) C 7.6	腹下部に隆沈線区画によるうす巻文と思われるも、それを付ける位置に横位の梢円文が充填されている。底面部にかけて、その上よりなる調節がなされている。底部は丸味を帯び、調節部にかけて大きく外傾する。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂塵・スコリア 色調 暗褐色・にじみ・橙色	IV	底部15%



第58図 第16号住居跡実測図

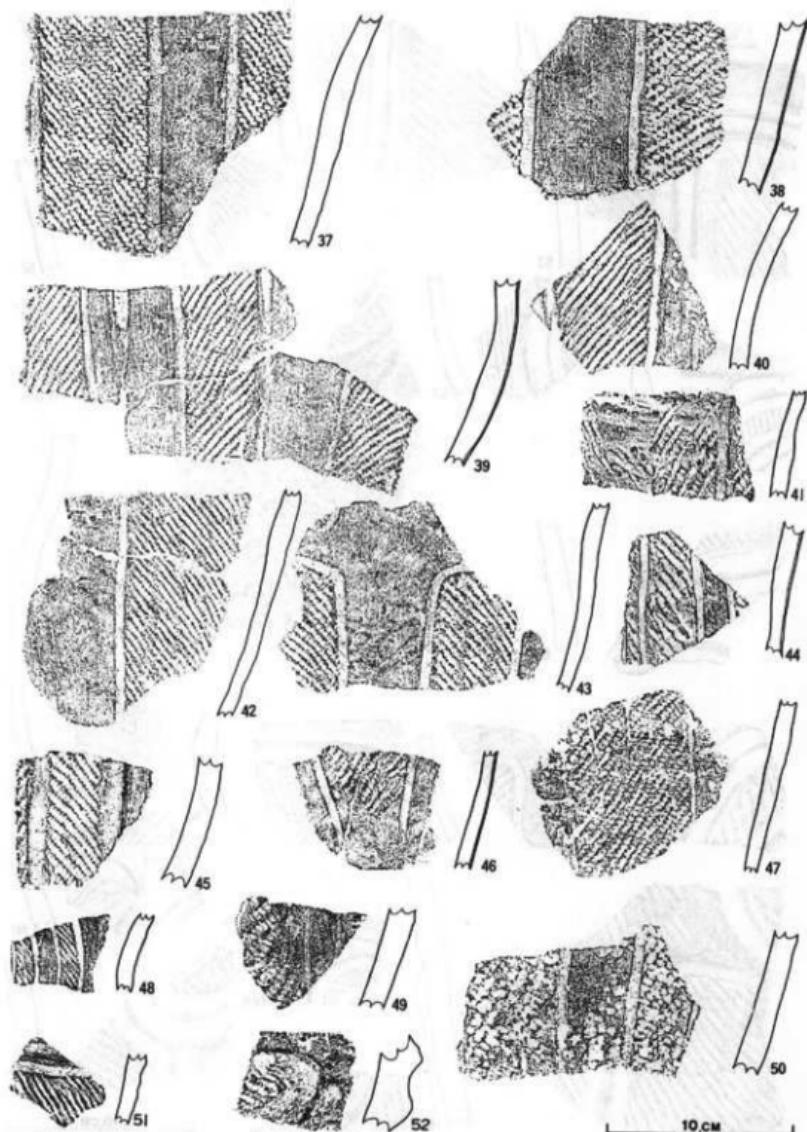


第59图 第16号住居跡出土遺物拓影圖



第60図 第16号住居跡出土遺物拓影図

（国集調査報告書第16号）



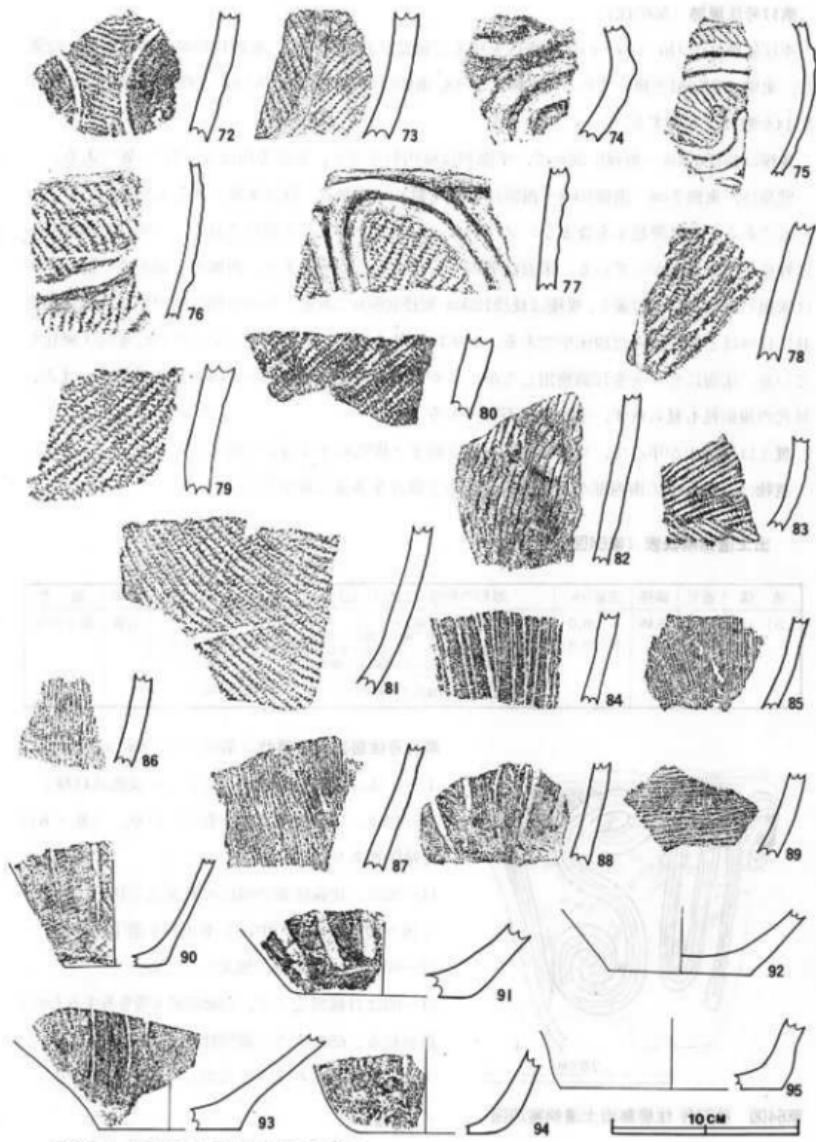
第61图 第16号住居跡出土遺物拓影図

北朝鮮古墳出土遺物拓影図集解 四五四



第62図 第16号住居跡出土遺物拓影図

（国営奈良公園出土品）



第63图 第16号住居跡出土遺物拓影圖

第17号住居跡（第65図）

本住居跡はG 9 b₄・c₄・c₅の調査区を中心に確認されたもので、北西住居跡群の中央部に位置し、東側でSK681と接している。東側にSI18、南側にSI22、西側にSI136、北西側にSI15、北側にSI14が離れて存在する。

規模は長径6.4m・短径5.56mで、平面形は梢円形を呈し、長径方向はN—44°—Wである。

壁高は、東側7cm・南側10cm・西側12cm・北側6cmを測る。壁は東側が黒色土を含むソフトロームである。他は黒色土を含まないソフトロームでやや縮まりを帯びており、いずれもゆるやかに外反して立ち上がっている。床面は平坦で、ロームがよく縮まり、西側の一部がやや低い。炉は床面の西側寄りに位置し、規模は長径120cm・短径105cmである。炉の形態は梢円形で、床面を皿状に14cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は火熱を受けたロームが、レンガ状に赤化・硬化している。床面にピットを12個検出したが、P₇が74cmと深く、他は13~28cmと比較的浅い。また、柱穴の規則性も見られず、主柱穴は不明である。

覆土は褐色土を中心で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含んで縮まっていた。

遺物は、覆土中の南西部から加曾利E期の土器片を多量に検出した。

出土遺物解説表（第64図）

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-17	I	深鉢	A 28.0 B(29.8)	平口縁で口縁部に沈線をめぐらし、すり消している。削下部まで繩文を施し、その上に貼付による戴文と、「S」字文4単位。その間に縦紋の降坡線による横文を構成し、内側に縄文を充填している。底部から球状に立ち上がり、口縁部で内側する。	焼成 普通 胎土 砂粒・石英。 スコリア 色調 橙色	E W	網上70%

第17号住居跡出土遺物（第66・67・68・69図）



1~4は、縦横の梢円文がある (•1は波状口縁)。

6~10は、口縁部無文帯を有している。(6・8は沈線区画あり)。

14~26は、沈線区画の幅広の懸垂文を持っている。

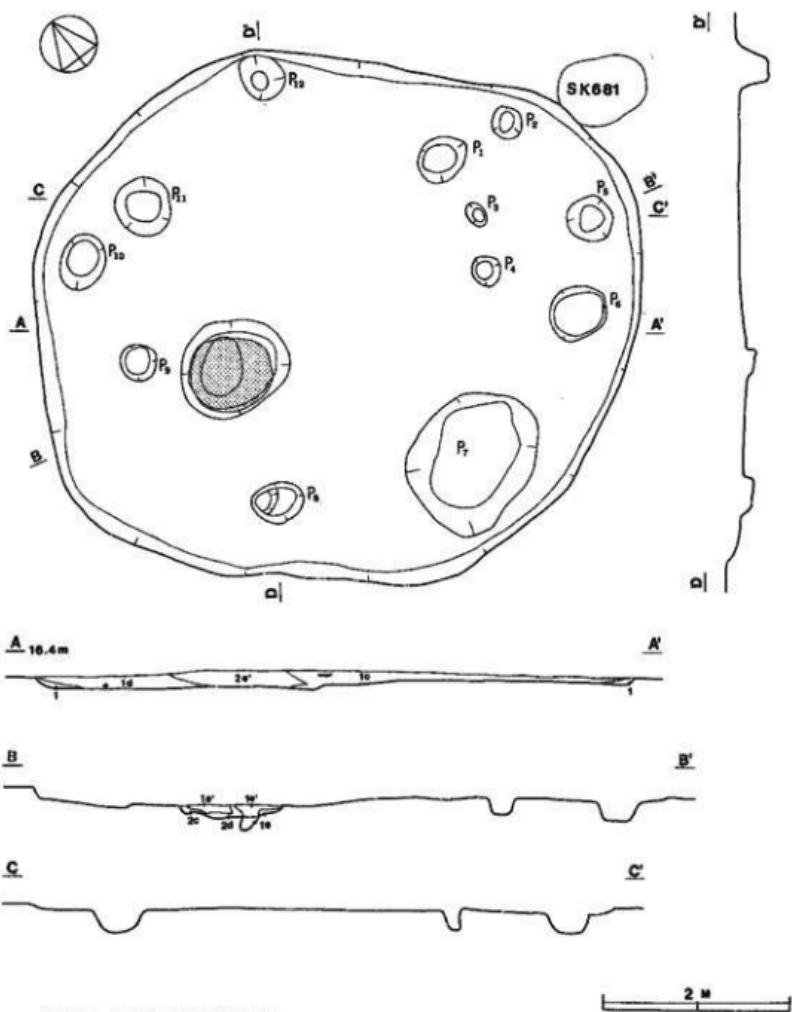
(16・20は懸垂文の中に1本沈線を垂下させる)。

27~60までは縄文のみ施している。

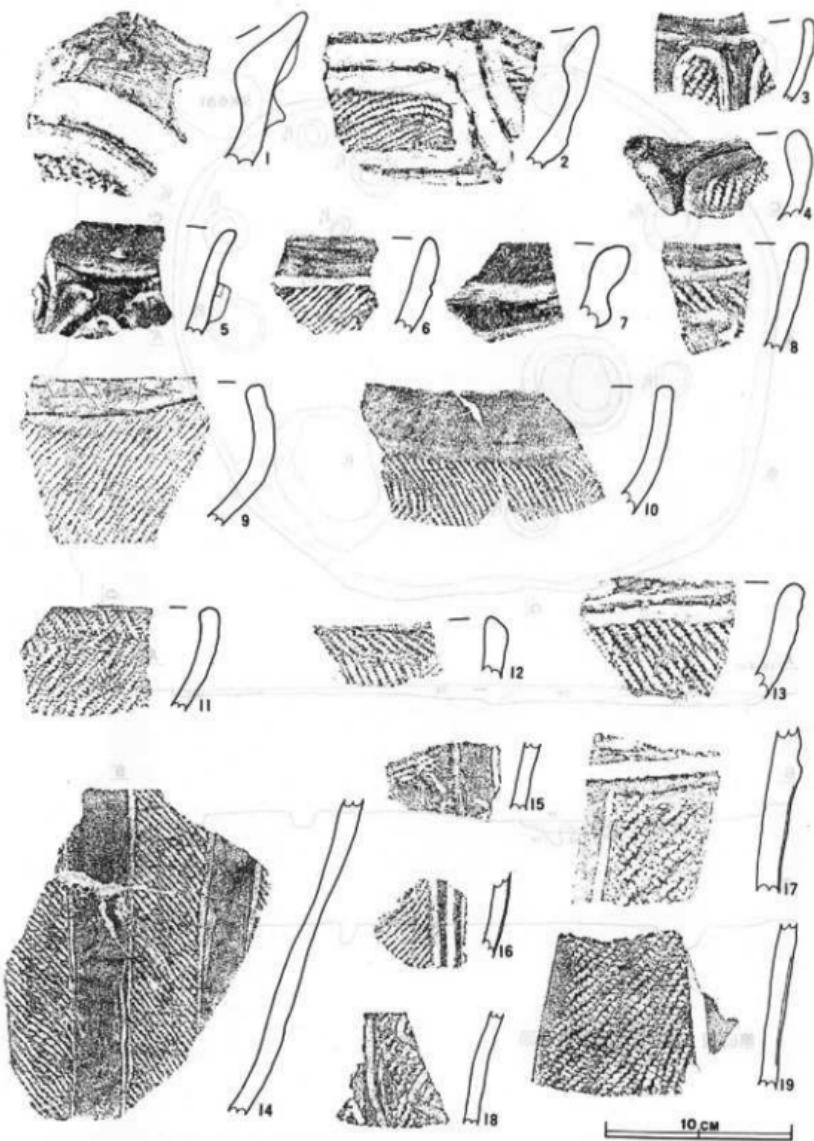
61~63は口縁部近くで、口縁部無文帯を有するものと思われる。65は大きな縱位梢円文の一部。

66は、横筋状線を大きな波状にうねらせている。

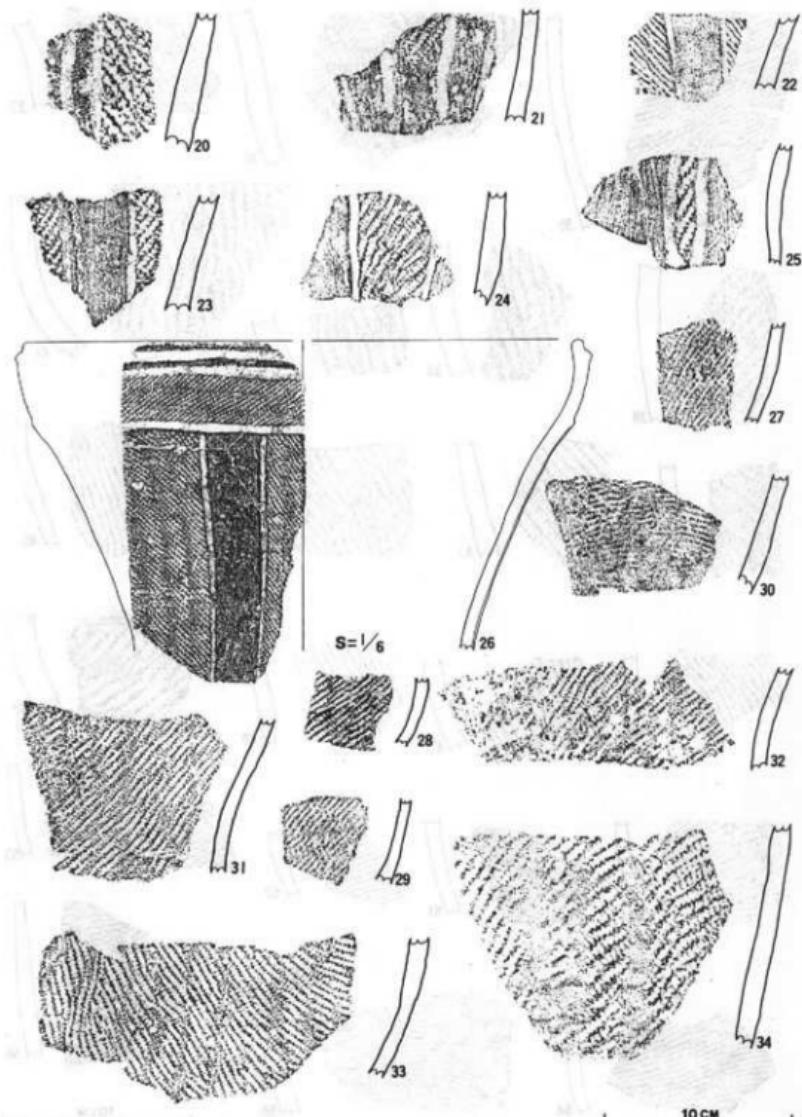
第64図 第27号住居跡出土遺物実測図



第65図 第17号住居跡実測図

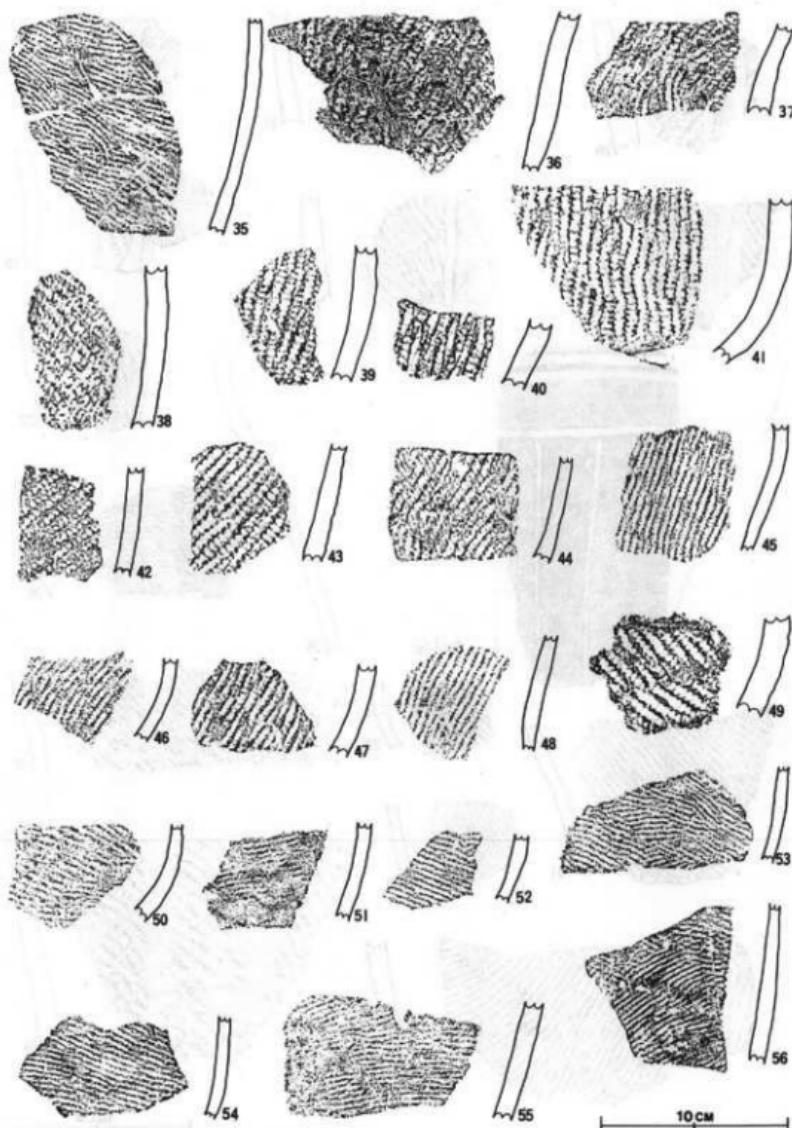


第66図 第17号住居跡出土遺物拓影図

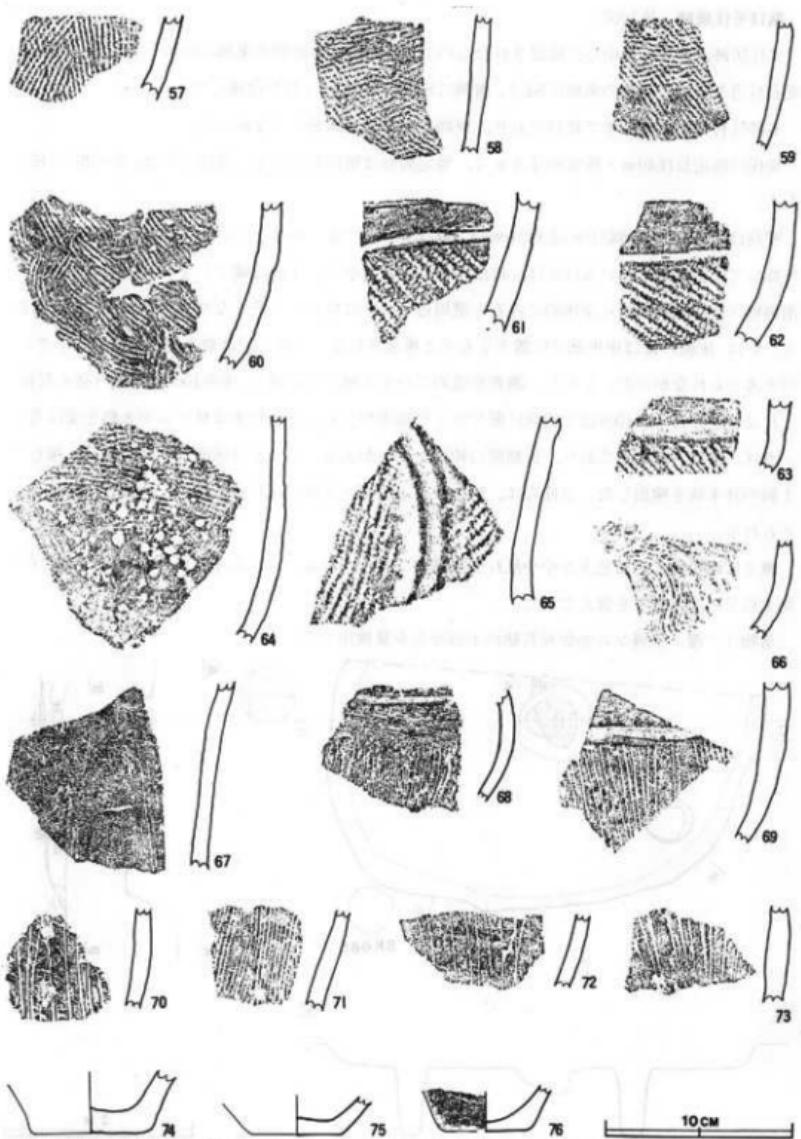


第67図 第17号住居跡出土遺物拓影図

第67図 第17号住居跡出土遺物拓影図



第68図 第17号住居跡出土遺物拓影図



第69図 第17号住居跡出土遺物拓影図

第18号住居跡（第70図）

本住居跡は G 9 c₇を中心確認されたもので、北西部住居跡群の東部に位置している。南北に走る村道を越えて本跡の東側に SI 5、南側に SI 19、西側に SI 17が近接している。

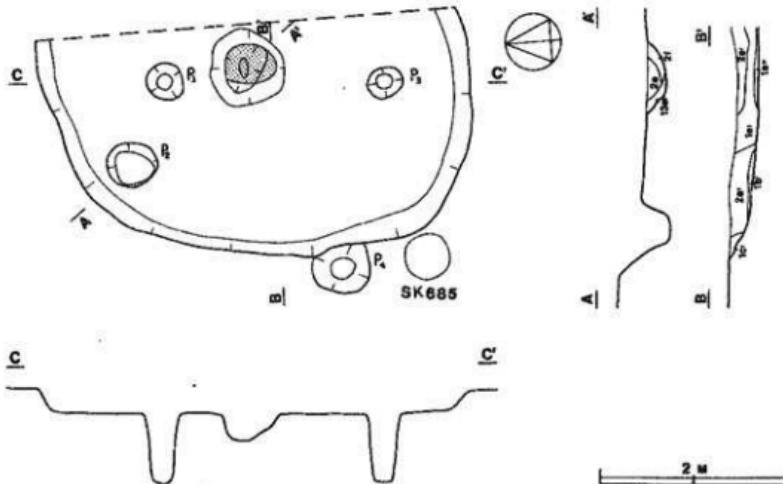
本跡は村道の下部にまで延びており、東側の約半分が調査できなかった。

規模は推定長径49m・推定短径4mで、堆定面形は橢円形である。長径方向は、N-25°-Eである。

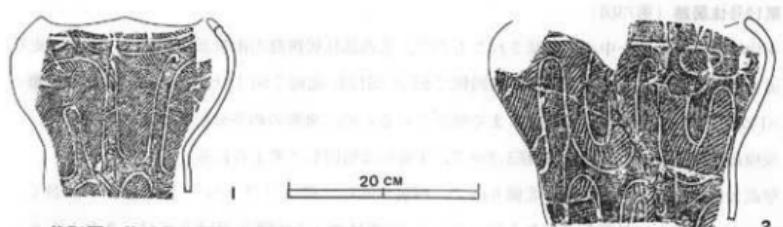
壁高は南側20cm・西側21cm・北側24cmで、壁はロームでよく締まっている。西側の壁が床面から外傾して立ち上がっているほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は硬くしまり、西側がやや高く、南側壁ぎわの一部が低い。全体的にみると壁周辺から炉に向かって低くなり、大きな起伏が見られる。がは、床面のはば中央部に位置するものと推定される。当初、炉は焼土範囲が極めて小さく、炉と考えられなかった。しかし、調査を進めていくと掘り方が深く、床を10cmほど掘り込んだ後、それより小さ目に約10cmほど皿状に掘り込んだ地床炉であった。炉床はロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。ピットは床面に3個、西壁に接して1個の計4個を検出した。主柱穴は、炉をはさんで南・北側に見られる深さ72cmほどの2本と考えられる。

覆土は明褐色土・褐色土がやや乱れて堆積しており、少量のローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含んでいた。

遺物は、覆土上層から加曾利E期の土器片を少量検出した。



第70図 第18号住居跡実測図



第71図 第18号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第71図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-18	1	深鉢	A(18.5) B(18.5)	流状口縁で、口縁部に縄文模様の押印文を施し、その下部は、沈線による区画がなされ、すり削しによる無文部分がある。胸上部は、実形口文が4箇位沈線により区画され、文が光磨されている。胸下部には縦纹格円文が沈線によって区画される。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂砾・スコリア 色調 にぶい黄褐色	E IV	胴上50%
	2	深鉢	A 25.2 B 22.8	口縁部に無文帶をもち、3箇位の大波状の沈線による文様を有し、その他の区画には縦文が光磨されている。胸上部は、2箇位の沈線による縦文模様である。外側に縦文を充填、内側にはすり削しの無文帶を付ける。内へラナデ、外へラナデ。	焼成 普通 胎土 砂粒 色調 橙色	E IV	胴上25%



第72図 第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物 (第72図)

1～5が口縁部、6～10が胸部片である。

4・6は、沈線区画による文様を持っていて。

7・8は縦文のみ施文している。9・10は、櫛齒状沈線である。

第19号住居跡（第73図）

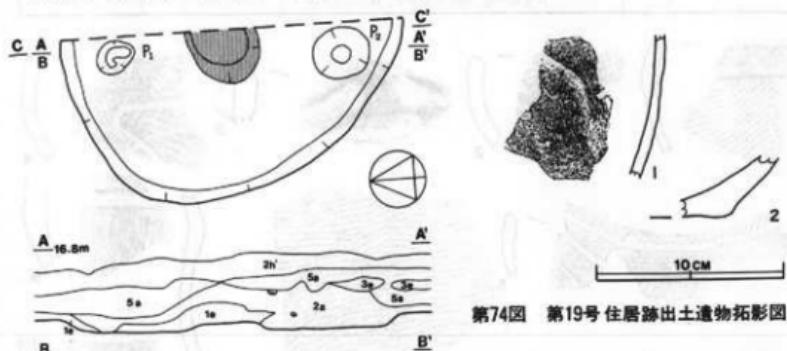
本住居跡はG 9 erを中心に確認されたもので、北西部住居跡群の南東部に位置し、南北に走る村道を越えて本跡の北東側でSI 5、南西側でSI 10・SI 21、北側でSI 18と近接している。やや離れてSI 17がある。本跡は村道の下部にまで延びているため、東側の約半分が調査できなかった。

規模は推定長径3.8m・推定短径3.3mで、平面形は橢円形と考えられる。

壁高は南側13cm・西側8cm・北側9cmで、西側が低い。壁はソフトロームで締まりが弱く、床面からゆるやかに外反して立ち上がっている。床面はロームで硬く、床としてはきりとらえられ、壁周辺から炉に向かってやや低くなる。全体としては平坦である。炉は床面の中央部に位置するものと思われ、規模は長径90cm・短径70cmほどで、平面形は橢円形である。また、炉の形態は床を20cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。柱穴は、炉の南側に深さ16.5cmのものと北側に深さ12cmのものを2本検出した。

覆土は暗褐色土から黒褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子をわずかに含んで、やや締まっていた。

遺物は、覆土上層の西壁近くから石片1個と加曾利E期の土器片を数点検出した。



第74図 第19号住居跡出土遺物拓影図



第73図 第19号住居跡実測図

第19号住居跡出土遺物

1は胴部、薄手のものである。2は、底部である。

第20号住居跡（第76図）

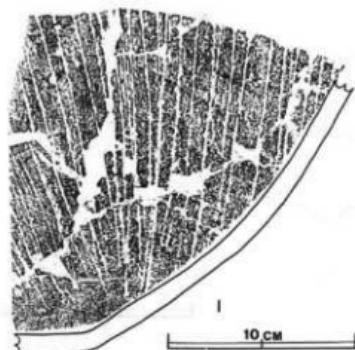
本住居跡はG 9 f₆の調査区を中心に確認されたもので、北西部住居跡群の南東部に位置し、本跡の西側でSI 21と重複している。

規模は長径5.7m・短径4.9mで、平面形は南北にやや長い楕円形を呈し、長径方向はN—43°—Wである。

壁高は北側で4cm、そのほかは約7cmである。壁は軟らかなロームで、床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面はロームで縁りを帯び、炉の南東部と北東部がやや高く、東・西北側が低くなっている。大きな起伏もみられる。炉は床面のやや西寄りに位置し、長径95cm・短径85cmで、平面形は楕円形を呈している。また、炉の形態は皿状に深さ15cmほど掘り窪められた地床炉である。炉の掘方は、付近の住居跡と比較して浅いが、やや大きい。炉内には焼土が厚く堆積し、炉床はロームが火熱を受けて赤化・硬化しており、かなり長期間の使用をうかがわせる。床面にピットを11個検出したが、主柱穴はP₁・P₄・P₆と、やや壁ぎわのP₉と考えられる。

覆土は少量の焼土や炭化物を含み、比較的固く締まり、自然堆積であった。

遺物は、覆土の上層と北部にのみ集中し、多量の加曾利E期の土器片を検出した。

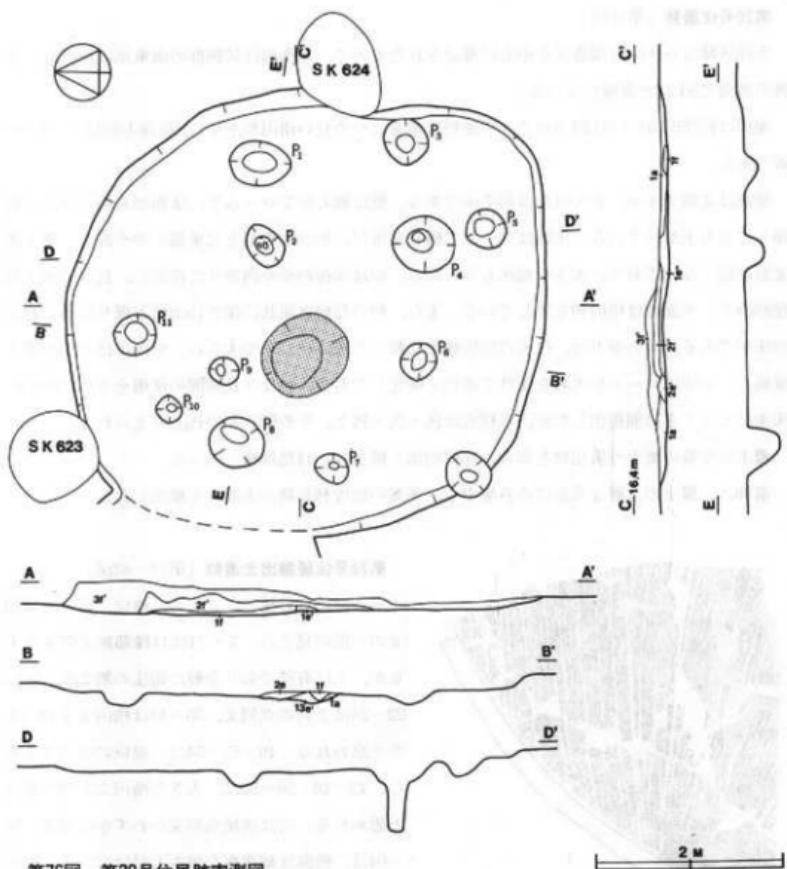


第75図 第20号住居跡出土遺物実測図

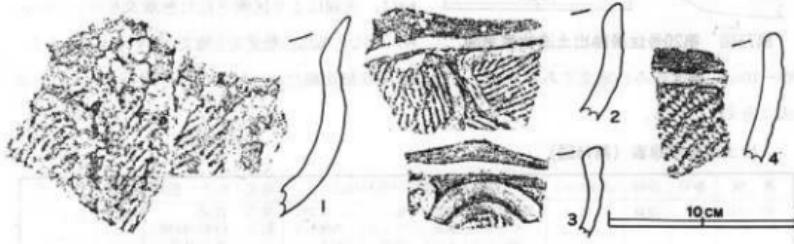
89～106は、縄文のみの施文である。107～115は櫛目状細沈線だが、113・115を除いて円弧状・波状に施文している。

出土遺物解説表（第75図）

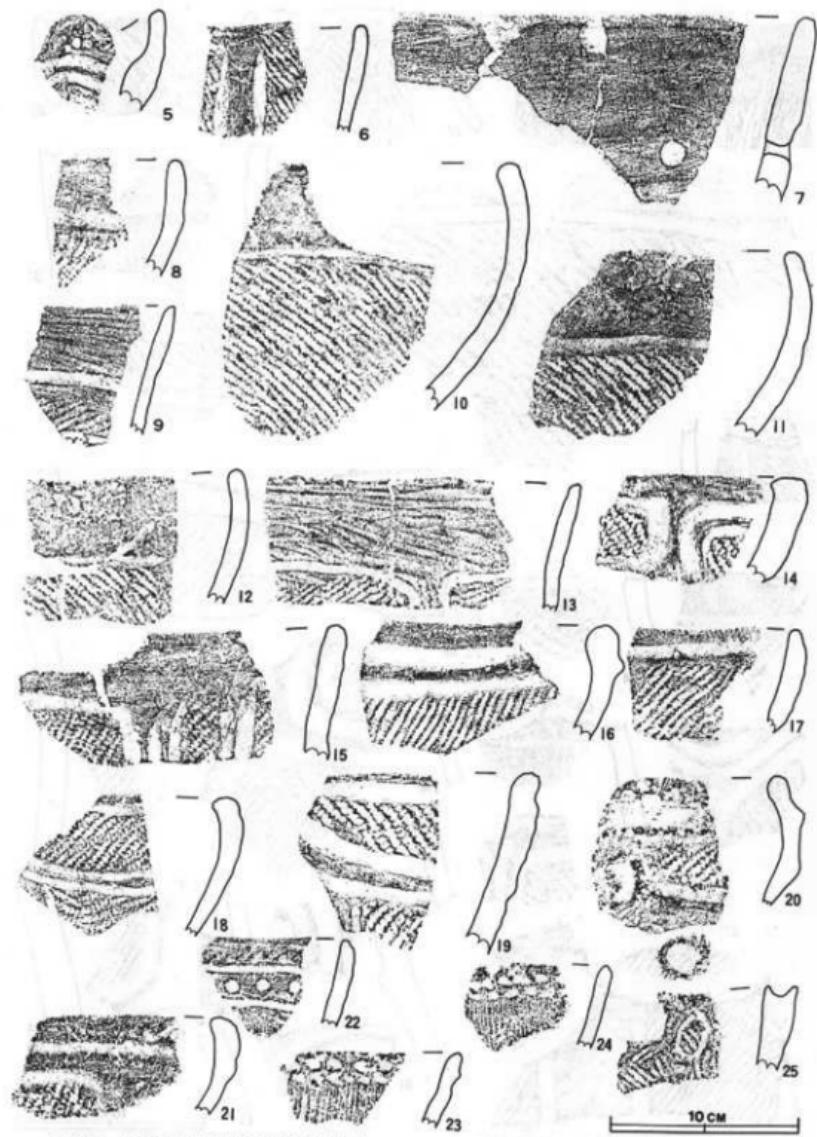
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-20	1	深鉢	B(12.7) C(9.2)	縁部は縦位の竹管文を施している。底部はやや小さく、脚部にかけて大きく内寄きみに開いて立ち上がる。内面へラフ加工。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫・スコリア 色調 橙色	E III	胴下



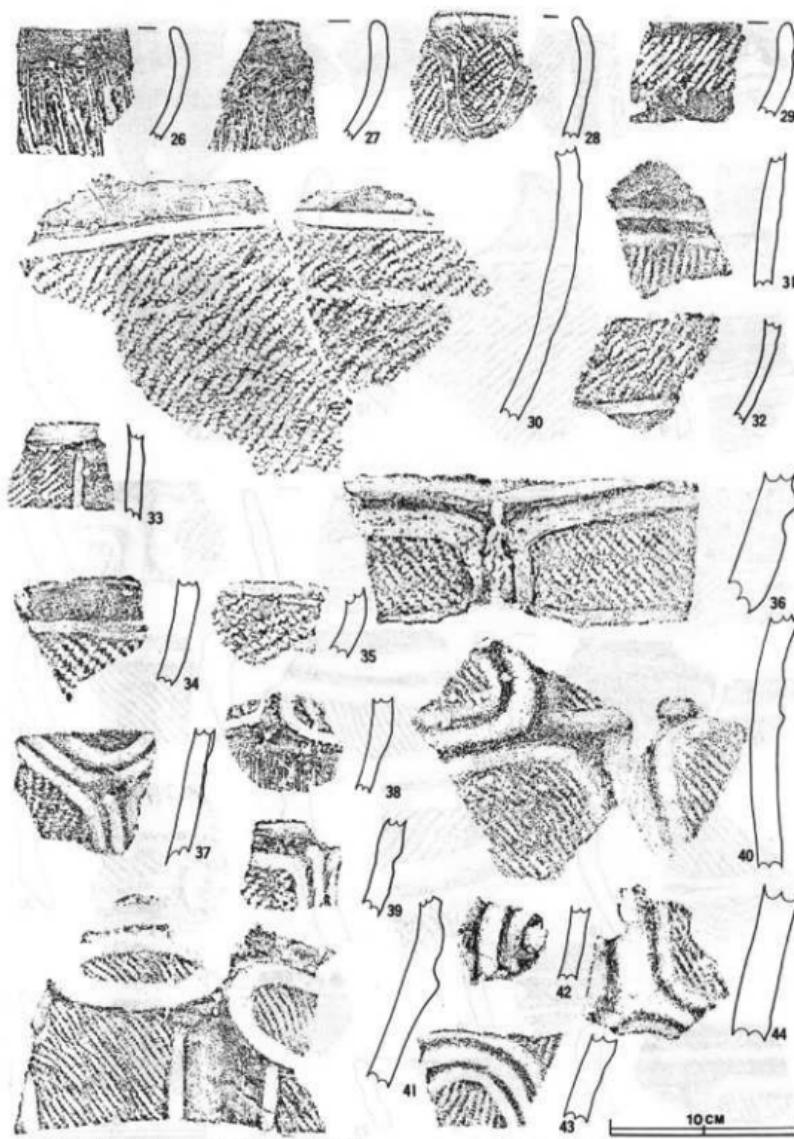
第76図 第20号住居跡実測図



第77図 第20号住居跡出土遺物拓影図

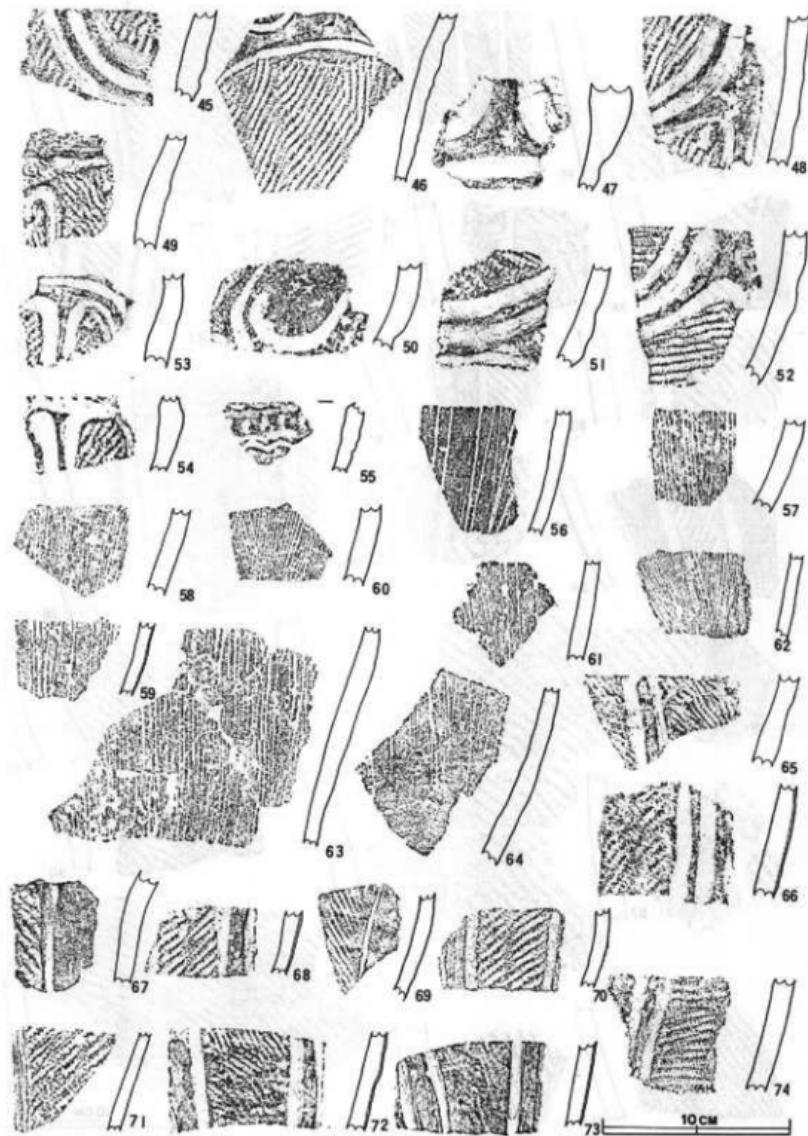


第78図 第20号住居跡出土遺物拓影図



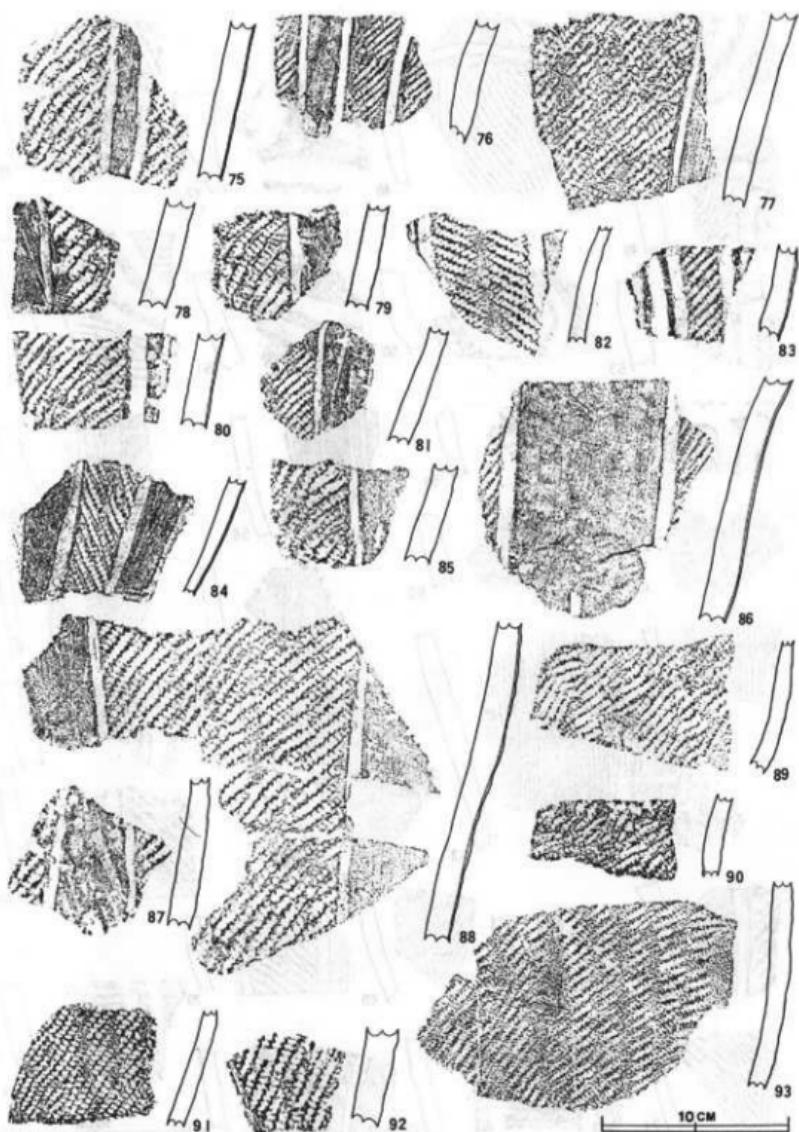
第79図 第20号住居跡出土遺物拓影図

四種新石器時代山河遺跡研究 第20号



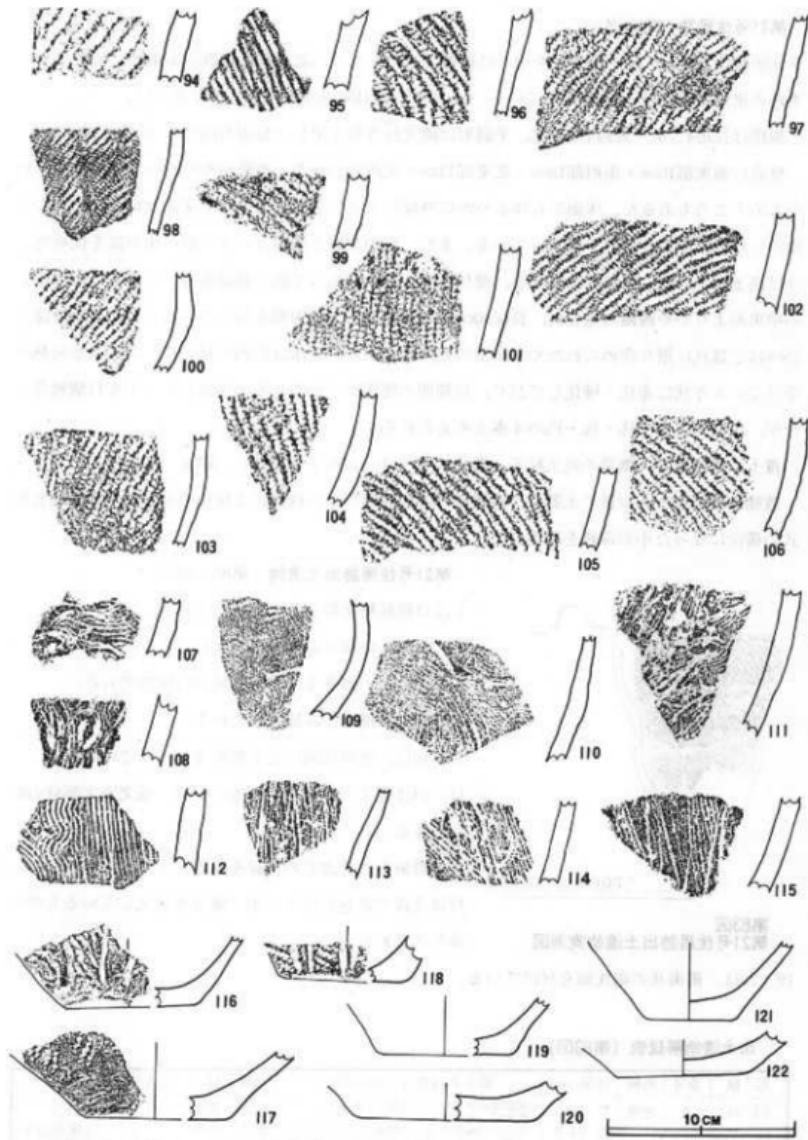
第80圖 第20号住居跡出土遺物拓影圖

新石器時代良渚文化遺物



第81図 第20号住居跡出土遺物拓影図

支那漢唐土出藏器物考略圖



第82図 第20号住居跡出土遺物拓影図

第21号住居跡（第84図）

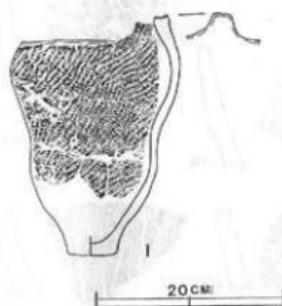
本住居跡は G 9 es・fs の調査区を中心に確認されたもので、北西部住跡群の南東部に位置し、本跡の東側で SI 20 と一部重複している。SI 20 との新旧関係は、SI 21 の方が新しい。

規模は長辺 4.7m・短辺 4.4m で、平面形は隅丸長方形を呈し、長辺方向は N—64°—W である。壁高は南東部 10cm・南西部 18cm・北東部 11cm・北西部 15cm で、西側がやや高い。壁は軟かいロームのところもあるが、床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面はロームで、よく踏みしめられており、固く締まっている。また、炉の北側と西側コーナー部の床が皿を伏せたように高まっている。全体的にみると、壁付近から炉に向かって低い傾斜をもっている。炉は床面の中央部よりやや西側に見られ、長径 80cm、短径 76cm で、楕円形を呈している。また、炉は深さ 15cmほど皿状に掘り窪められたやや小型の地床炉である。炉床は凹凸が見られ、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。床面にピットを 11 個検出したが、主柱穴は P₃・P₅・P₆・P₁₀ の 4 本と考えられる。

覆土は褐色土で、微量の焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を含有し、締まっていた。

遺物は覆土中から少量の土器片、南西壁付近の床面から口縁部に 1 個の突起をもつ加曾利 E III 式の横位になった小形深鉢を検出した。

第21号住居跡出土遺物（第85・86図）



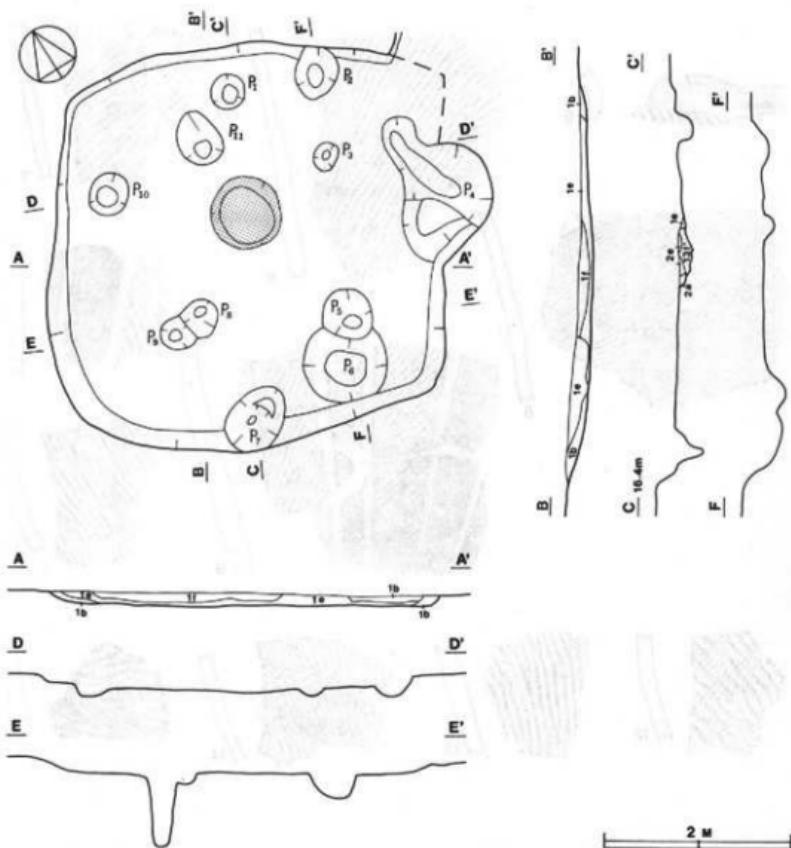
第83図
第21号住居跡出土遺物実測図

19・20は、櫛歯状の細沈線を付けている。

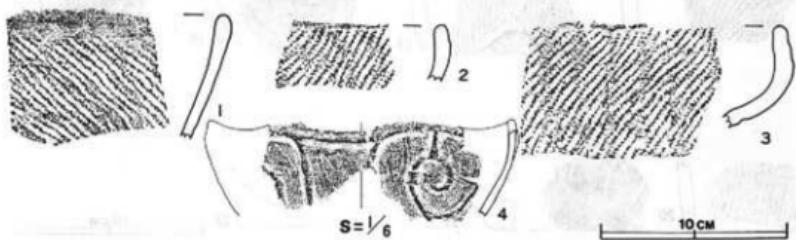
- 1 は口縁部無文帯を有する破片である。
- 2・3 は、口縁から繩文を施文している。
- 4 は、縦位の渦巻文を有す波状の口縁部である。
- 6～8 は、繩文のみ施文している。
- 9～10 は、沈線区画による懸垂文を付けている。
- 11～14 は繩文のみ施文が、他の文様の繩文施文部分の破片である。
- 16 は櫛歯などで波状の沈線を描き、それを交差させている。
- 17 は沈線で渦巻を作り、中に繩文を施文しているものの破片と思われる。

出土遺物解説表（第83図）

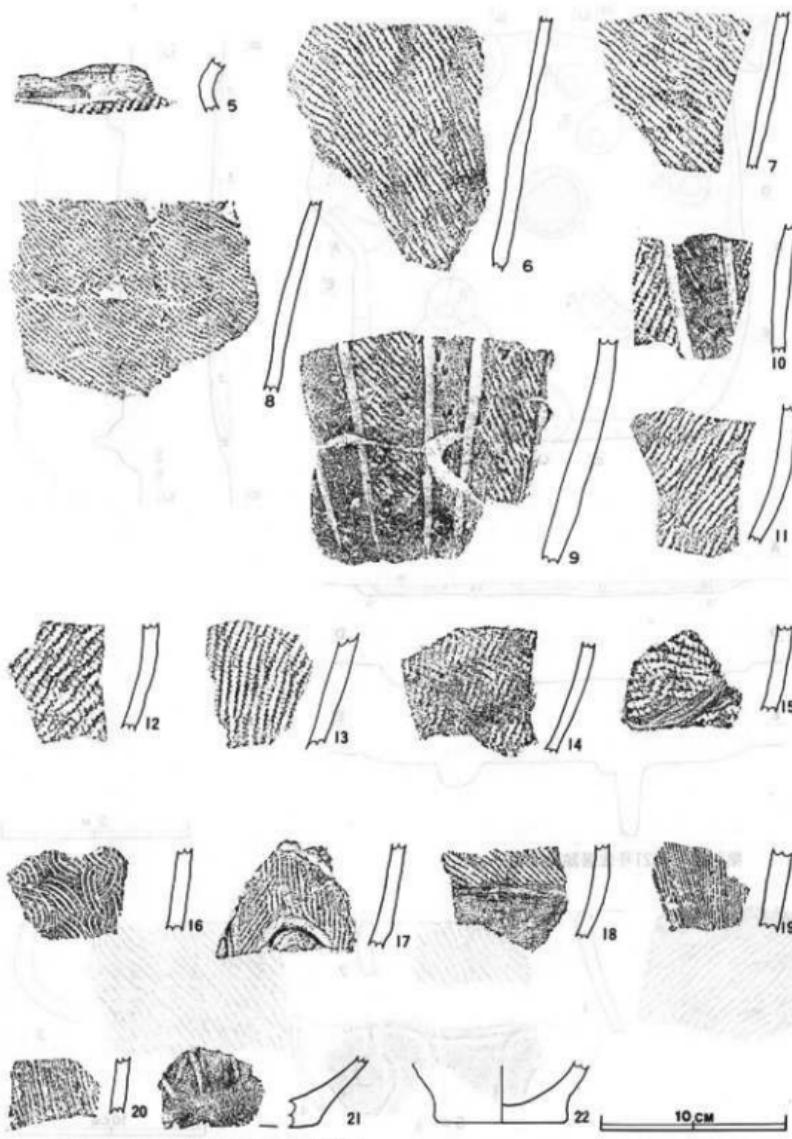
重 構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備 考
SI-21	1	深鉢	A 15.5 B 24.0 C 5.3	底部は小さく厚い。底部から側面部にかけて曲線的に立ち上がり、腹部で一旦くびれる。さらに口縁部に向けて曲線的に立ち上がる。 文様は、あらわ繩文を全面に施す。平口縫だが把手を 1 つ付けている。	焼成 普通 胎土 砂粒 色調 褐色	E IV	95% 床面出土



第84図 第21号住居跡実測図



第85図 第21号住居跡出土遺物拓影図



第86図 第21号住居跡出土遺物拓影図

昭和26年秋山遺跡調査報告書

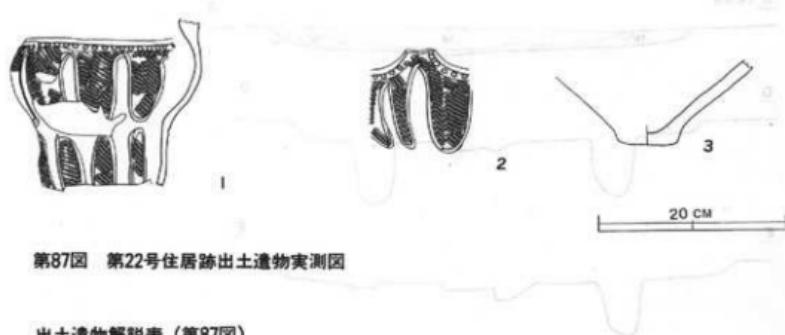
第22号住居跡（第88図）

本住居跡はG9faの調査区を中心に確認されたもので、北西部住居跡群の南部に位置し、本跡の東側にSI20・SI21、南側にSK632・SK633がある。

規模は長径4.9m・短径4.8mほどで、平面形はほぼ円形を呈し、長径方向はN-25°-Eである。壁高は東側24cm・南側20cm・西側11cm・北側17cmほどで、西側が低くなっている。壁はソフトロームであるが締まっており、床面からゆるやかに外傾して立ち上がる比較的明確なものである。床面はロームで硬く、炉の周囲は平坦であるが、南東部の壁寄りが低く、北西部が高い。また、壁ぎわで大きな起伏が見られる。炉は床面の中央部に位置し、径70cmで、平面形は円形を呈している。炉の形態は、深さ30cmほど掘り窪められた地床炉である。炉内には焼土が多量に堆積していた。炉床はロームが火熱を受け、レンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。この炉はSI18・SI36の炉と似ており、比較的深い掘方をもっている。そのためなのか、床面に焼土はほとんど見られなかった。床面にビットを7個検出したが、主柱穴と思われるものはP₂・P₃・P₄の3本である。

覆土は褐色土で、微量の焼土粒子・炭化粒子を含み、よく締まり、自然堆積であった。

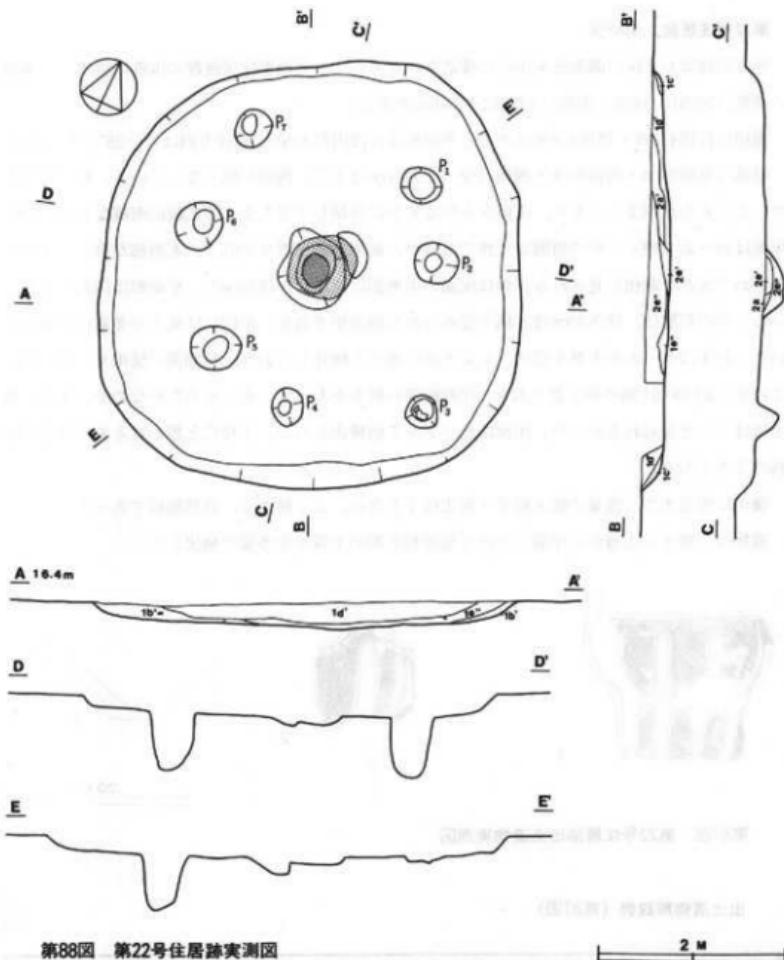
遺物は、覆土の上層から中層にかけて加曾利E期の土器片を多量に検出した。



第87図 第22号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第87図）

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-22	1	深鉢	A 17.2 B(17.8)	平口縁だけ1個の突起を持つ。胴部から口縁部にかけて球状に立ち上がる。口縁部には点列文が残り、胴上部には比較による大波状下り直線文の区画がなきれ。その内側には織文が施されている。胴下部は、底の沈刷区画による織文が施されている。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂砾 色調 明褐色	E IV	胴上60%
	2	深鉢	B(7.4) C 6.4	内面は横へつながり、外側は細へつながり無文である。底部はやや丸底をもつていて、胴部は、大きく直線的に開き早い。外側に縁が付着している。	焼成 不良 胎土 砂粒・砂砾 色調 明黄褐色		15% 底部



第88図 第22号住居跡実測図

第22号住居跡出土遺物（第89・90図）

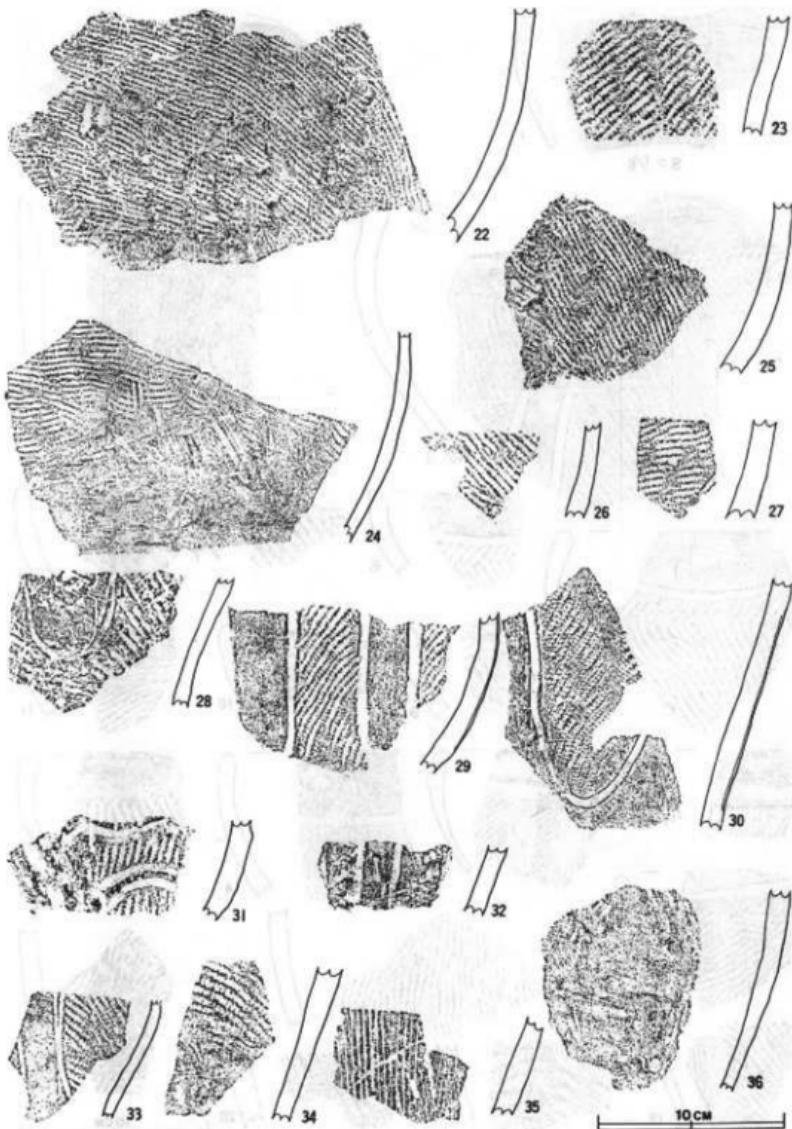
1は沈線区画の懸垂文、5～16は口縁部無文帶で5～7, 9・13・14・16は沈線で胴部と区画している。17～27は縄文のみ施文し、24は胴部に無文部を有している。

28・29は沈線楕円区画によるすり消しを作り、33は逆に縄文を施文している。35は、櫛歯状細沈線を施している。



第89图 第22号住居跡出土遺物拓影圖

西周时期居住遗址出土遗物拓影图



第90図 第22号住居跡出土遺物拓影図

西漢武帝时期上林苑的建筑与遗物

第23号住居跡（第91図）

本住居跡はG 8 ds・esの調査区を中心に確認されたもので、北西部住居跡群の南西部に位置し、本跡の北東側にSI36がある。なお、本跡の当初二つの土壙(SK506・SK507)として調査されたが、そのうち一つにかが検出されたため、住居跡に変更して調査したものである。

規模は3.9mで、平面形はほぼ円形を呈している。長径方向はN-85°-Eである。

壁高は東側8cm・南側14cm・西側9cm・北側8cmで、南側がいくぶん高い。壁はソフトロームで、床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面はロームブロックが一部に見られる程度で不明確な所もあり、また、全体的に凹凸の少ない平坦なものである。炉は床面の中央部からやや西寄りに位置し、長径85cm・短径75cmで、楕円形を呈している。炉の形態は、皿状に深さ10cmほど掘り進められた地床炉である。炉内には多量の焼土が堆積していた。炉床は中央部にやや高い凸部がある。また、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。ピットは、P₂の搅乱穴をのぞいて床面に6個と外側に10個検出したが、主柱穴はP₁・P₃・P₄・P₅の5本と考えられる。本跡の外に見られるピットは東側に多く、出入口の施設に伴うものとも考えられる。

覆土は褐色土で、縦まりを帯びた自然堆積土であるが、周囲の土よりやや硬く焼土を含んでいた。遺物は、皆無であった。

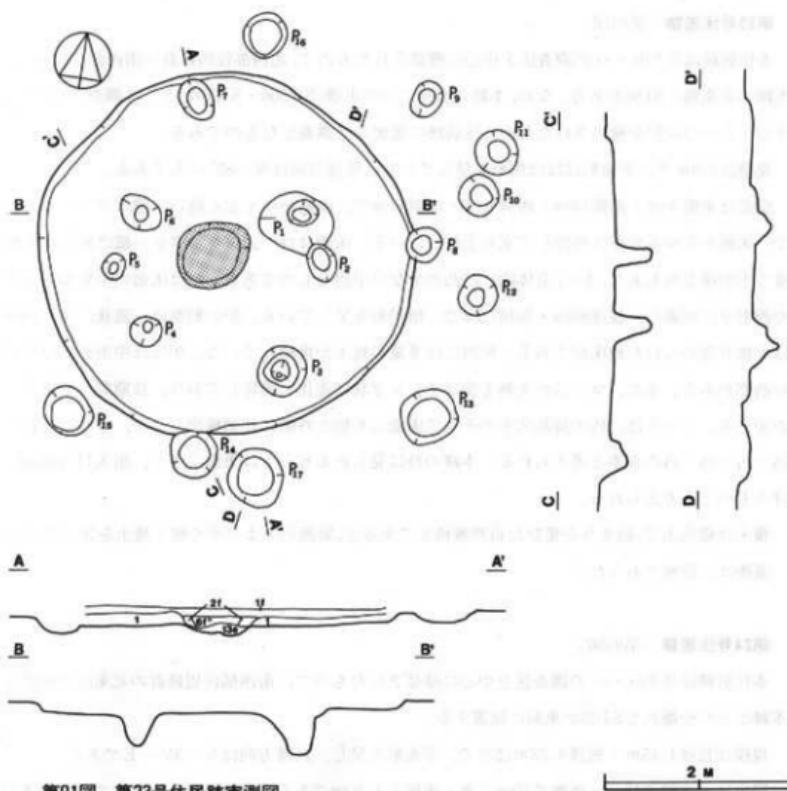
第24号住居跡（第93図）

本住居跡はH 9 cs・csの調査区を中心に確認されたもので、南西部住居跡群の北東部に位置し、本跡からやや離れてSI25が東側に位置する。

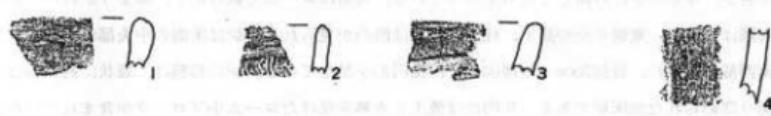
規模は長径4.45m・短径4.23mなどで、平面形を呈し、長径方向はN-35°-Eである。

壁高は、北側で12cm・西側で10cm・東・南側とも9cmである。壁はソフトロームでやや縦まりを帯び、ゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面はロームで軟らかく、縦まりが弱い。炉の周囲は平坦で、東側がやや高く、柱穴付近では凹凸が見られる。炉は床面の中央部からはずれて南西部にみられ、長径70cm・短径60cmで、楕円形を呈している。炉の形態は、皿状に約13cmほど掘り進められた地床炉である。炉内には焼土と火熱を受けたローム小ブロックが含まれていた。炉床はロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化している。炉床を観察すると、火熱を受けたロームの赤化・硬化の状態が薄く、短期間の使用と考えられる。床面にピットを9個検出した。深さと規模はまちまちであるが、主柱穴と思われるものは、位置的にP₁・P₆・P₇・P₉と考えられる。

覆土は褐色土で、微量の炭化粒子・焼土粒子を含み、よく縦まって凸レンズ状に自然堆積していた。遺物は覆土中と床面から、加曾利E III式の土器片を少量検出した。



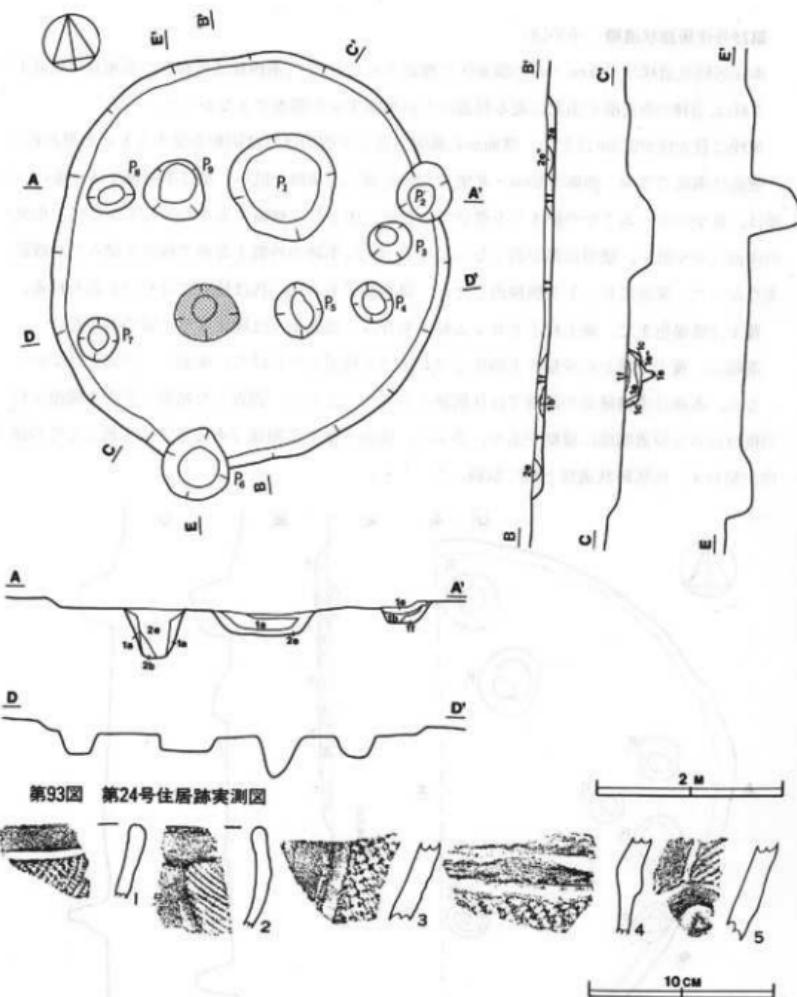
第91図 第23号住居跡実測図



第92図 第23号住居跡出土遺物拓影図

1・3は、口縁部に幅広の無文帯を有するものと思われる。

2は同じく口縁部だが、櫛歯状沈線文か連續爪形文を有するものと思われる。



第93図 第24号住居跡実測図

第94図 第24号住居跡出土遺物拓影図

第24号住居跡出土遺物（第94図）

1・2は口縁部無文帯を有するもの、3は幅広の懸垂文を持つものと思われる。

5は、横位の渦巻文を持っている。

第25号住居跡状遺構（第95図）

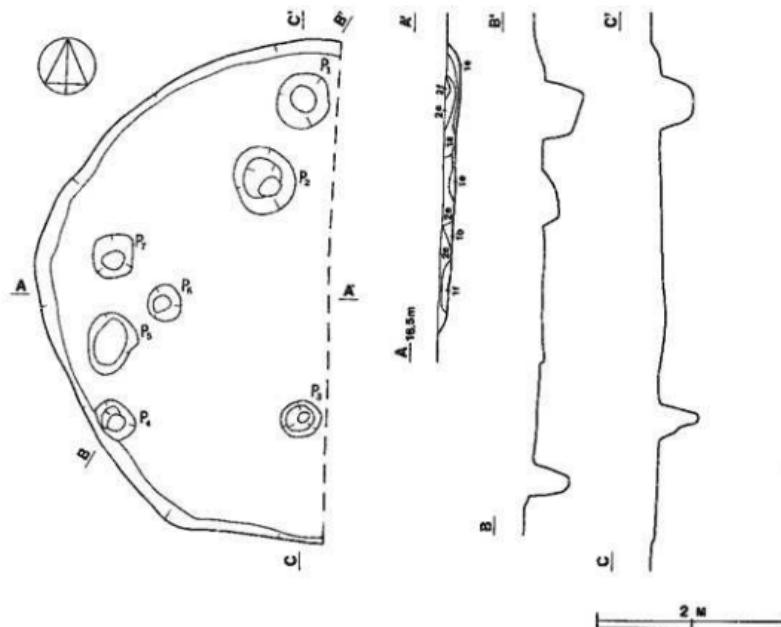
本住居跡状遺構はH 9 es・dsの調査区に確認されたもので、南西部住居跡群の北東部に位置する。本跡は、遺跡の中央部を南北に走る村道のため東側半分が調査できなかった。

規模は最大径が5.3mほどで、壁面から推定すると平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。壁高は南側で5cm・西側で10cm・北側で12cmを測り、南側が低い。壁は不明確な所が多い。床面は、軟かいロームでやや掃まりを帯びているが、床として判断することはむずかしい。中央部の床面はやや低く、壁周辺部が高くなっている。炉は、本跡の外側を含めて検出を試みたが確認出来なかった。床面にピット5個検出したが、皿状を呈するP₂・P₃は柱穴ではないと思われる。

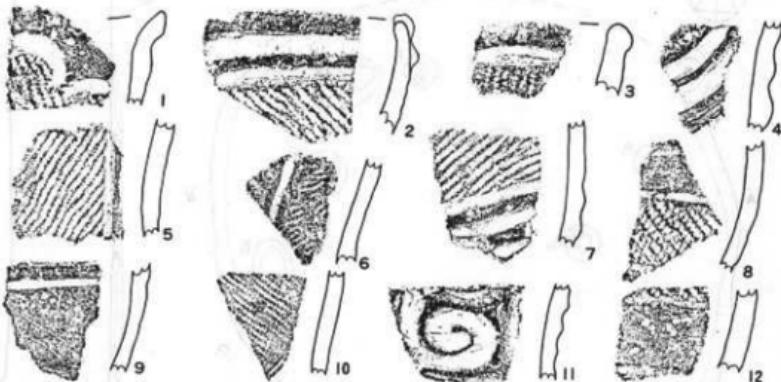
覆土は暗褐色土で、焼土粒子とローム粒子を含み、周開よりは締まった土層であった。

遺物は、覆土上層から少量の土器片とフレイクを検出しただけで、床面からの出土はなかった。

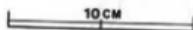
なお、本跡は遺構確認の段階では住居跡としてとらえたが、調査した結果、炉の未検出・柱穴の掘り込みと位置関係に疑問があり、さらに、床面と壁も不明確であるなど住居跡としての諸条件が整わず、住居跡状遺構として取扱った。



第95図 第25号住居跡状遺構実測図



第96図 第25号住居跡状遺構出土遺物拓影図



第25号住居跡状遺構出土遺物（第96図）

1～3は口縁部で、横位の楕円文を持つものである。4・11は、沈線による渦巻文を持っている。7は、懸垂文の中に1本の沈線を入れている。8は、口縁部無文帶の一部片である。9も口縁部近くの破片で、沈線によって胴部と区画しているが、胴部にも無文部分を有している。

第26号住居跡状遺構（第97図）

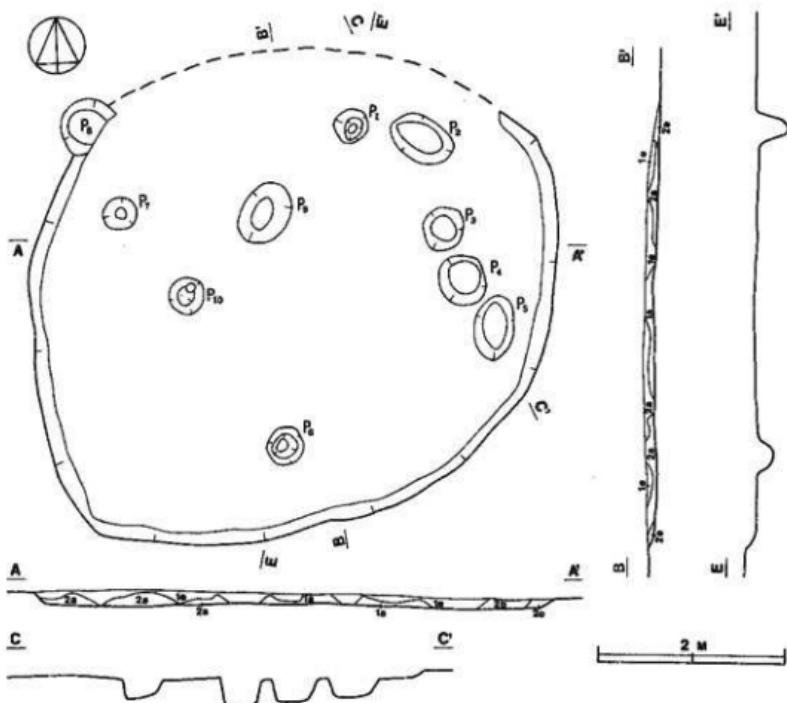
本住居跡状遺構はH 9 haの調査区を中心に確認されたもので、南西部住居跡群の東部に位置し、南側でSI29、南西部でSI27と近接している。

規模は推定長径6.2m・短径5.2mで、平面形は不整円形を呈し、長径方向はN-46°-Eである。壁高は東側9cm・南側8cm・西側14cmほどを測るが、北側は確認面とはほぼ同じで低く、やや確認できる程度のものである。壁は、軟らかいロームでプランがはっきりしなかった。床面は締まりがなく軟らかいロームである。炉は本跡の外側を含めて再度の検出を試みたが、検出することができなかった。床面からビットを9個検出した。壁ぎわからは浅い土壤状の掘り込み1個が検出された。ビットの底面はロームで凹凸があり、壁面も硬く締まっている。 P_3 ・ P_5 ・ P_6 は楕円形で20cmほどの深さをもっていた。主柱穴は不明であるが、 P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 ・ P_5 ・ P_7 ・ P_8 はほぼ一直線上に並んでいる。

覆土は褐色土が主体で、微量の炭化物・焼土粒子、少量のローム粒子を含んでおり硬い。

遺物は覆土の上層から少量の小さい土器片、南側壁付近から大きい土器片を検出した。

なお、本跡は炉が未検出で、床・壁・柱穴等ははっきりしないところが多いため、ここでは住居跡状遺構として取扱った。



第97図 第26号住居跡状造構実測図

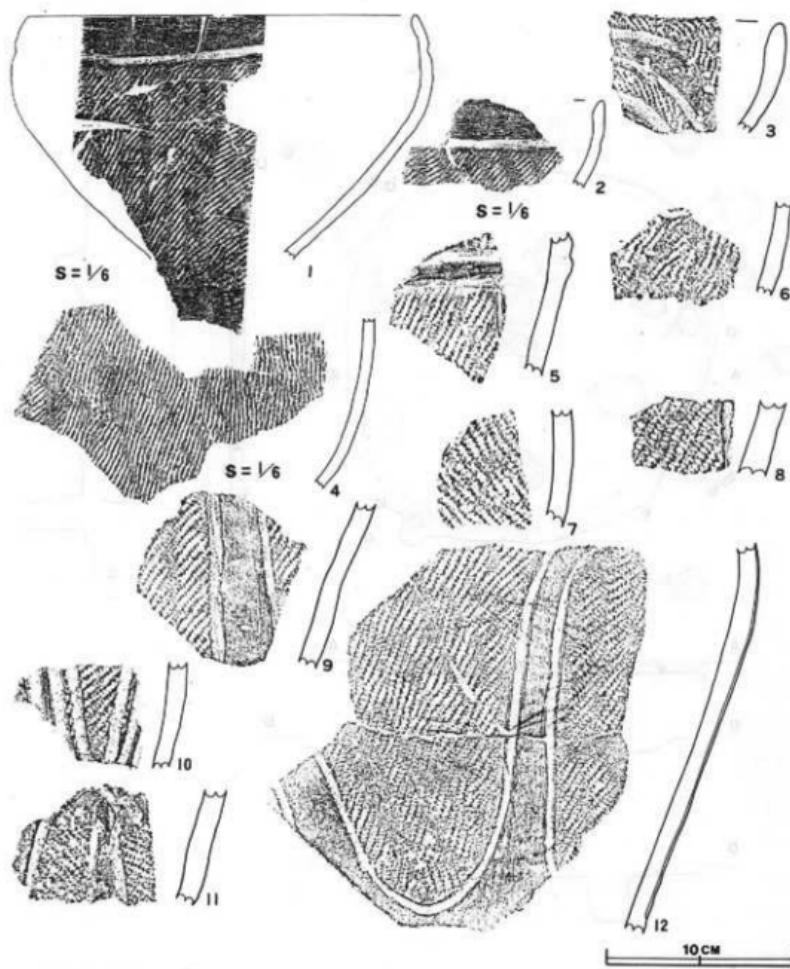
第27号住居跡（第99図）

本住居跡はH 9 i₄・j₄の調査区を中心に確認されたもので、南西部住居跡群の南東部に位置し、東側でSI29、西側でSI28と近接している。

規模は長径5.7m・短径5.5mで、平面形はほぼ円形を呈し、長径方向はN-25°-Wである。

壁高は北東側で15cm、北西側で11cm、南東・南西側で12cmを測る。壁は硬くて明確なもので、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面はロームでよく繋まり、炉の北東部がやや低く、他はほぼ平坦である。炉は床面の中央部よりやや北東寄りに位置している。規模は径70cmほどを測り円形で、炉の形態は皿状に9cmほど掘り込まれた地床炉である。炉内には焼土が少量検出された。炉床は、ロームが火熱を受けて赤化・硬化し、レンガ状になっている。床面にピットを9個、住居跡外に14個検出した。主柱穴はP₁・P₂・P₄・P₅・P₆と考えられる。

遺物は、覆土中から加曾利EⅢ式の小形鉢の洞部以下を検出した。床面からも加曾利E期の土器片、黒曜石のフレイク・チップ等の剥片を多量に検出した。



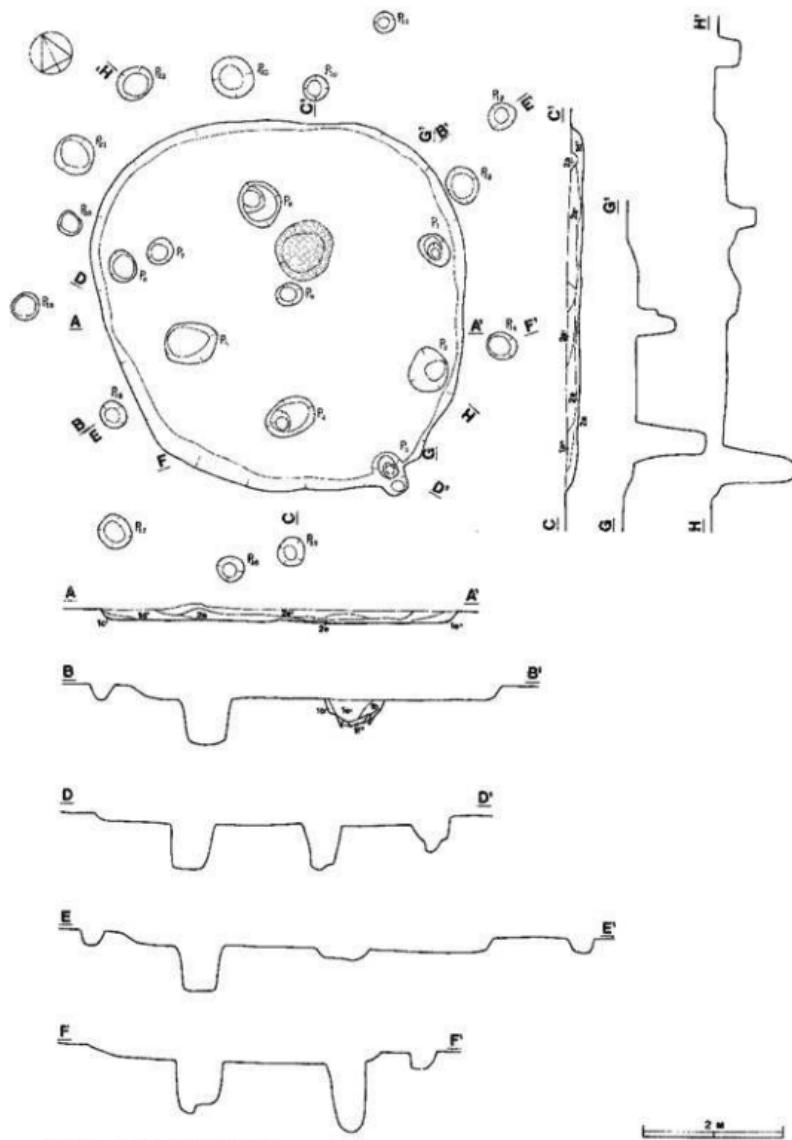
第98図 第26号住居跡状造構出土遺物拓影図

第26号住居跡状造構出土遺物（第98図）

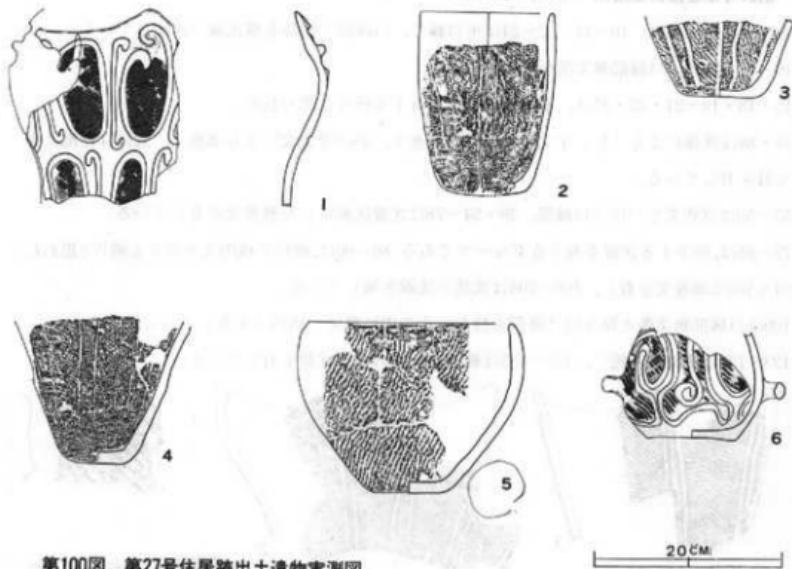
1・2は、口縁部無文帯を有し、口縁部・胴部を横沈線によって区画している。

4・6・7は繩文のみ施しているが、破片で他の文様はわからない。

9・10・11は、幅広の沈線区画による懸垂文を有し、10・11は、懸垂文の中に1本の沈線が垂下している。12は、沈線区画による「Y」字状無文帯を持つものの破片と思われる。



第99図 第27号住居跡実測図



第100図 第27号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第100図）

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-27	1	深鉢	A(27.0) B(20.8)	浅状口縁で、全面に繩文を施したのち、瓶底の変形柄内文を沈継法で施し、その間にさらに瓶底のかき状の底縁を施し、柄内文間をはすべてすり消している。瓶部は、1212番底に立ち上がり、口縁部にかけて半円を描くように内削する。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂糖 色調 スコリア にぶい褐色	(10%)	
	2	深鉢	A(13.8) B 19.6 C(8.7)	底盤はやや厚く、丸底を待ち一部欠損している。平口縁で、口付部のみ残ながなきれ、側部でややふくらみを持ち、ほぼ同形状の小形深鉢で、全面に繩文が施されている。	焼成 不良 胎土 砂粒・砂糖 色調 明赤褐色	E III	50%
	3	深鉢	B(8.3) C 8.6	底部は比較的大きく厚い。底部より底縁に外側に立ち上がり、沈継による9区画が瓶底になされ、すり消滅文と繩文が交互に施されている。ただし、1か所は繩文、沈継、繩文と続く。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂糖 色調 内赤褐色 外明赤褐色	E III	剥下20% 床面出土
	4	深鉢	B(14.9) C 6.0	瓶部から底部にかけて沈縁が垂下し、へラなどですり消滅文と繩文が交互に半周ほど見られ、他はへらによるながなきれているが、粗糙なものである。底部はやや丸底を待ち、比較的薄い。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂糖 色調 明赤褐色	E III	18%
	5	深鉢	A(21.6) B 18.1 C 7.8	最大径を瓶部に持つ。底部から瓶上にかけて直線的に立ち上がり、瓶上部から口縁部にかけてやや内削する。瓶底で、内外面ともへらながなきれっている。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂糖 色調 橙色	E IV	40% 床面出土
	6	鉢	B(11.6) C 9.4	瓶下部が大きくふくらみ、底部が大きくて、へら磨きによる溝をなされ、瓶底がやや膨る。瓶部は繩文を施した後、沈継による溝消滅文を施し、一部すり削が行われている。瓶下部には、瓶底の有孔把手が2個貼り付けられている。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂糖 色調 橙色	E III	40%

第27号住居跡出土遺物（第101～106図）

1～9は波状口縁。10～14・22～24は平口縁で、口縁部と胸部を横沈線で区画している。

16・17・29は、口縁部無文帯を有している。

15・18・19・21・25・27は、横位の楕円文を有する破片と思われる。

37・38は沈線による「U」字文、41～43は渦巻文、45は隆沈文による渦巻文、52は口唇部にキザミ目を有している。

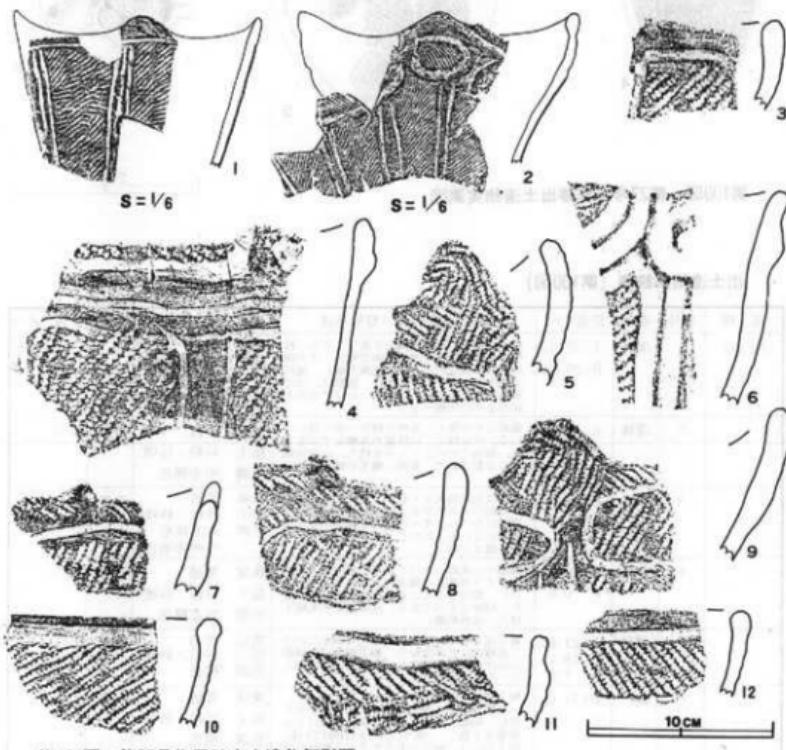
53～55は点列文をつける口縁部、39・54～78は沈線区画された懸垂文を有している。

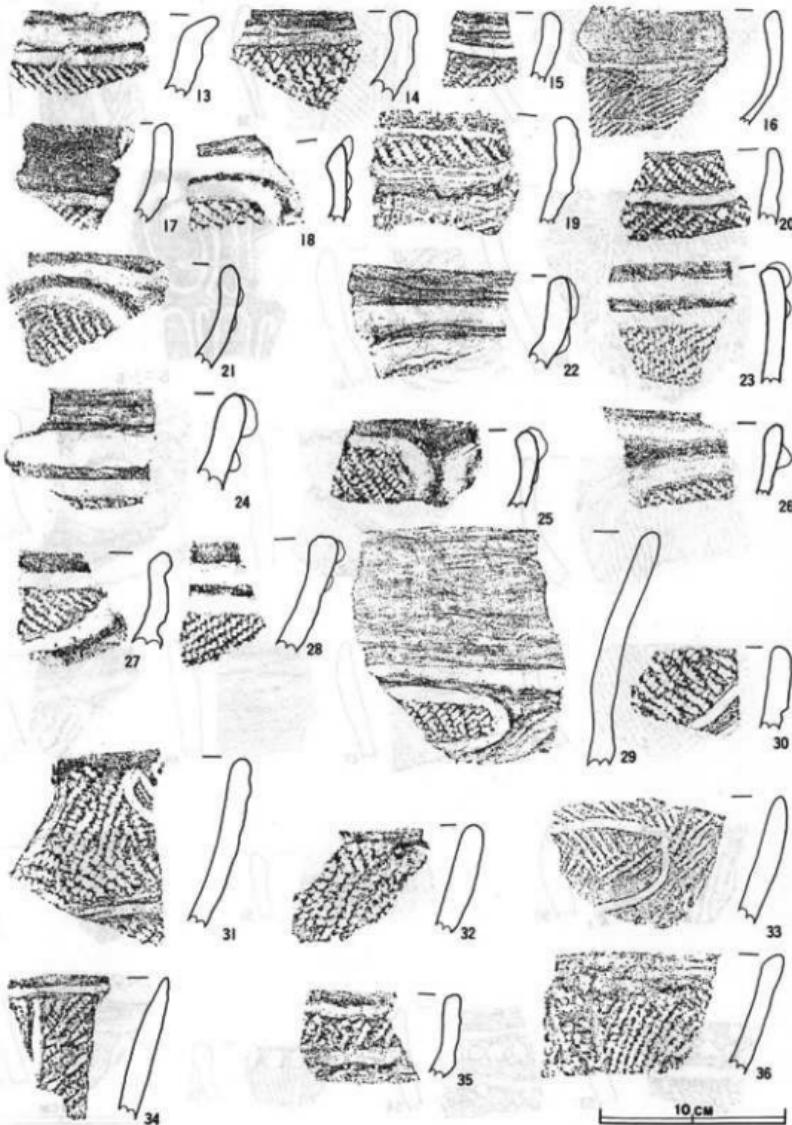
79～85は、垂下する沈線を有するグループである。86～90は、縱位の楕円文を有する破片と思われる。

91～102は渦巻文を有し、106～108は波状の沈線を施している。

109は口縁部無文帯と貼り付け隆帶を持ち、その中に横位の楕円文を有している。

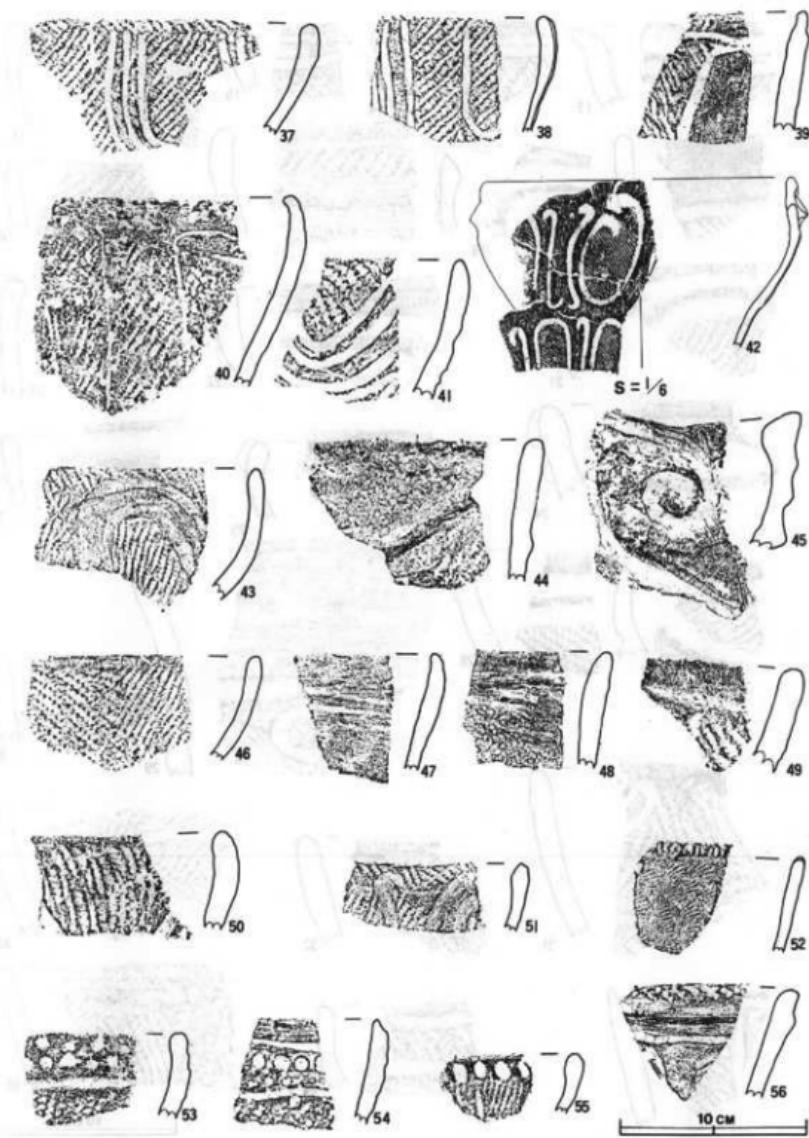
123・124は繩文のみ施し、127～135は櫛歯状の縱い沈線を有している。





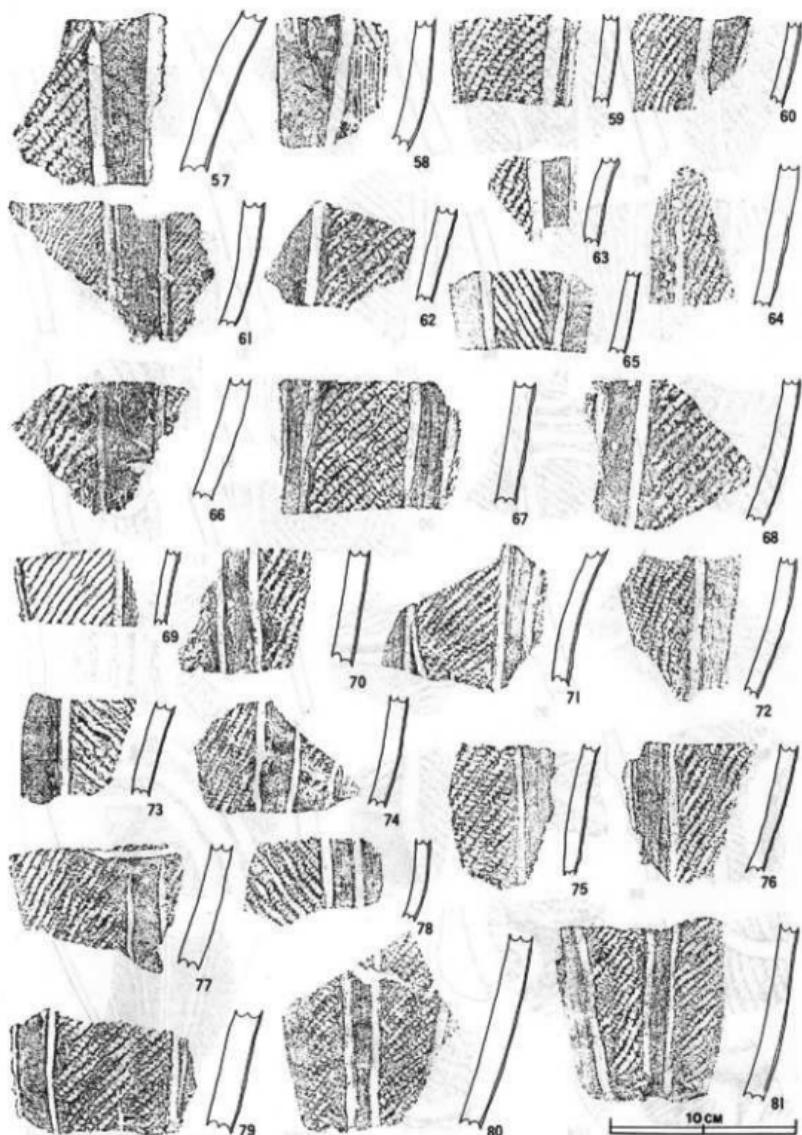
第102図 第27号住居跡出土遺物拓影図

昭和四十年九月三十日撮影



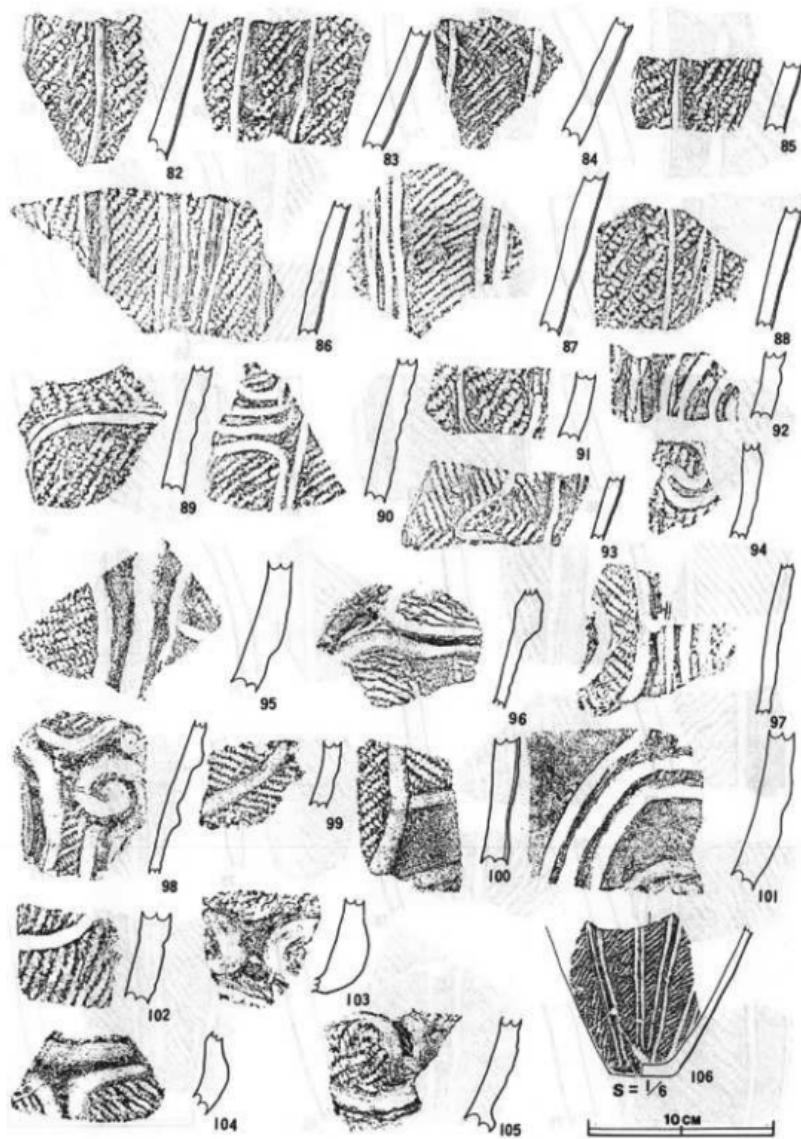
第103図 第27号住居跡出土遺物拓影図

図版説明者：土木部器物課長：西田信一郎

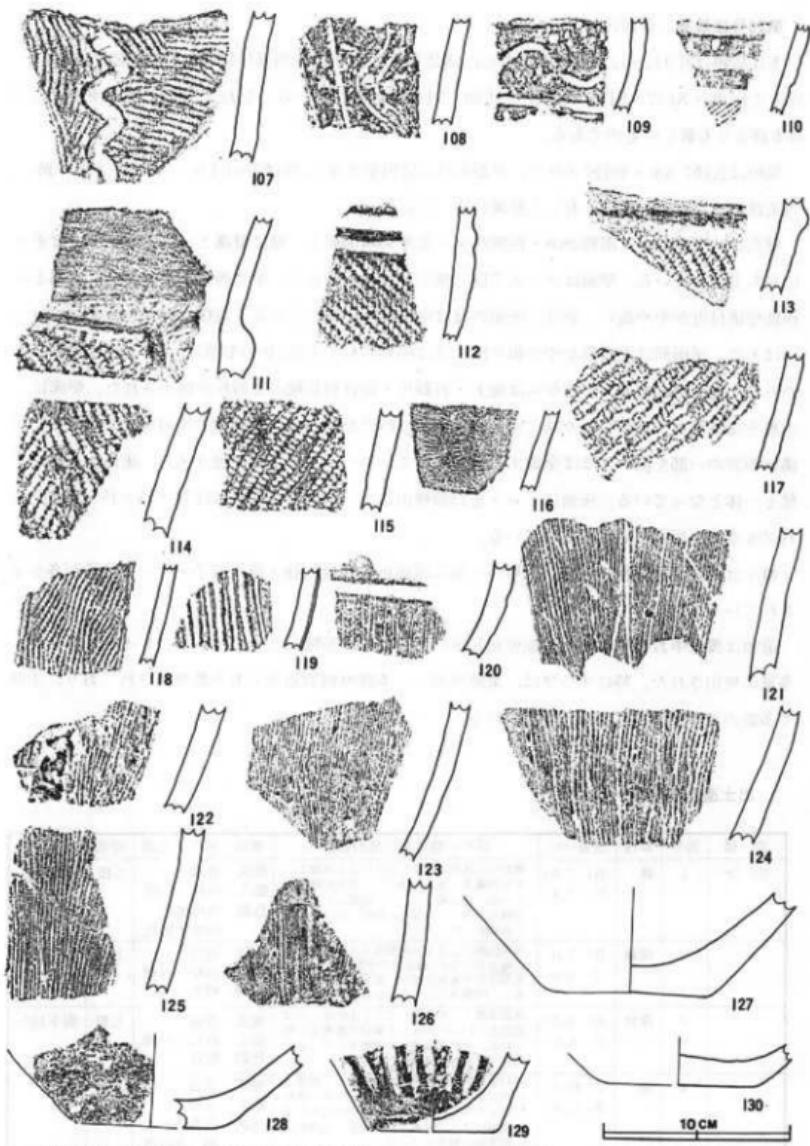


第104図 第27号住跡出土遺物拓影図

北海道立大出島遺跡調査報告書 四四二年



第105図 第27号住居跡出土遺物拓影図



第106図 第27号住居跡出土遺物拓影図

第28号住居跡（第107図）

本住居跡はH 9.9m・i₂の調査区を中心に確認されたもので、南西部住居跡群の中央部に位置し、周辺でSI26・SI27・SI35・SI37・SI38・SI39と近接している。なお、北東側に位置するSK271は本跡よりも新しいものである。

規模は長径7.8m・短径7.6mで、平面形はほぼ円形を呈し、長径方向はN-E 0°である。本跡は、当遺跡の中で最大の規模を有し、壁溝を伴っている。

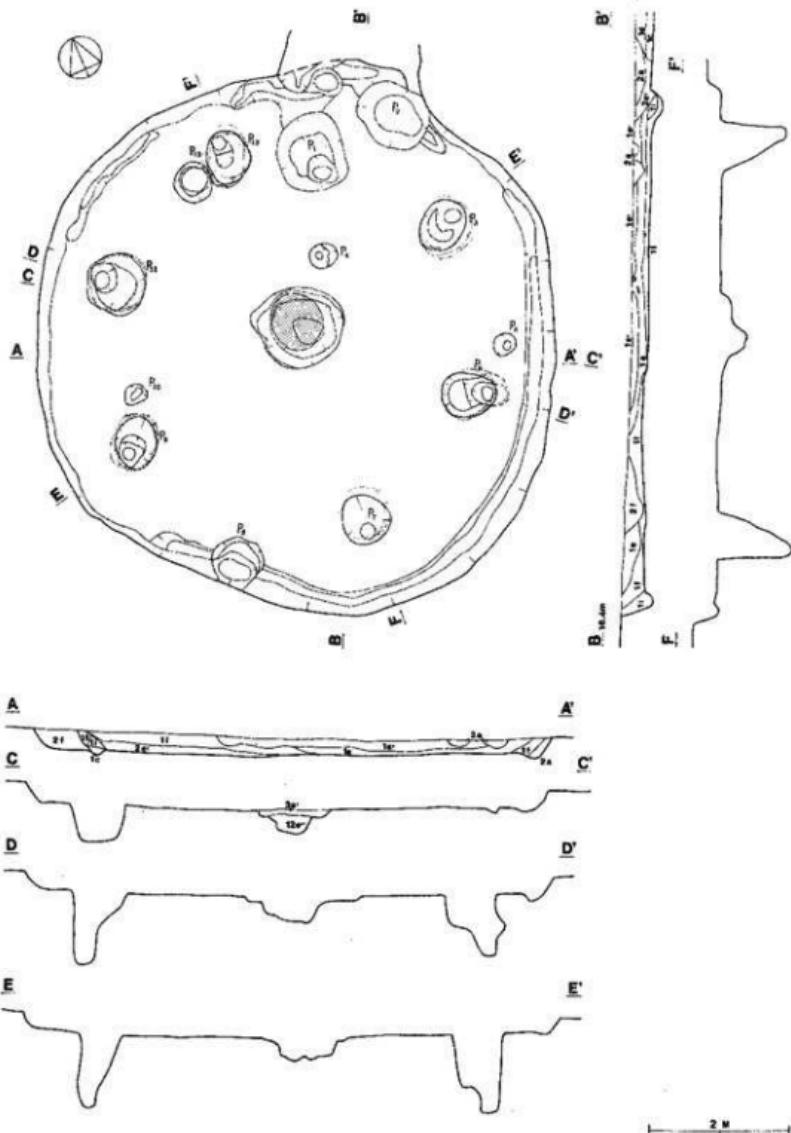
壁高は、東側22cm・南側28cm・西側25cm・北側30cmを測る。壁は壁溝と一体となり、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁面はロームで良く踏みしめられており、炉の西側がやや低く、東側と北西部踏み付近がやや高い。炉は、床面のほぼ中央部に位置している。規模は長径130cm・短径120cmほどで、平面形は北西部がやや張り出すほぼ円形のものである。炉の形態は、深さ35cmほど掘り深められた地床炉である。炉内からは焼土・石器片・加曾利E期の土器片が検出された。炉床は、火熱を受けたロームがレンガ状に赤化・硬化して凹凸が見られ、長期間の使用がうかがえる。壁溝は西側の一部を除いてほぼ全周する浅いもので、ロームをU字形に掘り込み、床面から統一して壁と一体となっている。床面にビットを13個検出した。このうち主柱穴はP₃・P₆・P₇・P₉・P₁₁・P₁₂の6本で、炉を中心に対応している。

覆土は褐色土を主柱体とし、上層の一部は暗褐色土で炭化物・焼土粒子・ローム粒子が各少量含まれている。

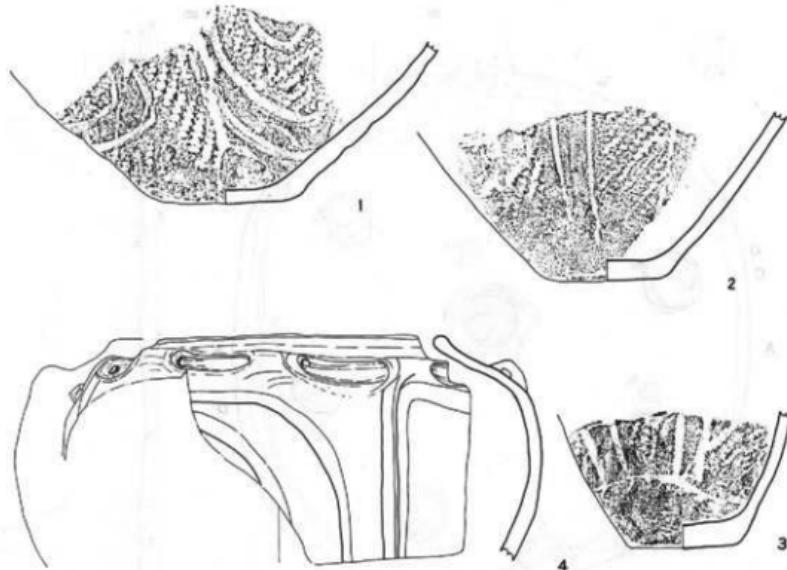
遺物は覆土中および床面から加曾利E III式の土器片、黒曜石とチャートのフレイク・チップが多量に検出された。特にチップは、東側床面と、本跡外側周辺からも多数検出されており、本跡で多数の石器が製作されたと考えられる。

出土遺物解説表（108図）

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-28	1	鉢	B(7.6) C 7.8	輪郭から底部にかけてへらによる沈線で、すり落とし、春の枝「S」字形が施されている。これは鏡である。底部はやや丸味があり、底部から輪郭にかけて大きく直線的にひらく。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 内暗褐色 外明赤褐色	E III	底部20% 床面出土
	2	深鉢	B(7.0) C 6.0	沈線外側によるすり落とし文と繩文が交互に施されているが、底部はやや削減している。底部はやや丸味があり、底部から輪郭にかけてゆるく、内側のみに立ち上がる。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 棕色	E III	底部10%
	3	深鉢	B(8.3) C 6.6	底面は厚く、やや開いて立ち上がる。口は底面まですり落しの6~7半径の懸垂文が見られる。その間に繩文が施されている。内面へら盛り、外面へら削り。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 橙色	E III	底面下15%
	4	壺	A 22.0 B(12.0)	平口縁で無文。済手の土器である。肩部とその他の部分に布縫穴（袋縫目）をめぐらせ、縫目にはくらみを持ち、横円もしくは円形の文が沈線によって区画されている。内外面に一部本彩が残されている。	焼成 普通 胎土 砂粒 色調 内黄褐色 外 赤褐色	E IV	15%



第107図 第28号住居跡実測図



第108図 第28号住居跡出土遺物実測図

10 CM

第28号住居跡出土遺物（第109・110・111・112・113・114図）

1～3は波状口縁で、斜位の楕円文を持っている。

4・6～8は横位の楕円文を持つが、7は楕円文の中は無文である。

5は波状口縁で、渦巻文と横位楕円文を有す。9は、懸垂文の一部である。

12は、懸垂文の中にもう1本継の沈線を施している。

13・20は渦巻文、横位楕円文、懸垂文の組み合わせである。

18・19・21～27は沈線で口縁部を区画し、口縁部無文帯を持ち、19・20は、口縁部無文帯を有している。

30は竹管文による円形竹管を点列状に並ばせ、31は点列文の文様、32は2列の点列文である。

33～38は2本の沈線を付け、その間に連続爪形文を充填させて施文している。

43～65は、沈線区画による懸垂文を付けている。66～74は、繩文のみ施文する破片である。

77～79・81～83・85・91は、横位の楕円文を持つ破片と思われる。

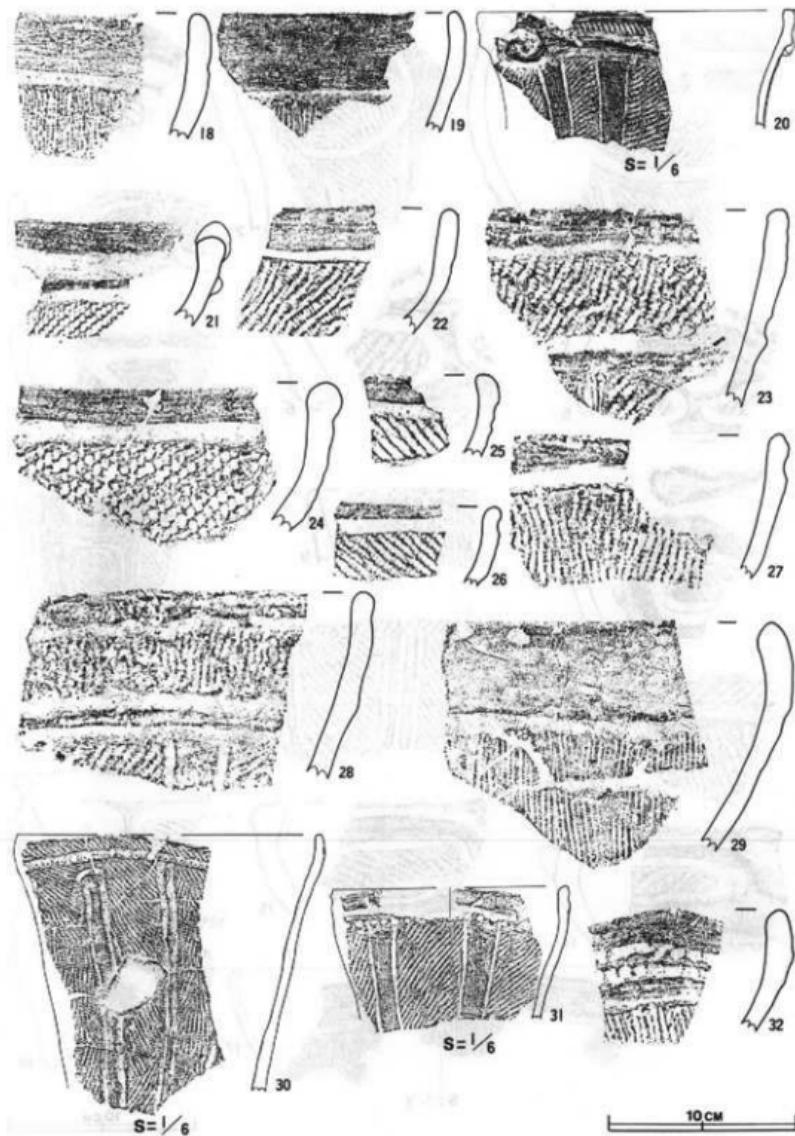
91・92は「S」字状文であり、90・96・97は2～3重の楕円文である。

98～101は櫛齒状細沈線、104は細沈線を波状に付ける。102・103は、ヘラによる沈線である。



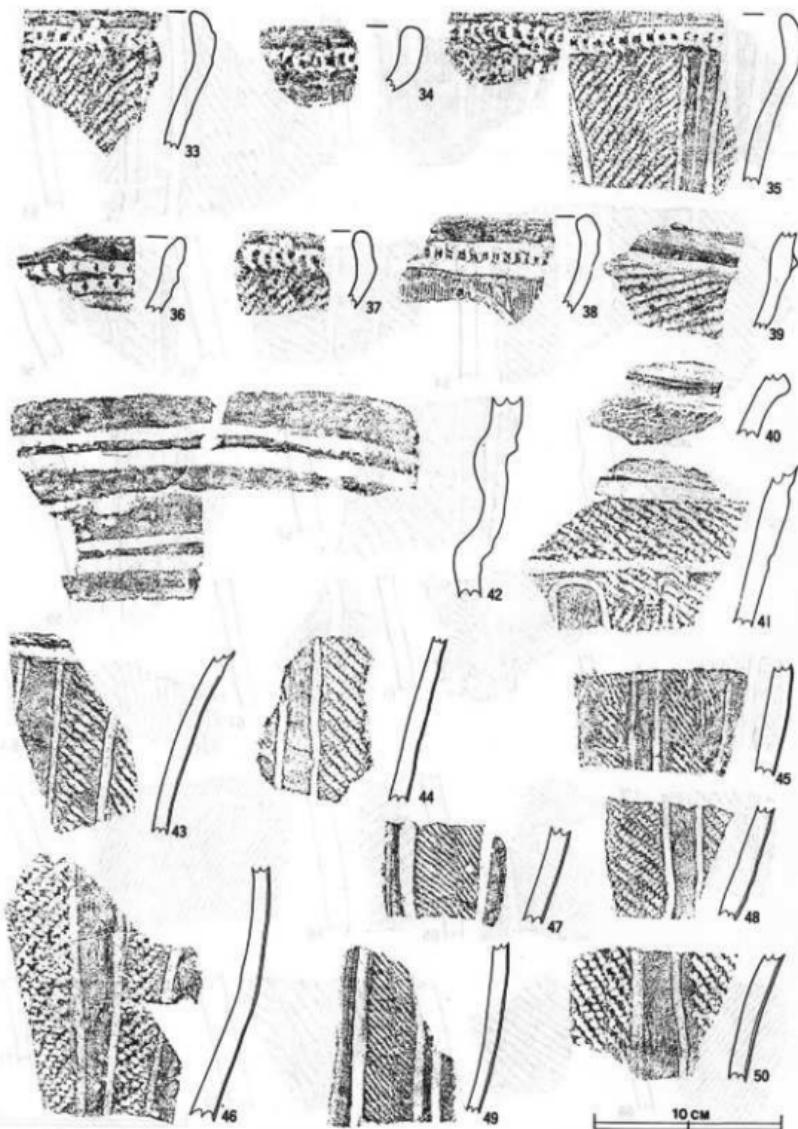
第109図 第28号住居跡出土遺物拓影図

（複数の骨片を示す。）



第110図 第28号住居跡出土遺物拓影図

日本古跡研究会編著『日本古跡』(1981年)



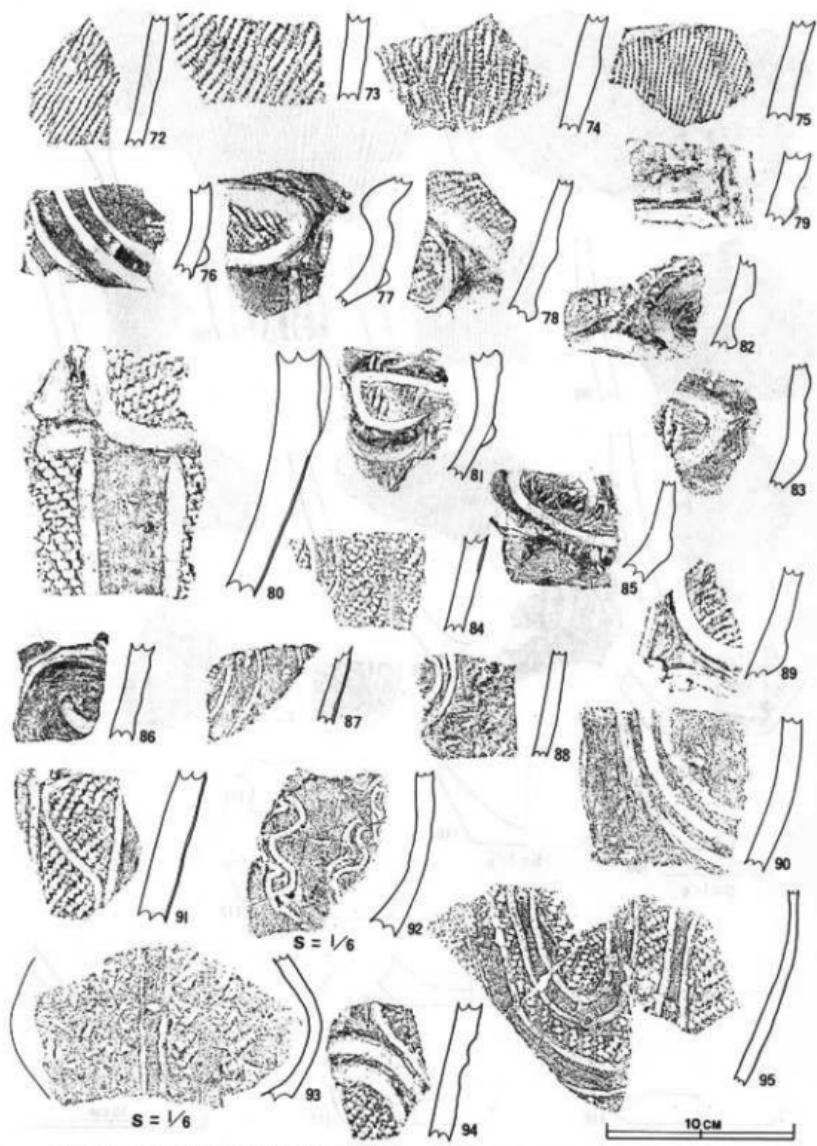
第111図 第28号住居跡出土遺物拓影図

第28号住居跡出土遺物拓影図



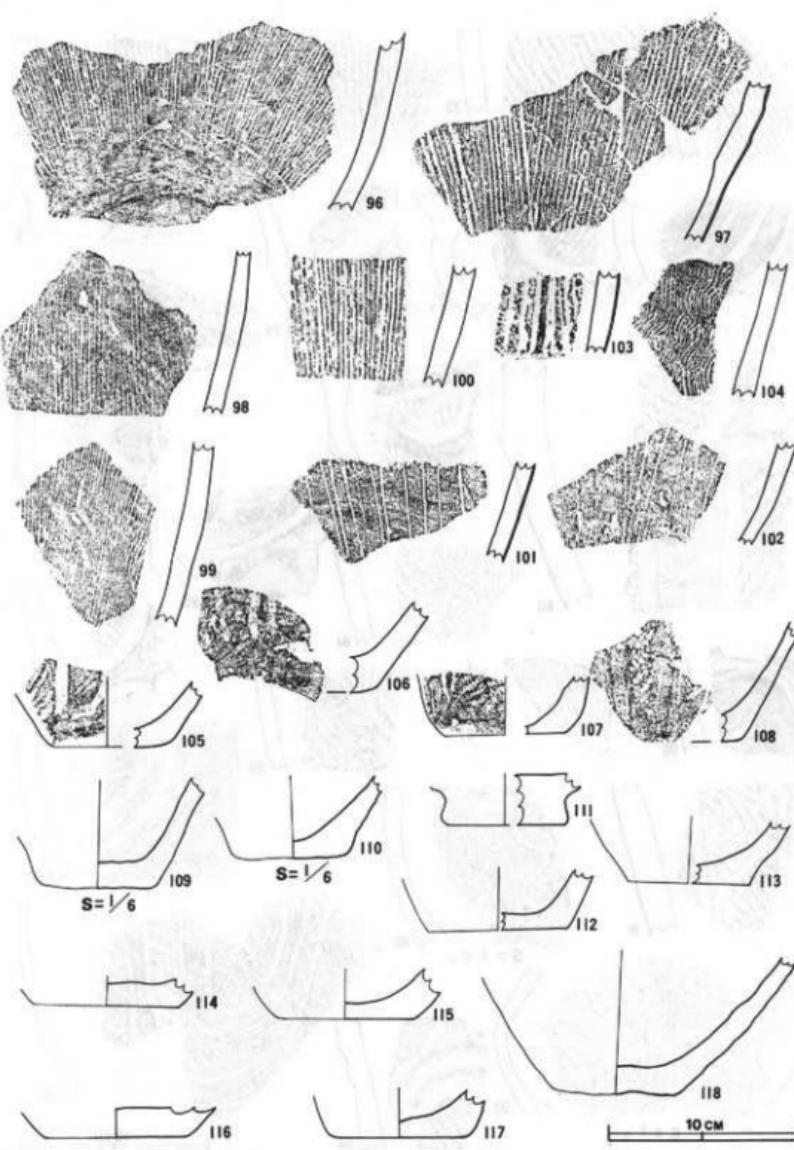
第112図 第28号住居跡出土遺物拓影図

昭和田城邑出土物研究会編 第112号



第113図 第28号住居跡出土遺物拓影図

西漢後期・東漢初期の墓地



第114図 第28号住居跡出土遺物拓影図

（複数回複数土層にわたる）

第29号住居跡状造構（第115図）

本住居跡状造構はH9 ie・jeの調査[X]に確認されたもので、南西部住居跡群の東部に位置し、北側でSI 26、西側でSI 27、南西側でSI 30と近接している。

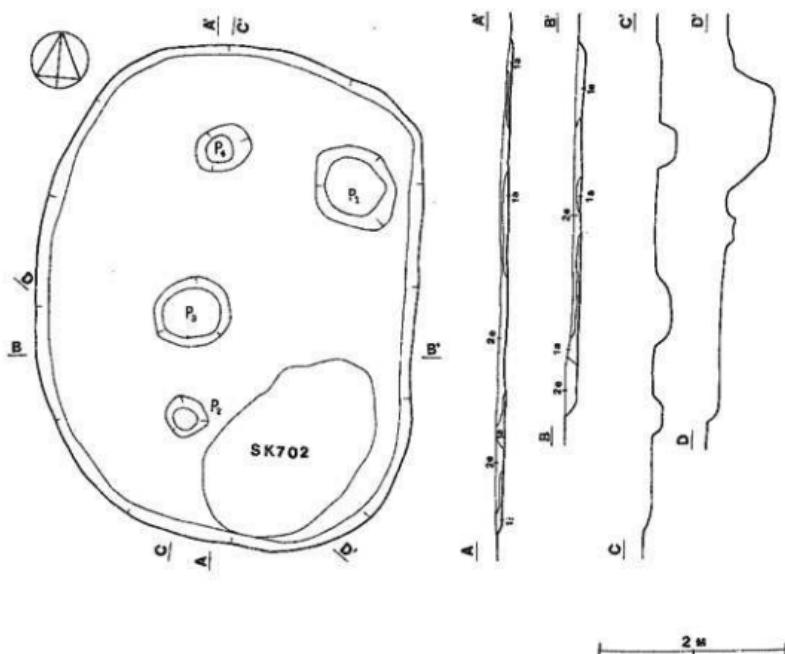
規模は長径5.3m・短径4.0mで、平面形は橢円形を呈し、長径方向はN—0°である。

壁高は東側7cm・南側7cm・西側12cm・北側4cmを測り、西側が高い。壁はロームで、やや縮まりを帯び、床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、腐植土を含んでおり、比較的縮まりをおびているが、床として不明確な所が多い。なお、南東側の床面を切ってSK702が構築されていることから、SK702が新しい。炉はなく、柱穴状の掘り込みを4本検出した。

覆土は褐色土で軟かく、ローム粒子を含んでいた。

遺物は、覆土上層から土器片を少量検出した。

本跡は、床面が不明確であり、また、炉を検出することが出来なかった。さらに、柱穴と思われる掘り込みも確認出来ず、住居跡と断定するには無理があり、住居跡状造構として取扱った。



第115図 第29号住居跡実測図

第30号住居跡状遺構（第177図）

（参考）第177図 第30号住居跡状遺構

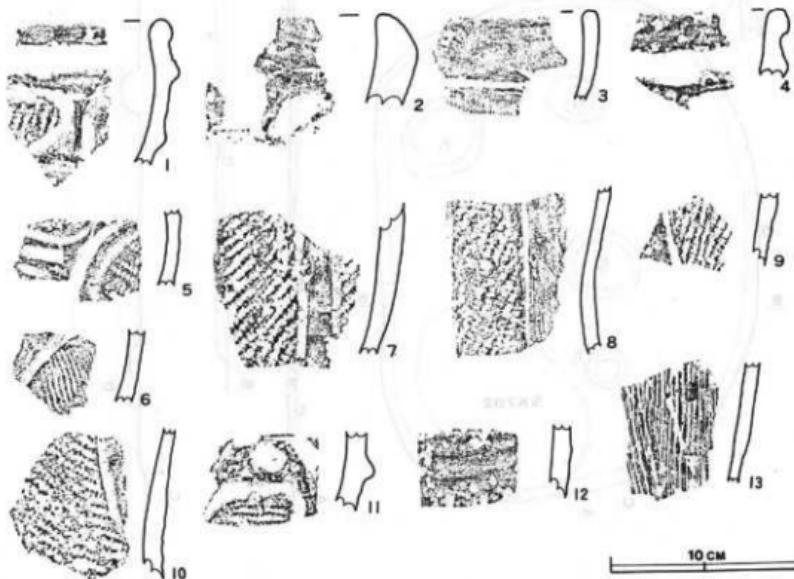
本住居跡状遺構はI 9 bsの調査区を中心に確認されたもので、南西部住居跡群の南東部に位置し、本跡の南側でSK731と重複している。なお、本跡との新旧関係は、SK731の方が新しい。

規模は長径2.5m・短径4.65mほどで、平面形は不定形を呈し、長径方向はN-36°-Wである。壁高は南東部で9cm、北西部は4cmほどで低く、南側で高くなっている。壁は軟らかいロームで、床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面は平坦であるが軟らかく、踏みしめられたようすは見られない。炉は検出されなかった。柱穴状の掘込みが8本確認されたが、いずれも比較的浅く柱穴と断定できなかった。なお、炉跡を検出すべく調査を続けたが、検出には至らなかった。

覆土はローム粒子を含んだ北較的軟らかい褐色土で、自然堆積であった。

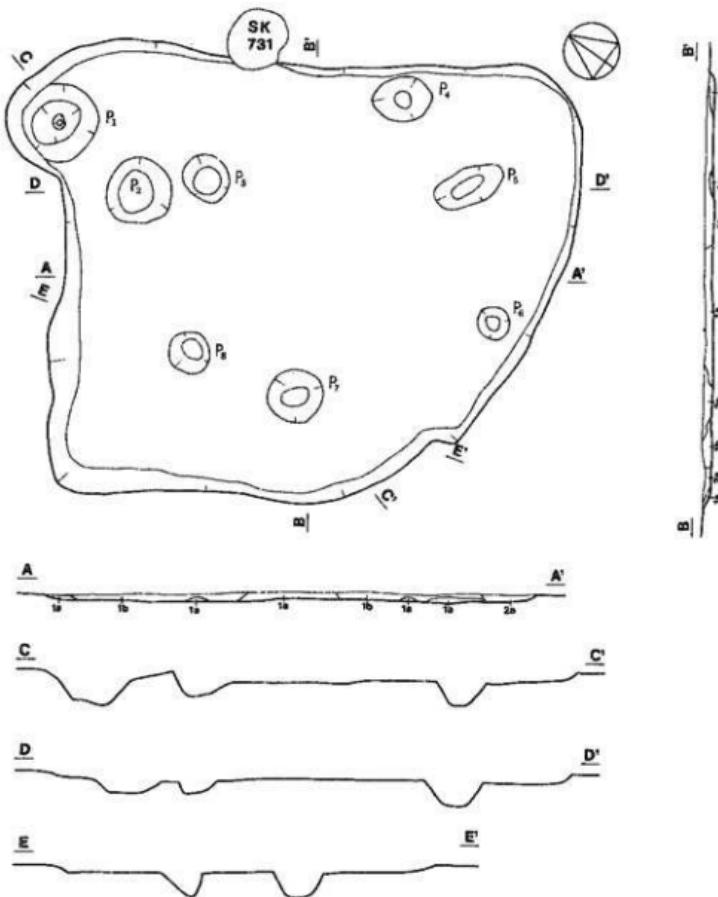
遺物は、覆土の上層に20数点の加曾利E期の小さい土器片を検出した。

本跡を、床面・柱穴・平面形状等から総合的に判断すると、住居跡として判断することが難しく、住居跡状遺構として取扱った。

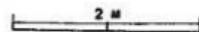


第116図 第30号住居跡状遺構出土遺物拓影図

（参考）第177図 第30号住居跡状遺構



第117図 第30号住居跡状造構実測図



第30号住居跡状造構（第116図）

1・5・6・11は、横位の楕円文を有している。

7～10は沈線区画による懸垂文を持ち、1・2・4・11は貼り付けも行っている。

3・13は、櫛歯状の細い縦沈線を多数付けている。

第31号住居跡（第118図）

本住居跡はI 9 b:調査区を中心に確認されたもので、南西部住居跡群の南部に位置し、本跡の南西部でSI 32と一部重複している。

規模は長径4m・短径3.5mほどで、平面形は楕円形を呈し、長径方向はN-30°-Wである。壁高は、南東部で10cm・北西部で7cmほどと低い。壁はソフトロームで、やや縮まりを帯び、床面からやや外傾して立ち上がっている。床面はロームで固くしまっており、一部に凹凸がみられるが、全体的には、壁周辺から中央部に向かってやや低くなっている。炉は床の中央部にみられ、長径120cm・短径75cmの楕円形のものである。炉の形態は、皿状に18cmほど掘り深められた地床炉である。炉床は、ロームが火熱を受けて赤化・硬化しており、かなり長期間にわたる使用がうかがえる。柱穴はP₁～P₃が検出された。P₁・P₃は、長径45～50cm、深さ15～18cm、P₂は長径45・65cm、深さ65・75cmを測ることができる。

覆土は、暗褐色土でよく縮まっており、ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含んだ自然堆積であった。

遺物は、覆土の上層から加曾利E期の土器片少量と数点のフレイクを検出した。

なお、本跡の南西部にあるSK723は、炉跡の一部を崩して作っており、本跡よりも新しい造構である。

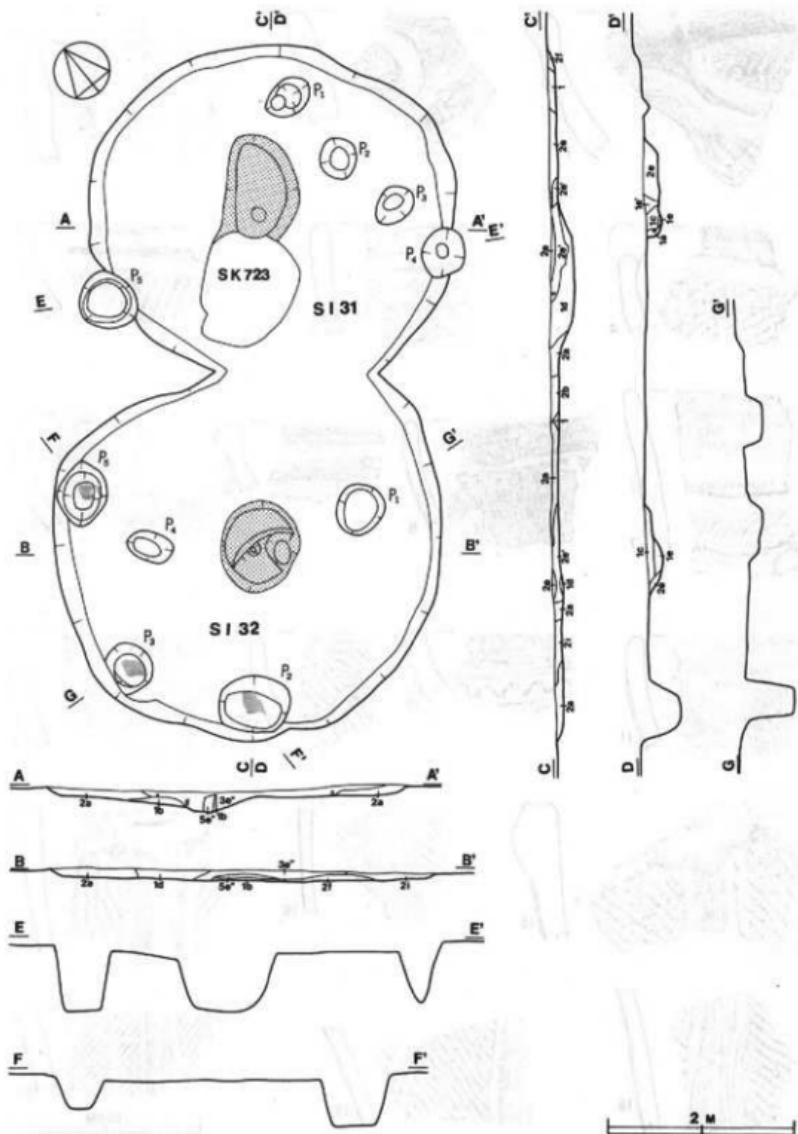
第32号住居跡（第118図）

本住居跡はI 9 b:の調査区を中心に確認されたもので、南西部住居跡群の南部に位置し、本跡の北東部でSI 31と一部重複している。

規模は長径4.45m・短径3.95mで、平面形は楕円形を呈し、長径方向はN-88°-Eである。壁高は北東部で8cm、南西部で5cmほどと低い。壁はソフトロームでやや軟らかく、床面から外傾気味にゆるやかに立ち上がっている。床面はロームで硬く、西側から中央部に向かってやや低くなっている。床面のレベルはSI 31とはほぼ同じであり、切り合い関係は不明である。炉は床の中央部にみられ、長径100cm・短径85cmの規模を有している。炉の形態は楕円形で、皿状に20cmほど掘り深められた地床炉である。炉床はロームが火熱を受けて赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。また、炉床の南側半分がやや低くなり、さらに、南東部に深さ30cmほどの窪みが見られる。この位置に埋設土器が存在したことも考えられる。床面に柱穴を5本検出したが、深さが30cmを越える壁ぎわのP₂(-50cm)、P₃(-54.5cm)、P₅(-31cm)の3本が主柱穴で、位置的にはP₁(-19cm)、P₄(-12cm)もその可能性をもつている。

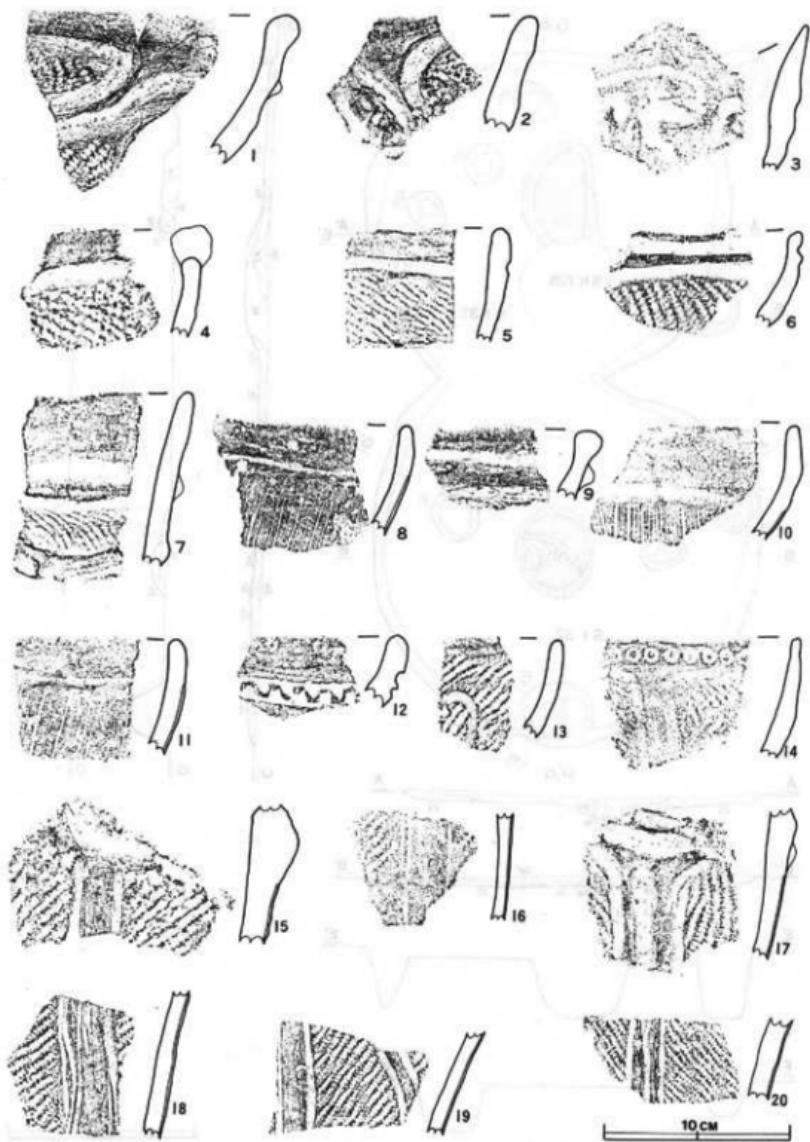
覆土はローム粒子・炭化粒子を少量含む褐色土でやや縮まりを帯び、自然堆積であった。

遺物は、覆土の上層から加曾利E期の小さい土器片を20数点検出した。

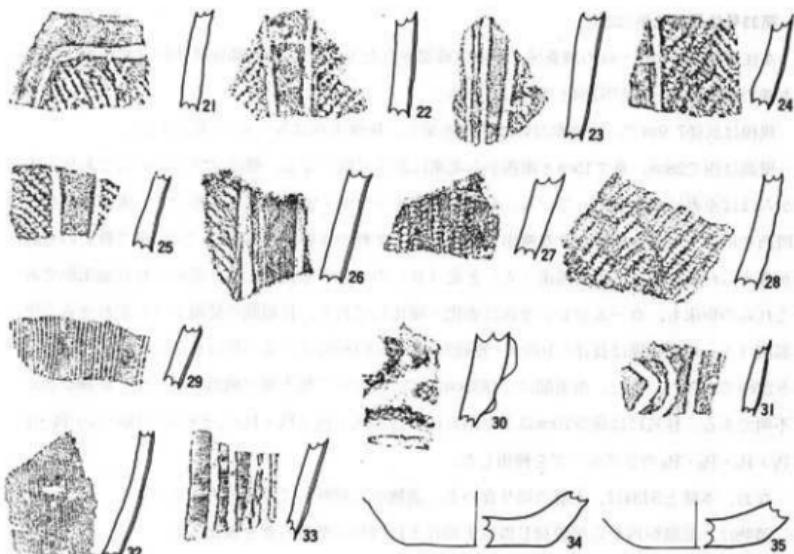


第118図 第31・32号住居跡実測図

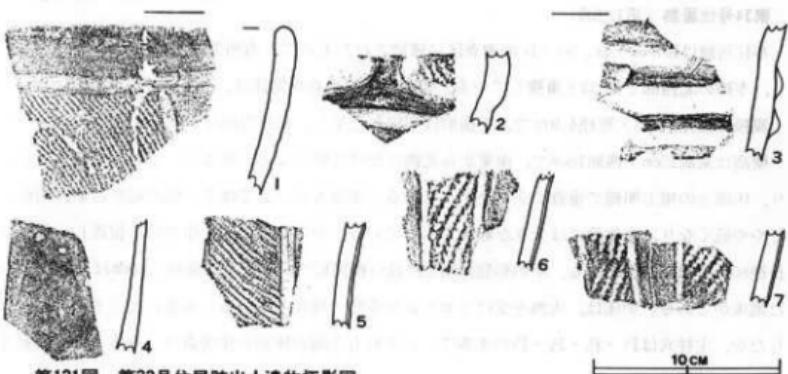
第10章 深度学习框架 TensorFlow



第119図 第31号住居跡出土遺物拓影図



第120図 第31号住居跡出土遺物拓影図



第121図 第32号住居跡出土遺物拓影図

第31号住居跡出土遺物（第119・120図）

1・2・4～6は口縁部に横位の楕円文を有し、8・10・11は櫛歯状細沈線を付けている。

14は竹管による円形の点列文。16・18～20・22～26は、沈線区画による懸垂文である。

第32号住居跡出土遺物（第121図）

1は口縁部無文帯、2は横位の楕円文、5～7は沈線区画による懸垂文を有している。

第33号住居跡（第122図）

本住居跡はH 8 ds・esの調査区を中心に確認されたもので、南西部住居跡群の北西端に位置し、本跡の南東部の一部がSI34と重複している。

規模は長径7.9mで、平面形はほぼ円形を呈し、長径方向はN-6°-Eである。

壁高は西で28cm、東で15cmと南北から北東にかけて低くなる。壁はソフトロームであり、床面からはほぼ垂直に立ち上がっている。全体的に締まりが弱く多少明確さに欠ける。床面はかなりの凹凸を示している。炉跡が2基検出されており、2軒の住居跡の重複、または、建て替えの可能性を考えられる。炉は、中央部南（A）と北（B）のどちらも皿状に掘り深められた地床炉である。これらの炉床も、ロームがレンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用をうかがわせる。中央部南（A）炉の規模は長径が105cm・短径74cm・深さ18cm、北（B）炉は長径120cm・短径88cm・深さ27cmであった。また、南東部に、径35cmほどにわたって焼土塊が検出されたが、炉跡か否かは不明である。柱穴には深さ70cm以上を測るP₁・P₂・P₄・P₅・P₆・P₉と、それより浅いP₃・P₇・P₈・P₉・P₁₀の2グループを検出した。

なお、本跡とSI34は、土層の切り合いと、遺物から判断して本跡の方が古い。

遺物は、北側炉内から加曾利EⅢ式土器片とP₄内から磨製石斧を検出した。

第34号住居跡（第122図）

本住居跡はH 8 es・fs・es・efの調査区に確認されたもので、南西部住居跡群の北西部に位置し、本跡の北西部でSI33と重複している。本跡とSI33の新旧関係は、本跡の方が新しい。

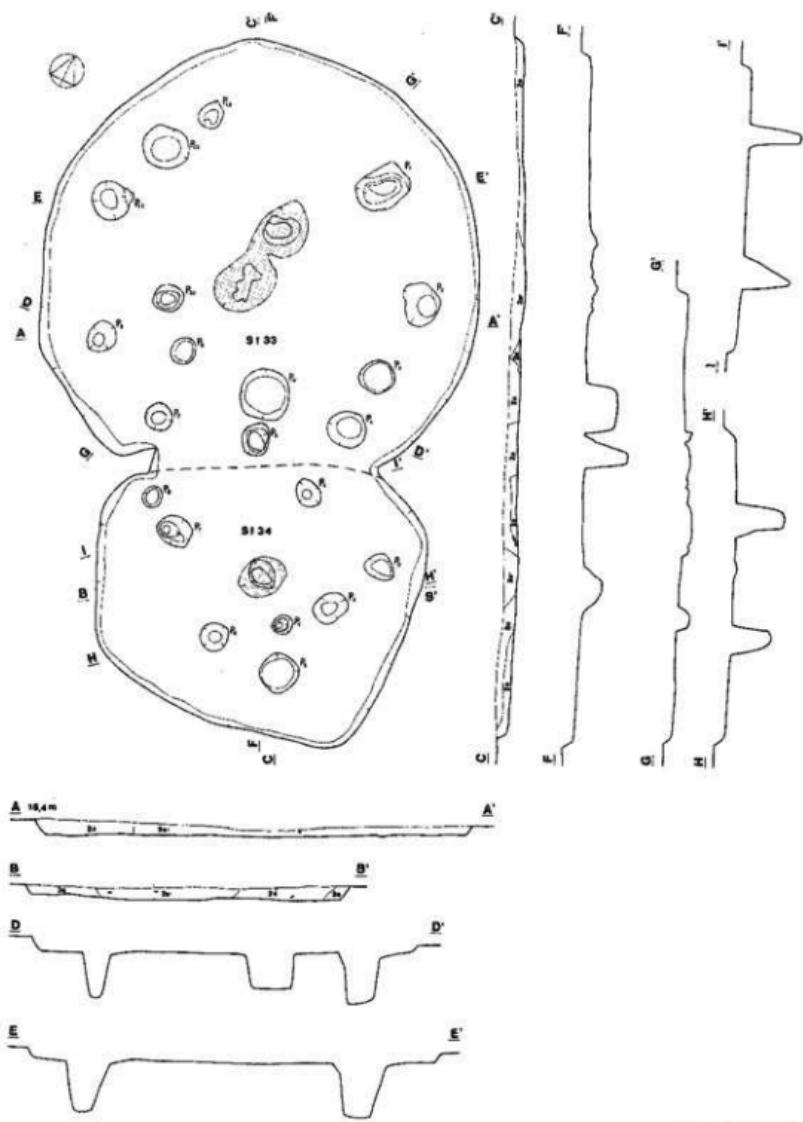
規模は長径5.7m・短径4.9mで、平面形は不定形を呈し、長径方向はN-8°-Wである。

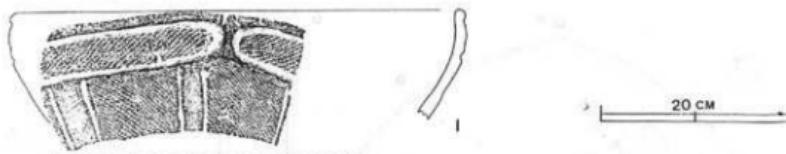
壁高は東側25cm・西側16cmで、南東から北西にかけて低くなる。壁はロームでよく締まっており、床面との境も明確で垂直に立ち上がっている。床面もロームで硬く、壁周辺から炉に向かってやや低くなり、全体的には大きな起伏を示している。炉は床面のやや中央部に位置し、規模は長径80cm・短径70cmである。炉の形態は南北に長い楕円形で、床面を擂鉢状に40cmほど掘り深めた地床炉である。炉床は、火熱を受けてロームが赤化・硬化している。床面にピットを8個検出したが、主柱穴はP₁・P₃・P₆・P₇の4本で、いずれも上端が床面の中央寄りになるような傾斜を持たせて掘られていた。

覆土は、下層に焼土粒子・炭化粒子を、上層と中層にローム粒子を含み、締まった土層であった。

遺物は、覆土中のものが大部分であるが、床面から加曾利EⅢ式の大きな土器片を検出した。

この遺物からも、SI33より本跡の方が新しく構築されたものと考えることができる。

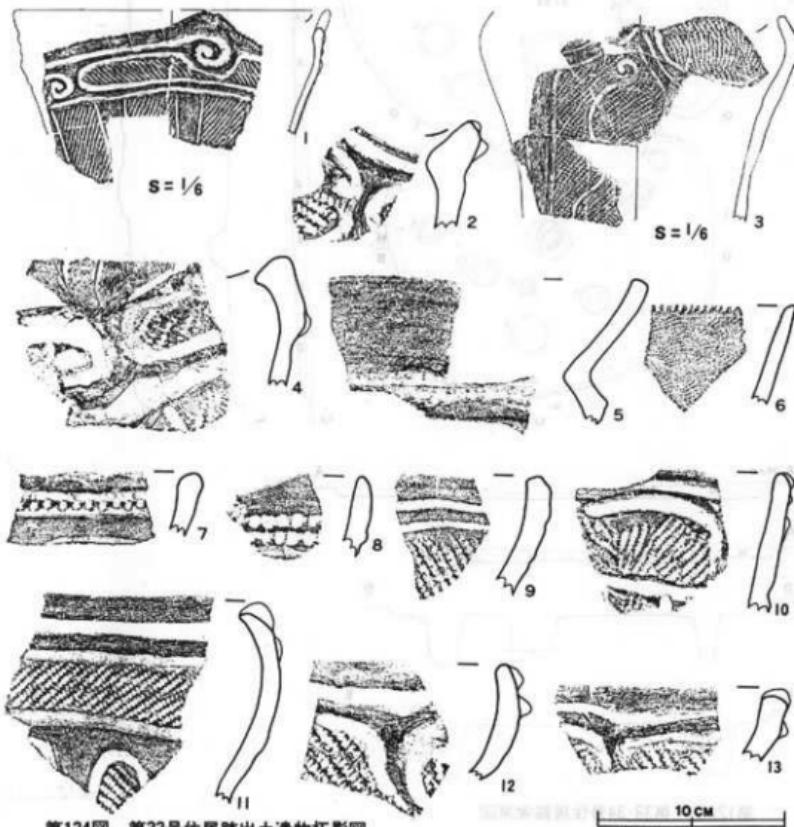




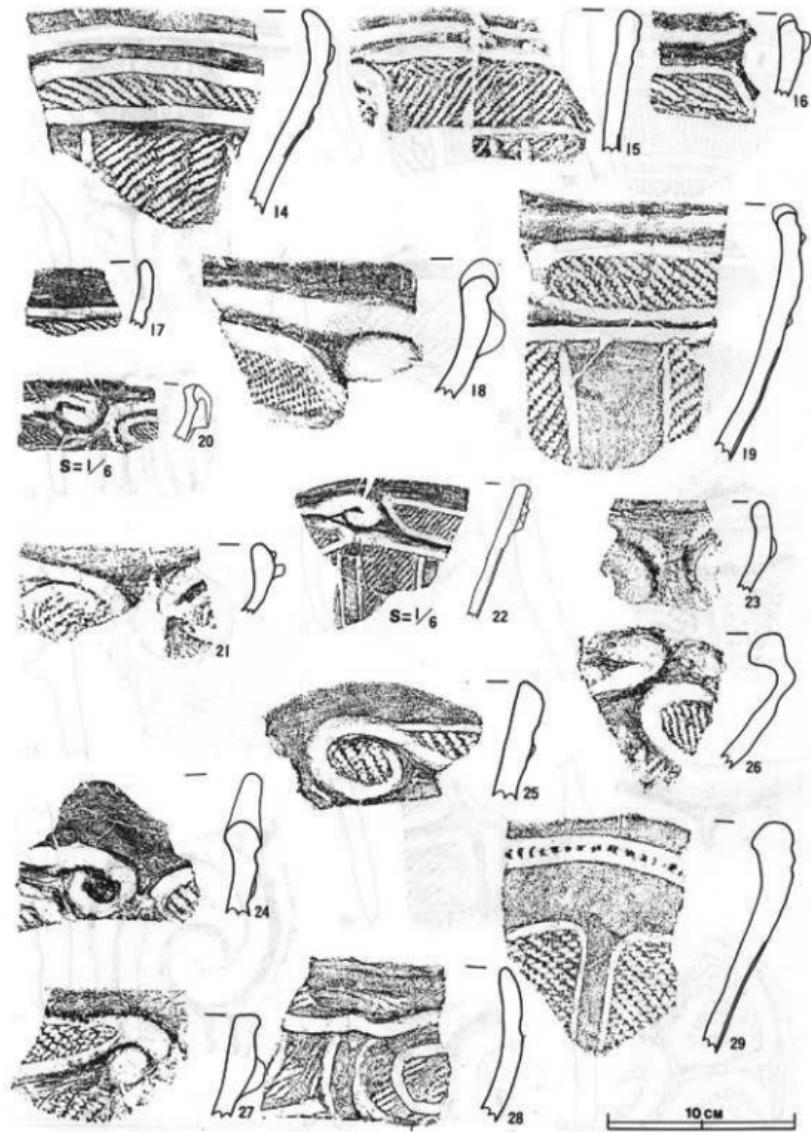
第123図 第33号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第123図）

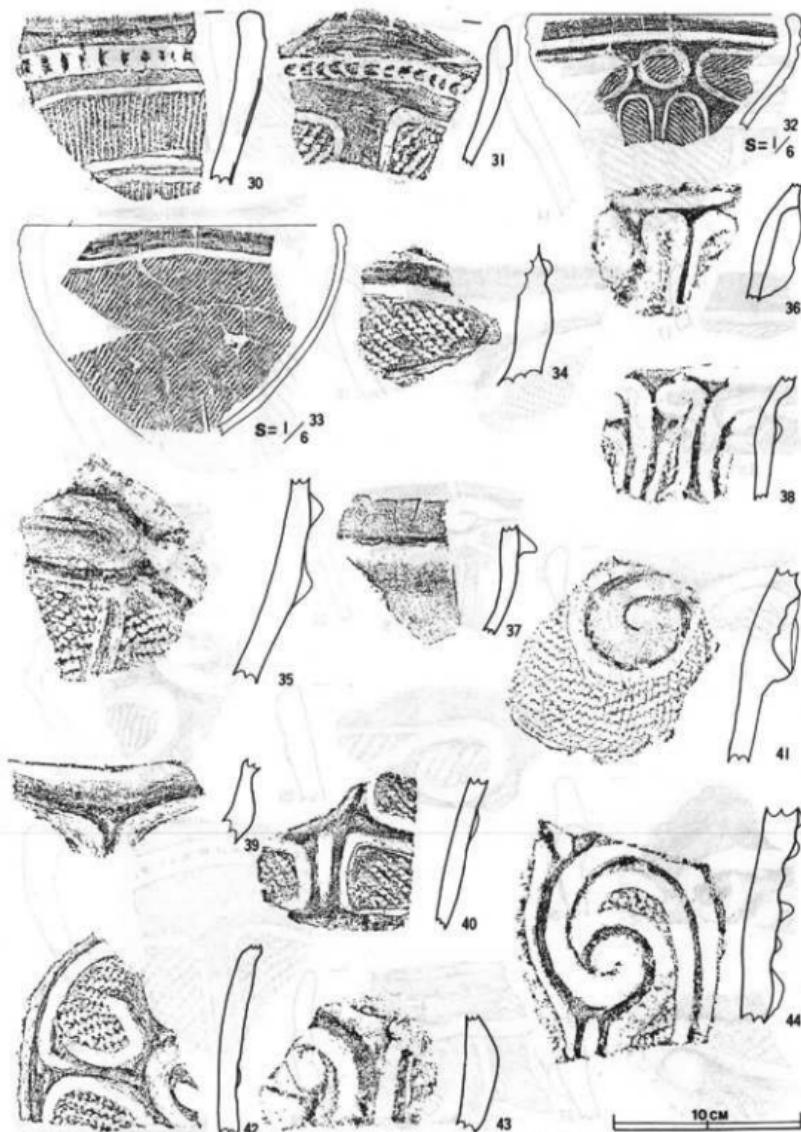
造 構	番 号	器 様	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時 期	備 考
SI - 33	1	深鉢	A(46.9) B(11.8)	平口縁で、全面に幾文を施したのち、既沈時に二回文位の側面削り落とし施されている。側面部は低位の横内文が施され、横内文周辺がすり削かれている。内壁さみに立ち上がる。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫・スコリア 色調 にじい橙色	E III	



第124図 第33号住居跡出土遺物拓影図

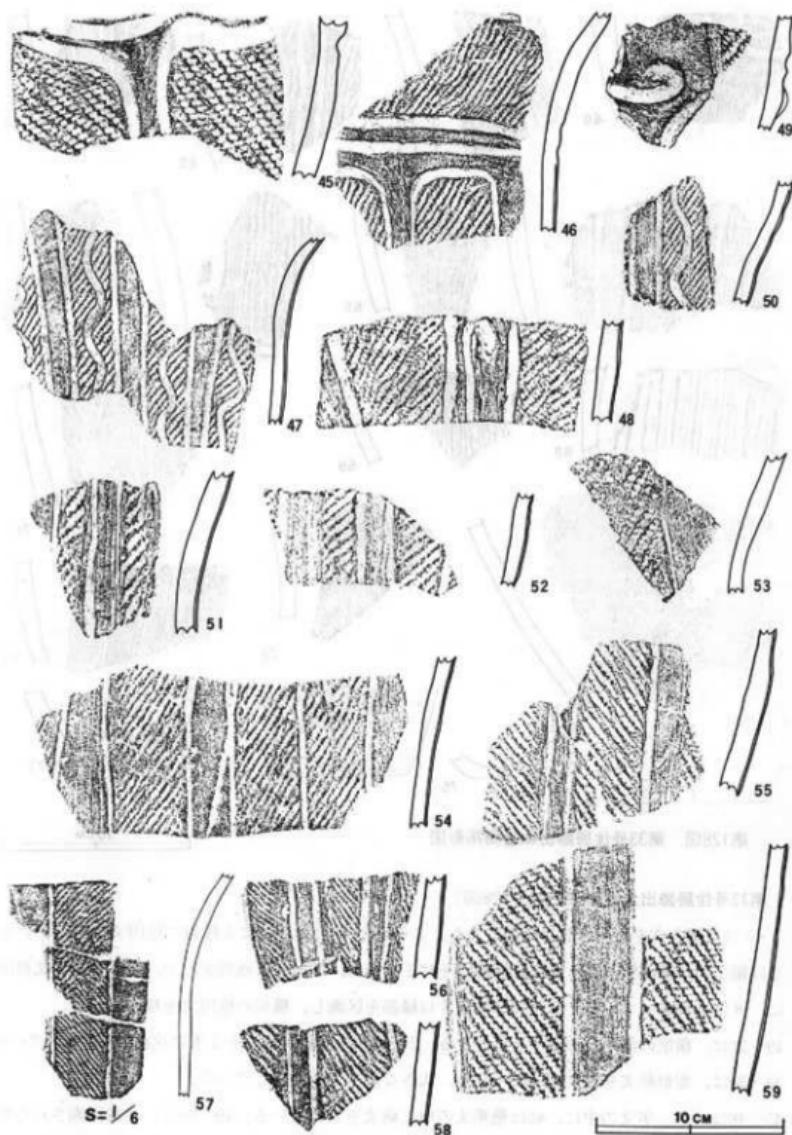


第125圖 第33号住居跡出土遺物拓影圖

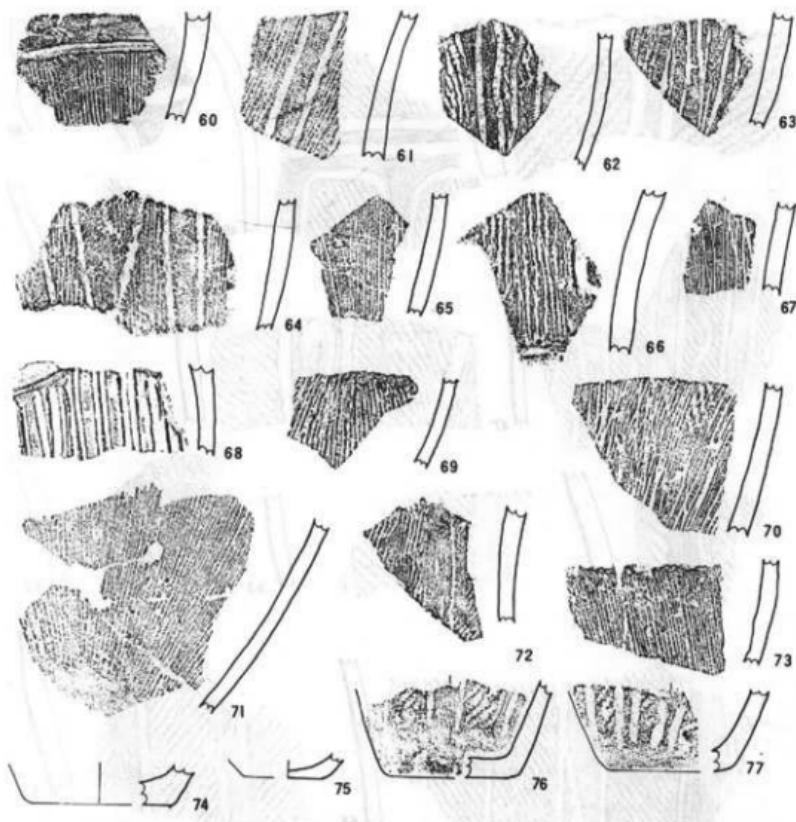


第126図 第33号住居跡出土遺物拓影図

（鹿児島県出土遺物）



第127図 第33号住居跡出土遺物拓影図



第128図 第33号住居跡出土遺物拓影図

10 CM

第33号住居跡出土遺物（第124～128図）

1・3は、渦巻文を持つ波状口縁部である。2・4は、貼り付けによる隆帯で楕円文を有している。5は幅広の口縁部無文帯、6は口唇部にキザミを持ち、7～8は点列文だが、7は2本の沈線間に、8は2列並べている。9～16は沈線で口縁部を区画し、横位の楕円文を描いている。17～27は、横位の渦巻文の破片と思われる。29～31は、連続爪形文を2本の沈線の間に描いている。34・36は、変形螺旋文を付ける。39～42は、大きな渦巻文を施文している。45・48は「S」字文の中に、46は懸垂文の中に蘿文を入れている。49～59は、沈線区画された懸垂文である。61～64は櫛歯状細沈線で施文し、また沈線区画の懸垂文も付ける。



第129図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号 住居跡出土遺物（第130図）

1～3は波状口線で、楕円文、懸垂文、蕨文などが描かれる。

4・7～9は、沈線で口縁部を区画する。6は斜行の懸垂文、10は大きな横位楕円文と思われる。

11～12は縦位の楕円文、13・14は横位の楕円文である。

17～19は渦巻文を有し、20は変形蕨文を描き、その中を無文にしている。

22・23は沈線区画の縦位楕円文であるが、楕円文の中を無文にしている。

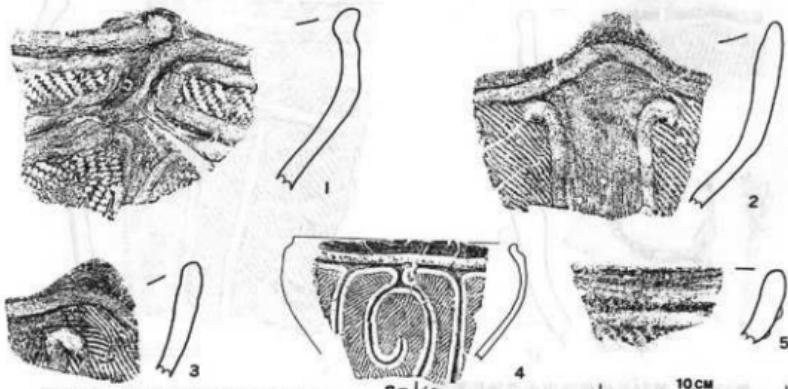
26～30は口縁部を横沈線で区画し、口縁部無文帯を付けている。

32～36は連続爪形文をつけるが、34～36は2本の沈線の間に爪形文を付けている。

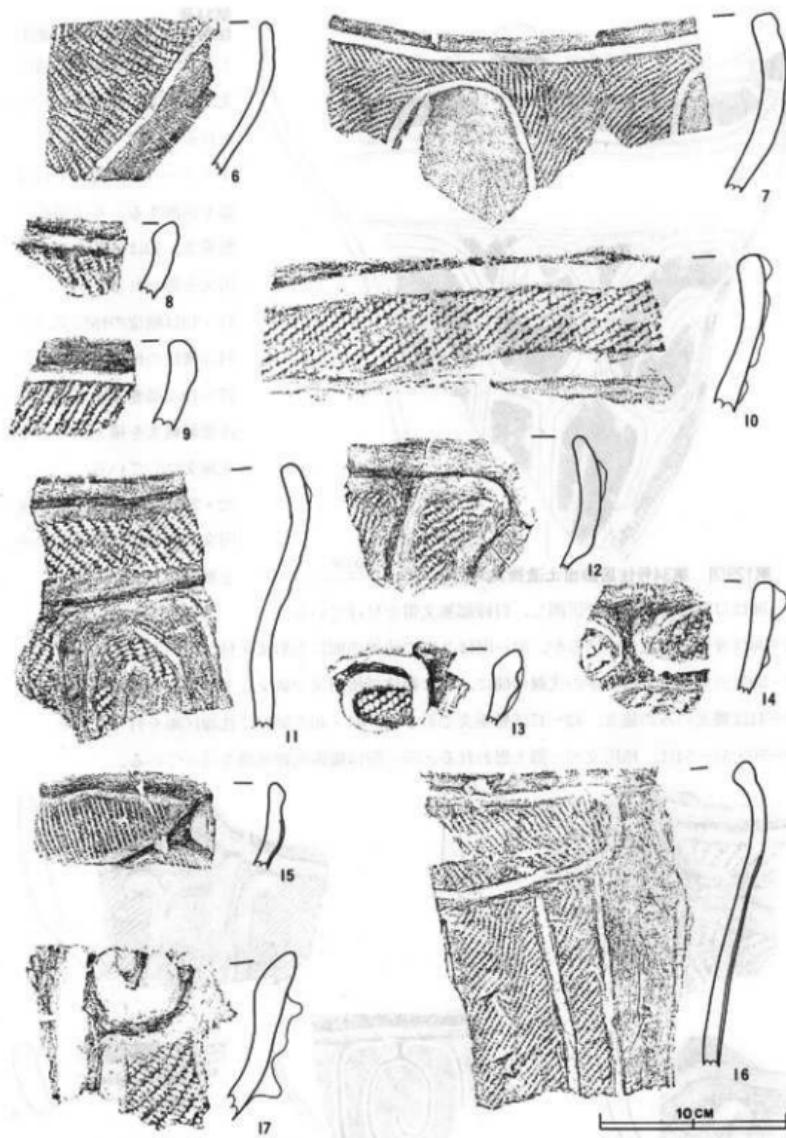
37・38は点列文、37は2本の沈線の間に、38は縦位の楕円文や蕨文なども合わせて描いている。

39～41は繩文のみの施文、42～47は懸垂文であるが、44・46を除いて沈線区画を行っている。

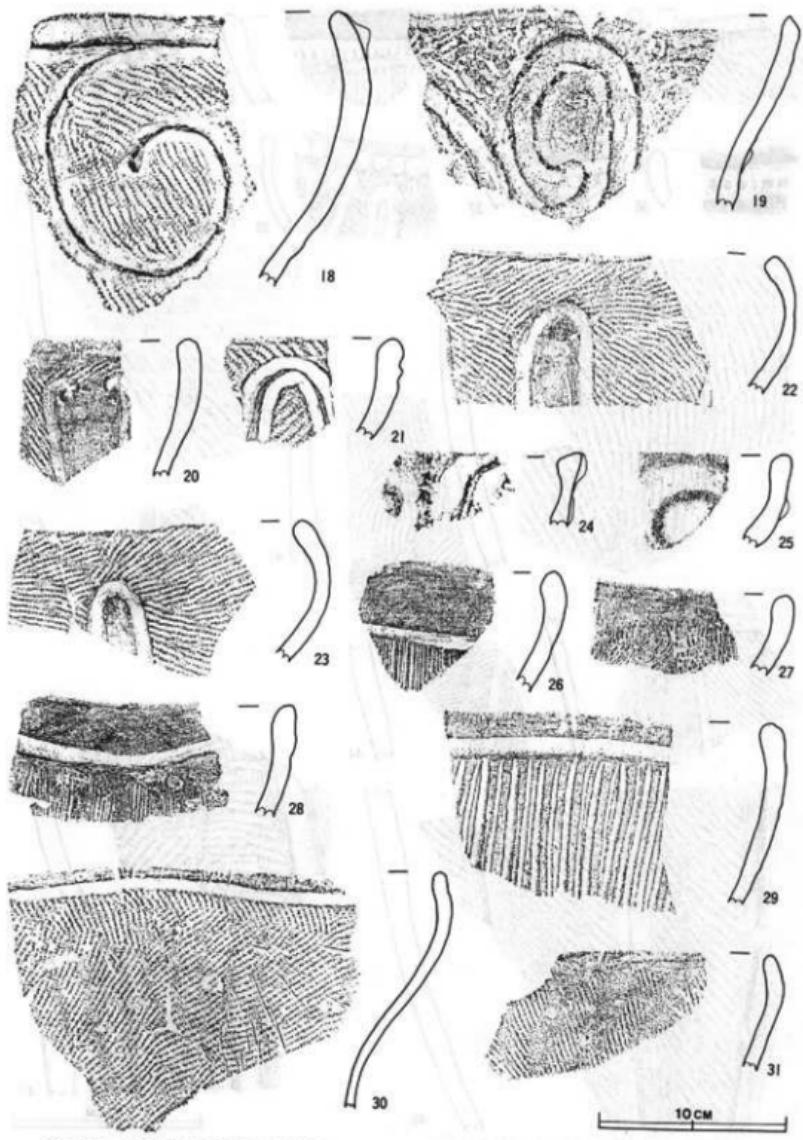
48～50・52～54は、楕円文の一部と思われる。55～59は歯齒状細沈線を持っている。



第130図 第34号住居跡出土遺物拓影図

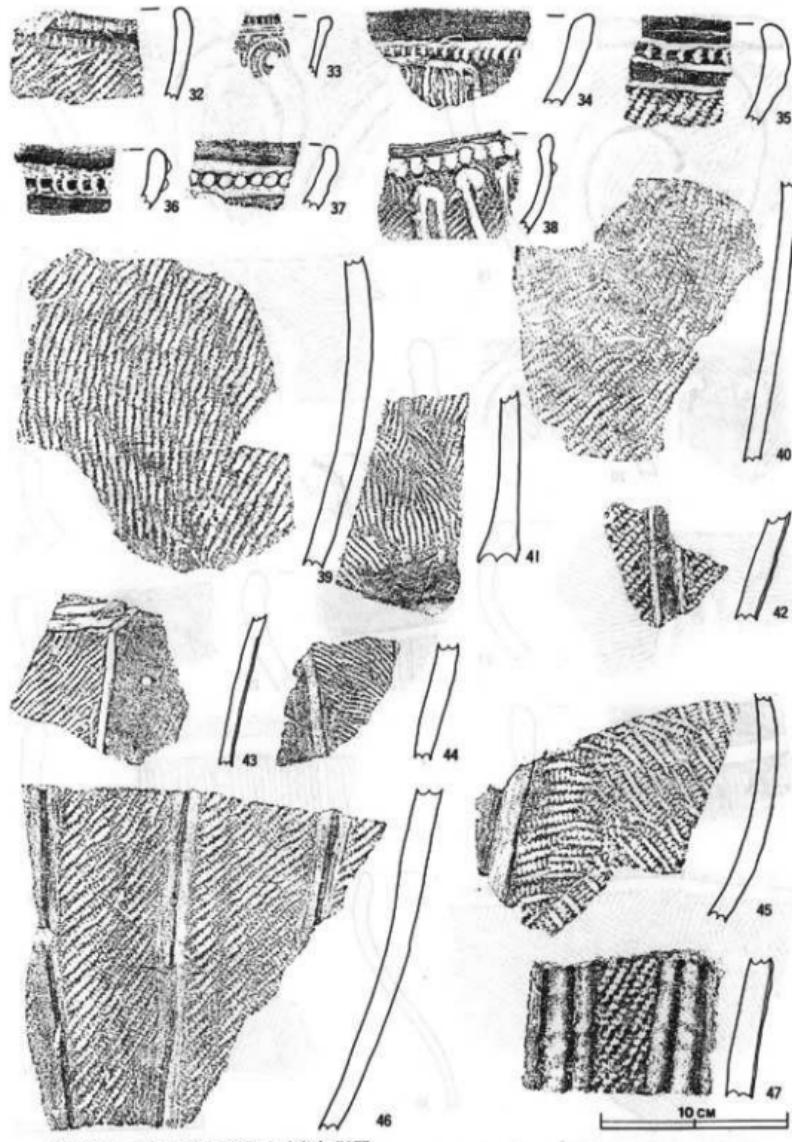


第131図 第34号住居跡出土遺物拓影図



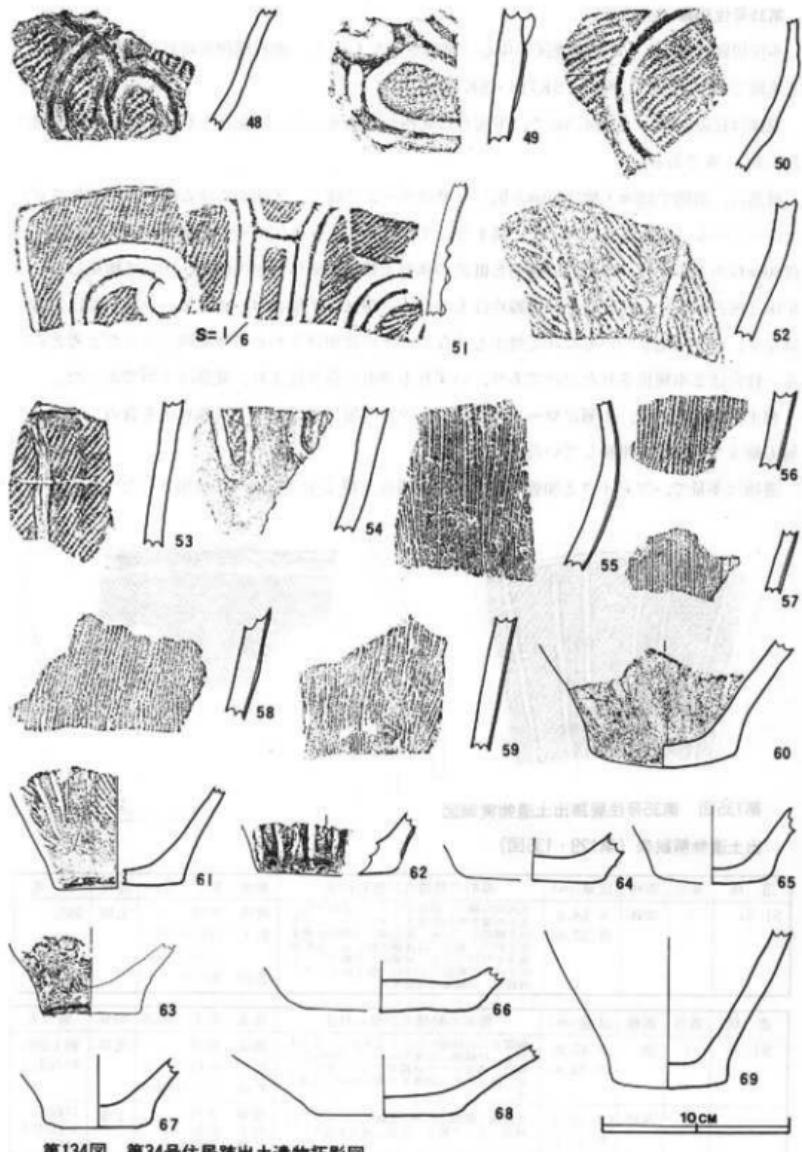
第132图 第34号住居跡出土遺物拓影図

（写真：伊藤重典、監修：高橋良一、編集：高橋良一）



第133図 第34号住居跡出土遺物拓影図

（佐賀県鹿島市出土）



第134図 第34号住居跡出土遺物拓影図

第35号住居跡（第136図）

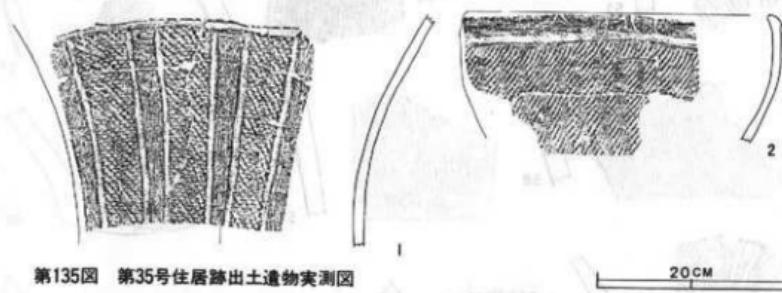
本住居跡はH 8.1m・10mの調査区を中心に確認されたもので、南西部住居跡群の西部に位置し、北東側でSI39と接し、西側にSK718・SK719がある。

規模は長辺5.7m・短辺4.3mで、平面形は北西から南東へ長い隅丸長方形を呈し、長辺方向はN-30°-Wである。

壁高は、南側で12cm・他は11cmと低い。壁はロームで硬く、床面からゆるやかに外傾して立ち上がりっている。床面はロームでよく締まり、平坦である。炉は床面の中央部にみられ、深さ19cm・径60cm程の土器片囲い炉で、加曾利E III式の鉢形土器片三個体分を円筒形に囲って構築している。炉床は凹凸が激しい。しかし、土器片はもちろん、炉床、炉壁のロームが強い火熱を受けた様子はなく、やや硬化しているだけで焼土も少なく、その使用はきわめて短期間であったと考えられる。柱穴は2本検出されただけであり、いずれも垂直に掘り込まれ、底部は平坦であった。

覆土は暗褐色土で、上層にロームの小ブロック、下層に焼土粒子・炭化粒子を含み、いずれの層も締まりを帯びて堆積していた。

遺物は多量で、フレイクと加曾利E III式の土器片が覆土中と炉内から検出された。



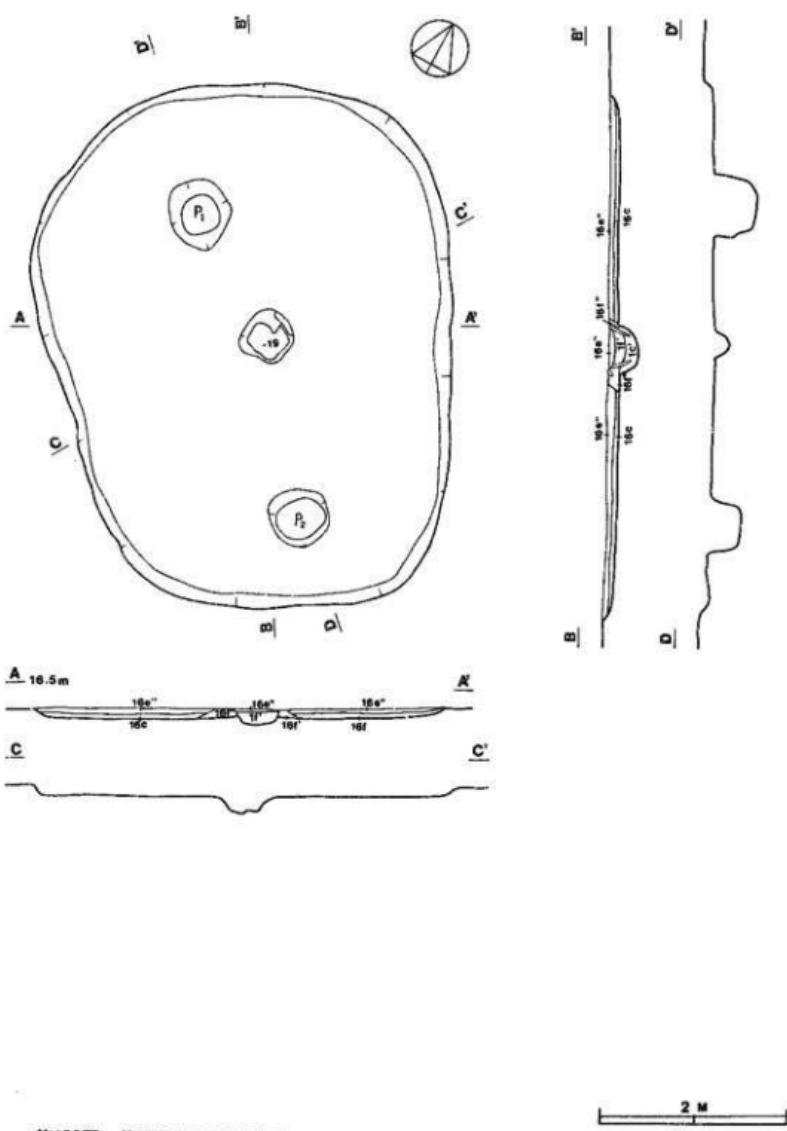
第135図 第35号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第129・135図）

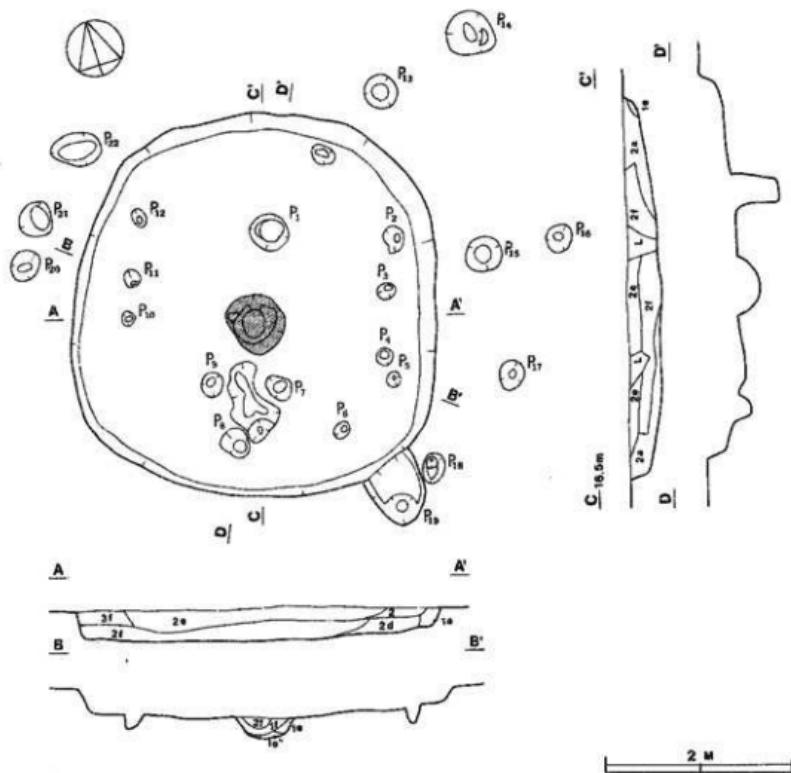
20 CM

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-34	1	深鉢	A 58.3 B (57.6)	大底折口縁で、陳述文によって区画された大小の金彩格円形文を1単位として、5単位を構成している。内面は内側に支点を有する内輪下には沈縁区画による金彩格円形文を2つ有している。底部から内側に立ち上がり、脚部でくびれ、脚上部で大きく外傾し、口縁部で内側にする。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫・ スコリア 色調 褐灰色	E III	55%

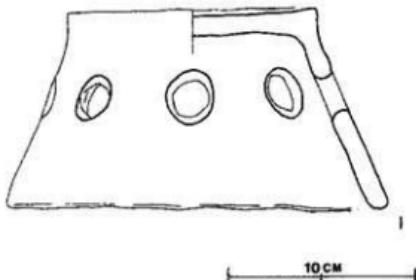
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-35	1	甕	A (45.2) B (24.8)	脚部から口縁部にかけて外反曲をもたらす。脚部には複数の縦文とすり消縞文を交互に施している。縦文とすり消縞文の境は沈縁で区画する。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫・ 色調 にぶい橙色	E III	脚上50% 炉内出土
	2	深鉢	A 32.3 B 13.7	平口縁で脚部との境に沈縁をめぐらす。内外面ともへう焼き。全面に縦文を施す。	焼成 普通 胎土 砂粒 色調 明黄褐色	E III	口縁部 炉内出土 15%



第136図 第35号住居跡実測図



第137図 第36号住居跡実測図



第138圖 第36号住居跡出土遺物實測圖

第36号住居跡出土遺物（第140図）

1は口縁部無文帯と大きな横円文、2は波状口縁で口縁部無文帯と構位の横円文である。

3は貼り付け隆沈線による無文帯、4は継位

5・6は、口縁部無文帯を有す。7は、横位

10・14は沈線区画による懸垂文。15は縱位の横凹文2つを少しずらして付けている。

第36号住居跡（第137図）

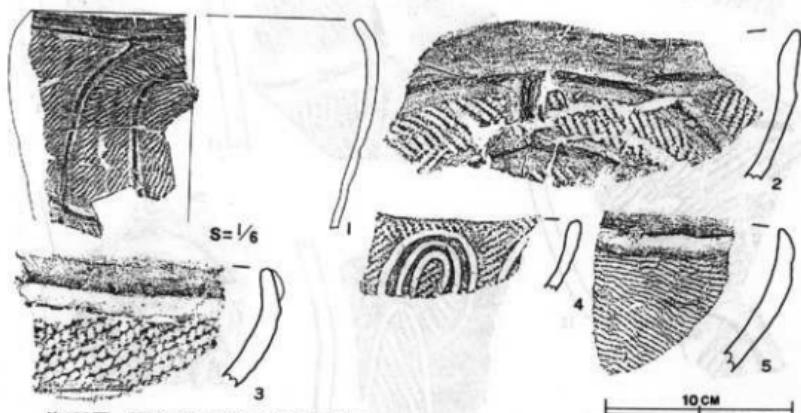
本住居跡はG 8 da・caの調査区を中心に確認されたもので、北西部住居跡群の南南西に位置し、その南南西側でSI23と接続している。

規模は長径4.1m・短径3.9mで、平面形は橢円形を呈し、長径方向はN-18°-Eである。

壁高は東側20cm・南側19cm・西側27cm・北側13cmで、北側が低い。壁はロームで締まり、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面はハードロームで、小さな凹凸があり、その凹んだ所にソフトロームが固く踏みしめられている。床面の傾斜は、壁から炉に向かって低くなっている。炉は床面の中央部に位置し、規模は長径66cm・短径57cmである。炉の形態は橢円形で、床面を12cmほど掘り込んだ後、さらに皿状に掘り窪めた地床炉である。炉内には焼土が厚く堆積し、炉床は火熱を受けたロームがレンガ状に赤化・硬化している。ピットは床面に12個検出し、さらに外側の東・西側に10個検出したが、主柱穴と考えられるのは床面のP₁・P₂・P₃である。

覆土は暗褐色土で、上層にローム粒子と焼土粒子・炭化粒子を含み、下層は焼土粒子・炭化物を少量含んで硬く締まっていた。

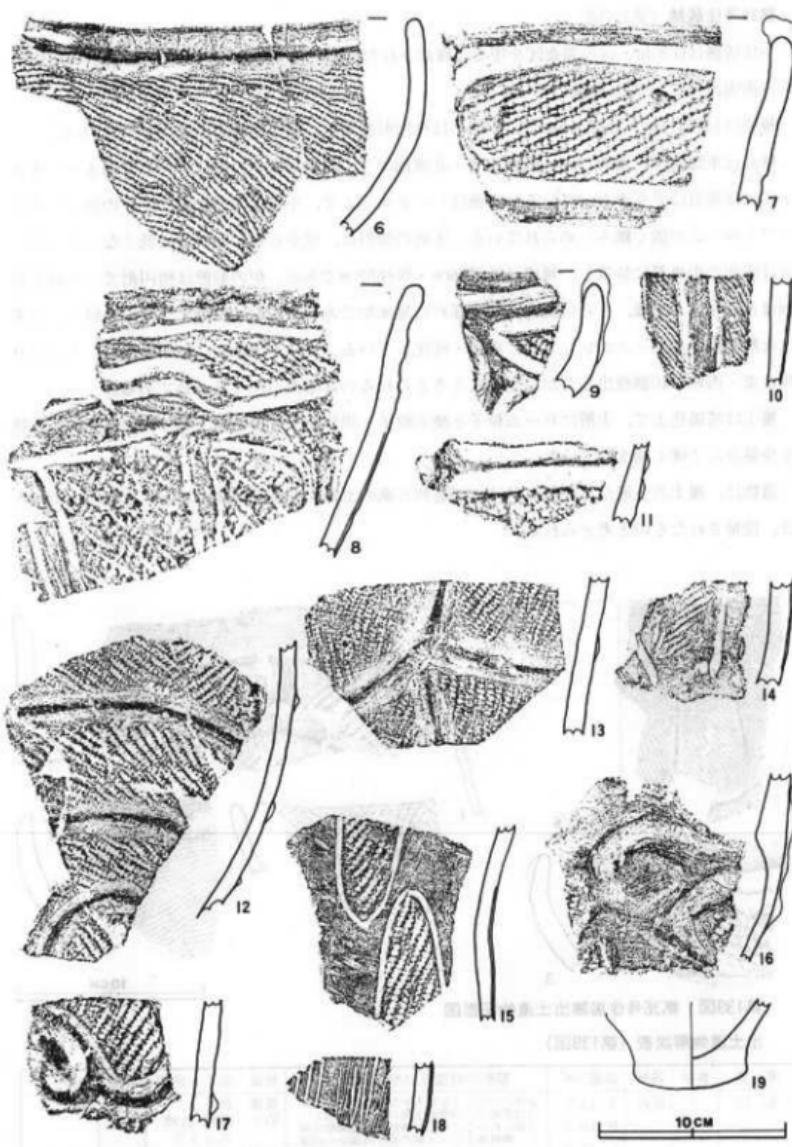
遺物は、覆土の上層から中層にかけて加層利E期の土器片を多量に検出した。これらの土器片は、投棄されたものと考えられる。



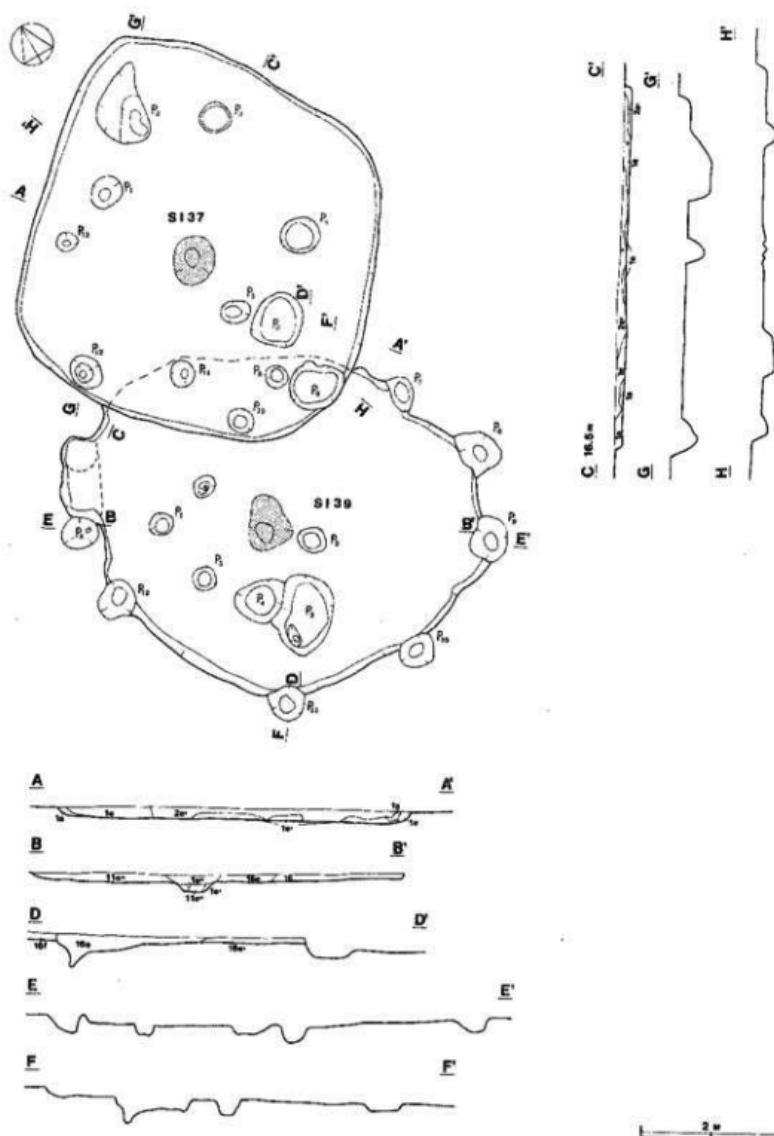
第139図 第36号住居跡出土遺物拓影図

出土遺物解説表（第139図）

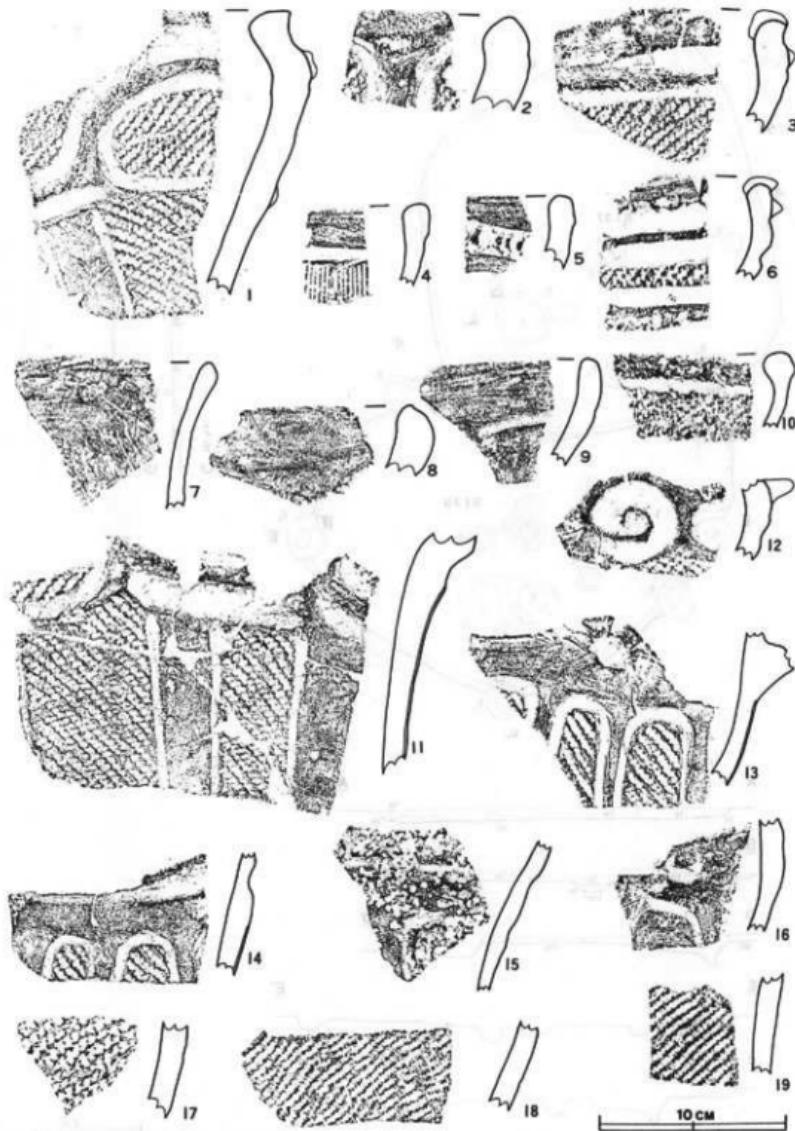
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-36	1	器台	A 13.5 B 10.3 C 19.4	全体にヘラによる磨きがなされ、器底部はほぼ垂直で、器底部上面の中心は、凹レンガ状にわづかに盛り、脚柱部は直線的に開く。脚柱部上面には脚の孔を外側から内面にうがったもの、ヘラ調整がなされている。	焼成 良 胎土 砂粒・砂礫・スコリア 色調 浅黄褐色	E III	80%



第140圖 第36號住居跡出土遺物拓影圖



第141図 第37-39号住居跡実測図



第142図 第37号住居跡出土遺物拓影図

（図版実物は、図版142-15版、図142-16版）

第37号住居跡（第141図）

本住居跡はH 8 ge・H 9 g₁の調査区を中心に確認されたもので南西部住居跡群の北西部に位置し南側でSI39と重複している。SI39との新旧関係は、本跡の方が新しい。

規模は長辺5.2m・短辺4.9mで、平面形は隅丸長方形を呈し、長辺方向はN-45°-Wである。

壁高は10-13cmほどであり、壁はソフトロームで締まりが弱くやや不明確である。また、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床はロームがかなりよく踏み締められており、平坦である。SI39と南西部で重複し、床面のレベルは同じであるが、本跡の床面の方が結まっている。炉は床面のほぼ中央部に位置し、その形態は長径70cm・短径60cm・深さ10cmほどの橢円形を呈する地床炉である。炉床と床面がほぼ同じレベルであり、掘り立めた様子はない。炉床のロームがレンガ状に赤化・硬化し、長期間の使用がうかがえる。床面にピットを13個検出したが、主柱穴はP₁・P₄・P₈・P₁₁・P₁₂の5本と考えられる。いずれも20cm前後の深さである。P₁・P₈・P₁₂はやや幅広い掘り込みを持っている。

覆土は二層に分けられ、上層は暗褐色土で焼土粒子・炭化粒子等を含む締まったものである。下層も同色土であるがやや軟らかい覆土で、自然堆積であった。覆土中の遺物は少ない。

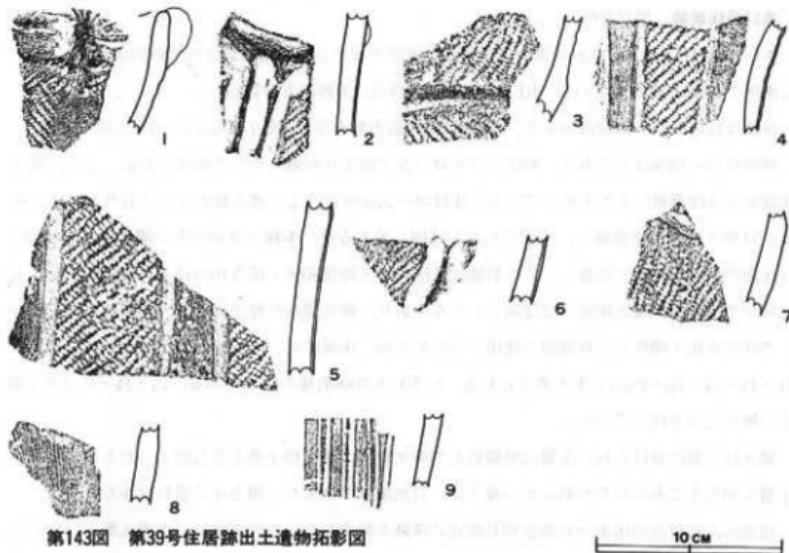
遺物は、P₁付近の床面から加曾利E III式の深鉢を検出した。この深鉢は、埋設土器とは別もので、ただ単に直立して検出された。

第39号住居跡（第141図）

本住居跡はH 8 he・H 9 h₁の調査区を中心に確認されたもので、南西部住居跡群の西部に位置し、北東部でSI37と重複し、さらに南西部でSI35と重複している。

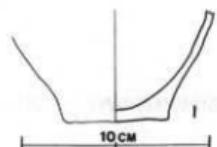
規模は長径6.4m・短径推定4.8mで、平面形は不整円形を呈し、長辺方向はN-51°-Wである。壁高は7-10cmと低い。壁は木の根による攪乱や、締まりのないロームではっきりしないところもあるが、明確なところは床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面はロームでよく締まっており、南側がやや高まりを持っているものの、全体としては平坦である。炉は、床面の中央部からやや西に検出された。規模は長径80cm・短径60cm・深さ9cmで、炉の形態は不定形の地床炉である。炉床は比較的浅い掘り込みであり、焼土の堆積が他の住居跡に比較して少ない。また、炉床のロームも赤化・硬化しておらず、長期間にわたって火熱を受けたようすは見られなかった。ピットは炉の周間に6個と壁ぎわに8個、およびSI37の床面に重複して2個を検出した。覆土は褐色土で、焼土粒子・炭化粒子を微量に含む軟かい覆土であり、遺物も極めて少なかつた。

遺物は、炉の西側柱穴内と覆土上層から、無文・薄手の土器底部片を検出した。



第143図 第39号住居跡出土遺物拓影図

10 CM



第144図 第39号住居跡出土
土遺物実測図

1は、貼り付けによる隆縁を持つ波状口縁部である。

2は、縦位の横円文の間に蕨状文らしき沈線を付けている。

4～6は、沈線区画による懸垂文を有す。8は、櫛歯状細沈線を付けている。

9は、竹管などによるはっきりした沈線を何本も垂下させている。

第37号 住居跡出土遺物（第142図）

1～3・6は、横位の横円文を持つものと思われる。4は、横円文の中に横齒状の沈線を付けている。11は横位の横円文と沈線区画爪形文を付ける。7～9は、口縁部無文帯を有している。

11は、横位の横円文と沈線区画による懸垂文を持つ。12は、横位の渦巻文を付けている。13・14は、縦位の横円文を並列している。17～19は、繩文のみの施文である。

第39号住居跡出土遺物（第143図）

1は、貼り付けによる隆縁を持つ波状口縁部である。

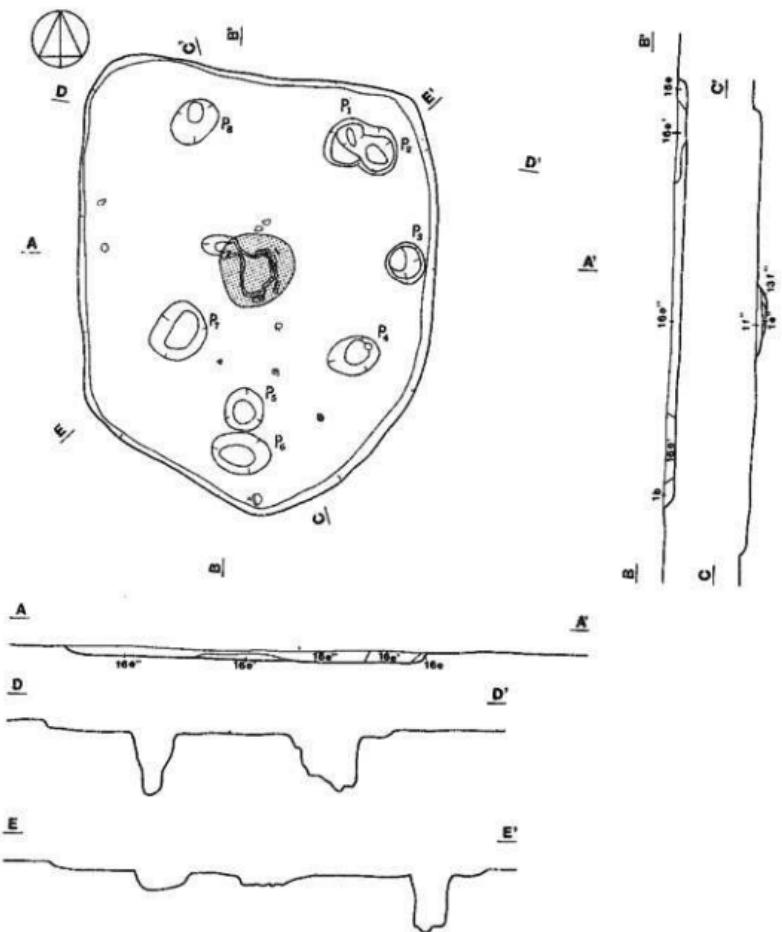
2は、縦位の横円文の間に蕨状文らしき沈線を付けている。

4～6は、沈線区画による懸垂文を有す。8は、櫛歯状細沈線を付けている。

9は、竹管などによるはっきりした沈線を何本も垂下させている。

出土遺物解説表（第144図）

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-39	1	鉢	B 7.0 C 6.0	ヘラによる磨きがなされている。底部は小 型であり、ごく薄手の土器である。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 橙色		底部



第145図 第38号住居跡実測図

2 m

第38号住居跡出土遺物（第146・147図）

1～3は沈線で口縁部を区画し、無文帯を有している。

4・5・7・15は、貼り付けによる隆起帯を持っている。

12・13は2列の点列文。11は連続爪形文。9・10・18は、横位の楕円文を付けている。

20～35・38・43は、沈線区画による懸垂文。39～42は、櫛状細沈線文を有している。

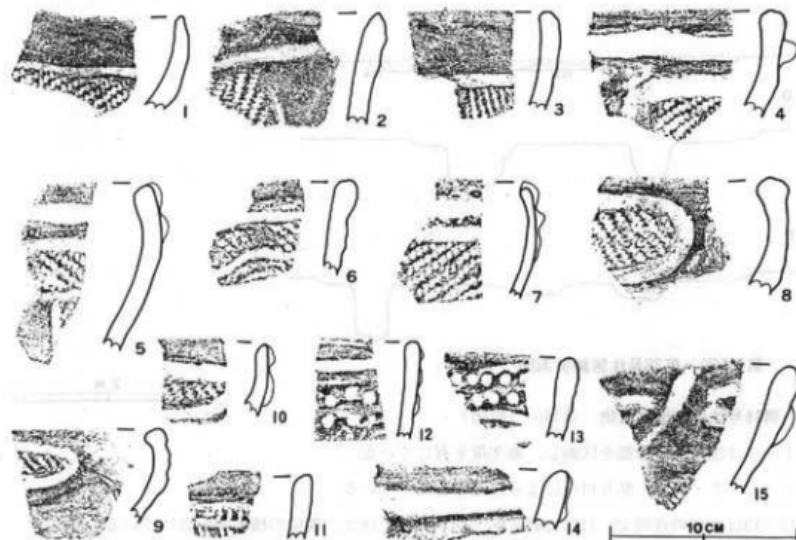
第38号住居跡（第145図）

本住居跡はI8 a₀・I9 a₁・H8 j₀・H8 j₁の調査区に確認されたもので、南西部住居跡群の南西部に位置し、北東側でSI28、南東側でSI31・SI32、南西側でSI35・SI39と近接している。

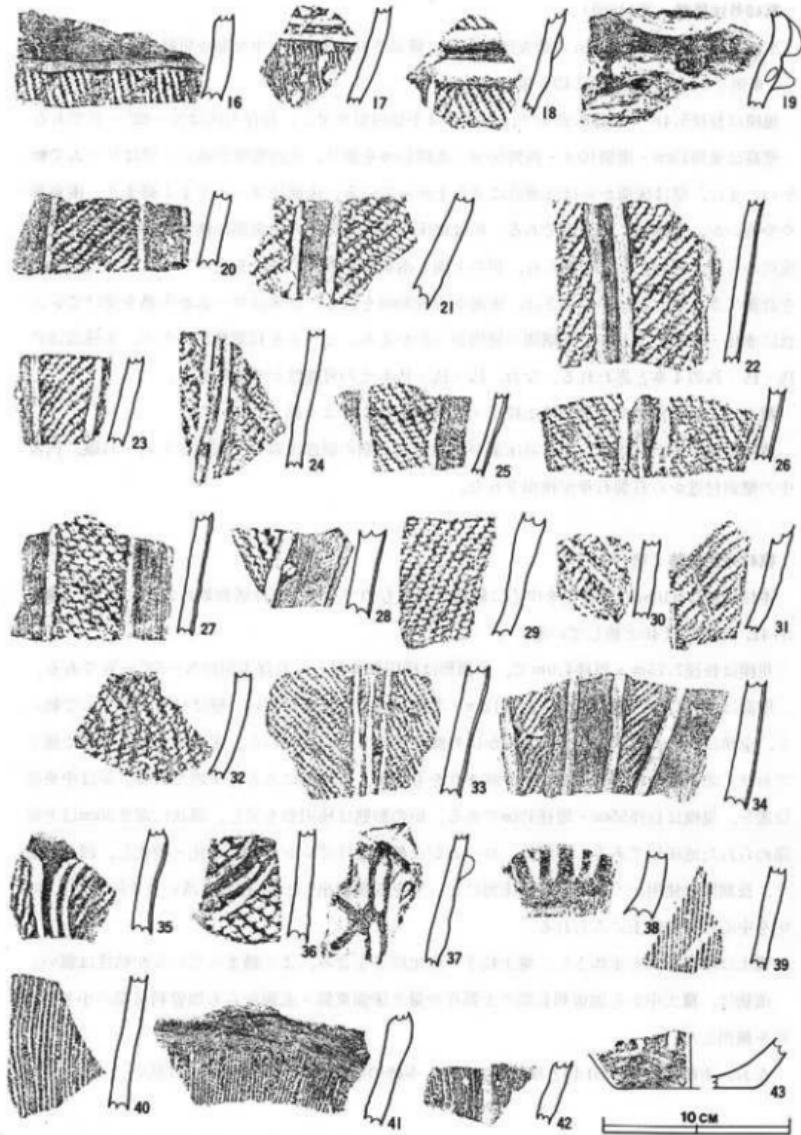
規模は長径4.7m・短径3.9で、平面形は不定形を呈し、長径方向はN—0°である。

壁高は、東側11cm・南側9cm・西側8cm・北側9cmと低い。壁はロームを主体としているが繊まりがなく、やや不明確である。壁面は床面からゆるやかに外傾した後、上部で垂直に立ち上がっている。床面はロームで硬く、平坦である。炉は床面の中央部に位置し、長径80cm・短径75cmで、平面形はほぼ円形を呈する。この炉は、皿状に15cmほどロームを掘り窪めた内側に、花崗岩と土器片で、径45cmほどの円形に囲んだ土器片・石閉いがである。炉床は、土器片と石で囲った内側のロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化し、激しい凹凸をしている。さらに、花崗岩も強い火熱を長期間受けたと思われ、ボロボロと崩れ、炉とともにかなり長期間の使用がうかがえる。また、炉の西側からは、土器片・石の検出ではなく、囲われていたと推定される外側までロームが赤化・硬化しており、本跡の終末頃には、西側の閉いが失われた状態で使用されたものと思われる。床面にピットを8個検出したが、主柱穴のP₂・P₄・P₈は60~80cmと深く、さらに、深度16cmの浅いピットP₅が主柱穴と思われる。

遺物は、覆土中から少量の土器片を検出した。また、西壁ぎわに磨製石斧1個を検出した。



第146図 第38号住居跡出土遺物拓影図



第147図 第38号住居跡出土遺物拓影図

第40号住居跡（第148図）

本住居跡はH9b_a・H10b_iの調査区を中心に確認されたもので、中央部住居跡群の北西部に位置し、東側でSI41・南側でSI43と接している。

規模は長径5.4m・短径5.25mで、平面形は不整円形を呈し、長径方向はN-82°-Eである。

壁高は東側13cm・南側10cm・西側16cm・北側15cmを測り、北西部壁が高い。壁はロームで軟らかい。また、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面はロームでよく縮まり、南東部がやや低いが、全体的には平坦である。炉は地床炉であり床面の中央部に検出されたが、たまたま現代のものと思われる穴が掘られ、炉の上面と南側が崩されて搅乱を受けていたため、その規模を計測できなかった。炉の深さは、床面から約30cmを測る。炉床はロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。ピットを12個検出したが、主柱穴はP₁・P₃・P₄・P₉の4本と思われる。なお、P₄・P₆・P₁₀もその可能性が考えられる。

覆土は、暗褐色土で少量の焼土粒子・炭化物を含んでよく縮まっていた。

遺物は覆土中から少量、炉付近床面から加曾利E期の胴部土器片、床面から石・石鎚、P₁覆土中の壁面付近から打製石斧が検出された。

第41号住居跡（第148図）

本住居跡はH10b_aの調査区を中心に確認されたもので、中央部住居跡群の北部に位置し、東側でSI42、西側でSI40と接している。

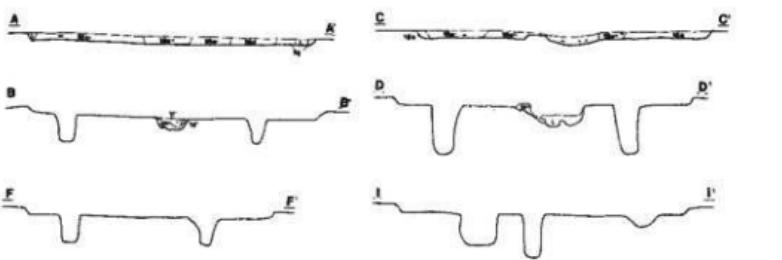
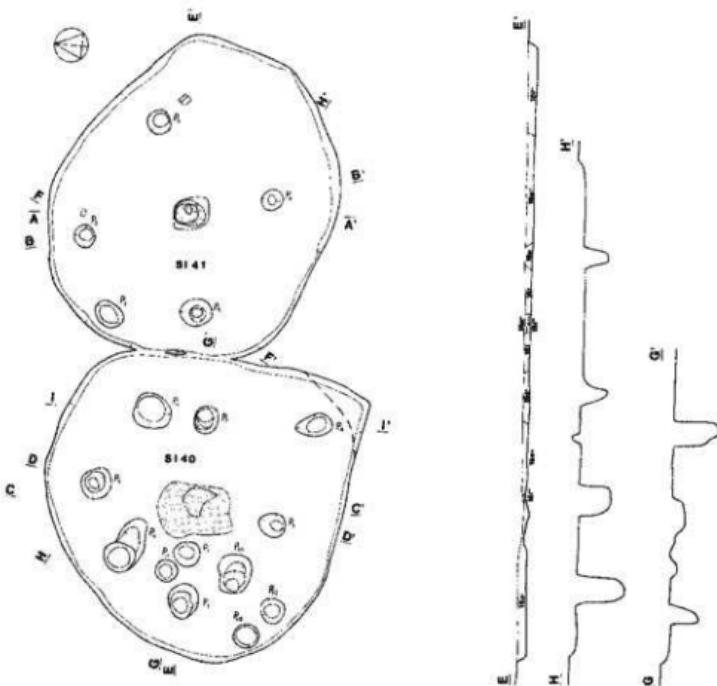
規模は長径7.75m・短径4.9mで、平面形は梢円形を呈し、長径方向はN-58°-Wである。

壁高は東側17cm・南側11cm・西側12cm・北側12cmで、東側が高い。壁はソフトロームで軟らかく、全域にわたって床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面はロームで固く縮まっており、北西部のP₁・P₂の間がやや高まりをもつが、全体的にみると平坦である。炉は中央部に位置し、規模は長径55cm・短径47cmである。炉の形態は梢円形を呈し、皿状に深さ30cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化し、凹凸が激しく、長期間の使用がうかがえる。床面にピットを5個検出したが、柱穴は浅いP₁を除いた4本で、炉を中心に対角線上にみられる。

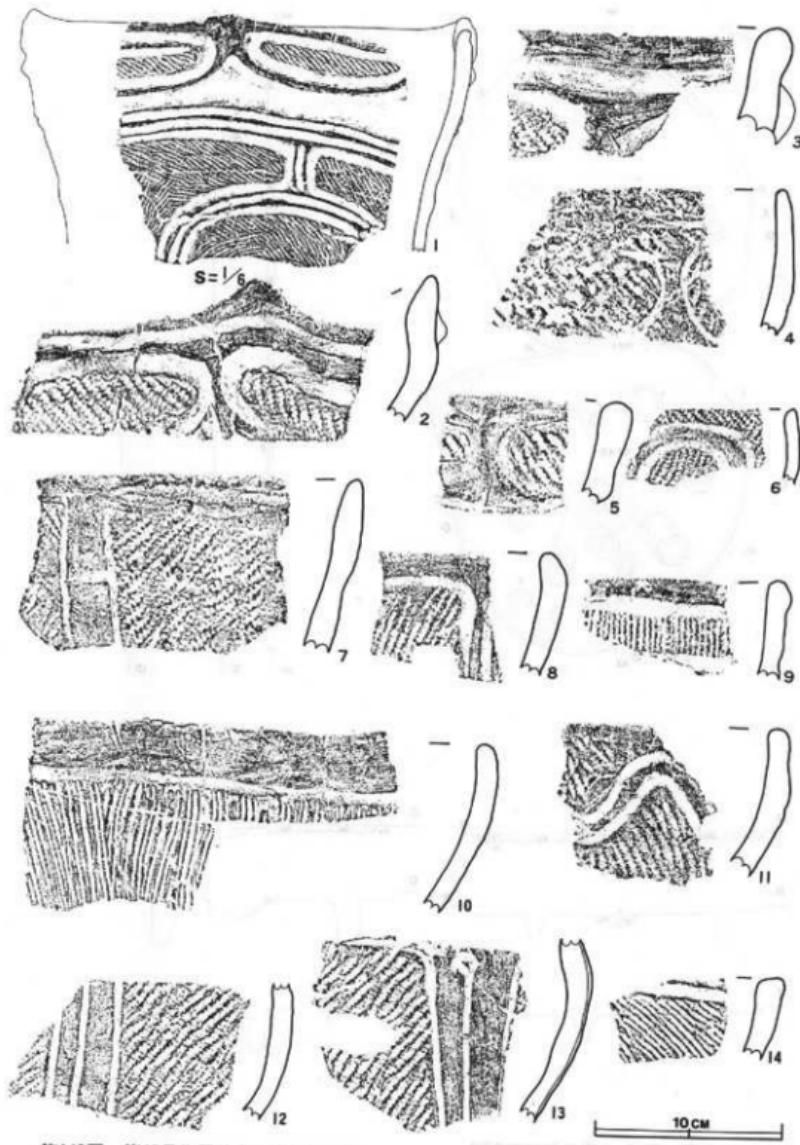
覆土は暗褐色土を主体とし、焼土粒子・炭化粒子を含み、よく縮まっているが粘性は弱い。

遺物は、覆土中から加曾利E期の土器片少量と床面東側・北側からも加曾利E期の小さい土器片を検出した。

なお、本跡は西側でSI40と接しているが、本跡の床面のレベルはそれより低い。

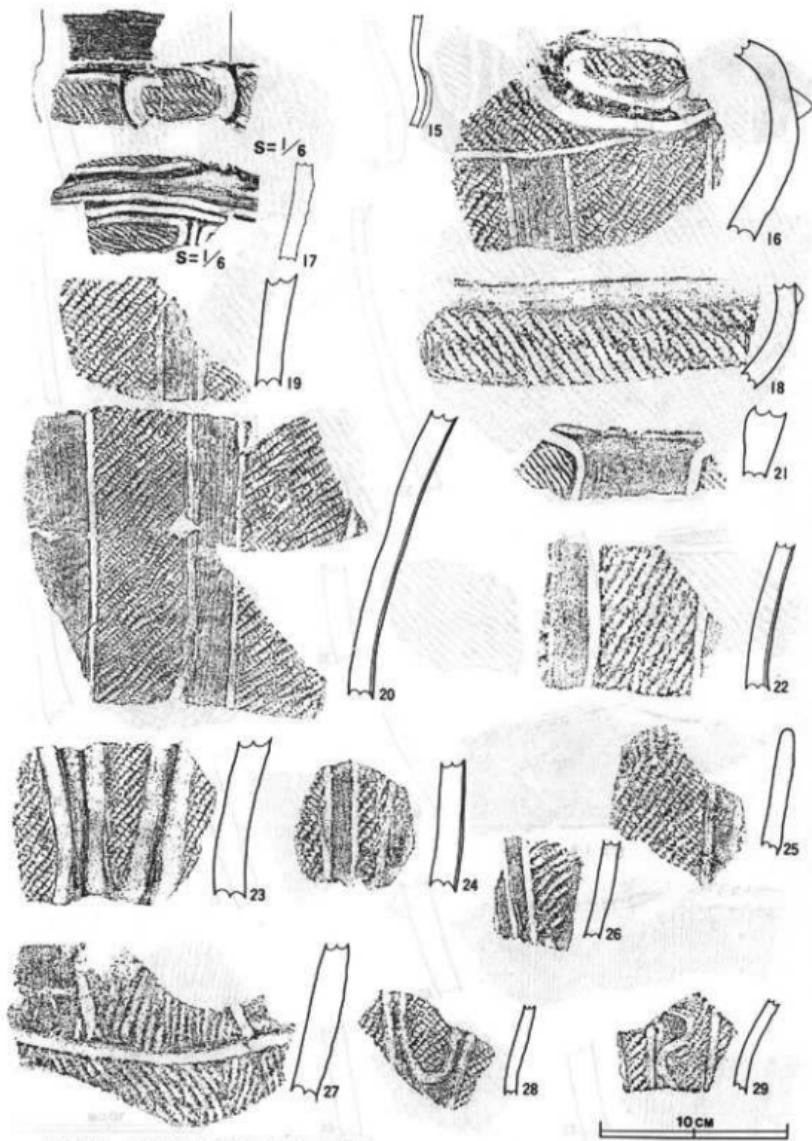


第148図 第40・41号住居跡実測図



第149図 第40号住居跡出土遺物拓影図

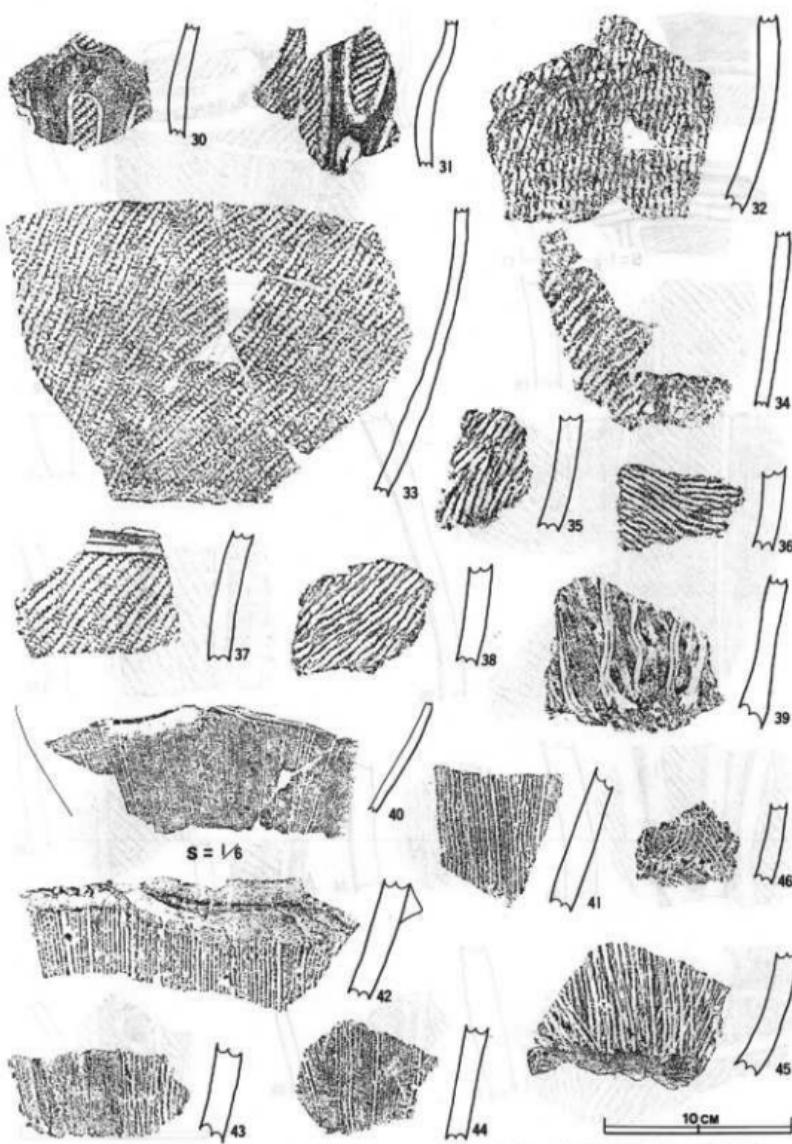
日本考古学会学術委員会 計量測定



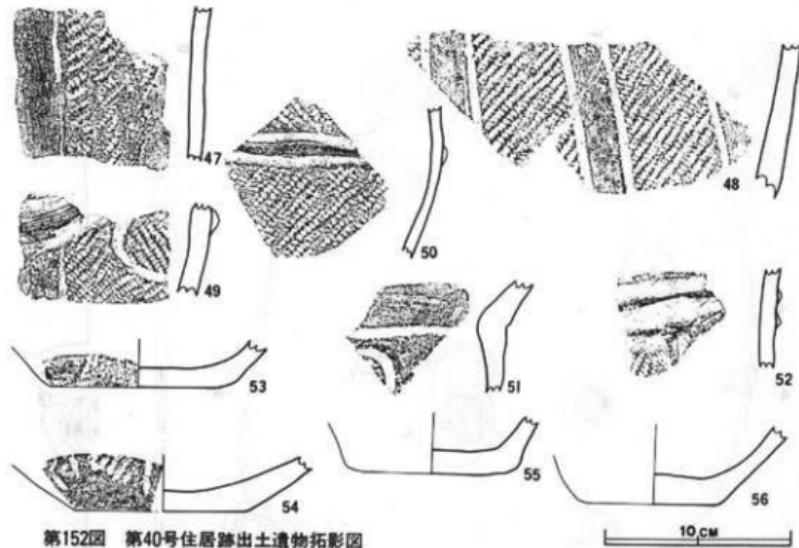
第150図 第40号住居跡出土遺物拓影図

図版40号住居跡出土遺物拓影図

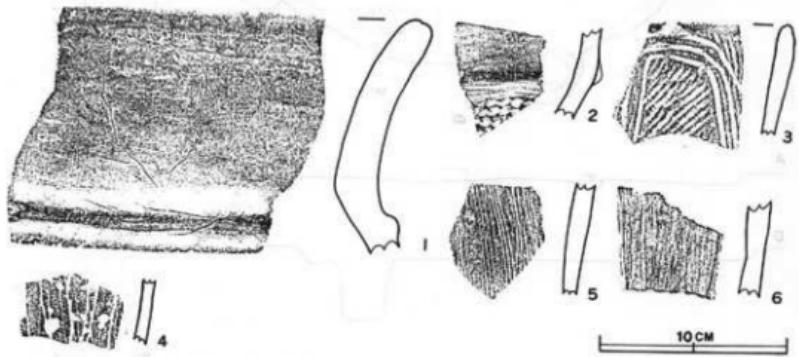
10 CM



第151図 第40号住居跡出土遺物拓影図



第152図 第40号住居跡出土遺物拓影図



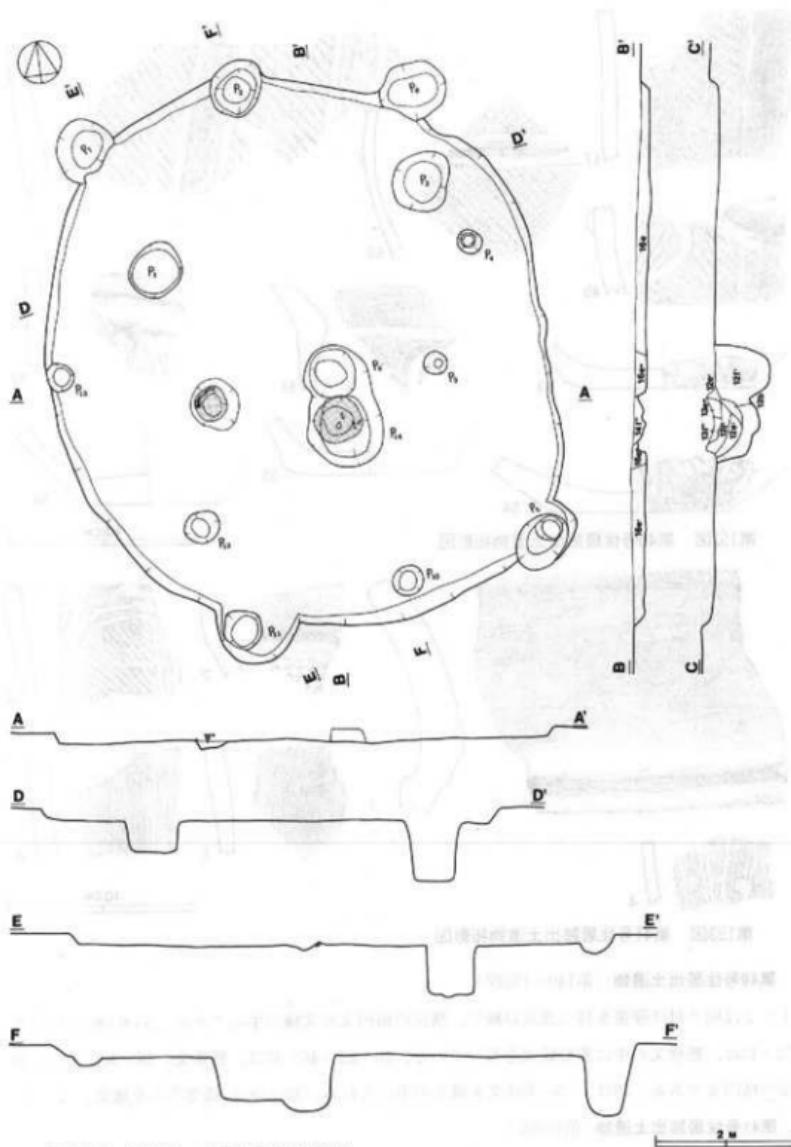
第153図 第41号住居跡出土遺物拓影図

第40号住居出土遺物（第149～152図）

1・2は貼り付け隆帯を持つ波状口縁で、横位の楕円文が文様の中心である。5・6・8は、楕円文。12・13は、懸垂文の中に変形藤文を有している。20～25・46・47は、懸垂文。28・30・31は、縦位の楕円文である。29は、「S」字状文を縄文の中に入れる。32～38は、縄文のみを施文している。

第41号住居出土遺物（第153図）

1・2は、幅広の口縁部無文帶。3は、縦位の楕円文。5・6は、櫛歯状細沈線文である。



第154図 第42A・B号住居跡実測図

第42A号住居跡（第154図）

本住居跡とSI42Bは、H10bs・bt、H10cs・c₄の調査区を中心に確認されたもので、中央部住居跡群の北部に位置し、西側でSI41と接している。本跡はSI42Bの上の同じ位置に重複して構築されており、炉だけが確認された。規模・平面形の推定をすることは不可能であった。炉はSI42Bの床面の中央部より南々東に検出され、径66cm・深さ13cmを測る円形のもので、SI42Bの柱穴上に造られた地床炉である。柱穴は、P_b・P_a・P_bと思われる。

第42B号住居跡（第154図）

本住居跡はSI42Aと重複し、計測出来たものを示すと、規模は長径8.3m・短径7.4mで、平面形は不整円形を呈し、長径方向はN-33°-Wである。壁高は東側13cm・南側14cm・西側15cm・北側11cmで、南西部が高い。床面はロームでよく締まった明確なもので、東側がやや高くなっている起伏がみられる。炉は床面の南西部に位置し、長径64cm・短径46cmで、平面形は橢円形を呈する。また、深さ11cmほど皿状に掘り窪め、周囲を土器片で固めた土器片囲い炉である。炉床に凹凸が見られ、ロームが火熱を受けて赤化・硬化しているが、この炉はごく短期間の使用と考えられる。床面にピットを14個検出したが、本跡の柱穴はP₁・P₃・P₅・P₆と推定される。

覆土は暗褐色土が主体で、焼土粒子を含み、締まりを帯びていた。

第42号住居跡出土遺物（第155・156図）

1・2は同一個体と思われ、2本の沈線間に2列の点列文を有し、その下に櫛歯状細沈線を有している。

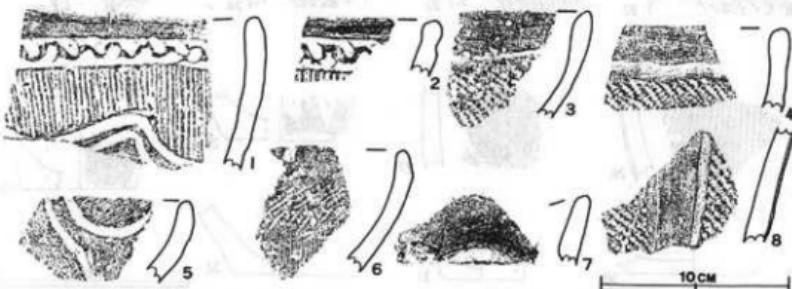
3・4は、口縁部無文帯を有している。

8・10~16・19は、懸垂文を有している。

10~12・16・19は、沈線で区画された懸垂文である。

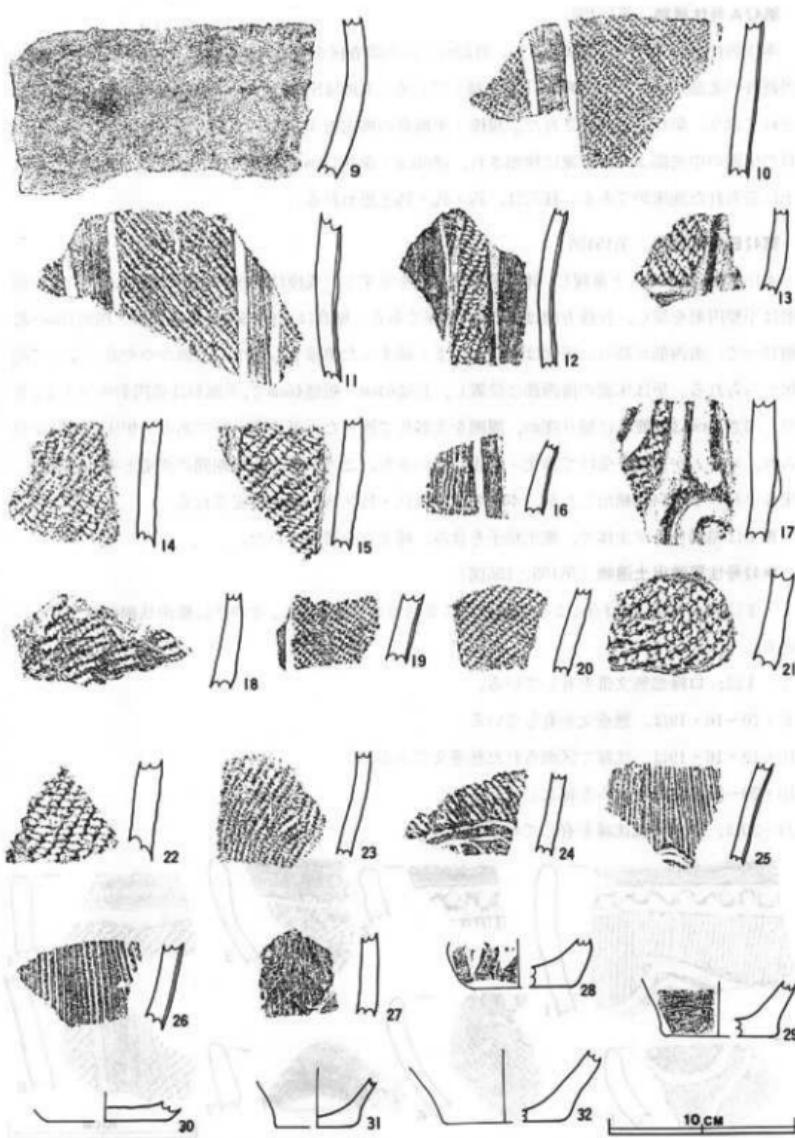
18・20~23は、繩文のみを施文している。

24~26は、櫛歯状細沈線を有している。



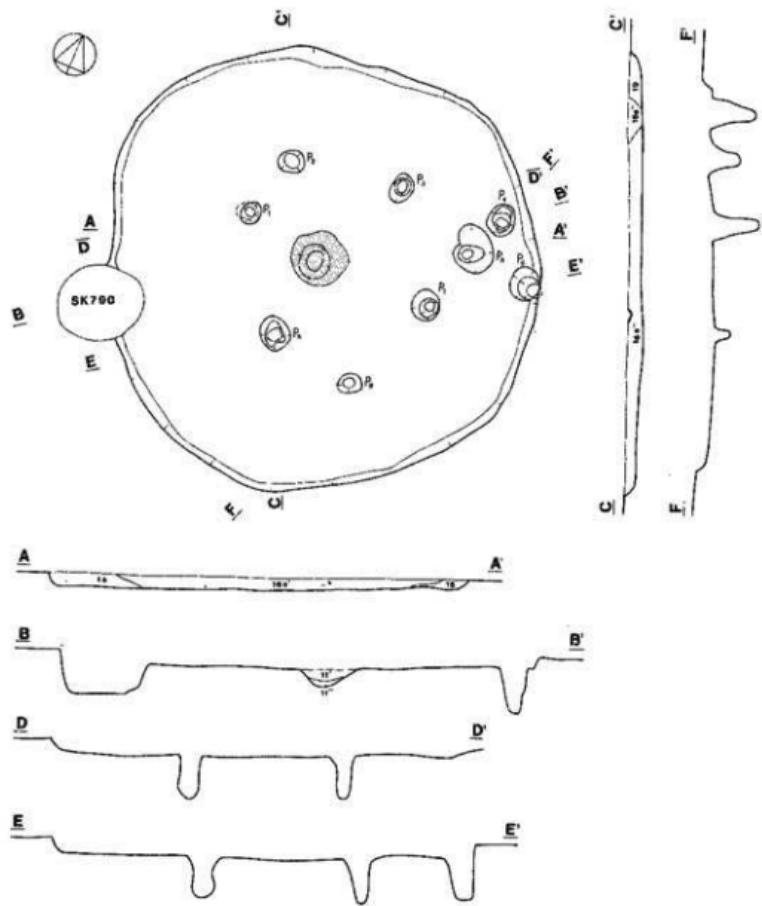
第155図 第42号住居跡出土遺物拓影図

（鹿嶋奈良野出土遺物拓影図）



第156図 第42号住居跡出土遺物拓影図

西漢時代の中国の考古学



第157図 第43号住居跡実測図

第43号住居跡出土遺物（第158・159図）

- 1は波状口縁部で、横位の渦巻文を有し、16・18も同類の破片と思われる。
- 2～5は横位の波線で、腹部と口縁部を区別する。6は、繩文のみ施文している。
- 10は、貼り付けによる隆起帯を持つ。7・9・12・15は楕円文を有するが、7・9は楕円文の中をすり消す。13・14・19～23は懸垂文であるが、13・14は中に1本の沈線を有している。

第43号住居跡（第157図）

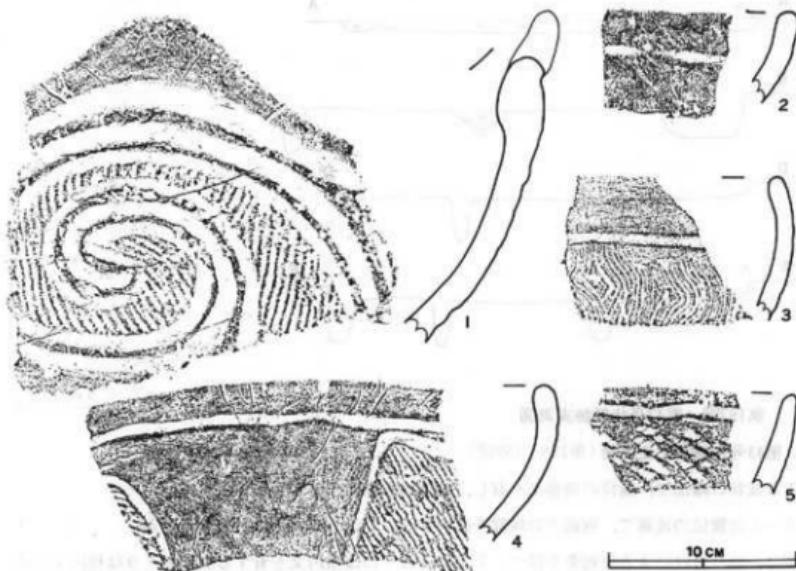
本住居跡はH 9 cm-d₀, H 10 cm-d₁の調査区に確認されたもので、中央部住居跡群の北西部に位置し、北側でSI 40と接している。

規模は長径6.6m・短径6.3mで、平面形はほぼ円形を呈し、長径方向はN-75°-Wである。

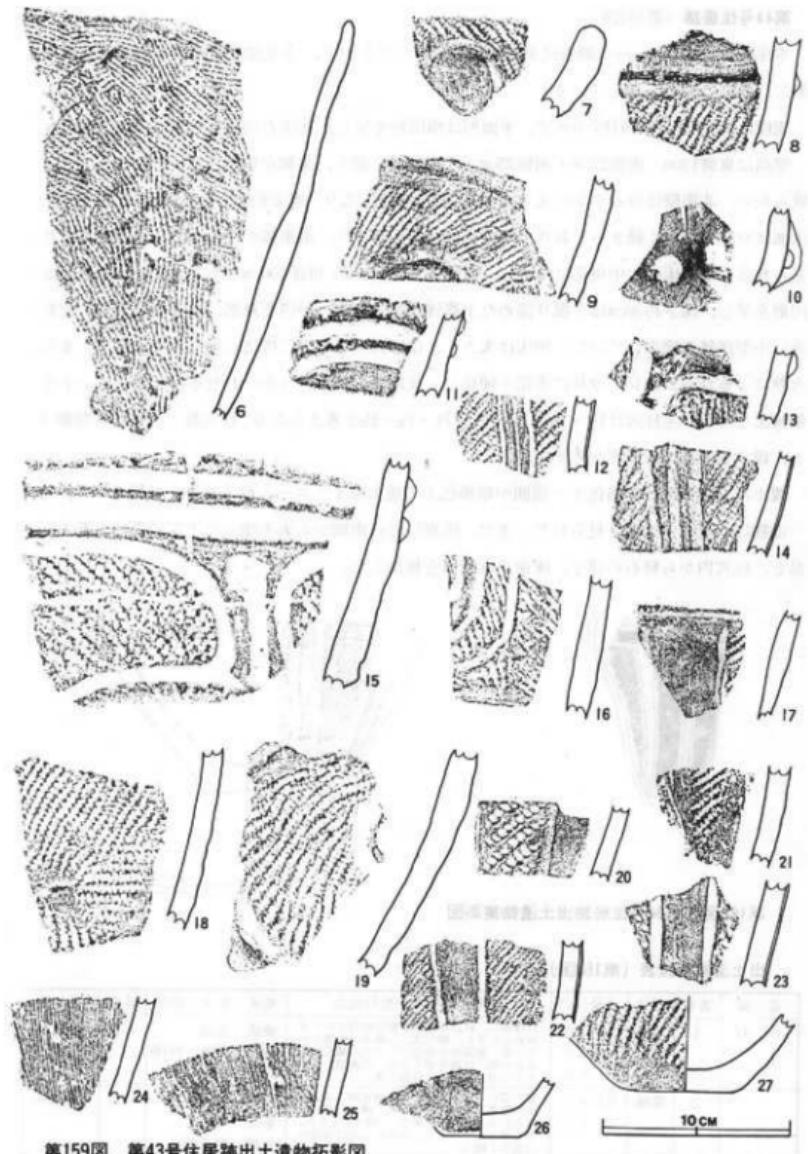
壁高は南東側13cm・南西側17cm・北西側11cm・北東側15cmを測る。壁はロームで、やや縮まりを帯びた比較的明確なもので、床面からゆるやかに外傾した後、ややオーバーハング気味に立ち上がっている。床面はロームで固く縮まっており、北東部から炉にかけてやや高く、南東部はやや低いが、全体的にみると平坦である。炉は中央部に位置し、規模は長径83cm・短径75cmである。また、平面形は横円形を呈し、深さ25cmほど皿状に掘り窪められた地床炉である。炉床はロームが火熱を受けて赤化・硬化しており、長期間の使用がうかがえる。床面にピットを9個検出したが、主柱穴はP₁・P₃・P₅・P₆の4本である。また、P₄・P₅・P₆付近の床面がやや高まりをもって硬く、出入口と推定される。

覆土は暗褐色土で、周辺が褐色土を呈し、焼土粒子・炭化粒子をわずかに含み、縮まりを帯びて自然堆積していた。

遺物は覆土中から加曾利E期の口縁部土器片等を検出した。



第158図 第43号住居跡出土遺物拓影図



第159図 第43号住居跡出土遺物拓影図

第44号住居跡（第161図）

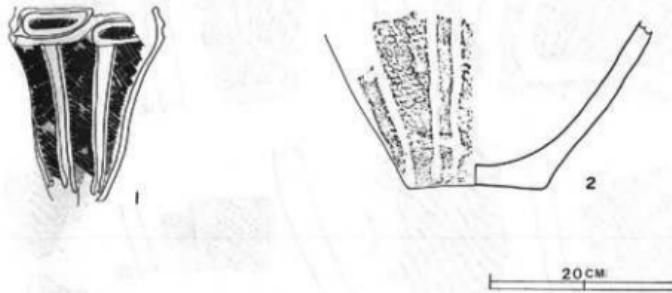
本住居跡はH10e1・e2の調査区を中心に確認されたもので、中央部住居跡群のはば中央部に位置し、西側でSI57と接している。

規模は長径8.0m・短径7.0mで、平面形は楕円形を呈し、長径方向はN-30°-Eである。

壁高は東側12cm・南側22cm・西側25cm・北側23cmを測り、東側が低い。壁は、ロームであるが軟らかい。北側壁はゆるやかに立ち上がってから垂直になり、他は床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面はロームで固く締まっており、炉の東部がやや高まり、南東部がやや低く、北西部で凹凸が見られる。炉は床面の中央部に位置し、規模は長径163cm・短径100cmである。また炉の形態は楕円形を呈し、深さ約30cmほど掘り窪めた土器埋設炉である。炉内北東部に加曾利E III式の完形に近い小型深鉢を埋設していた。炉床は大きく、ほぼ同一場所に二度造られたとみられる。また、火熱によるロームがレンガ状に赤化・硬化し、長期間の使用をうかがわせる。床面にピットを17個検出したが、主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄・P₅・P₆・P₇と考えられる。柱穴数と炉跡から判断すると、建て替え等の可能性が考えられる。

覆土は、中央部が黒褐色土・周囲が暗褐色土で焼土粒子・ローム粒子を含んで締まっていた。

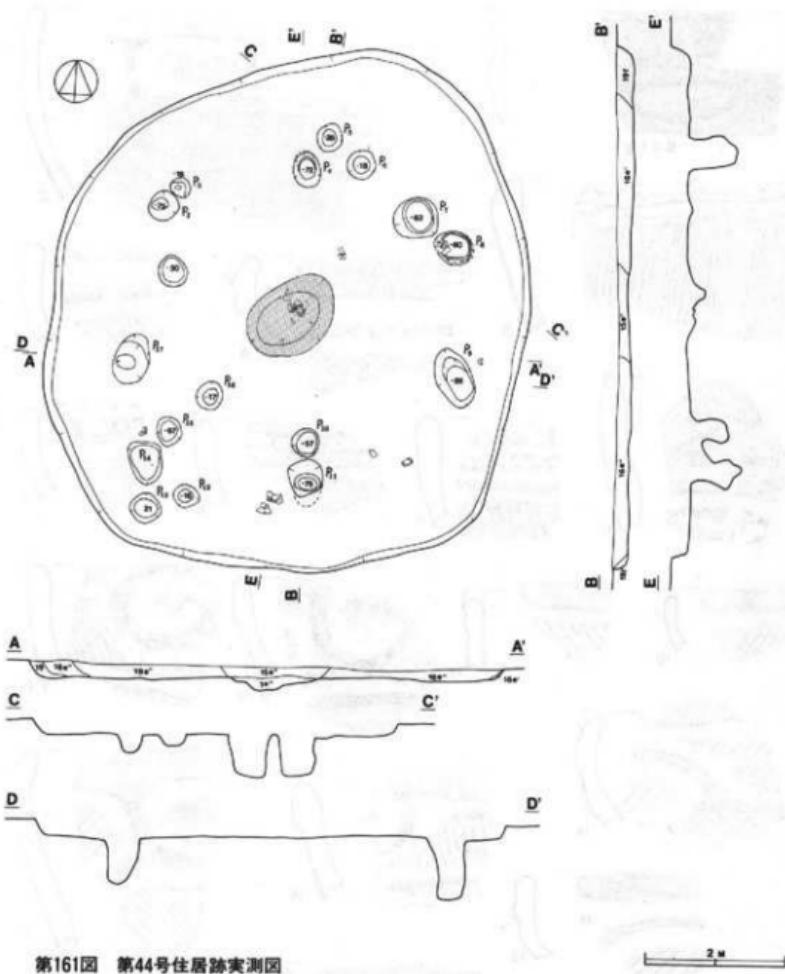
遺物は、覆土中に多く見られた。また、床面に近い南側から朱を塗った小型釣手付土器の完形品と、柱穴内から軽石の浮子、床面から石鐵を検出した。



第160図 第44号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第160図）

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-44	1	深鉢	A(15.0)	口縁部は、薄洗面による横筋横内文が5~6組めぐらされ、楕円文には横文が充満されている。胴部から底部にかけて、繩文が施された後、沈線を施下され、底麻間を交互に4回り削っている。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 橙色	E III	70% 炉内出土
			B 20.7				
			C 5.8				
	2	深鉢	B(8.3) C 7.4	脚下部から底部にかけて沈線区画によるすり清潔面文が11段位施され、繩文と交互に見られる。底部は丁寧なフチ巻きがなされ、中心部がややへこむ。底部からほぼ直線的に大きく開く。	焼成 普通 胎土 砂粒 色調 明赤褐色	E III	底部10%



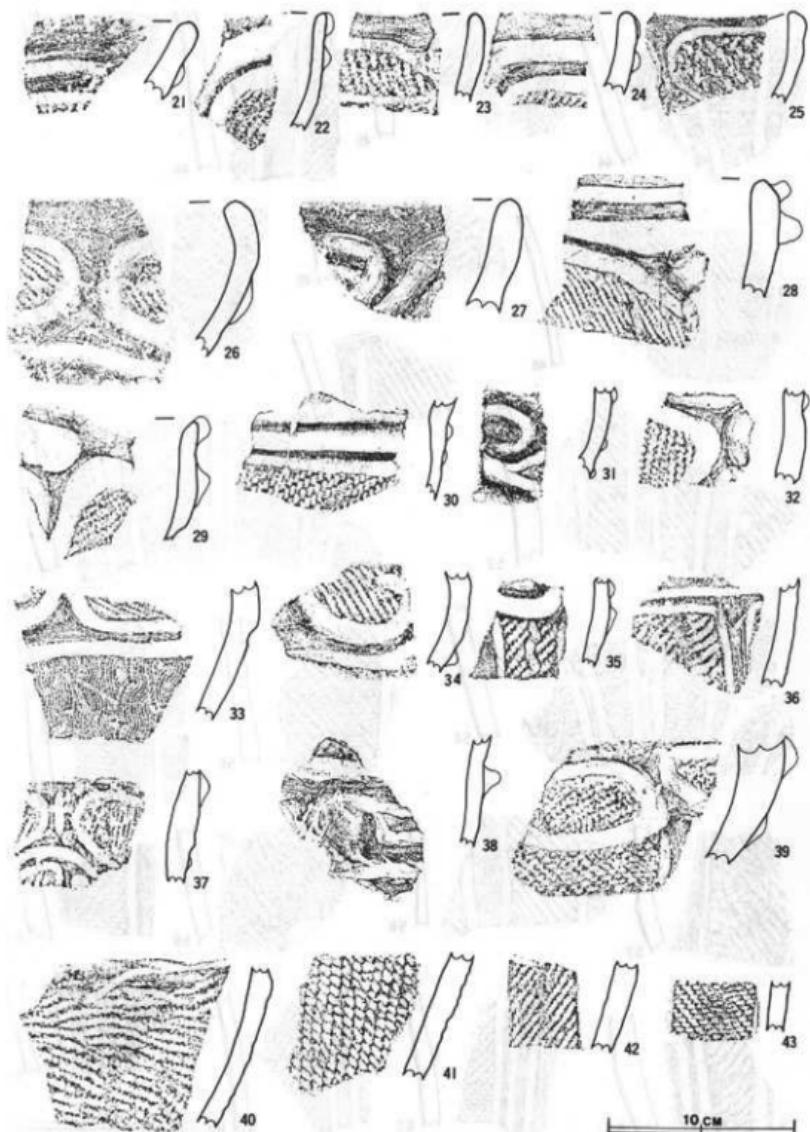
第161図 第44号住居跡実測図

第44号住居跡出土遺物（第162～165図）

1～3は、櫛歯状細線を持つ口縁部、6は点列文。7～9は、連続爪形文を持っている。
 12・13・18は、渦巻文。14～17・22～26・32・34・37・39は、横位楕円文。40～43は、縞文だけである。
 44～46・75～77・79・80～82は沈線によって区画された懸垂文であるが、61～64・75～77・79・80～82はもう1本沈線を垂下させる。65～74・78・81は、櫛歯状細線を持つものである。

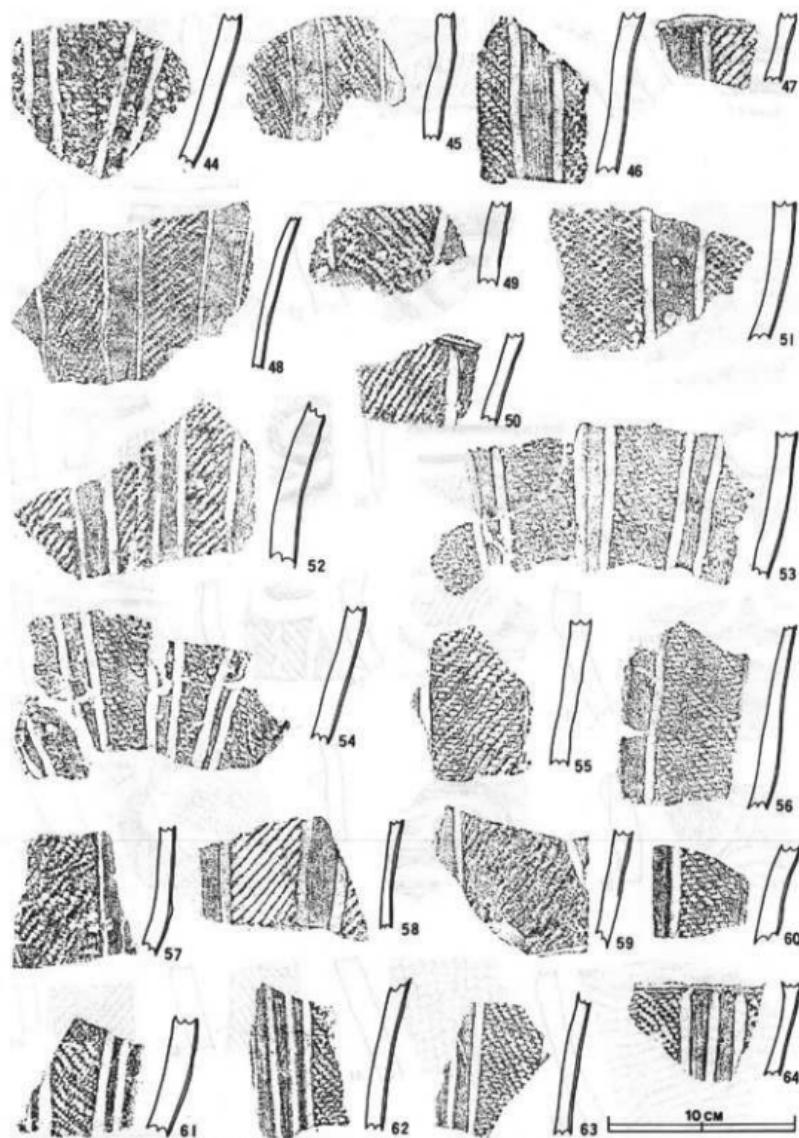


第162圖 第44號住居跡出土遺物拓影圖



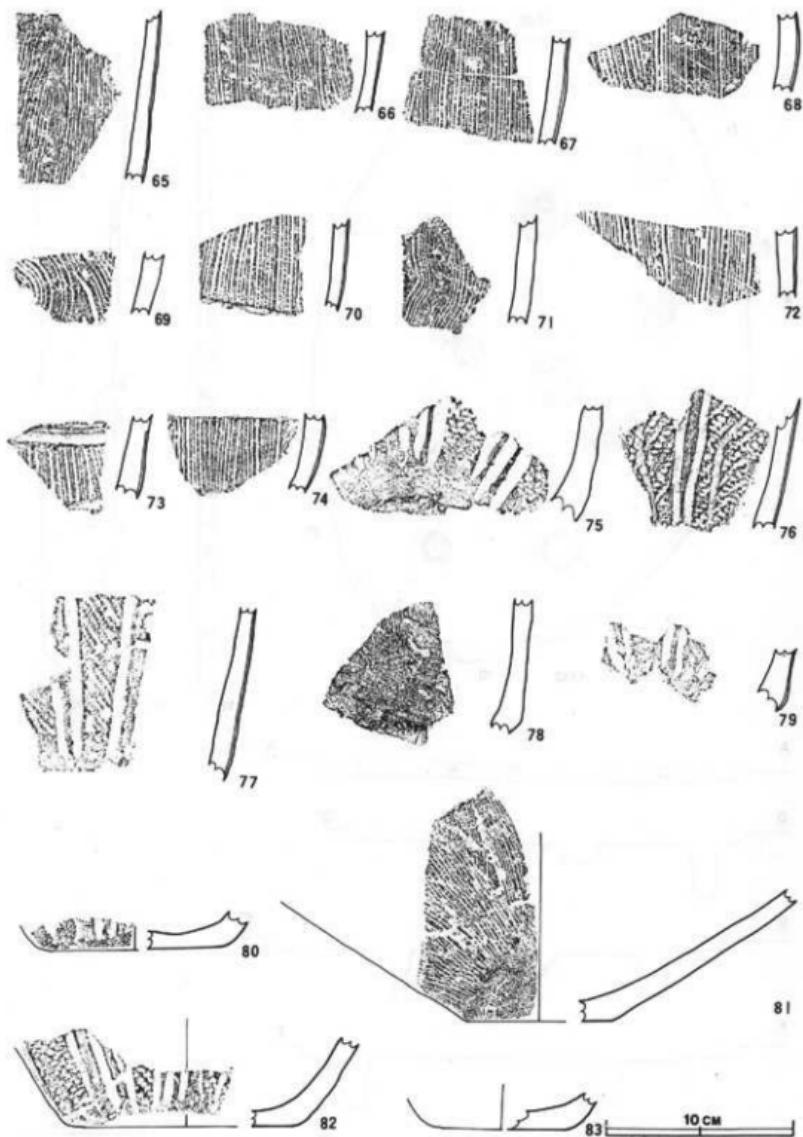
第163図 第44号住居跡出土遺物拓影図

（複数枚の図を示す）

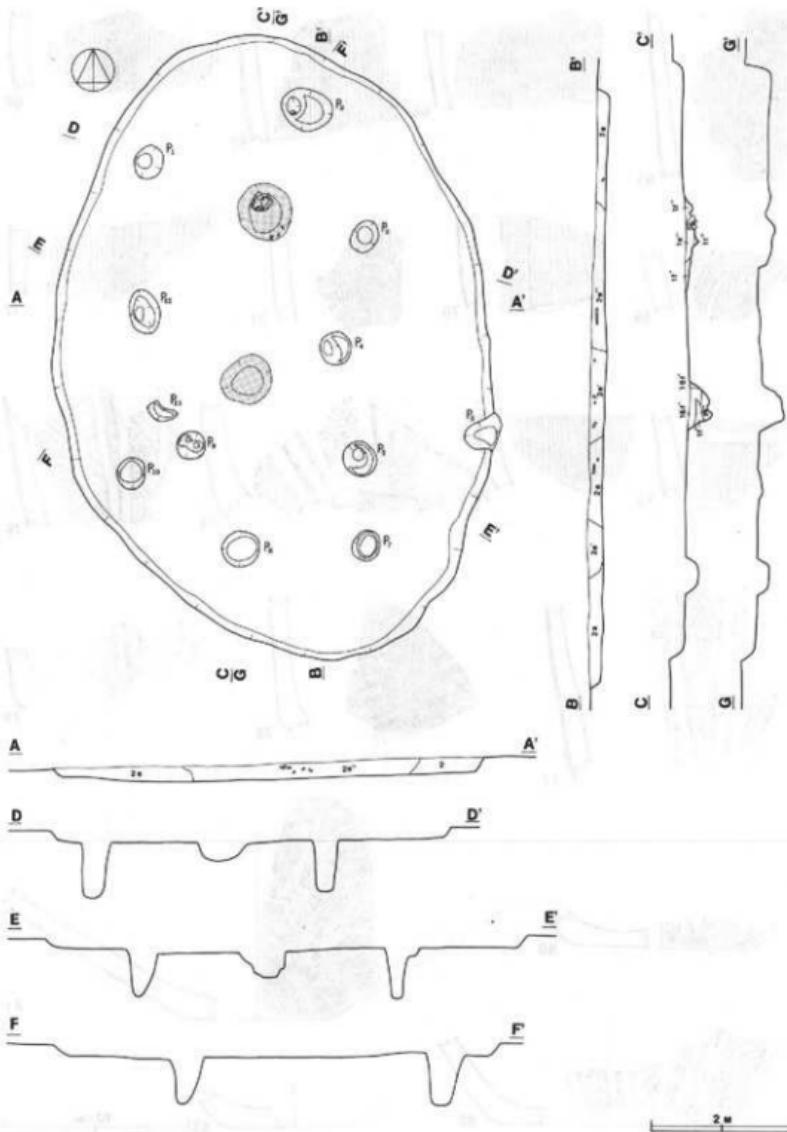


第164図 第44号住居跡出土遺物拓影図

（福井県立歴史博物館蔵）



第165図 第44号住居跡出土遺物拓影図



第166図 第45A・B号住居跡実測図

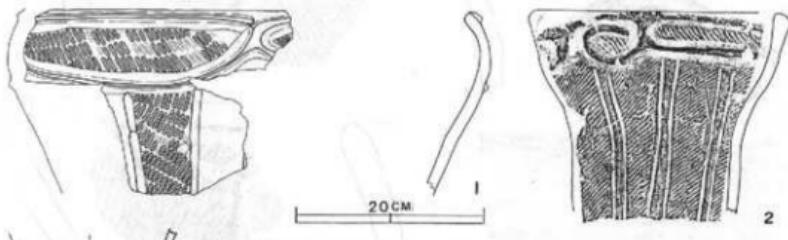
第45A号住居跡（第166図）

本住居跡はH10d・e・fの調査区を中心に確認されたもので、中央部住居跡群の北東部に位置し、南西部でSI46・西部でSI44・北々西部でSI42と近接している。なお、本跡はSI45Bと重複しているため、北側の炉をもつものを本跡とした。

規模はA・Bを明確に分けることが困難なため、重複したままで計測すると、長径8m・短径7mで、平面形は楕円形を呈する。長径方向はN-14°-Wである。壁高は東側20cm・南側15cm・西側12cm・北側19cmであり、壁は不明確である。床面は、ロームで締まりが弱い。床は東・北側がやや高くなり、凹凸が見られる。炉は床面の北部に位置し、径80cmの円形で、床面を深さ25cmほど皿状に掘り込んだ土器埋設炉である。炉内の北西部に加曾利E III式の小型深鉢を埋め込んでいた。炉床はロームがレンガ状に赤化・硬化している。主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄と考えられる。

第45B号住居跡（第166図）

本住居跡はSI45Aと重複しているため、南側の炉をもつものを本跡とした。炉は床の中央より南西部に位置し、その規模は長径75cm・短径65cmである。また、炉は深さ35cmほど深く掘り廻された土器埋設炉である。埋設土器の引き抜かれた痕跡がみられ、炉床が赤化・硬化している。炉壁はロームが乳白色化して硬化している。主柱穴は、P₄・P₅・P₆・P₇と考えられる。



第45号住居跡出土遺物（第168～171図）

1～3は波状口縁で、円文・楕円文を有し、5～11・13は口縁部無文帶を有している。

第167図

第45号住居跡出土遺物実測図12・27・28は渦巻文を有するもの、14・15・37は沈線によって区画された懸垂文を有している。

16は、器面全体に繩文を施している。17・18～21は、横位楕円文を有している。

22・24は、楕円文の間に変形麻文を入れる。

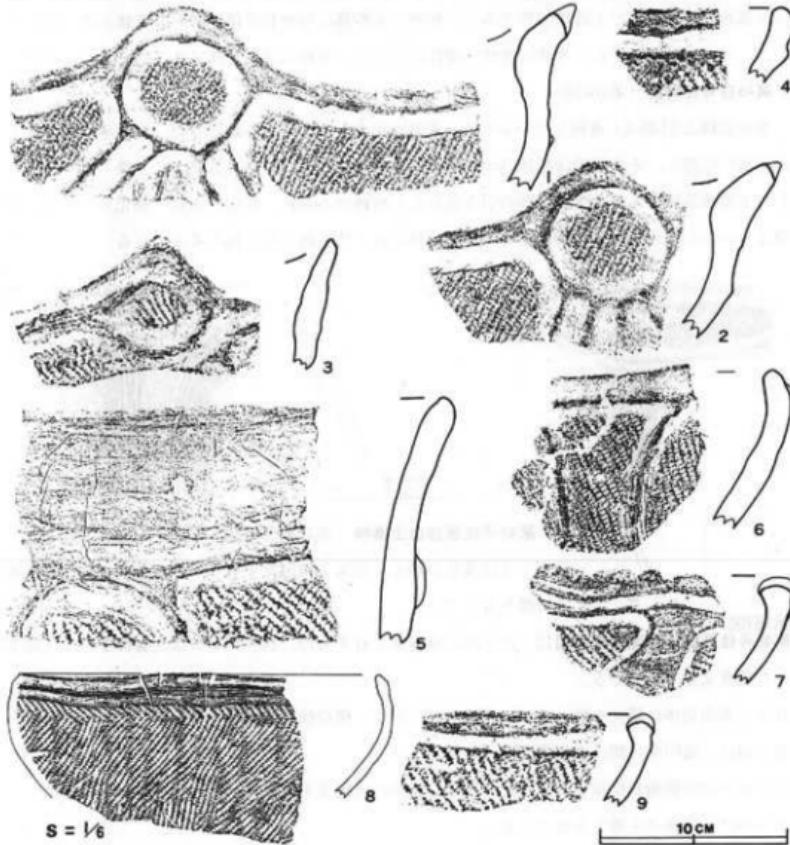
26・30～34は櫛齒状沈線を有し、23・35は、縱位の楕円文を有している。

36～39は、懸垂文を垂下させている。

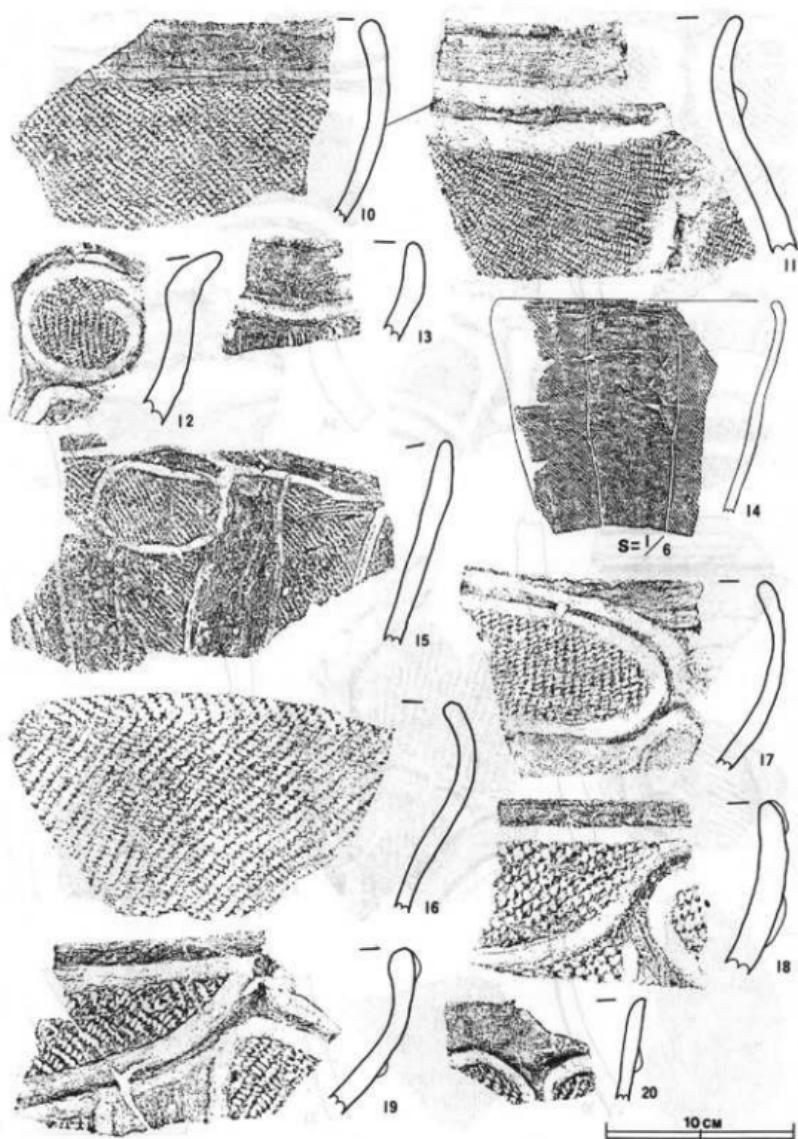
40・41は、櫛齒状の細沈線と波状に縦に付けている。

出土遺物解説表（第167図）

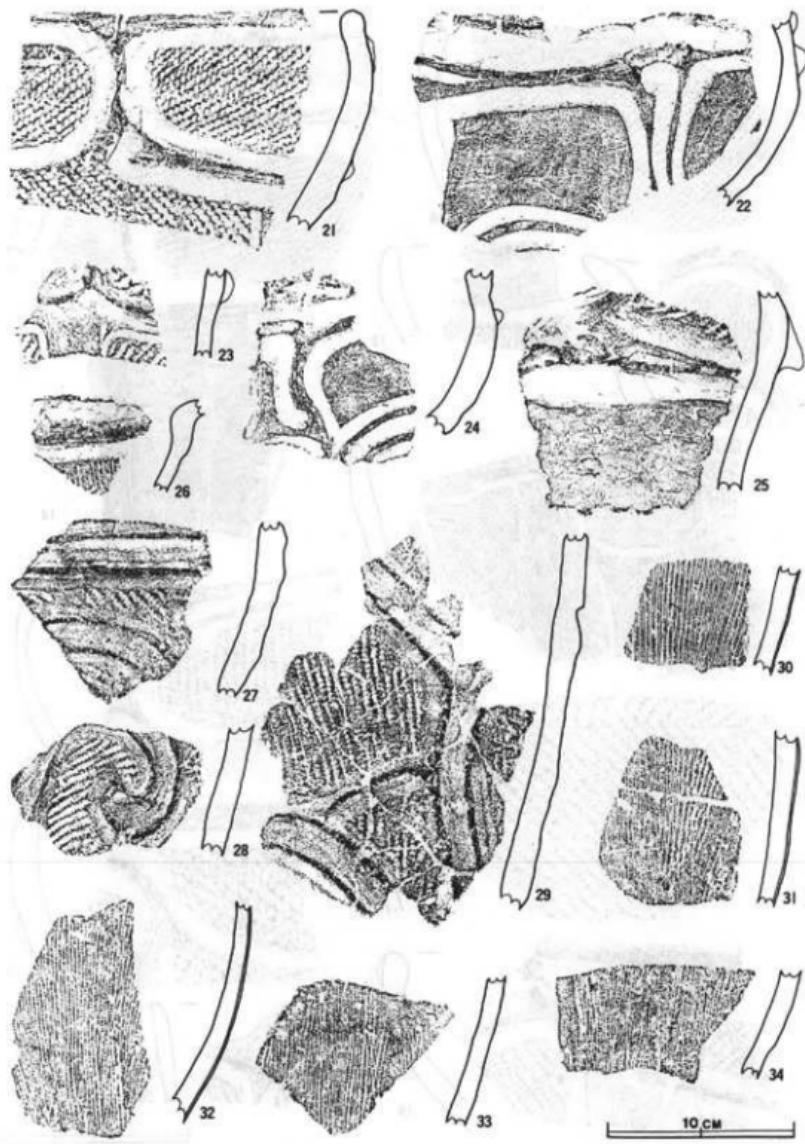
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-45	1	深鉢	A(47.6) B(19.6)	手口縁で焼沈痕による横位の変形焼因文を施し、縫合部を強化している。胴部は洗面区画に沿る焼成部である。すり消磨文が交叉反覆する。口縁部にかけて内側して立ち上かる。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫・スコリア 色調 にふい橙色	E III	胴上10%
	2	深鉢	A 26.4 B 21.3	口縁部に焼沈痕による逆巻焼因文をつける。その間に縫合部を強化する焼成部以下は焼文と呼ぶべきもので、その焼成部の表面に焼因文と織文が交互にみられる。胴部が表面に立ち上がり、口縁はややふくらみをもって開き、上部でやや内側する。	焼成 良 胎土 砂粒・スコリア 色調 赤褐色	E III	
	3	深鉢	B 10.4 C(9.4)	胴部は織文を施したもの。ヘラによる研削のすり消しを行われ、一部織文が残る。底面は欠損しているが、大きく述べ。内面に傷が付着している。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 明赤褐色	E III	胴部以下



第168図 第45号住居跡出土遺物拓影図

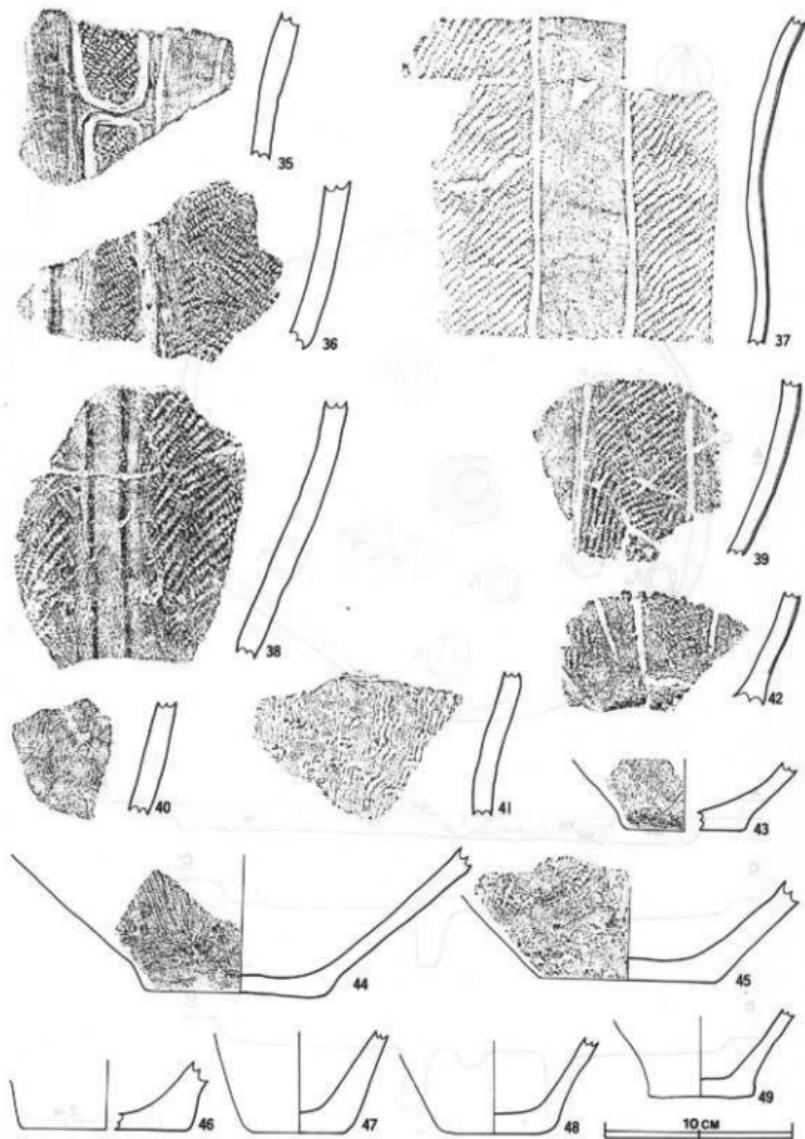


第169図 第45号住居跡出土遺物拓影図



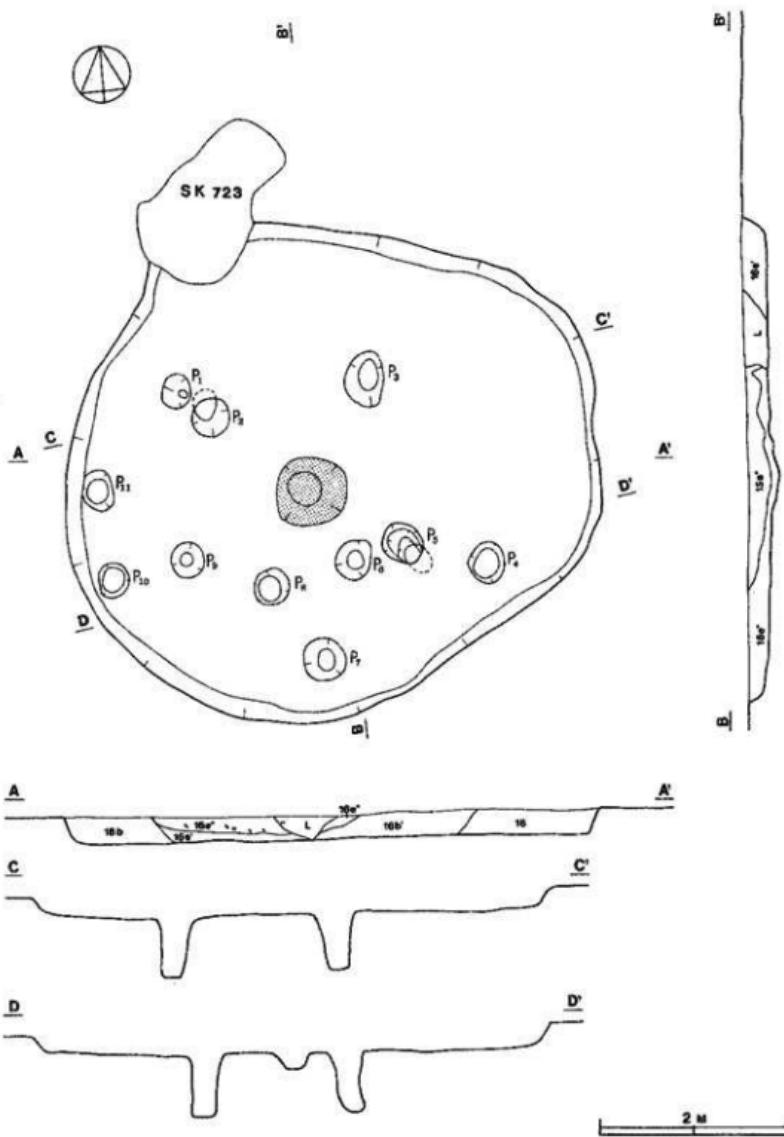
第170图 第45号住居跡出土遺物拓影圖

辽西地区出土的陶器和骨器



第171図 第45号住居跡出土遺物拓影図

昭和三四年度調査報告書 第四章



第172図 第46号住跡実測図

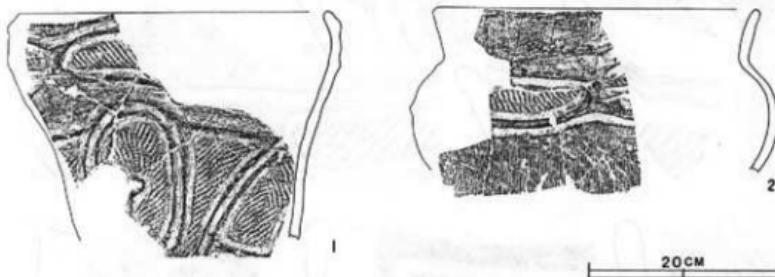
第46号住居跡（第172図）

本住居跡はH10f₃・g₃・f₄・g₄の調査区に確認されたもので、中央部住居跡群の中央部に位置し、北東部でSI45、南部でSI50A・B・C、SI59と接続している。

規模は長径5.95m・短径推定5.3mで、平面形は楕円形を呈し、長径方向はN—66°—Eである。壁高は東側26cm・南側16cm・西側28cm・北側27cmで、南側が低い。壁はロームでよく締まり、南・西壁は明確である。北・東壁はやや不明確で、西壁がゆるやかに外傾して立ち上がるが、他は床から垂直に立ち上がる。床面は、北東部の壁ぎわがソフトロームで軟らかく明確なものでないが、他はよく締まり床として明確で、東側がやや高く、西側が低くなっている、かなり大きな起伏をもっている。炉は床面の中央部に位置し、長径80cm・短径75cm・深さ30cmの規模をもち、皿状に掘り溝められた地床炉である。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化している。床面にピットを11個検出したが、主柱穴はP₂・P₃・P₅・P₆の4本である。

覆土は、黒褐色土から暗褐色土で締まりを帯び、自然堆積であった。

遺物は、南西部の覆土中から多量の加曾利E III式土器片と床面から磨製石斧を検出した。



第173図 第46号住居跡出土遺物実測図

第46号住居跡出土遺物（第174～177図）

1～4は、波状口縁で渦巻文を有する。5～9も波状口縁で、横位の楕円文を有している。

10は、円文である。13は、楕円文か円文の間に変形蔵文を有している。

18～21は、口縁部無文帶を有する。22～24は、横の沈線による胴部と口縁部の区画がなされる。

35～48は、懸垂文を垂下させるが沈線で区画させる。

49は、懸垂文の中に縱の沈線を1本垂下させる。26は、変形蔵文を付けている。

29～33は口縁部に貼り付けによる隆沈文で胴部を区画している。

50・51・63は、縱位の楕円文を有している。56は、楕円文の間に蔵文を付けている。

61・62は胴部に渦巻き文を有し、65～69は櫛齒状沈線を何本も付けている。

70・71は底部に近いものだが、沈線区画による懸垂文を有している。

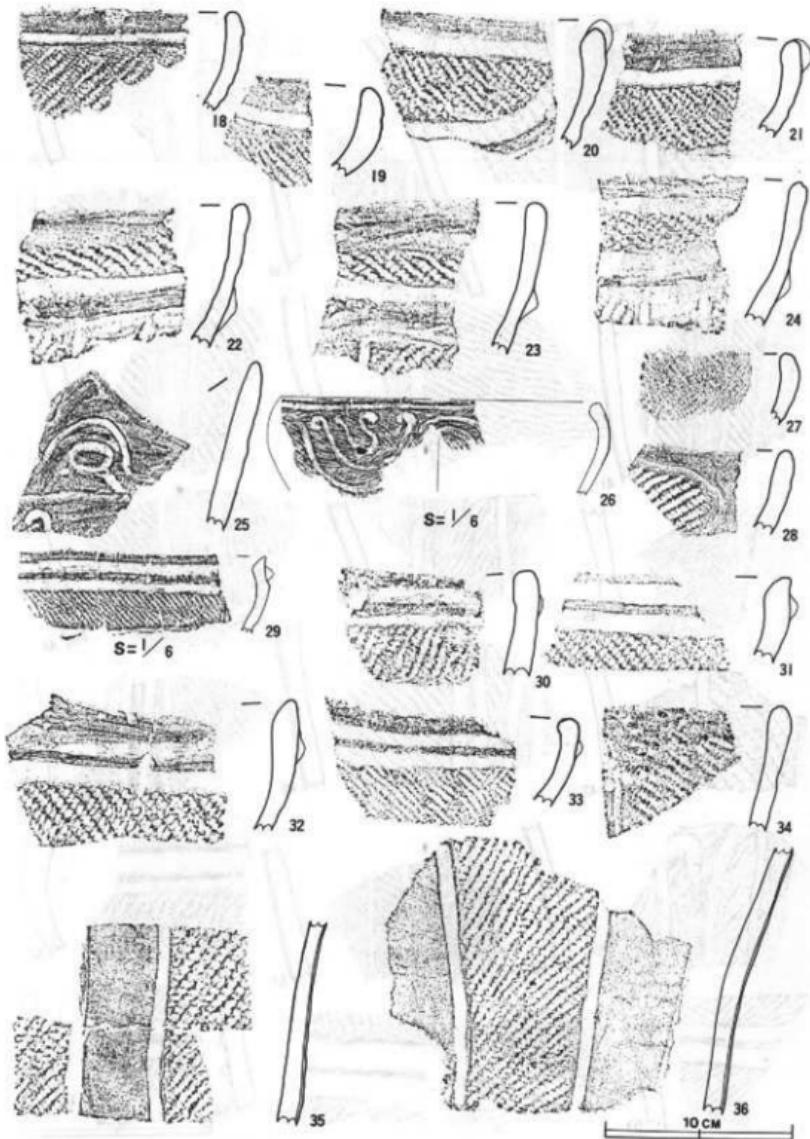
出土遺物解説表 (第173図)

出土地点：東京都江戸川区

遺 構	番 号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時 期	備 考
SI-46	1	深鉢	A 36.0 B 25.3	口縁部は横沈線による6段位の横凹横円文を施し、縄文を充てする。脚部には楕円文を施している。また、脚部と脚部の境にはヘラなどでよける跡がされ、脚部と区画される。内側は外側と、口縁部で内側と、口唇部で外側。	焼成 普通 胎土 砂粒・スコリア 色調 橙色	E III	網上15%
	2	壺	A 34.0 B(17.2)	平口縁で底大口を脚部に持つ。口縁部に「く」の字状に大きく開いて立ち上がる。口縁部をすり消済し、脚部との境に横沈線と横位の横円文を施し、その中に縄文を充てしている。脚部は楕円文を施されている。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂蠅スコリア 色調 橙色	E III	口縁部

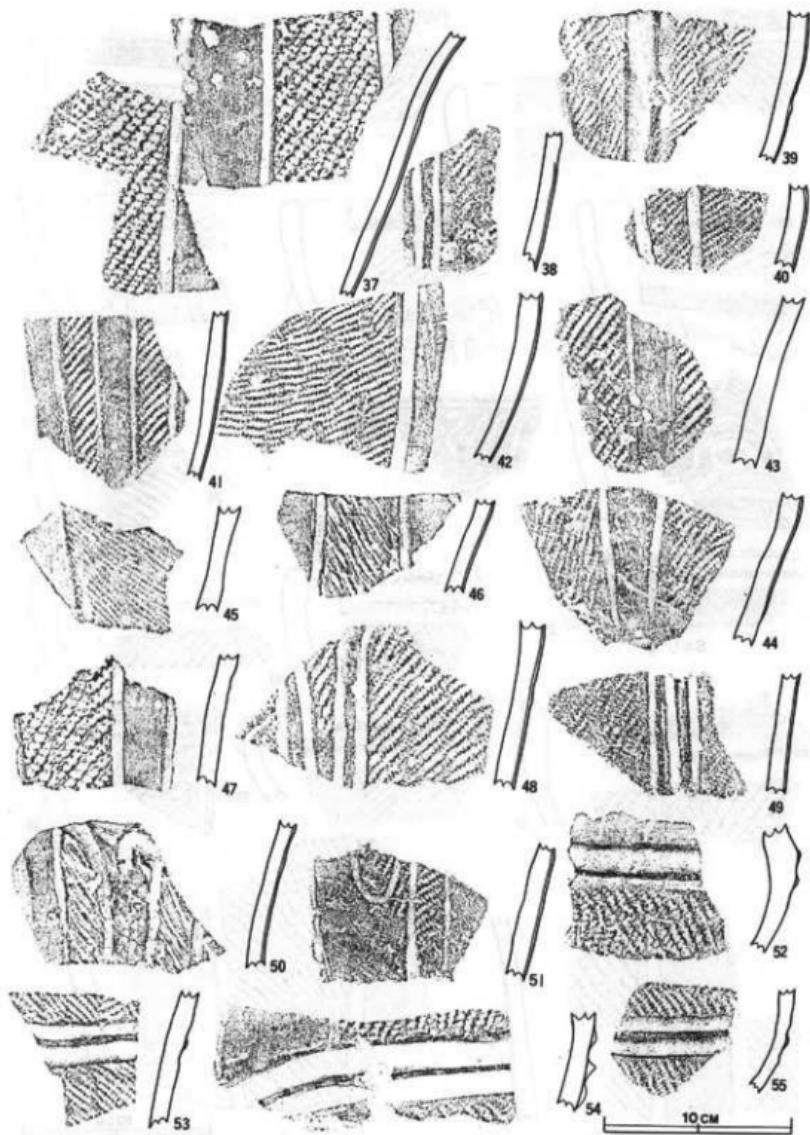


第174図 第46号住居跡出土遺物拓影図

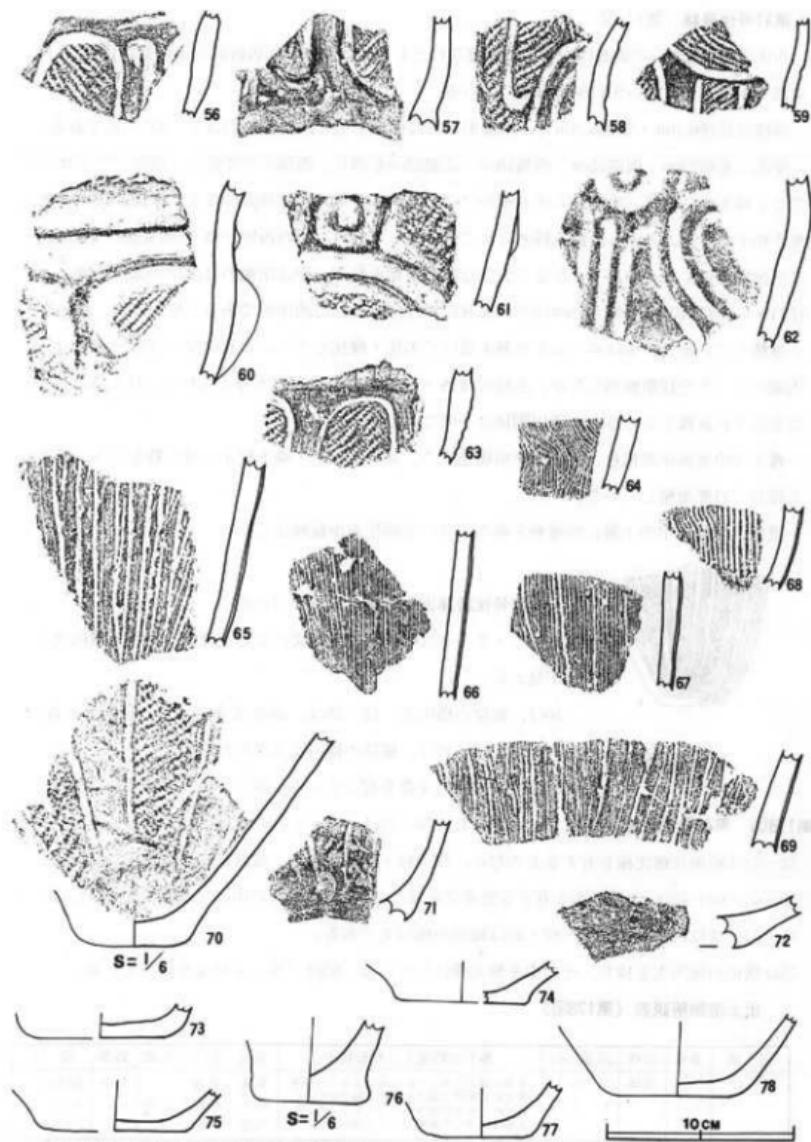


第175图 第46号住居跡出土遺物拓影圖

辽西地区出土的古代遗物拓影图



第176図 第46号住居跡出土遺物拓影図



第177図 第46号住居跡出土遺物拓影図

第47号住居跡（第179図）

本住居跡はH 9.9mの調査区を中心に確認されたもので、中央部住居跡群の南西部に位置し、北東部で本跡より新しいSK794と重複している。

規模は長径6.9m・短径6.3mで、平面形はほぼ円形を呈し、長径方向はN-53°-Eである。

壁高は東側23cm・南側25cm・西側18cm・北側22cmを測り、西側がやや低い。壁はソフトロームでよく縮まっており、床面からゆるやかに立ち上がった後、ほぼ垂直になる。床面は、炭火物や焼土粒子がロームとともに踏み締められて固くなっている。炉の西側が高く、南東部がやや低い。また南側壁近くがやや高く、かなり大きな凹凸が見られる。炉は床面のほぼ中央部に位置し、長径110cm・短径105cm・深さ25cmほどの皿状に掘り盛られた地床炉である。炉内には、焼土が厚く堆積している。炉床はロームが火熱を受けて赤化・硬化してレンガ状になり、凹凸が見られる。床面にピットを12個検出したが、主柱穴はP₁・P₂・P₃を除くものと考えられる。P₁とP₂、P₃とP₄はそれぞれ重複しているが、新旧関係は不明である。

覆土は中央部が黒褐色土、周囲が暗褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含み、縮まりを帯びて自然堆積していた。

遺物は、覆土中の上層に加賀利E期の小さい土器片を少量検出した。



第47号住居跡出土遺物（第180～183図）

1～5・7・8は貼り付け隆沈文による文様で、横位の横円文などが見える。

10は、縦位の横円文。12・15は、渦巻文を有する口縁部である。

11・14・16・17は、横位の横円文と思われる破片である。

29は、口縁部無文帯を有している。26～28は、連続爪形文を持って

第178図 第49号住居跡実測図

いる。29～31・78・79は、1～2列の点列文を有している。

32～53は櫛歯状細沈線を有するものだが、33・44・45は円弧状、波状に描いている。

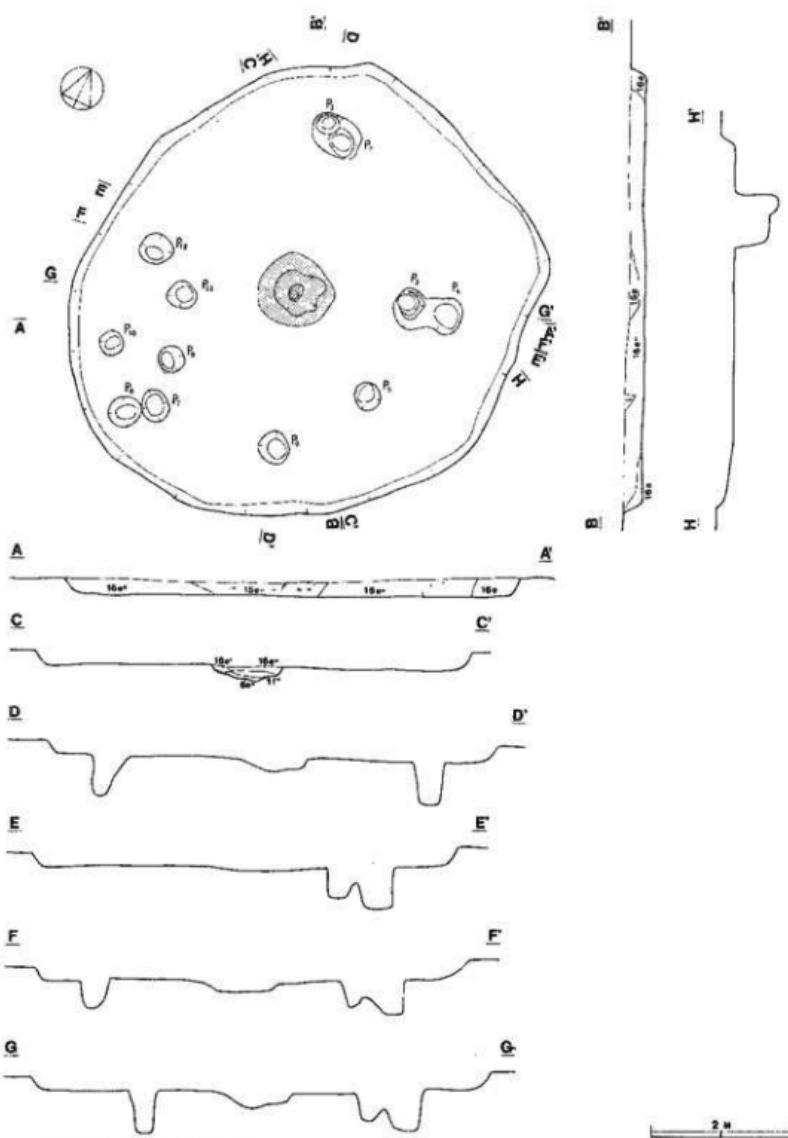
56～64・66～72は、沈線区画を有する懸垂文を持つ。65は、懸垂文の中に2本の沈線を有している。

74・84は横位の横円文、77・87・89は縦位の横円文である。

75は横位の横円文を持ち、その中を無文帯にしている。65は「S」字状文を持っている。

出土遺物解説表（第178図）

遺 様	番 号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時 期	備 考
SI-47	1	深鉢	B 13.3 C 6.7	全体に繩文を施した後、沈線によるすり筋無 繩文が12單位と繩文が交互に施されている。 底部からやや内側ごとに立ち上がりしている。 底部はへらなどで調整で、やや厚い。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 橙色	E III	腹部以下 30%

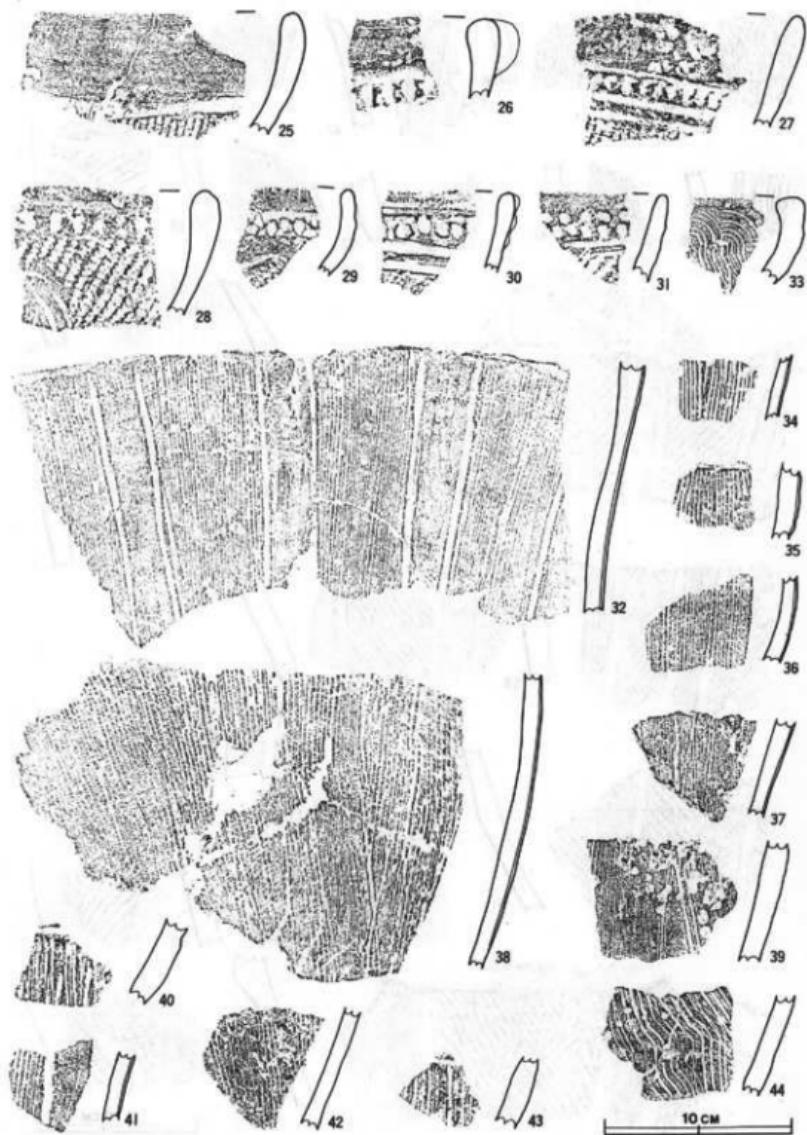


第179図 第47号住居跡実測図

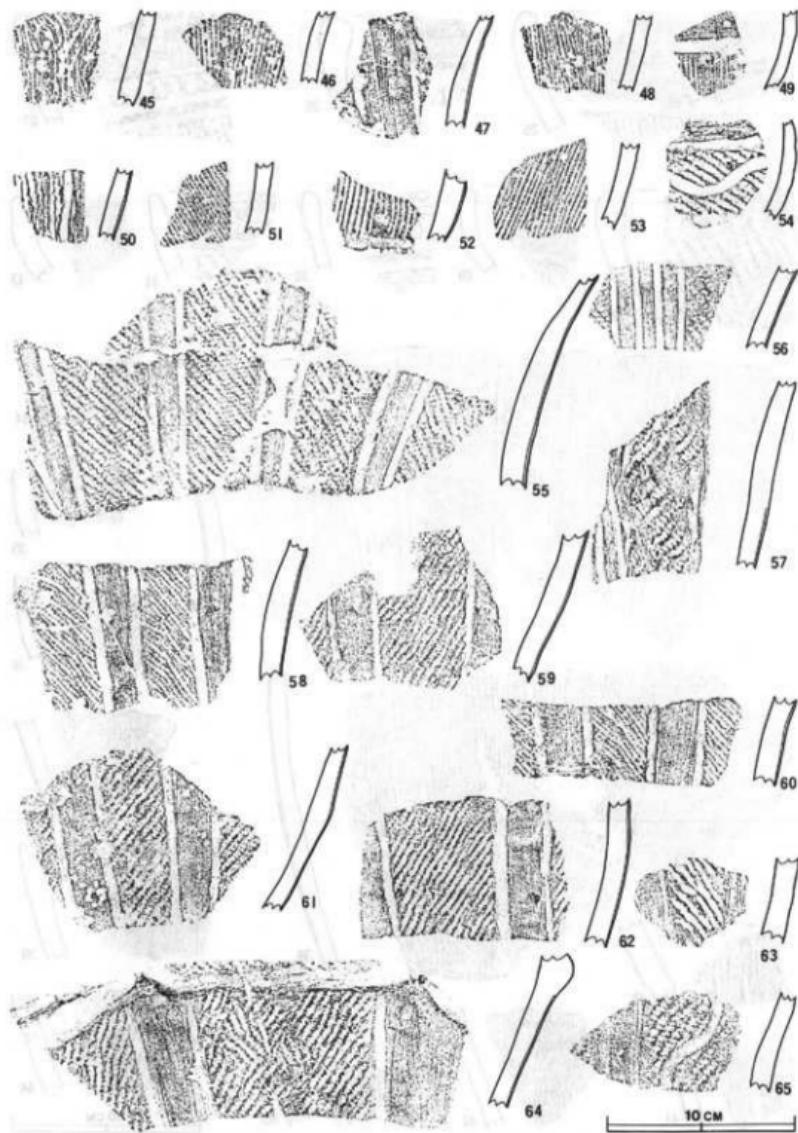


第180図 第47号住居跡出土遺物拓影図

中原文化遺跡研究会 著者不明

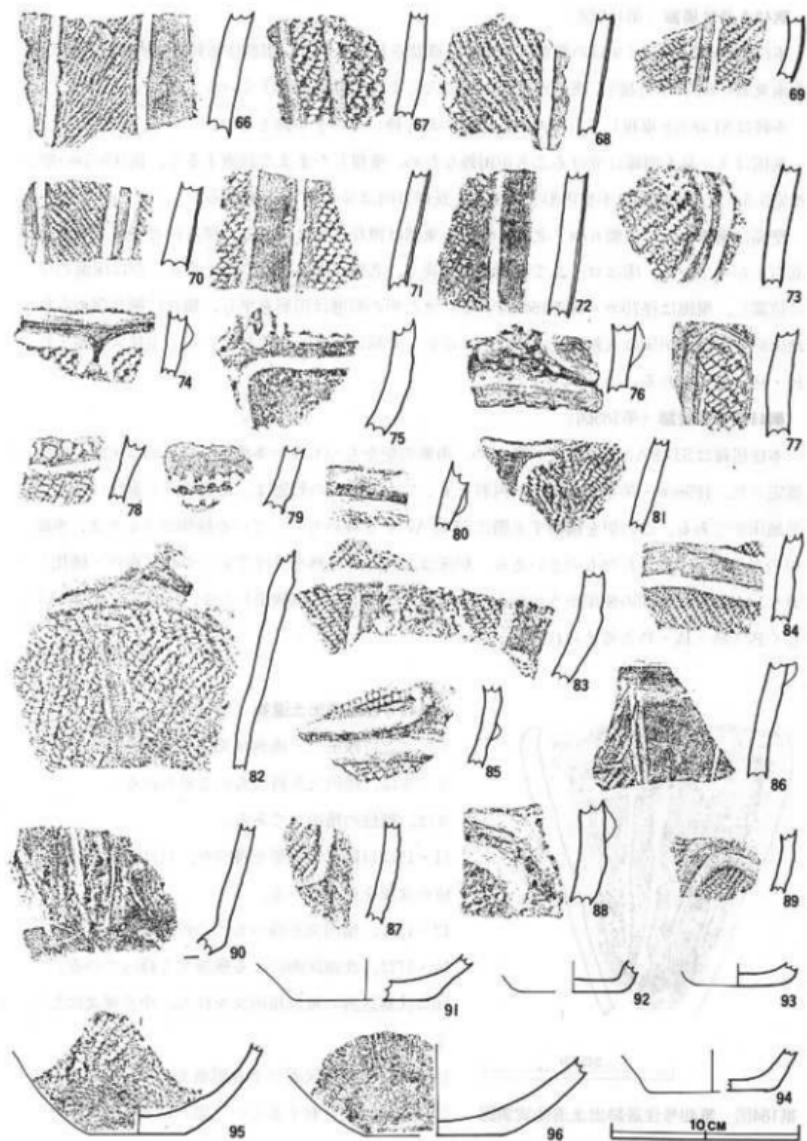


第181図 第47号住居跡出土遺物拓影図



第182図 第47号住居跡出土遺物拓影図

四庫全書・考古學・卷之三・第四回



第183図 第47号住居跡出土遺物拓影図

第48A号住居跡（第185図）

本住居跡はI 9 jo・J 9 asの調査区を中心に確認されたもので、南部住居跡群の西部に位置し、東南東側にSI 49が近接し、東側が現代のゴミ穴によって搅乱を受けている。

本跡はSI 48Bと重複しているため、北側の炉を持つものを本跡とした。

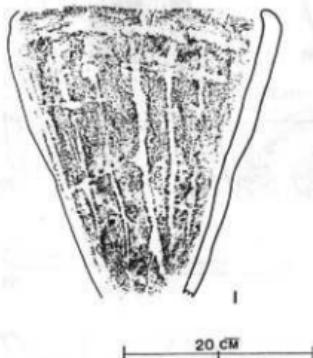
規模はA・Bを明確に分けることが困難なため、重複したままで計測すると、長径6.5m・短径推定5.5mで、平面形は不整円形を呈する。長径方向はN—E^{6°}である。

壁高は南側10cm・西側6cm・北側8cmで、東側は搅乱を受けている。壁はゆるやかに外傾して立ち上っている。床はロームで南側がやや高く、北側がゆるやかに低くなる。炉は床面の中央に位置し、規模は径70cm・深さ15cmである。また炉の形態は円形を呈し、皿状に掘り窪められた地床炉である。炉床は火熱を受け、ロームがレンガ状に赤化・硬化している。主柱穴はP₃・P₃・P₆・P₇と考えられる。

第48B号住居跡（第185図）

本住居跡はSI 48Aと重複しているため、南側の炉をもつものを本跡とした。炉は床面の中央と推定され、径98cm・深さ35cmほどの円形を呈している。炉の形態は、比較的深く皿状に掘り窪めた地床炉である。この炉を構築する際にSI 48Aの炉を埋めもどしている様相がうかがえ、本跡の炉の方が新しく造られたものといえる。炉床はロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化しており、かなり長期間の使用がうかがえる。床面にピットを7個検出したが、主柱穴はSI 48Aと同じくP₃・P₃・P₆・P₇と考えられる。

第48号住居跡出土遺物（第186図）



第184図 第48号住居跡出土遺物実測図

26~28は、櫛歯状細沈線を持っている。

1・2は口縁部で、渦巻状文様を有している。

3・5は、楕円文を持つものと思われる。

9は、縦位の楕円文である。

11・15は口縁部無文帯を持つが、11は口縁部区画に横位の沈線を持っている。

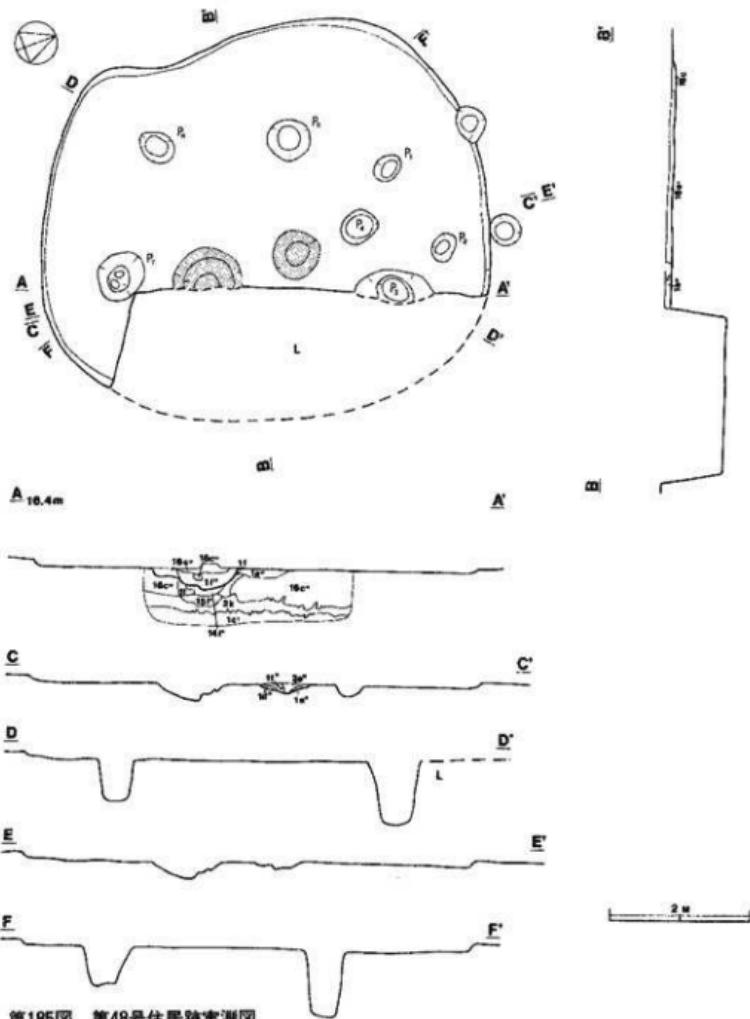
12・13は、楕円文を持つものの破片と思われる。

14・17は、沈線区画による懸垂文を持っている。

16は沈線区画の縦位楕円文を持ち、中を無文にしている。

18~20は、沈線区画による懸垂文を持っている。

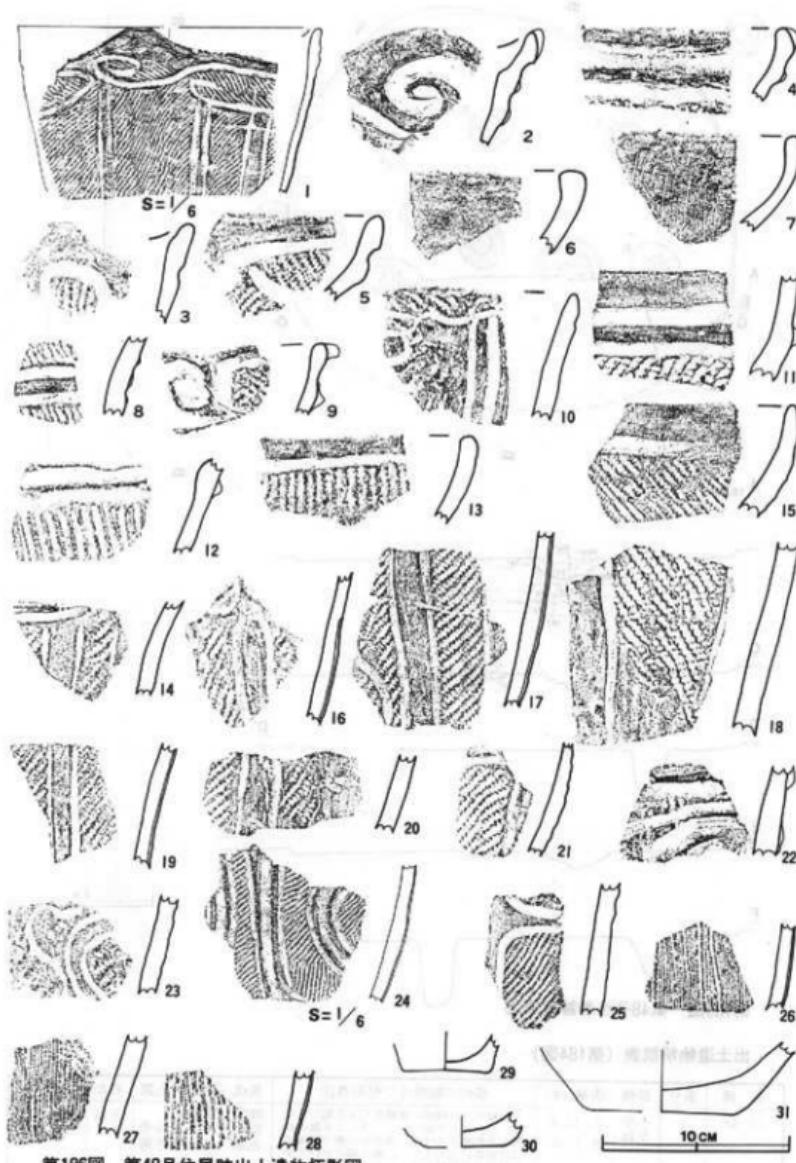
22は、点列文を有するものと思われる。



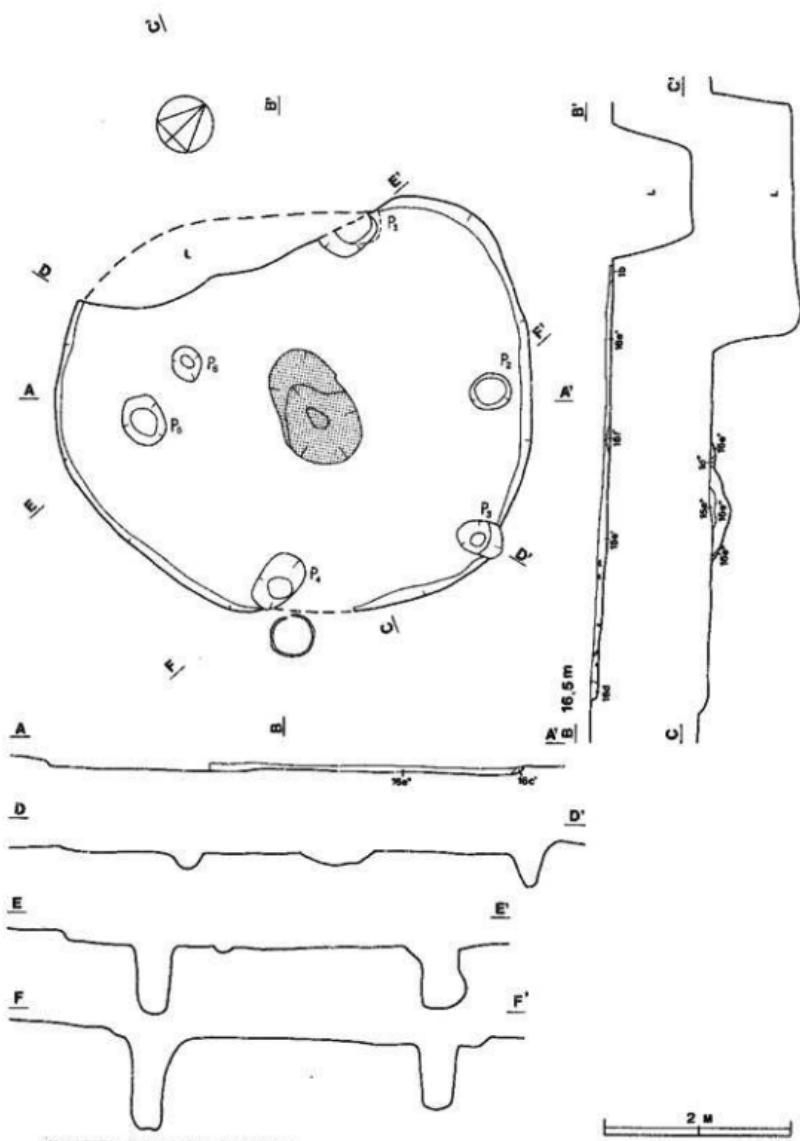
第185図 第48号住居跡測定図

出土遺物解説表（第184図）

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-48	1	小型 深鉢	A 13.4 B 16.4	手口縁で、口縁部に施被小形文を施している。爪彫文の下部には、ヘラによる板の北緯を多段圧下させる。底部から側下部まではほぼ直面にせり上がり、底上部にかけてやや外傾する粗獣な作りである。	焼成 胎土 普通 砂粒・砂塵 に含む赤褐色	E III	65%



第186図 第48号住居跡出土遺物拓物図



第187図 第49号住居跡実測図

第49号住居跡（第187図）

本住居跡はJ10a₁・b₁の調査区を中心に確認されたもので、南部住居跡群の西部に位置し、さらに西側でSI48と、南東側でSI56・東側でSI51と近接している。

規模は長径5.05m・推定短径4.25mで、平面形は楕円形を呈し、長径方向はN—40°—Eである。

壁高は東側7cm・南側4cm・北側8cmで、南側が低い。壁ははっきりしたもので、床面から垂直気味に立ち上がっている。床面は、ロームでよく締まって固く、南西部・北西部がやや低く、炉の周囲が高くなり、凹凸が見られる。炉は床面のはば中央部に位置し、規模・形態は長径130cm・短径70cmの楕円形を呈するもので、深さ23cmほど皿状に掘り窪められた地床炉である。当初、炉が大きく、重複しているのではないかと考えられたが、一つの炉であった。炉内には炭化物・焼土が堆積し、炉床はロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化している。床面にピットを6個検出したが、主柱穴は炉を中心にしてP₁・P₂・P₄・P₅の4本が考えられる。

覆土は暗褐色土で焼土粒子を少量含み、締まりを帯びて自然堆積している。

遺物は、覆土上層から加曾利E期の土器片を数片検出した。

第49号住居跡出土遺物（第188図・189図）

1は横位の貼り付けの楕円文を持つ口縁部、2は貼り付けによる溝巻文を持つものである。

3は、沈線区画口縁部を持つ横位の楕円文である。

5は、2本の沈線間に連続爪形文を持っている。

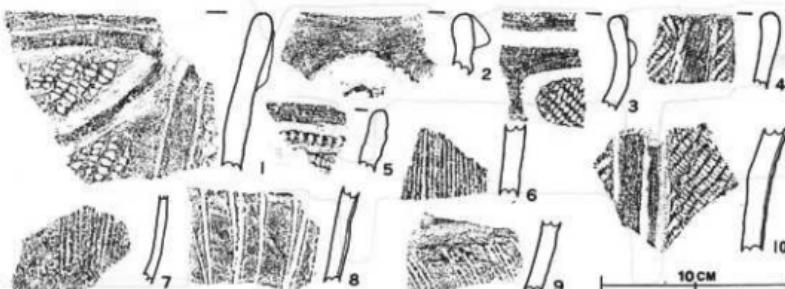
6・7・9は、櫛歯状沈線を付けている。8は、垂下する沈線を何本も付けている。

10は、沈線区画による懸垂文の中にもう1本垂下する沈線を付けている。

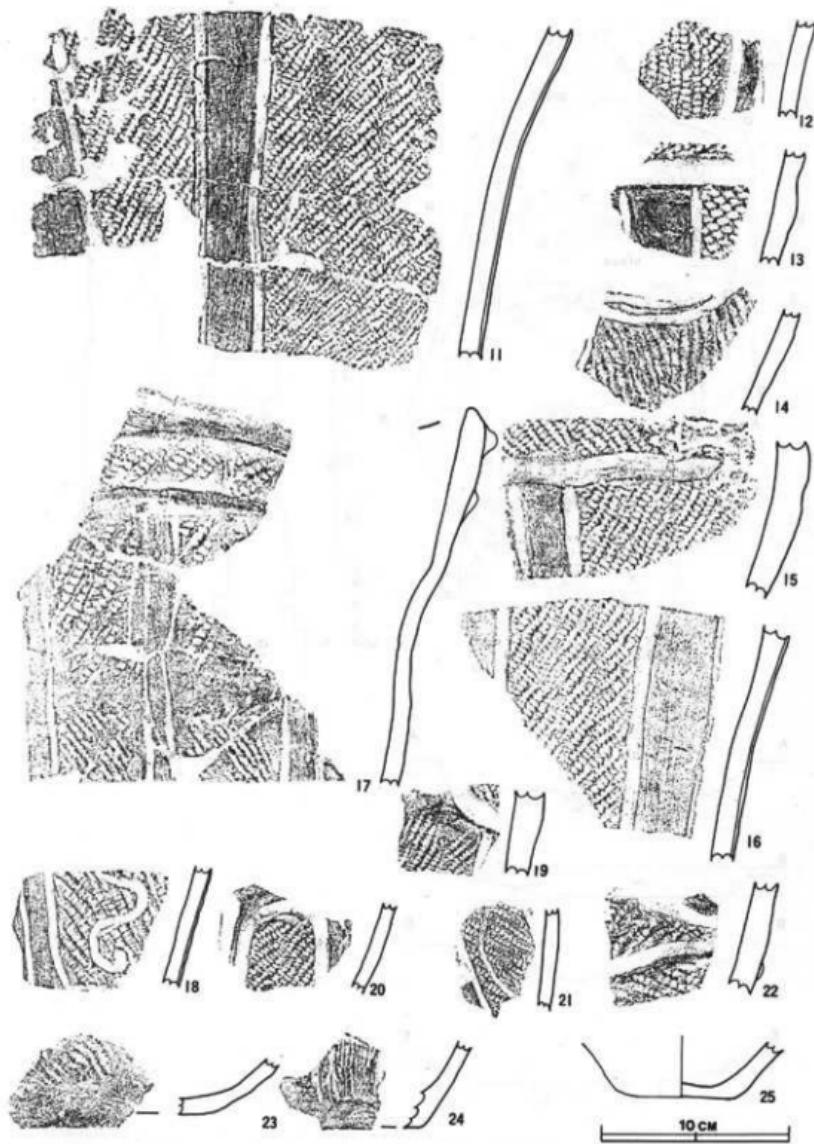
11～17は、沈線区画による懸垂文を持っている。

18は、「S」字状文を繩文の中に描いている。

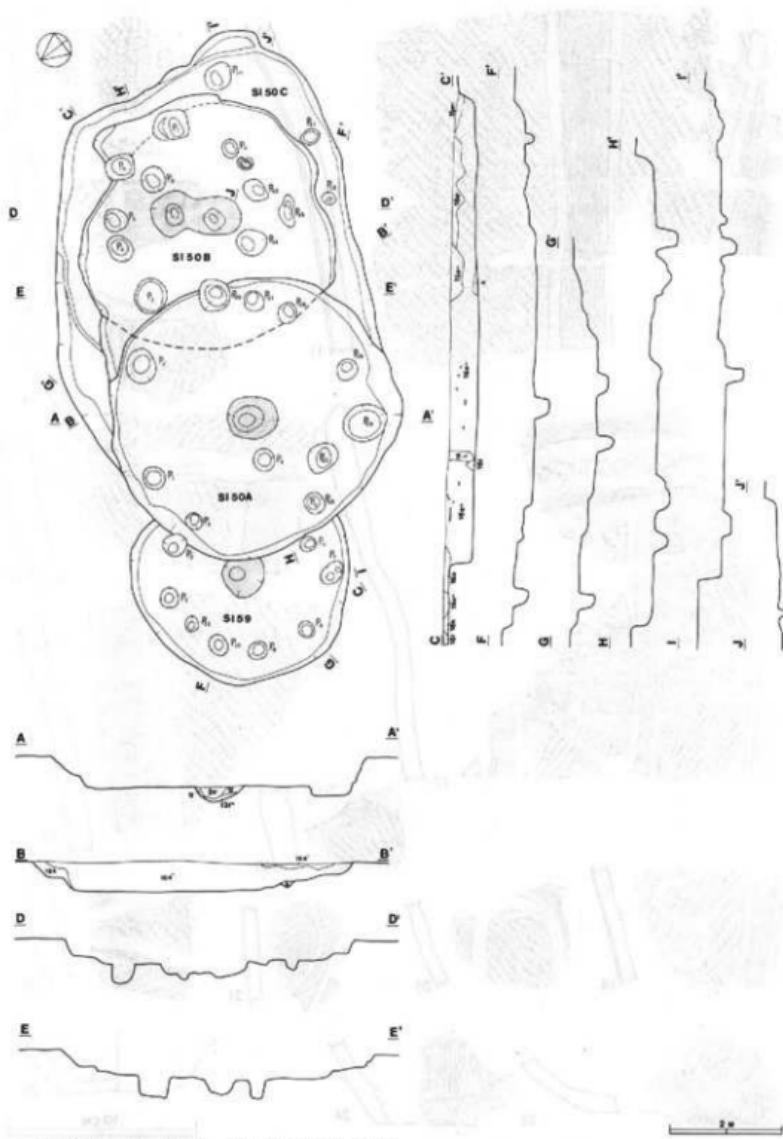
20・21は、縦位の楕円文を持つものの破片と思われる。



第188図 第49号住居跡出土遺物拓影図



第189图 第49号住居跡出土遺物拓影圖



第190図 第50A・B・C・59号住居跡実測図

（国宝）神奈川県立歴史博物館蔵

2 m

第50A号住居跡（第190図）

本住居跡はH10ha・h₄の調査区を中心に確認され、中央部住居跡群の南部に位置し、南東部でSI50B・SI50Cと、北西部でSI59と重複している。

規模は長径5.05m・短径4.75mで、平面形は円形を呈し、長径方向はN—7°—Eである。

壁高は西側で38cmを測り、他は重複しているため計測不可能である。壁はロームで明確であり、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面はロームであり、硬く明確なもので、西側とP₂の南側、南・北側の炉と柱穴間がやや高く、東側がやや低く凹凸が見られる。炉は床面の中央部に位置し、長径56cm・短径44cmの楕円形を呈し、深さ28cmほど掘られている。当初、地床炉と考えられたが、炉床北側に光形土器の3分の1ほどが垂直に遺存しており、炉の壁が直接火を受けた様子も見られないことから判断して、本跡の炉は土器埋設炉であり、それが抜かれたものと考えられる。炉床は、ロームが火熱を受けてレンガ状に赤化・硬化していた。柱穴は、P₁・P₂・P₃・P₄・P₅・P₆・P₇と考えられる。

覆土は暗褐色土で、焼土粒子・炭化粒子・石器片・チップ等が多数含まれて縮まっていた。

遺物は覆土中から多く検出された。また、床面近くからも加曾利E VI式の大型土器片と西側壁近くにチップ、フレイクが多数検出された。さらに、床面の近くから、人面付の把手部と思われる土器片を検出した。

第50B号住居跡（第190図）

本住居跡はH10ha・h₄の調査区を中心に確認されたもので、中央部住居跡群の南部に位置し、北西部でSI50Aと、南東部でSI50Cと重複している。

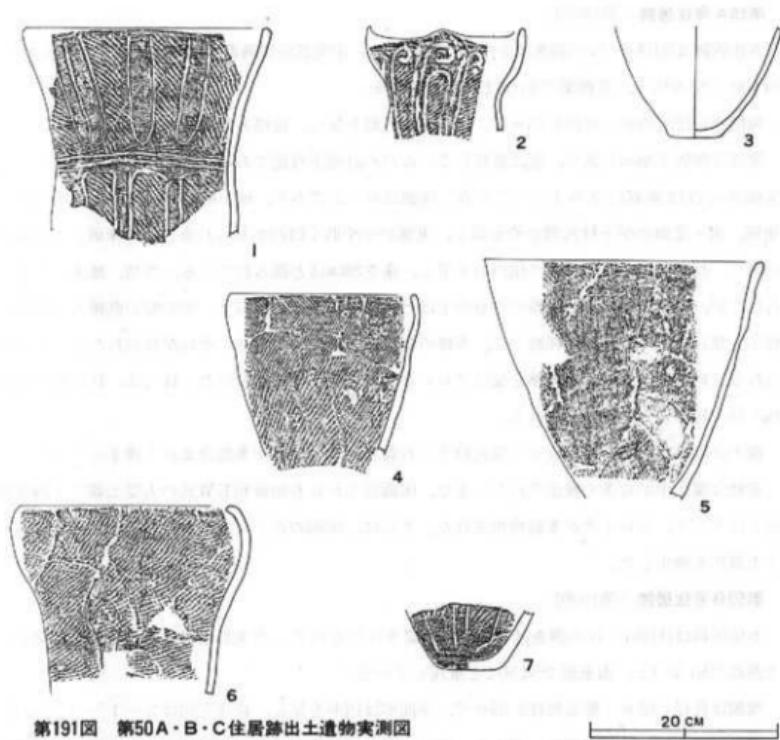
規模は長径4.65m・推定短径4.05mで、平面形は円形を呈し、長径方向はN—1°—Eである。

壁高は、南側12cm・北側11cmである。壁は、ロームで南・北側で明確であった。床面は西側の一部がSI50Aに切られているが、炉に向かって壁付近から低くなり、また、炉の付近がやや高い。炉は、ロームが熱を受けて赤化・硬化した部分が連続している。炉床を観察すると、北側は土器埋設炉の様相を呈し、南側は皿状に掘り窪められ、地床炉となっている。いずれも深さ25cmほど掘られ、連続している一つの炉であった。

第50C号住居跡（第190図）

本住居跡はSI50A・SI50Bと重複しており、位置は同じである。本跡の北西部にSI59・北北西でSI46と近接し、東側にやや離れてSI58がある。

平面形・長軸方向は、壁と床面が不明確なために、推定もできなかった。炉は土器埋設炉で、直径47cmほど円形にロームが焼土化し、さらに、その中心部の径16cm・深さ12cmほどが掘り窪められ、埋設されていた土器が引き抜かれていた。柱穴は、P₈・P₉・P₁₀・P₁₁・P₁₂と考えられる。



第191図 第50A・B・C住居跡出土遺物実測図

20 CM

第59号住居跡（第190図）

本住居跡はH10hsの調査区を中心に確認されたもので、中央部住居跡群の南側に位置し、本跡の南東側でSI 50 Aと半分ほど重複し、北側でSI 46と接している。

規模は推定径4mで、平面形は円形を呈するものと考えられる。

壁高は、南側17cm・西側11cm・北側16cmである。壁はロームでやや縮まっており、床面からゆるやかに立ち上がった後、上部で垂直となって立ち上がる。床面はロームで縮まりを帶びており、全体的にややゆるやかな起伏をもっている。炉は中央部に位置し、径75cm・深さ10cmほど掘り窪められた円形と思われる地床炉である。炉床は、火熱を受けたロームがレンガ状に赤化・硬化している。炉床をよく観察するとその使用期間は短かったと考えられる。柱穴は、床面から7本検出し、南東側のものはSI 50 Aの床面にみられるものと考えられる。

出土遺物解説表（第191図）

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備考
SI-50A	1	深鉢	A 25.0 B 21.7	平口縁で、全面に繩文を施し、口縁部は「U」字状の沈線で区画し、すり消繩文がみられる。腹部との間を2本の沈線で区画し、さらに「日」字の沈線で区画をし、その外をすり消している。側部はやや内傾ぎみに立ち上がり、ほぼ直線的に外傾し、口縁部で内傾する。	焼成 普通 胎土 砂粒・砂礫 色調 内に赤褐色 外褐灰色	E IV	胴上50%
	2	深鉢	A 16.3 B(10.9)	四つの底状は縁で、口縁部はへラ磨き、全体に繩文を施したのか、縦位の調整沈線文と一部沈線文をすり消している。内面はへラ磨き。	焼成 普通 胎土 砂粒・スコリア 色調 褐灰色	E IV	
	3	深鉢	B(11.8) C 5.8	底部から底部にかけて縦位の沈線がみられ、他はすべてへラ磨きがなされている。底部はへラ磨きによる調整がなされている。内面はへラ磨き。底部から内傾ぎみに立ち上がる。	焼成 惣 胎土 砂粒 色調 赤褐色	E IV	胴部以下 20%
	4	深鉢	A 19.7 B(17.1)	平口縁で、口付はへラ磨き、全体的に繩文を施している。軸部は直線的に外傾し、口縁部がやや内傾する。内面はへラ磨き。	焼成 普通 胎土 砂粒・スコリア 色調 右美・左母 褐色、内に赤褐色	E IV	50%
	5	深鉢	A 29.5 B 25.2	平口縁だが、やや波打つ。器身全体に繩文を施した痕跡がみられるが、ほとんどへラ削りによって消されている。底部からはほぼ直線的に外傾する粗なつくりである。内面はへラ削り。	焼成 普通 胎土 砂粒・スコリア 色調 黄橙色	E III	胴部以上 80% 床面出土
SI-50B	6	深鉢	A 24.0 B(21.0)	全体に繩文が施されている。内面へラ磨き、胴下部にはほぼ直線に立ち上がり、頂上部から口縁部にかけて大きく内傾する。	焼成 普通 胎土 砂粒・スコリア 色調 褐色	E IV	胴上70%
SI-50C	7	深鉢	B(6.3) C 6.8	底部にかけて、沈線区画によるすり消繩文と繩文が反対に施されている。軸部はやや摩滅している。底部はへラ削りされており、胴下部にかけて横かに内傾して立ち上がる。	焼成 良 胎土 砂粒・砂礫 色調 内に赤褐色	E III	底部10%

第50A・B・C号住居跡出土遺物（第192～196図）

1・2は、波状口縁である。3～7は沈線で口縁部を分け、横位の楕円文を付けている。

10・13は、波状沈線と縦位の楕円文を持ち、13は紫状文を持っている。

11・12・14・16・18～21・25は横位、縦位の楕円文を持つ破片と思われる。

22・24は口縁部無文帯を持ち、28～29は2本の沈線間に連続爪形文を充填させている。

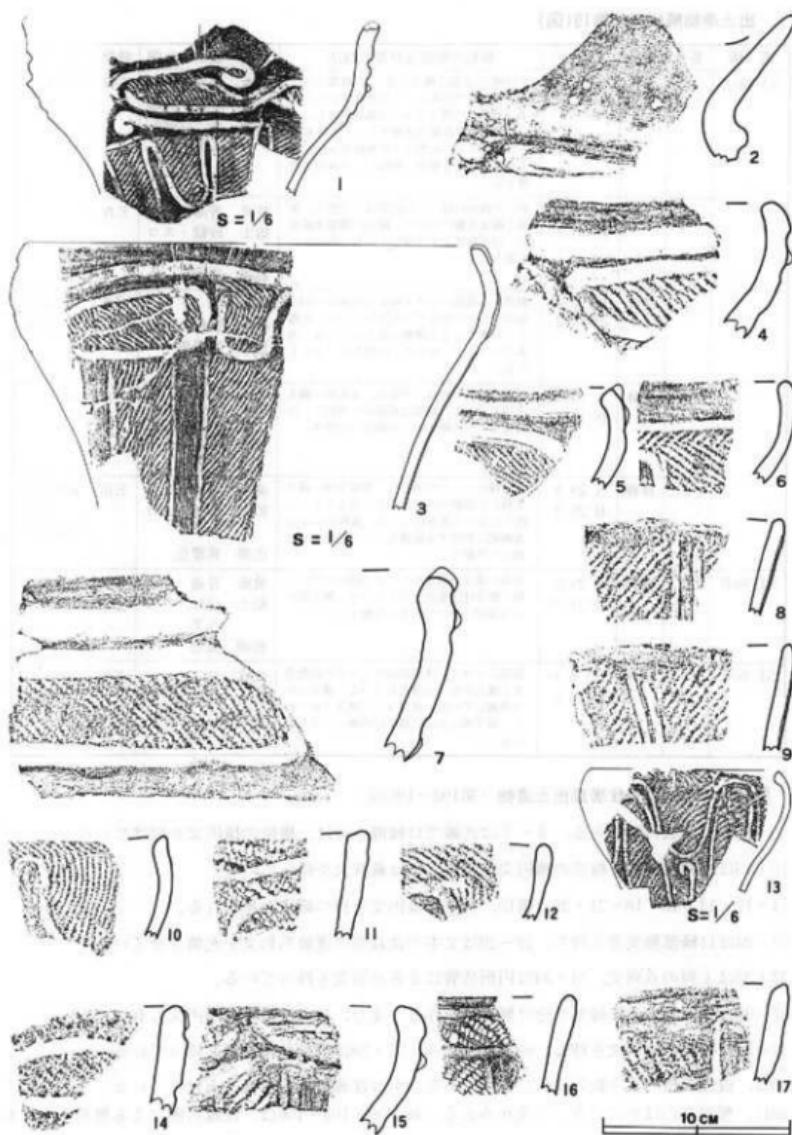
32・33は1列の点列文、31・34は円形竹管による点列文を持っている。

37・38は横沈線で、口縁部を分け無文帯を作る。また、37には横位の楕円文も有している。

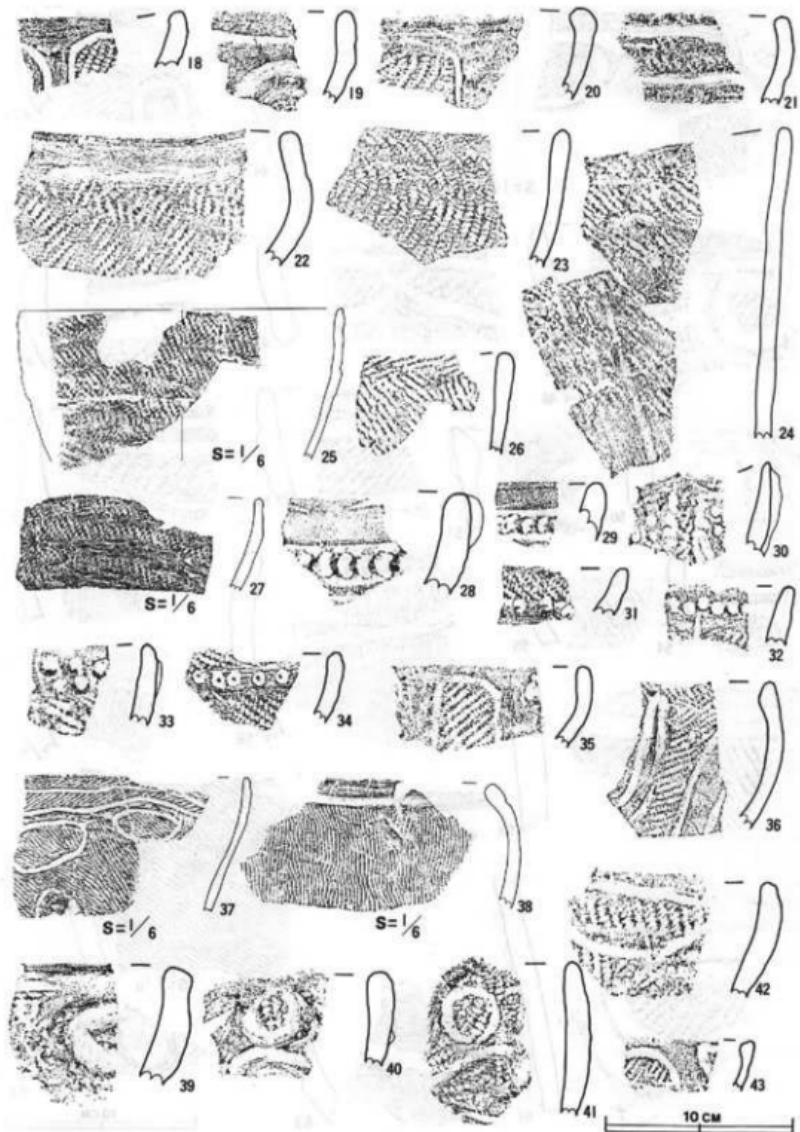
39～54は横位の楕円文を持ち、62は繩文のみ、57・58は櫛齒状細沈線を持っている。

85は、縦位の楕円文を数列平行に並べてある。84は沈線による渦巻文を付けている。

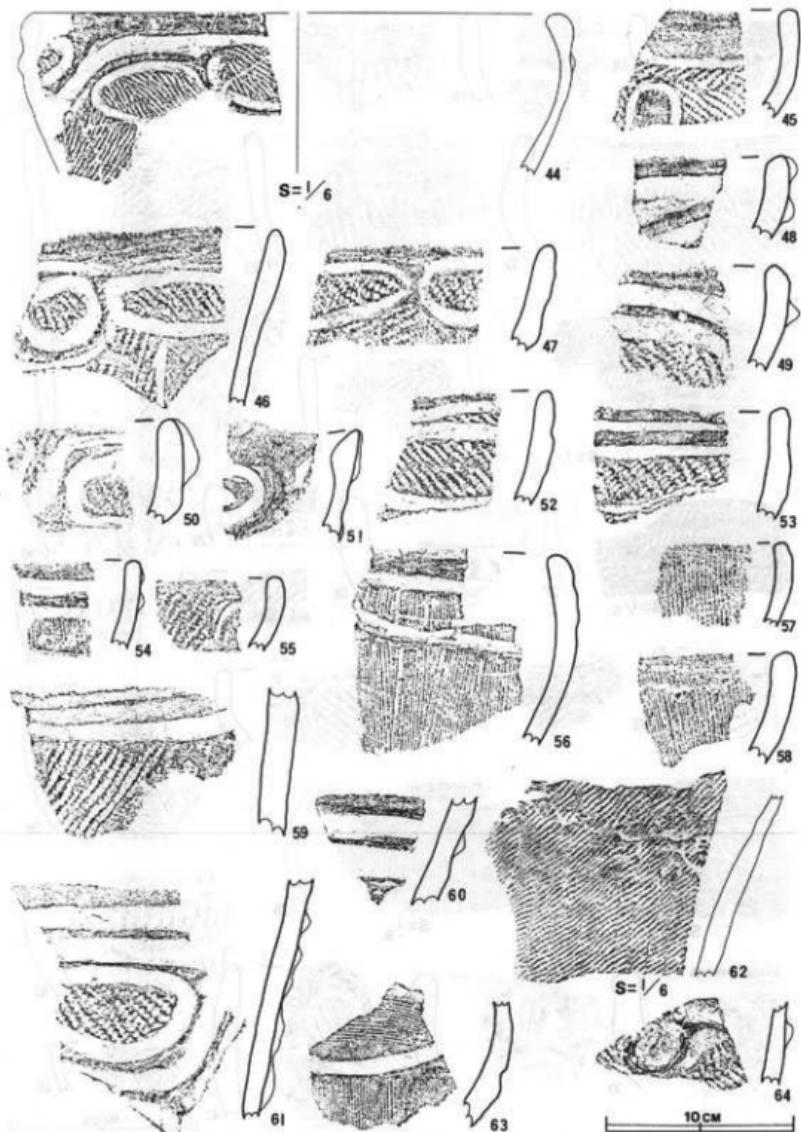
88は、懸垂文のほかに「S」字文がみえる。88～99・103・106は、沈線区画による懸垂文を何本か垂下させた文様である。



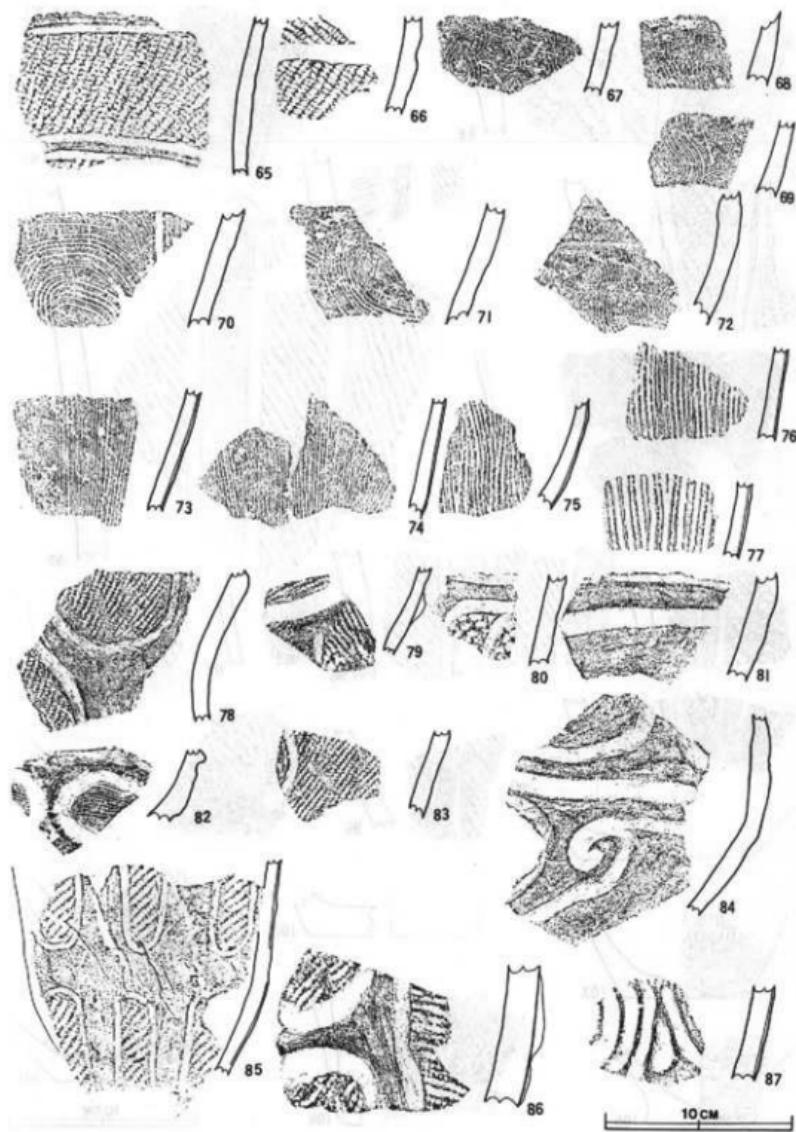
第192図 第50A・B・C号住居跡出土遺物拓影図



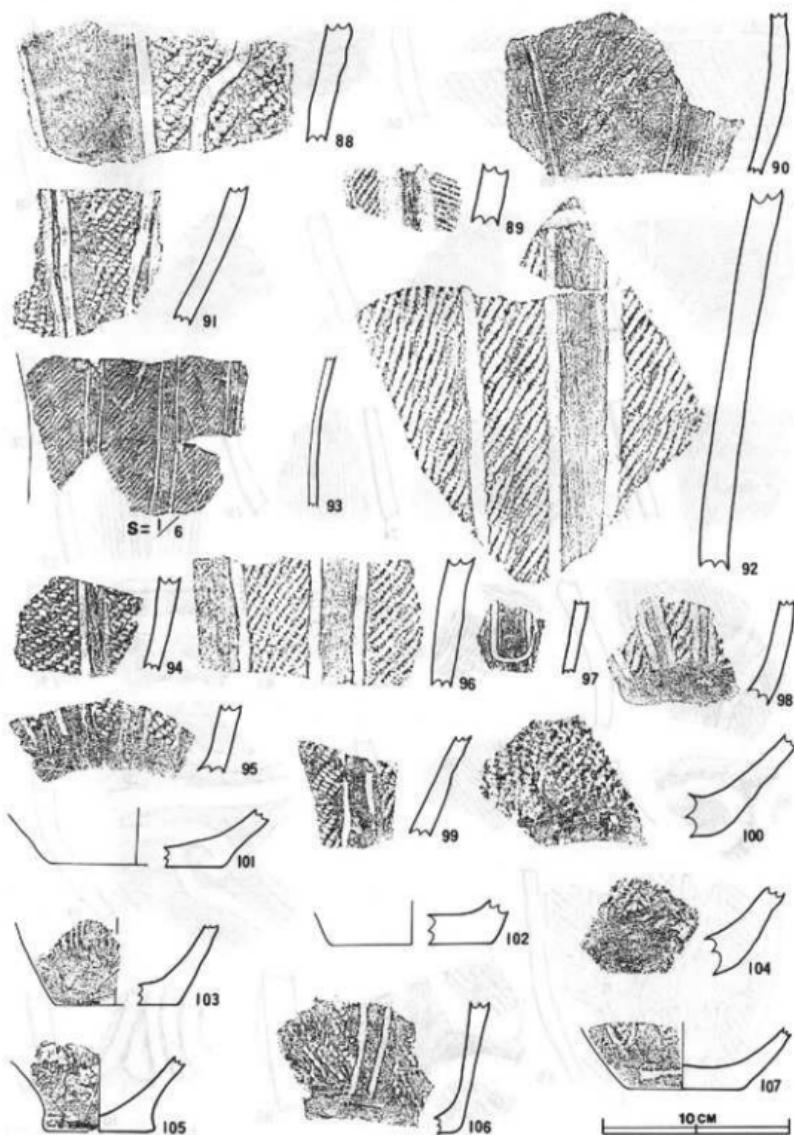
第193図 第50A・B・C号住居跡出土遺物拓影図



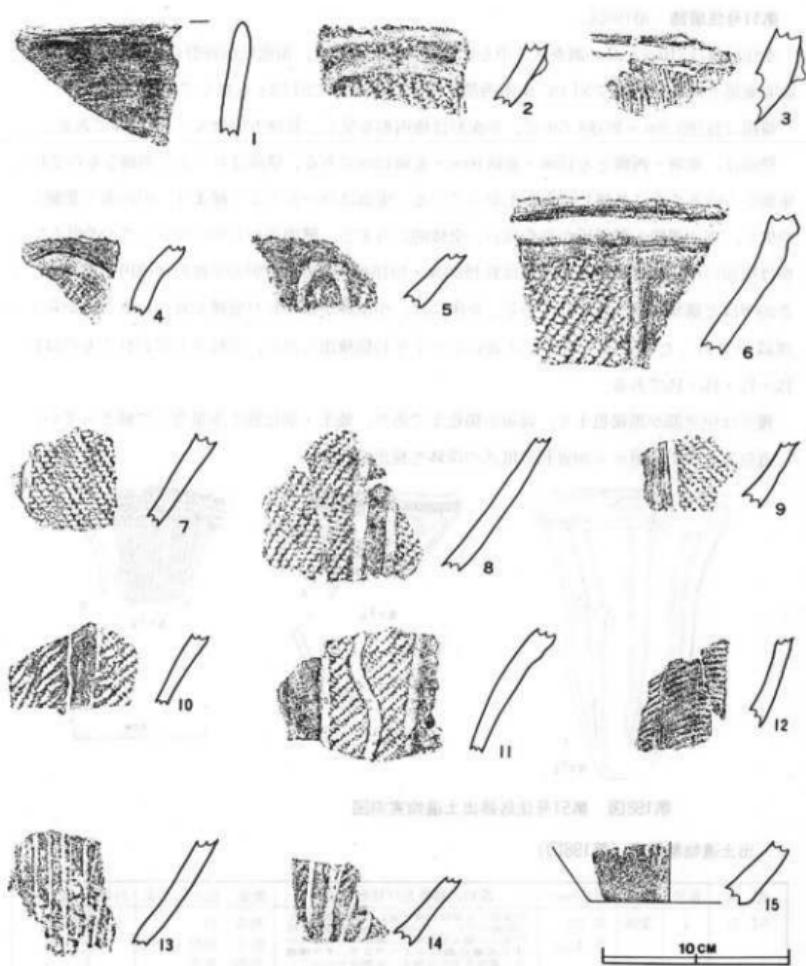
第194図 第50A・B・C号住居跡出土遺物拓影図



第195図 第50A・B・C号住居跡出土遺物拓影図



第196図 第50A・B・C号住居跡出土遺物拓影図



第59号住居跡出土遺物（第197図）

1は、幅広の口縁部無文帶を有している。

2・4は、横位の楕円文を持っている。

6・11は、沈線区画による懸垂文を持っている。

13・14は、垂下する沈線を多数付けている。

第51号住居跡（第199図）

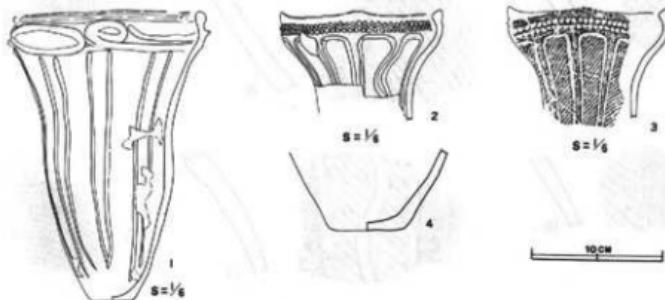
本住居跡はJ10az・asの調査区を中心に確認されたもので、南部住居跡群の中央部に位置し、北北東部でSI52、西部でSI49、南南西部でSI156、南東部でSI53と近接している。

規模は長径5.2m・短径4.5mで、平面形は楕円形を呈し、長径方向はN-26°-Wである。

壁高は、東側・西側とも15cm・南側16cm・北側12cmである。壁面はロームで明確なものであり、床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面はロームでよく締まり、炉の南・北側がやや低く、東・西側と壁周辺がやや高い。全体的にみると、壁周辺から炉に向かってやや低くなる。炉は床面の中央部に位置し、規模は長径80cm・短径45cmである。炉の平面形は楕円形を呈し、深さ20cmほど皿状に掘り込まれている。炉床には、小型鉢が抜かれた痕跡が見られることから土器埋設炉であったと考えられる。床面にピットを19個検出したが、主柱穴と思われるものはP₁・P₂・P₃・P₄である。

覆土は中央部が黒褐色土で、周辺が褐色土であり、焼土・炭化物を少量含んで締まっていた。

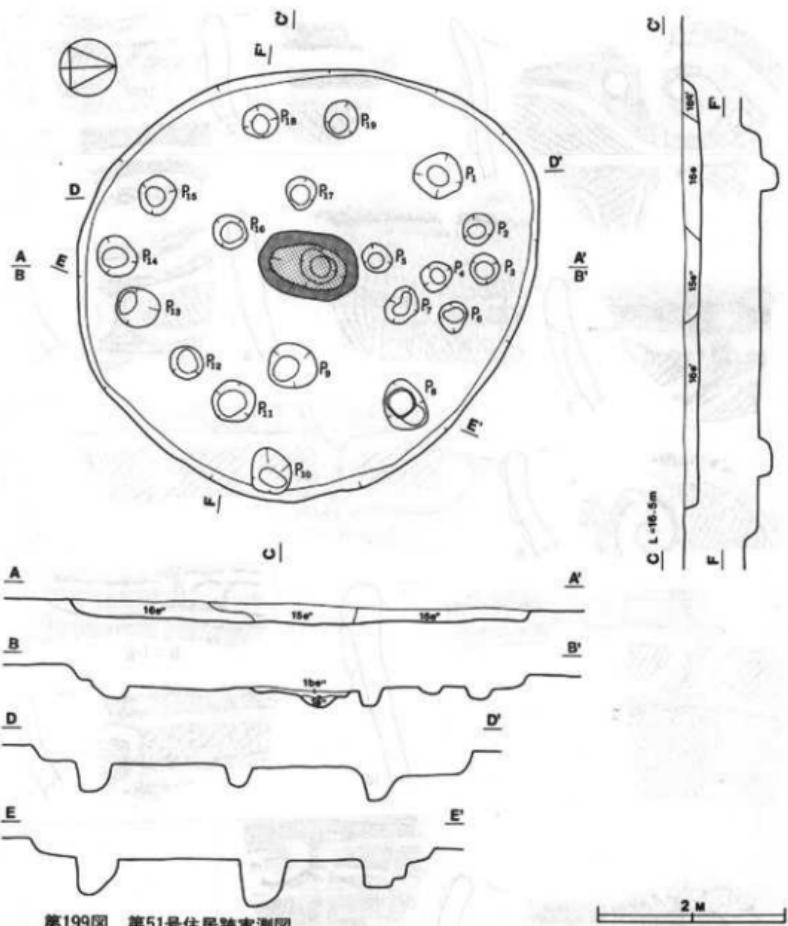
遺物は、覆土上層から加曾利E田式の深鉢を検出した。



第198図 第51号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第199図）

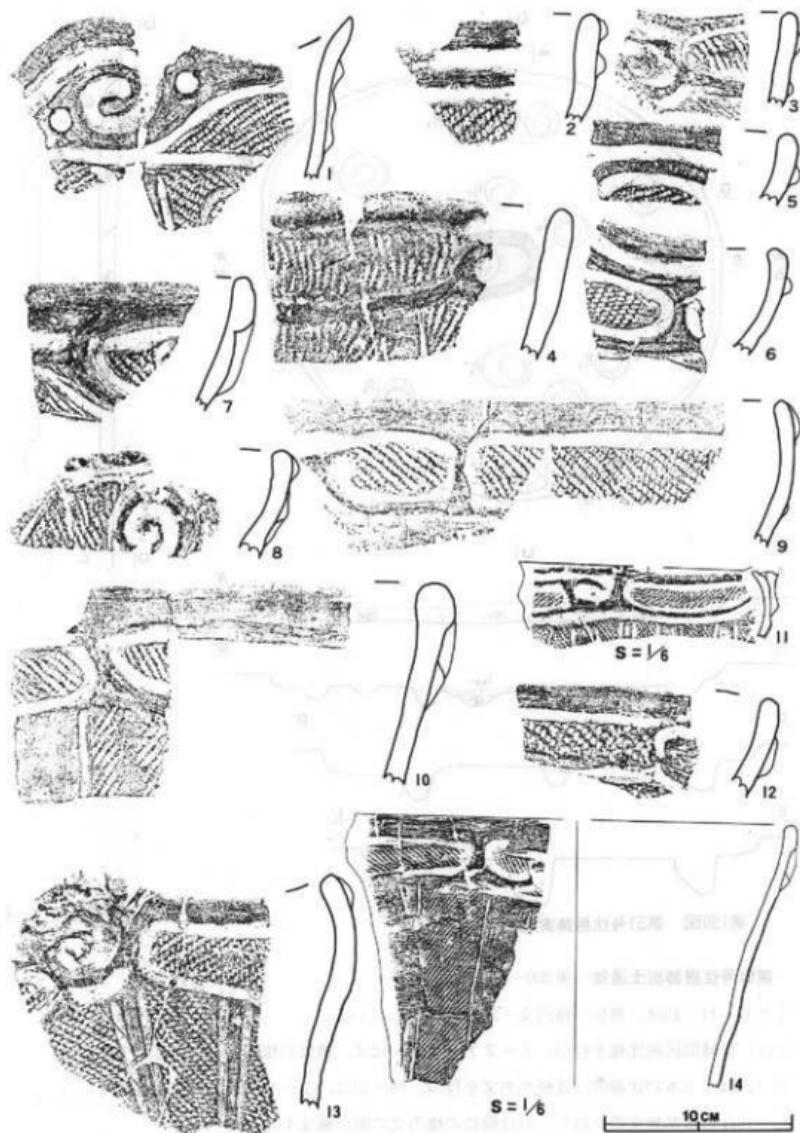
遺 様	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び整形技法	焼成・胎土・色調	時期	備 考
SI-51	1	深鉢	A 29 B 43.0	口縁部は5.4枚の鋸刃縫による楕円形内文の区画がされ、3か所に消去文を施す。楕円内文には縞文を施文したのみ。沈縫による軽微な変形と縞文を表面に施す。底部はややくぼら、側面がややくびれる。	焼成 良 胎土 砂粒・砂礫 色調 黒褐色	E III	90%
	2	深鉢	A 24.3 B 17.0 (16.5)	4重位の流れ口縫で、ヘラ削きをしたあと、凹凸内凹削文をめぐらしくしている。側面以下は、縞文を施文したのみ。沈縫による軽微な変形と縞文を表面に施す。底部はややくぼら、側面がややくびれる。	焼成 良 胎土 砂粒・スコリア 色調 棕色	E IV	網上30%
	4	深鉢	B(5.9) C 5.7	底部にかけて、沈縫区画によるすり消去縞文と縞文が交互に施文されている。底部は小さく、ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	焼成 普通 胎土 砂粒 色調 内黒色 外にぶれ色	E III	底部



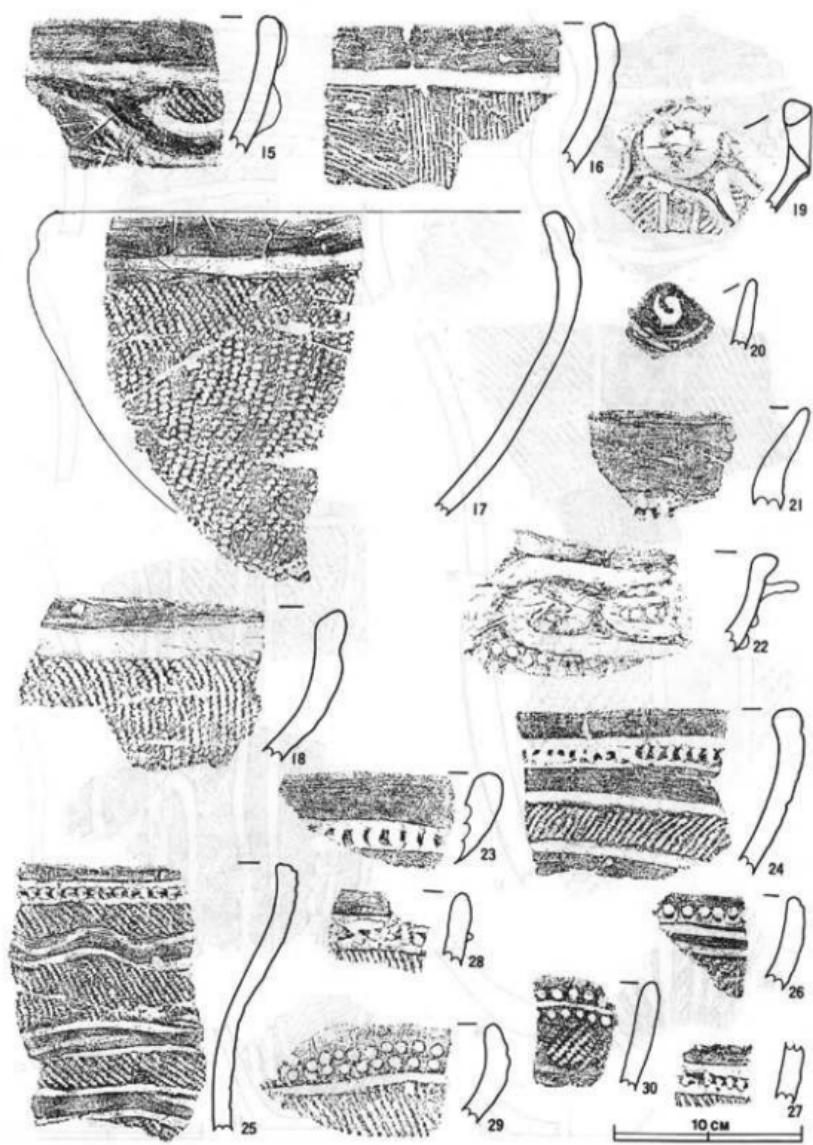
第199図 第51号住居跡実測図

第51号住居跡出土遺物（第200～202図）

- 1・8・11・13は、横位の楕円文・溝巻文を持っている。
- 2は、口縁部区画沈線を持つ。3～7・9・10・12は、横位の楕円文を持つものである。
- 23～25は、2本の沈線間に連続爪彫文を持つ。26～30は、1～2列の点列文を付けている。
- 15～18は口縁部無文帯を持ち、34は縦位の楕円文の間に篆文を持っている。
- 36は、縦位の楕円文を並べている。35・37～40は、沈線区画による懸垂文である。

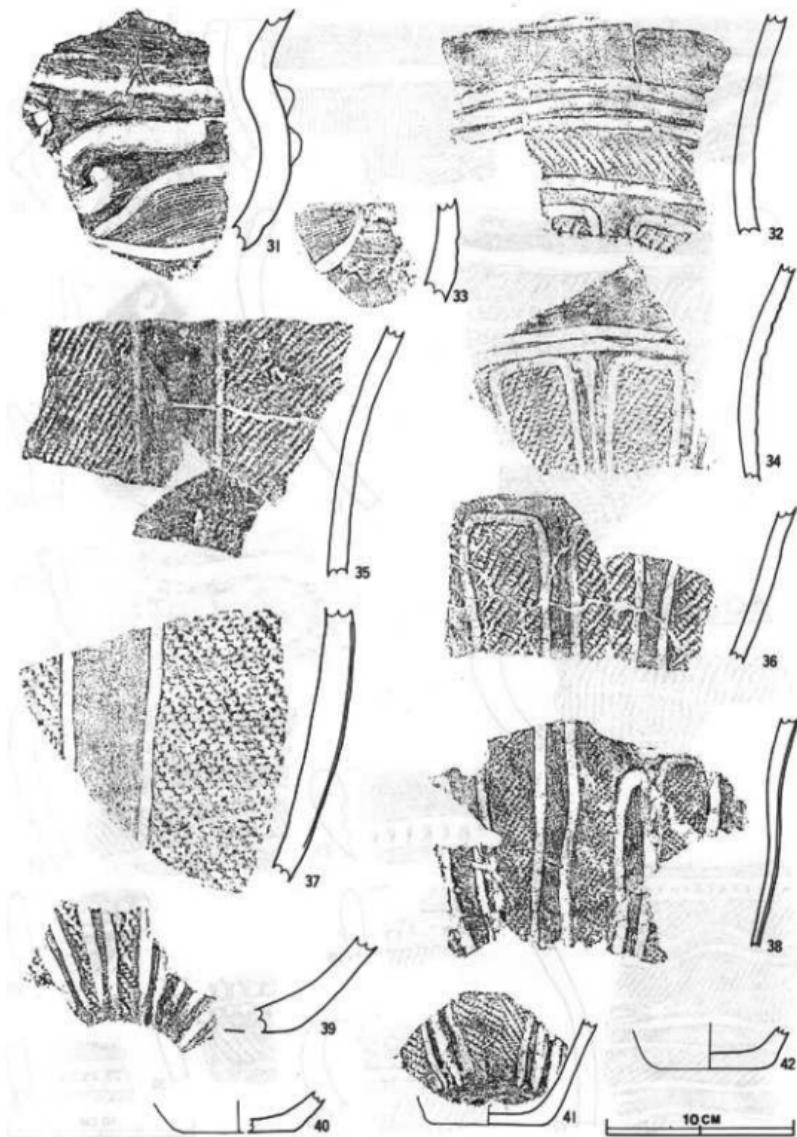


第200図 第51号住居跡出土遺物拓影図



第201図 第51号住居跡出土遺物拓影図

（福井県南条出土縄文時代後半・前文化層）



第202図 第51号住居跡出土遺物拓影図

図版原稿より出典。著者著者。図版原稿。